DS Rikkokushi
851 Zoho Rikkokushi
A2R5
1940
v.5

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/zhorikkokushi058800

佐伯有義校訂標注

增補 六國史

卷五

朝日新聞社藏版

LIBRARY
DEC 9 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

DS
851
A2R5
1940
v.5

装畫・・田中咄哉州

日本後紀

巻上

日本後紀

解説

一、書名

日本後紀は、續日本紀に次ぎて、桓武天皇延暦十一年正月より平城・嵯峨兩天皇を歷て、淳和天皇天長十年二月に至るまで、御四代四十二年間の事を記載せり、續日本紀は、日本紀に續きたる史書なれば、續日本紀と名づけられしが、本史は續日本紀に次ぎたるものなれば、續々日本紀と號すべきも、さる名稱もいかゞなれば、漢書に對する後漢書などの例を思ひて、日本後紀と名づけられしにやあらむ、書名を選ぶことは容易ならぬことなれば、種々の議ありしなるべけれど、文獻の徵すべきものなければ知るに由なし、其の卷數の四十卷なることは序文にも明かに見え、諸書にも四十卷と記せるに、拾芥抄上末には日本後紀三十卷と見え、惟賢比丘筆記にも三十卷とあれど、卅は卌の誤なりと知るべし、

二、編修

本史の編修せられしは、仁明天皇承和七年十二月九日なり、初めて此の書編修の勅命ありしは、嵯峨天皇弘仁十年なるが、此の御代には未だ完成せず、淳和天皇の御代にも相繼ぎて撰修せしめ給ひしかど、同じく成らず、仁明天皇御卽位の後屢〻勅あり、更に撰者を任命して督勵し給ひ、承和七年に至りて漸く功成り奏上せり、弘仁十年勅命ありしより此に至るまで前後二十二年に及べり、

さて初めて此の書編修の勅命ありしことは、序文に

弘仁十年、太上天皇勅ニ大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣緒嗣、參議從四位上行皇后宮大夫兼伊勢守藤原朝臣貞嗣、參議左衞門督從四位下兼守右大辨行近江守良岑朝臣安世等、監ニ修撰集、

と見えたり、されど其の月日を記さゞれば、何月なりしか詳ならねど、此に見ゆる四名の任官叙位の年月を推考するに、冬嗣は此の年(弘仁十年)大納言正三位にて左近衞大將按察使を兼ね、緒嗣は正三位中納言にて兼民部卿、安世は參議左衞門督從四位下兼右大辨近江守にて序文とよく合へるが、貞嗣は此の年三月一日に始めて參

議に任せられたり、されば四人に此の勅命ありしは、恐くは三月一日以後なりしなるべし、かくて嵯峨天皇には同十四年四月御讓位あり、淳和天皇卽位し給ひしが、

監修撰集、未了之間、三臣相尋薨逝、緒嗣獨存、

とあるが如く、未だ之を完成するに至らずして三人は薨去せり、貞嗣は弘仁十五年、卽ち天長元年正月に、冬嗣は同三年七月に、安世は同七年七月に薨じたり、かく四人の中三人まで薨去ありしかば、其の補缺を任命せざれば事業進行せざるを以て、更に緒嗣を總裁とし、其の以外の人々をば任命せられたり、其の事は序文に、

後太上天皇詔、副左近衞大將從三位兼守權大納言行民部卿淸原眞人夏野、中納言從三位兼行中務卿直世王、參議正四位下守右近衞大將兼行春宮大夫藤原朝臣吉野、參議從四位上守刑部卿小野朝臣峯守、從五位下勳七等行大外記兼紀傳博士坂上忌寸今繼、從五位下行大外記嶋田朝臣淸田等、續令修緝、

とあり、副とは夏野以下を緒嗣の副とせられしなり、此の勅命ありし年月は並に詳ならざれど、緒嗣をば總裁とし、夏野以下を其の輔佐とせられしより推測するに、曩に總裁たりし冬嗣の薨後(天長三年七月以後)なりしことといふまでもなかるべし、次に夏野以下の敍位任官の年月を檢するに、夏野の權大納言に任せられしは同五年

三月左近衞大將兵部卿如故)、直世王の中納言に任じ、從三位に敍せられしは七年六月、吉野の參議に任ぜられしは同五年五月、正四位下に敍せられしは七年八月、峯守の參議に任ぜられしは弘仁十三年三月、從四位上に敍せられしは天長三年正月にて同七年四月卒去せり、(以上公卿補任に據る)今繼は大外記從五位下に敍任せられしは天長元年、(外記補任に據る)淸田は大外記に任ぜられしは同四年にて、從五位下に敍せられしは同六年正月(文德實錄卷七、齊衡二年九月甲子紀淸田傳に據る)なり、以上の敍任に依て考ふるに、天長三年冬緖嗣薨去ありしかば、緖嗣を其の後任とし、峯守・今繼等を同時に任命し、其他は漸次に補缺せられしか、或は七年七月安世薨去の後に同時に任命ありしなるべし、然るに淳和天皇には同十年二月御讓位あらせられ、「屬之讓祚、日不暇給、」と序文に見ゆるが如く、其の期間僅に三年に足らざりしかば、此の御代にも完成に至らざりき、次で仁明天皇御卽位あらせられしが、「仁孝自然、聿修鴻業、垂綸重疊、筆削遲延、」とあるが如く、先帝の思召を遵奉せられ、先朝より關係せし人々に從事せしめ、屢〻勅を下して御督促あらせられしが、意の如く進まず、撰者直世王は承和元年正月に、夏野は四年十月に薨じたりしかば、更に左大臣藤原緖嗣・右大臣源常・中納言藤原吉野・中納言藤原良房・參議朝野鹿取に監修せしめ、前和泉守

布瑠高庭・大外記山田古嗣等をして、其の事を詮次せしめられたり、此の年月も詳ならざれど、夏野の薨せしは承和四年十月なれば、其の以後なるべし、されば緒嗣以下の更に勅命を奉じたる際には、大體の編修は既に訖り、整理中に屬せしを、奮勵して事に當り、七年十月に至りて淨寫功成り奏上せしものなるべし、本史は之を續日本紀に比較すれば、年數は約其の半に過ぎざれど、桓武天皇の後の半期より平城・嵯峨・淳和三天皇并せて御四代四十餘年に渉り、卷數は四十卷に上り、內容に於ては續日本紀に彷彿たるものなれば、編修に多年を要したるも故なきにあらず、法家文書目錄に據るに、

天長格抄卅卷

撰日本後紀之次、所抄出之例也、起桓武天皇延曆十一年正月丙辰、迄于後太上天皇十年二月乙亥、云々、

と見えて、天長格抄卅卷は、全く後紀編修につきて編纂せられしものなり、其の他事抄九卷、(自延曆廿三年盡弘仁二年)次事抄五卷、(自弘仁三年盡天長元年)の如きも、或は同時に編纂せしものかと思はる、されば國史の編修に就きては、材料の蒐集を始め、其の準備に多大の勞力を要せしかば、いかに努力すとも、短日月に成功すべき

ものにあらざることを知り、古人の勞苦を察すべきなり、

三、撰　者

本書の勅撰に關係したる人々は、弘仁十年に勅命を蒙りしは、

大納言藤原冬嗣
中納言藤原緒嗣
參　議藤原貞嗣
同　良岑安世

の四名、次に淳和天皇の御代に勅命を蒙りしは、緒嗣の外に

權大納言清原夏野
中納言直世王
參議藤原吉野
同　小野岑守
大外記坂上今繼
同　嶋田清田

の六名、次に仁明天皇の御代に勅命を蒙りしは、緒嗣並に吉野の外に、

右大臣源　常
中納言藤原良房
參　議朝野鹿取
前和泉守布瑠高庭
大外記山田古嗣

の五名なりき、以上の中參議以上の顯職に在りし人々は、此に其の傳を贅せず、其の他の人々に就きて知り得る所を述べむに、

坂上今繼は、外記補任天長元年の條に、紀傳博士大外記從五位下勳七等坂上忌寸今繼、九月廿三日兼任止紀傳博士と見え、それより同五年に至るまで大外記たり、坂上忌寸は、姓氏錄右京諸蕃に、坂上大宿禰後漢靈帝男延王之後也とある坂上大宿禰の同族なり、

嶋田清田は、文德實錄卷七に其の傳を載せ、齊衡二年九月甲子、散位從五位上嶋田朝臣清田卒、清田者、正六位上村作之子也、少入學、略涉經史、奉文章生試、遂及科第、後爲大學少屬、遷爲大宰少典、還爲內藏少屬、弘仁十四年、改臣姓爲朝臣、天長元年爲少外記、

三年兼爲勘解由判官、四年轉爲大外記、兼爲下野權掾、天長六年正月敍從五位下、承和二年爲宮內少輔、四年遷爲治部少輔、六年九月出爲伊賀守、仁壽元年十一月敍從五位上、卒時年七十七、とあり、されば此の書の成りし承和七年の前年九月に伊賀守としてて赴任し、其の以後は此の事に關係せざりしなるべし、

布瑠高庭は、後紀卷十二、延曆廿四年二月庚戌の條に、文章生從八位上布留宿禰高庭解を修め官に申して、石上神宮の神寶運遷を停止せむことを望み請ふ由見えたり、布留宿禰は姓氏錄大和皇別に、天足彥國押人命七世孫、米餠搗大使主命之後也、男木事命男市川臣、大鷦鷯天皇御世、達倭賀布都努斯神社於石上御布瑠村高庭之地、以市川臣爲神主、云々、天武天皇御世、依社地名、改布瑠宿禰姓、とあれば、其の家世々石上神宮の神職たりしなり、

山田古嗣は、文德實錄卷五に傳あり、仁壽三年十二月丁丑、相模權介從五位上山田宿禰古嗣卒、古嗣右京人也、越後介外從五位下勳六等益人之長子也、爲人廉謹、而寡言辭、幼歲喪母、敬事從母、天性篤孝、嘗讀書傳、至於樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、流涕不禁、卷帙爲之沾濡、弘仁十二年丁父憂、哀毀過禮、天長三年爲陸奥按察使記事、五年爲少內記、六年遷爲少外記、九年轉爲大外記、公卿大臣以備顧問、推薦文士、多見納用、故人

仰之、承和十三年出爲阿波介、政績有聲、阿波美馬兩郡常罹旱災、古嗣殊廻方略、築陂蓄水、賴其灌漑、人用温給、後爲相模介、病卒於官、時年五十六、とあり、大日本史卷一百十五にも其の傳を載せたり、古嗣は天長十年此の書編修の勅命ありし前年に少外記より大外記に進みたれば、恐らくは最初より編修に關係せしなるべく、而して奏上に至るまで其の事に預りしかば、撰者中の重要なりし人なるべし、殊に公卿大臣以備顧問とあるに據れば、編修に就きても此の人の意見を大に用ひられしなるべし、

四、傳來

本史は全部四十卷なるが、其の現存するものは卷五以下僅に十卷にして、其の他の三十卷は悉く散逸せり、此は實に口惜しきことなるが、いかにして、何時の頃に亡びしか、文獻の徵すべきものなければ詳に知り難けれど、試みに少しく述べむと欲す、本史は國家の重要なる史籍なれば、皇室を始め奉り樞要の地位にある人々の家に藏せられしことは、下文に引ける諸書にても明かなるが、其の完備せしは何時の頃までなるかと考ふるに、先づ第一に是が證とすべきは、日本紀略なるべし、此の書は六國史の完備せる時代に抄纂せるものにて、書紀以下悉く完備し、後紀も卷一より

卷四十に至るまで每卷缺くる所なし、之に依りて後紀の概要を知ることを得、至りて貴重なる寶典なり、其の抄錄せし年代は詳ならざれど、後朱雀天皇以後、鳥羽・崇德天皇頃までに成りしものにて、僧徒などの手に成れるものにはあらざるべく、斯道に志ある外記などが其の必要上抄錄せしものかと推測せらる、次に通憲入道藏書目錄に、

一合第七十六櫃、　日本後紀一部卅卷、　一帙十卷、　二帙十卷、　三帙十卷、　四帙十卷、

と見ゆるが、通憲は鳥羽・崇德・近衛三朝に仕へたる人にて、平治元年十二月十五日斬首せられたり、されば當時は完備せしこと言ふまでもなし、また花園院宸記に、

元亨二年八月廿六日、先日所給續日本紀卅卷、見了返進院御方、申日本後紀、欲見之也、

同く九月六日の條に、

九月六日、此間見日本後紀、先代政道尤可奉由者歟、凡內外和漢書反覆讀之、必知其義、於義雖無疑、及再三乃至數回、必有道義之染心、不知手舞足踏之心、自然而來者也、讀書人、必以此心可稽古也、一兩反讀誦或不留心者、更無稽古之益者也、

と見えたり、此の御日記を拜讀し奉るに、當時若し缺損する所ありしならむには、必

ず其の事を記させ給ふべきに、何等之に就きて記させ給はざるに據れば、當時も完備せしこと明かなり、此より約三十年ばかり後に記されたる仙洞御文書目錄にも、

丁御文庫、　杉櫃一合日本後紀、　一合續日本後紀、文德實錄、

と見ゆるが、此の目錄は文和三年六月に廳官中原盛氏外二名の注進したるものなり、續後紀二十卷、文德實錄十卷、合せて三十卷を一合に收め、後紀のみを一合に收めたるに據れば、當時も正しく完備せしなるべし、更に降りて、永正二年八月中原師名の書寫せりと奥書ある本朝書籍目錄にも、

日本後紀四十卷、春澄善繩撰、從桓武延暦十一年、至淳和天皇十年、凡四代、

とあれど、此の目錄には類聚國史二百卷、新國史四十卷、祕府略千卷など見え、いづれも完備せる書の現存するが如く記載すれど、應仁の亂を經て、大に荒廢せる永正の頃まで、是等の諸書が完全に保存せられたりとは信じ難ければ、日本後紀も其の類にて、目錄には四十卷と見えても、果して此の頃まで完備せしや否は疑はしく、之を以て本史の存在せし確證とは爲し難し、

以上は本書の存在せる徴證を擧げたるが、更に其の半面より、卽ち此の書の散逸せる事實に就きて少しく述べむと欲す、先づ其の證とすべきは、德川幕府にて慶長

中古書の蒐集に就きて大に力を致し、他の五國史は悉く之を謄寫せしめて文庫に收められしかど、(其の書悉く內閣文庫に現存す)獨り後紀のみは杳として其の名を聞かず、尾張・水戶兩德川家、加賀前田家の藏書中にも其の名は見えず、水戶家にて後紀を頻に搜索せられしかど得られざりしことは、年山紀聞に「西山公久しく日本後紀を探りたまふといへども、眞の本を得たまはず」とあるにて知られ、第二に元祿中鴨祐之の日本逸史を編纂したるも、亦本史の亡びたるに原因し、淺井重遠の序文に、「如日本後紀一書、蓋亦亡矣、云々、從四位上鴨祐之縣主云々、慨然惜舊史亡逸、嘗有志于補緝、比者方就類聚所載、而編次後紀時事、更條附他書可以參攷於此者、因名之曰逸史」と云へり、第三に類聚日本後紀を始め、後紀の僞書の世に現はるゝに至りしも、眞本の影を收めたるに原因せり、斯くて眞本は亡びて世に無きものと思ひしに、塙保己一は寬政十一年京都にて本書卷五以下八卷を獲て之を出版し、尋いで享和二年卷十二、同廿一の兩卷を獲て出版せり、是れ所謂塙本日本後紀なり、本書奧書には「右日本後紀殘缺、門人稻山行敎於京都寫之」とあるのみにて、所在を明かにせざれど、此の十卷は伏見家の御文庫に存せりといへるが故に、予は先年六國史校訂材料取調掛として、伏見宮家事務官に面會して取調を請ひしが得る所なく、其の儘にて止みた

り、後更に六國史校訂準備委員として從事中三條西伯爵に依賴して、六國史に關係ある諸書を借覽せむとせしに、一も存するもの無しと言はれしが、其の後此の數卷を見出だせりと示されしは、天文本日本後紀なりき、其の冊數は六冊にて、卷數は塙本と同じく十卷なり、每冊奧書あり、今其の奧書を擧ぐれば左の如し、

卷　五、本云、延久六年六月廿七日未時比挍了、大永四年九月十九日、以中書王御本書寫之、

卷　八、天文二三廿一、一見加朱點了、

卷十三、天文二五月、命大史于恒宿禰令書寫、同一挍了、

卷十七、天文元臘廿八、書寫了、

卷廿二、右命于恒宿禰令書之、加一見加點了、于時天文二年九月十日、

卷廿四、右倩于恒宿禰手令書之、于時天文二年重九之後一日、加一見又加朱點了、

此の奧書を見るに「大永四年九月十六日以中書王御本書寫之」とある中書は中務省の唐名なれば、中書王は親王にて中務卿の官にあらせられし伏見宮第六代貞敦親王(後柏原天皇御猶子)なるべし、されば大永四年伏見宮家にありし御本を拜借して寫したるものなり、卷八以下は天文元年、或は二年の書寫に係り、就中卷十七は元年

十二月にて、其の他は二年三月、五月、九月に書寫とあれば、卷八以下は天文に至りて發見せしものにて、卷五は別本によりて寫されしかとも思はる、而して稻山行敎の寫したる原本は、三條西家の寫本と同一のものにはあらざりしなるべし、そは二本を對校するに文字の異同少からざるにてそれと知らるゝなり、之に依りて考ふるに、此の書の散逸せしは蓋應仁の亂或は其の前後なるべし、而して永正大永の頃に至りて、國史を保存せむとする人起り、後紀の散逸せしを慨歎して、洽く之を搜索し幸うじて卷五以下の十卷を纏め得たるものなるべし、然るに此の十卷の存することをば、後紀僞作者は勿論、光圀卿藕之重遠等の諸氏も知られざりしが、塙氏の之を探り得て公にしたるは大に功ありといふべし、

五、異本

(一)塙本日本後紀　殘闕十卷

日本後紀四十卷中卷五、八、十二、十三、十四、十七、二十、廿一、廿二、廿四の十卷を京都に於て求め得て、寬政十一年(十二、廿一は享和元年)塙檢校が、門人稻山行敎をして校正せしめて出版せり、本史の刊行せるものは此の一本のみ、

(二) 三條西家本 寫本　　同上

伯爵三條西實義氏の所藏に係り、唯一の古寫本なり、世に之を天文本と稱すれど、卷五は大永四年九月の書寫に係れり、本書の事は上文傳來の項に詳に說明せるを以て此には之を略す

(三) 日本後紀纂 寫本　　一卷

和學講談所本奥書に「本云、右二條前攝政康道公之御家藏也、然江氏有二幽緣一而令二拜借一以深珍祕焉、予僥倖得二此書一、而寛文戊申之秋、句讀朱點等、悉令二書寫一畢、尤後葉讒勿レ令レ許容矣」とあり、最初に序文を載せて、次に延曆十一年閏十一月辛丑、同十二年四月丙子、同十三年十一月、同十四年八月等の記事を、年月の順序を逐ひて記載せり、延曆十六年正月癸卯善珠爲二僧正一の下に、元亨釋書資治表の文を混じたるは疑はしきに似たれど、此は後に書入れしが轉寫の際に誤りて本文となれるものなるべし、類聚國史・日本紀略に見えざる文の數條見ゆるに據れば、群書一覽に云へるが如く、後紀の全文未だ亡失せざりし時に抄出せしものか、尙ほよく考ふべし、二條前攝政は寛文六年七月六十歳にて薨去、戊申は寛文八年なれば、公の在世中に借受けて寫せる原本に依りて、八年に轉寫せしものなり、

（四）　類聚日本後紀 寫本　二十卷 十冊

卷一以下、毎卷の年月は日本逸史に全く同じ、無窮會神習文庫本奥書に「寛政九丁巳春二月二十六日、尾藩寺社以公衙之本寫之畢、尾張大國靈神社神主從五位下蜂須賀越後守藤原朝臣常榮、行年五十四歳之時、文政二己卯年夏五月晦日、以右本寫之畢、同社祠官正六位上川口播磨介藤原朝臣光緒」とあり、其の內容は世に行はるる後作の日本後紀と稱するものと同一なり、年山紀聞卷二に、日本後紀第十七天長二年浦嶋子歸鄉の一節、及契冲阿闍梨の書一篇を載せ、次に「右は契冲師よりおこせし物なり、西山公久しく日本後紀を探りたまふといへども、眞の本を得たまはず、いにしころ京師より一本來りしを、彰考館にて吟味せられたるに、はやう僞書にてぞ侍し、契冲翁の見たる本も此筋としられたり」云々と見ゆるが、類聚日本後紀にも、卷十七に天長二年十二月今歳浦嶋子歸鄉云々と載せたり、されば此の書も後作の日本後紀も同一のものにて、信用すべからざるものなり、

（五）　日本後紀 寫本　二十卷 十冊

眞本は四十卷なるが、此の書は之を二十卷と爲せり、世に之を僞書と稱するが、一本奥書に日本後紀四十卷は六國史の一にして、閑院贈正一位右大臣冬嗣公勅を奉じ

て撰給ふ所にして、承和八年仁明帝へ藤原冬嗣上られし史なり、しかはあれども中古より絶て世に傳る事なし、今此抄略廿卷は、木下長嘯子本を以て書寫するものなり、寶典の世にあらはれ、歷史の傳はる事、全く文明の德化によるゆゑならむかし、妙壽院惺窩とあり、其の次に右に出せる奥書ある古寫本は、惺窩自筆の本にして、已親しく見たる本也、されば此廿卷の後紀を今世に彼此と疑ふ人もあれど、全く本書を抄錄せる物にて、姓氏錄を抄錄せるが今世に傳はれる同じ類なれば、さのみ云ひ貶すべき物にあらざる也、云々、明治十七年八月榮木廼舍主長胤とあり、常世氏は惺窩自筆の本を見たりとあれど疑なき能はず、平田翁も之を後作の日本後紀と稱すべし、僞書にあらずといはれたれど、常世氏の言の如く、本書の完備せる程に抄錄せるものならむには、日本紀略に記せる所と卷數は一致すべきに、大に相違あり、又其の内容に於ても疑はしきものあれば、信ずべきものにはあらず、此書編纂の年代は詳ならざれど、本史の世に跡を絶ちしより後、元祿より以前に成りしものなるべし、日本逸史の卷數の區別も全く此書と同じきを見れば、逸史も亦年月は之に依りて區別せしものなるべく、さすれば此の書は其の以前よりありしものならむ、

（六）同　寫本　**二卷**　卷三、同四 卷子本

後僞後紀二十卷本の外に、卷子本にて卷三同四の兩卷あり、卷三は延曆十三年正月より十二月まで、卷四は同十四年より十五年六月までの事を記し、卷三奥書には、長保二年九月朔日明法博士左衞門權佐惟宗朝臣允亮一校了、同四には長保二年九月十六日明法博士左衞門權佐惟宗朝臣允亮一校了とあり、神習文庫本卷三奥書に、此後紀は卷子にて古寫本なりしを、親友藤原幸盛(通稱熊太郎)の自寫して被贈たる也、井上賴圀とあり、此二卷は古本の如く見ゆれど、久邇宮本日本紀略と比較するに、眞本後紀卷三は延曆十三年七月より十四年閏七月までの事を記せるに、此の書は十三年正月より十二月までの事を記し、眞本卷四は十四年八月より十五年六月までの事を記せるに、此の書は十四年より十五年六月までの事を記せり、是れ僞書たる證なり、其の記事は逸史よりも詳細にして、同書に見えざる事項をも載するは、或は逸史以後に成りしものかとも思はる、蓋し眞本の世に亡びしより、之を補はむとて好事家の編輯せしものなるべし、

校訂標注日本後紀

凡例

一、本書は塙檢校の校訂に係る日本後紀を以て底本とし、三條西伯爵家の所藏に係る大永及天文の奥書ある古寫本を以て校訂せり、三條西家の本は世に天文本と稱すれど、卷五は大永本にして、卷八以下の九卷は天文元年及二年の奥書あり、天文本と稱すること些さか穩當ならず、故に三條西家本と稱し、本書の符號は西本と書せり、

校合本には、狩谷棭齋校合本、谷森善臣翁校合本、井上賴圀翁校合本あれど、他に校合すべき古寫本なかりしを以て、狩谷校本は僅に類聚國史日本紀略等を以て校合したるのみにて見るべきものなし、谷森校本は塙本に三條西家本を校合したるものなり、井上校本は谷森本を寫し奈良本紀略等を書入れたり、予は幸に三條西家本を閲覽することを得、原本に就きて直に校合したれど、以上の校合本をも旁引し、採るべきものは之を取れり、

本書の注釋書と稱すべきものなし、たゞ矢野玄道翁の日本逸史私記あり、標注に私記として引けるは是なり、

二、本書の校訂に方りて、底本と校合し或は參照せる諸書は大略續日本紀に同じ、故に此に之を略す、

三、訓點は底本に據りたれど、一二改めたるもあり、宣命の傍訓は新に之を加へたり、

四、本書は四十卷の中三十卷を逸ひ、殘存するもの僅に四分の一に過ぎざれば、逸日本後紀を編纂して其の闕けたるを補はむと欲すれど、時日之を許さゞるを以て、他日を期して完成せむと欲す、

昭和四年十一月

佐伯有義識

日本後紀序

臣緒嗣等、討論綿書、披閲曩策、文史之興、其來尚矣、無隱毫釐之疵、咸載錙銖之善、炳戒於是森羅、徽猷所以昭晰、史之爲用、蓋如斯歟、伏惟前後太上天皇、一天兩日、異體同光、並欽明文思、濟世利物、問養馬於牧童、得烹鮮於李老、民俗未飽昭華、薜蘿早收渙汗、弘仁十年、太上天皇勅大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣緒嗣、參議從四位上行皇后宮大夫兼伊勢守藤原朝臣貞嗣、參議左衛門督從四位下兼守右大弁行近江守良岑朝臣安世等、監修撰集、未了之間、三臣相尋薨逝、緒嗣獨存、後太上天皇詔副左近衛大將從三位兼守權大納言行民部卿清原眞人夏野、中納言從三位兼行中務卿直世王、參議正四位下守右近衛大將兼行春宮

【日本後紀序】此序は原本に缺く類史百冊七に據て之を補ふ
○綿書、曩策と相對して古の書を云綿は綿邈即ち悠遠の意なるべし
○曩策、字書に曩は昔也策は簡也連編諸簡謂之策古無紙筆大事書之於策とあり史書を云
○炳戒云々、炳戒は明戒なり森羅は森然として多く羅列せるを云
○徽猷、善謀なり
○前後太上天皇、嵯峨淳和兩天皇
○欽明文思、尙書堯典に出づ陸氏音義に馬云威儀表備謂之欽照臨四方謂之明經緯天地謂之文道德純備謂之思とあり
○問養馬於牧童、莊子徐無鬼篇に黃帝過牧馬童子請問爲天下小童曰夫爲天下者亦奚以異乎牧馬者哉亦去其害馬者而已矣(節略)とあるに據れり
○得烹鮮於李老、老子第六十章に治大國若烹小鮮とあるに據れり李は老子の姓なり
○薜蘿早收渙汗、薜蘿は

楚辭九歌(少司命)に若有人兮山之阿、被薜茘兮帶女蘿とあるに出で、隱者の服の意に用ふ

渙汗は易渙卦の九五に渙(散也)汗其大號とありて王者の大號即ち詔令の意。禪位して御自ら政を執り給はずなりしを云

○弘仁十年、月日を記さざれど貞嗣の參議に任ぜられしは十年三月一日なれば勅命ありしは其後なるべし

○伊勢守藤原朝臣貞嗣、公卿補任には伊與守とす

○三臣相尋薨逝、貞嗣は弘仁十五年(天長元年)正月に、冬嗣は天長三年七月に、安世は同七年七月に薨ず

○後太上天皇、淳和天皇

○夏野、天長五年三月權大納言に任じ同七年九月正に轉ずされば勅命ありしは同年九月已前なるべし

○直世王、天長七年六月中納言に任じ同八月中務卿を兼ぬされば同年八月已後なるべし

○吉野、天長五年五月參議に任じ同七年五月春宮大夫、八月兼右大將、さ

大夫藤原朝臣吉野、參議從四位上守刑部卿小野朝臣岑守、從五位下勳七等行大外記兼紀傳博士坂上忌寸今繼、從五位下行大外記嶋田朝臣清田等、續令修緝、屬之讓祚、日不暇給、今上陛下稟乾坤之秀氣、含宇宙之滴精、受玉璽而光宅、臨瑤圖而治平、仁孝自然、聿修鴻業、聖綸重疊、筆削遲延、今更詔左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、正三位守右大臣兼行東宮傅左近衞大將臣源朝臣常、正三位行中納言臣藤原朝臣吉野、中納言從三位兼行左兵衞督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣良房、參議民部卿正四位下勳六等臣朝野宿禰鹿取、令遂功夫、仍令前和泉守從五位下臣布瑠宿禰高庭、從五位下行大外記臣山田宿禰古嗣等、銓次其事、以備釋文、錯綜群書、撮其機要、瑣詞細語、不入此錄、接先史後、綴叙已畢、但事緣例行、具載曹案、今之所撰、弃而不取、自延曆十一年正月(朔日)丙辰、迄于天長十年二月(廿八)乙酉、上下卌二年、勒以成卌卷、名曰日本後紀、

れば同年八月已後なるべし
○岑守、弘仁十三年三月參議に任じ天長三年正月從四位上に敍し五年閏三月兼刑部卿七年四月卒
○續令修緝、前に擧げし人々の敍任の年月より推して考ふるに夏野は天長五年三月より同七年九月十日までに、直世王吉野も蓋し之と同時に勅命ありしならむ岑守は七年四月十九日に卒したれば勅命ありしは五年閏三月以後にて修史の事に關せしは二箇年に過ぎざるべし
○臨之讓祚云々、夏野等に勅命ありしは七年秋にて淳和天皇の御讓位ありしは十年二月なれば其間僅に二年半に過ぎず故に日不暇給と云、給は足也
○今上陛下、仁明天皇
○瑤圖、瑤は玉之美者、圖は象也又地圖也
○聿修鴻業、聿修は毛詩大雅文王篇に無レ念二爾祖一聿二修厥德一とあるに出づ聿は述也
○聖綸重疊、綸は綸言にて聖勅なり重疊は重なる意、重ねて勅して後紀の成功を促さるゝなり

其次第、列レ之如レ左、庶三令二後世視一レ今、猶二今之視一レ古、臣等才非二司馬一、識異二董狐一、代レ匠傷レ手、流レ汗如レ漿、謹詣二朝堂一、奉進以聞、謹序、

承和七年十二月九日

左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣

正三位守右大臣兼行東宮傅左近衞大將臣源朝臣常

正三位行中納言臣藤原朝臣吉野

中納言從三位兼行左兵衞督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣良房

參議民部卿正四位下勳六等臣朝野宿禰鹿取

前和泉守從五位下臣布瑠宿禰高庭

從五位下行大外記臣山田宿禰古嗣

○今更詔云々、文中記す所の良房以下の官位は承和七年十二月の現在なれば之に據りて詔ありし年月を推知し難し按に夏野は承和四年十月、直世王は同元年正月に薨去ありしかば次々に補缺せられしか、或は御世の始に勅命ありしか何れとも定め難けれど仁孝自然事㆓修鴻業㆒翠綸重疊とあるに據れば先帝の叡慮のまゝに之を改めずして同一の人に從事せしめ速に竣功すべしと屢々勅を下されしかど筆削遲延せしを承和四年十月に夏野薨じ先朝より勅を奉ぜし人は緒嗣一人となりしかば此に中納言源常以下を任命せられ迅速に成功せしめ給ひしならむ

○緒嗣、天長九年十一月左大臣に任じ十年三月今上即位の日正二位に叙す

○常、承和七年八月右大臣に任じ同四年六月左近衛大將たり

○吉野、承和元年二月中納言に任ず ○良房、承和七年八月中納言に任じ同六年正月按察使を兼ぬ ○鹿取、天長十年六月參議に任じ承和三年五月兼民部卿七年正月正四位下に叙す ○功夫、功と云に同じ ○具載曹案云々、曹案は官曹の文案なり此紀の編纂に定例あり曹案には詳細に載せたれど此には弃てゝ録せずとなり ○乙酉、原本乙卯に作る二月戊午朔乙卯なり紀略及續後紀序に據て改む ○令後世視今云々、漢書京房傳に後之視㆑今猶㆓今之視㆒前也、又羲之蘭亭記に後之視㆑今亦猶㆓今之視㆒昔等の語に據れるなるべし ○司馬、史記の作者司馬遷 ○董狐、左傳宣二年に董狐古之良史也書㆑法不㆑隱とあり ○代匠傷手、老子第七十四章に夫代㆓大匠㆒斲者希㆑有㆑不㆑傷㆓其手㆒矣とあるに據れり ○如漿、漿は字書に水米汁相將也とあり

校訂標注 六國史第五卷目次

解説……
凡例……
序文……
日本後紀
皇統彌照天皇（桓武天皇）
卷第一【桓武紀一・起延曆十一年正月盡同十二月】……欠
卷第二【同二・起延曆十二年正月盡同十三年六月】……欠
卷第三【同三・起延曆十三年七月盡同十四年閏七月】……欠
卷第四【同四・起延曆十四年八月盡同十五年六月】……欠
卷第五【同五・起延曆十五年七月盡同十六年三月】
延曆十五年（自七月）……一

延暦十六年……九

巻第六【桓武紀六・起延暦十六年四月盡同十七年三月】……欠

巻第七【同　七・起延暦十七年四月盡同十二月】……欠

巻第八【同　八・起延暦十八年正月盡同十二月】

延暦十八年……一九

巻第九【桓武紀九・起延暦十九年正月盡同二十年六月】……欠

巻第十【同　十・起延暦二十年七月盡同廿二年二月】……欠

巻第十一【同　十一・起延暦廿二年三月盡同十二月】……欠

巻第十二【同　十二・起延暦廿三年正月盡同廿四年六月】

延暦廿三年……四一

延暦廿四年……六六

巻第十三【桓武紀十三・起延暦廿四年七月盡大同元年五月】

延暦廿四年〔自七月〕……六七

大同元年……七五

日本根子天推國高彥天皇（平城天皇）

卷第十四【平城紀一・起大同元年五月盡同九月】

大同元年（自五月）……九三

卷第十五【平城紀二・起大同元年十月盡同□年□月】……欠

卷第十六【同　三・起大同□年□月盡同三年三月】……欠

卷第十七【同　四・起大同三年四月盡同四年四月】

大同三年（自四月）……一〇五

同　四年……一二四

太上天皇（嵯峨天皇）

卷第十八【嵯峨紀一・起大同四年五月盡同十二月】……欠

卷第十九【同　二・起弘仁元年正月盡同八月】……欠

卷第二十【同　三・起弘仁元年九月盡同十二月】

弘仁元年（自九月）……一三一

卷第廿一【嵯峨紀四・起弘仁二年正月盡同閏十二月】

弘仁二年……一四七
巻第廿二【嵯峨紀五・起弘仁三年正月盡同四年二月】
弘仁三年……一七一
同　四年……一九〇
巻第廿三【嵯峨紀六・起弘仁四年三月盡同五年六月】……欠
巻第廿四【同　七・起弘仁五年七月盡同六年十二月】
弘仁五年（自七月）……一九七
同　六年……二〇三
巻第廿五【嵯峨紀八・起弘仁七年正月盡同八年三月】……欠
巻第廿六【同　九・起弘仁八年四月盡同九年四月】……欠
巻第廿七【同　十・起弘仁九年五月盡同十年十二月】……欠
巻第廿八【同　十一・起弘仁十一年正月盡同九月】……欠
巻第廿九【同　十二・起弘仁十一年十月盡同十二年十二月】……欠
巻第三十【同　十三・起弘仁十三年正月盡同十四年四月】……欠

巻第卅一【嵯峨紀十四・起弘仁十四年五月盡同十二月】……欠

天高讓彌遠天皇（淳和天皇）

巻第卅二【淳和紀一・起天長元年正月盡同十二月】……欠
巻第卅三【同　二・起天長二年正月盡同十二月】……欠
巻第卅四【同　三・起天長三年正月盡同十二月】……欠
巻第卅五【同　四・起天長四年正月盡同十二月】……欠
巻第卅六【同　五・起天長五年正月盡同十二月】……欠
巻第卅七【同　六・起天長六年正月盡同十二月】……欠
巻第卅八【同　七・起天長七年正月盡同十二月】……欠
巻第卅九【同　八・起天長八年正月盡同十二月】……欠
巻第四十【同　九・起天長九年正月盡同十二月】……欠

扉題字……三上参次筆

【延暦十五年】馬埒殿、考異に馬舊作レ爲據二類聚國史一訂埒當レ作レ埒と云り馬埒殿の稱は延暦十四年五月辛未（類史七十三）に始て見ゆ弘仁九年五月以後之を武德殿と稱す殷富門内右近衞府右兵衞府の東にあり其前は方百數十丈の廣場にして武技を演ずる所なり又弓場殿或は馬場殿とも稱す
○相撲、抄衞藝部に相撲漢武故事云角觝今之相撲也玉隱音書云相撲（撲音蒲角反和名須末比云々）下伎也とあり
○藤原朝臣繼繩薨、寳字七年正月壬子紀に始見叙任年月補任神護二年及延暦十五年等に見ゆ

日本後紀卷第五

起延暦十五年七月盡十六年三月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

皇統彌照天皇　桓武天皇

秋七月丙申、御馬埒殿、觀相撲、○戊戌、幸南院、賜五位已上物有差、無品朝原内親王授三品、從四位上五百井女王正四位下、正五位下高嶋女王正五位上、從四位上藤原朝臣雄友正四位下、從五位下石上朝臣宅子從五位上、外從五位上物部多藝連建麻呂爲造宮大工、外從五位下秦忌寸都岐麻呂爲少工、○乙巳、右大臣正二位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩薨、遣使監護喪事、葬事所須、令官給焉、詔贈從一位、繼繩者、右大臣從一位豐成之第二子也、天平寳字末、授從五位下、爲信濃守、天平神護初、叙從五位上、尋授從四位下、拜參議、寳龜二年、隷叙正四位上、十一月、授從三位、歷大藏卿左兵衞督、俄拜中納言、天應元年、授正

三位、延暦二年、轉大納言、五年、叙從二位、兼中衞大將、九年□右大臣、授正二位、在位七年、薨時年七十、繼繩歷文武之任、居端右之重、任在曹司、時就朝位、謙恭自守、政迹不聞、雖無才識、得免世譏也、○戊申（十九）、尾張國飢、遣使賑給、大和國人正六位上大枝朝臣長人、河內國人正六位上大枝朝臣氏麻呂、正六位上大枝朝臣諸上、正七位下菅原朝臣常人、從七位上秋篠朝臣全繼等十一人、貫付右京、○辛亥（廿二）、詔曰、朕以眇身、忝承司牧、日旰忘食、惆一物之向隅、昧□求衣、懼五行之紊序、比來大宰府言、肥後國阿蘇郡山上有沼、其名曰神靈池、水旱經年、未嘗增減、而今無故涸減二十餘丈、考之卜筮、事主旱疫、民之無辜、恐蒙其殃、方欲修德施惠消妖拯民、其天下鰥寡惸獨不能自存者、量加賑給、兼令每寺三日齋戒讀經悔過、庶恤隱之感、格於上天、靈應之徵、被於率土焉、生江臣家道女遞送於本國、家道女、越前國足羽郡人、常於市鄽、妄說罪福、眩惑百姓、世號曰越優婆夷、○癸丑（廿四）、造宮職官位准中宮職、但大屬特爲七位官、○丁巳（廿八）、從三位神王、正三位紀朝臣古佐美、爲大納言、正四位下石川朝臣眞守、大

○遣使監護喪事、補任に詔遣參議繼兄等四人監護葬事、又遣中納言……就第宣贈從一位、別勅賜絁布綿等と見ゆ
○贈從一位、原本贈を賜に作るを改む
○兼中衞大將、八年十月戊寅に任ぜらる
○授正二位、補任に據るに正二位昇叙は十三年十月廿七日なり
○文武之任、補任に任を清班の二字に作る
○端右之重、端右は朝端國右の略（江淹蕭重讓揚州表に超居國右、鬱處朝端とあり）朝臣の首端一國の高位の意か補任には重を重任に作る
○任在曹司、原本任を時に作る西本に據て改む
○向隅、漢書に出づ獨り憂ひ悲むを云既に注す
○昧□求衣、□疑くは爽字
○神靈池也云々、此事又清和紀貞觀六年十二月廿六日己卯條に見ゆ
○越優婆夷、翻譯名義集卷一に鄔波斯迦唐言近事女、舊優婆斯又曰優婆夷、皆訛也、言近事者親近承事諸佛法故後漢書

往中華翻譯近住言受戒行堪近僧住也とあり
○造宮職官位准中宮職、三代格卷五寛平三年八月三日官符中に見ゆ
（八月）諸□、□は神若は社字なるべし
○澇、字書に淫雨也淹也とあり
○佐比川橋、山城志紀伊郡廢佐比寺條に吉祥院村有地名佐比云々と見ゆ佐比は舊京城右京の縱衢の名にて朱雀大路の末鳥羽大路より乙訓郡久我畷に通する中間に桂河あり之に架せし橋なるべし
○賀茂神、神名式山田郡賀茂神社、廣澤村大字廣澤にあり
○美和神、同に美和神社、桐生市にあり
○火雷神、同に那波郡火雷神社、佐波郡芝根村大字下之宮にあり
○文字、原本文の字無し西本に據て補ふ
○驛道、原本驛を騎に作る西本に據て改む
○登勒野、山城國葛野郡にあり
（九月）牡山烽火、男山なるべし男山は綴喜郡にあり河內國に接す故に山

中臣朝臣諸魚授正四位上、從四位上藤原朝臣內麻呂、從四位下和朝臣家麻呂正四位下。○八月己未朔、日有蝕之。○六甲子、大和國山崩水溢、東大寺墻垣倒頽。○七乙丑、緣淫雨不晴、奉幣於畿內諸□、筑後國澇、詔令賑恤。○八丙寅、遣使賑給京中百姓、以霖雨經日、穀價騰躍也。○十戊辰、遣內兵庫正從五位下尾張連弓張、造佐比川橋。山城國人正六位上大野朝臣犬養貫付右京。○十六甲戌、上野國山田郡賀茂神、美和神、那波郡火雷神、並爲官社。○廿一己卯、巡幸京中、始置正親司史生二員。是日勅、諸國地圖、事迹疎略、加以年序已久、文字闕逸、宜更令作之、夫郡國鄉邑、驛道遠近、名山大川、形體廣狹、具錄無漏焉。○廿五癸未、幸大藏省、賜侍臣以下布有差。○廿八丙戌、遊獵於登勒野。○廿九丁亥、左兵衞佐從五位上橘朝臣入居爲兼右中辨、右兵衞佐從五位上秋篠朝臣安人爲兼左少辨。○九月己丑朔、勅、遷都以來、于今三年、牡山烽火、無所相當、非常之備、不可暫闕、宜山城河內兩國相共量定便處、置彼烽燧。○五癸巳、從五位上阿保朝臣人上爲陰陽頭、播磨守如故。○八丙申、山城國紀伊郡陸田二町賜典侍從四位上和氣朝臣

壌河内相共に量定せしむ
烽火の事は軍防令に見ゆ
○甄關、紀略」を暫に作る古くは相通す
○栗前野、抄郡鄕部に（山城國）久世郡栗隈（久里久末）鄕とある是なり今大久保村大字廣野卽ち此野なりと云
○御坂連、姓氏錄に載せす
（十月）本惟天造、考異に天舊作「大據「類史」訂すと云り又惟は類史此に作る大造は左傳成十三年に出づ大功と云か如し造は作なり僞なり、天造は易屯卦彖傳に天造草昧とあり天運の意或はまた天の始て物を作る意と云文選陸機歎逝賦に妙「思天造」注に妙思天之造物」とあり
○時來、類史來を泰に作る
○桅帆、字書に桅は船檣也卽懸帆之竿とあり
○楡材、爾雅釋木に楡無疵、邢昞疏に楡木無疵病因名とあり豫章に似たる木なりと云
○不沒卽危、類史沒を波に作る
○不諧、原本諧を諸に作る類史に據て改む

廣虫、○癸卯、越前國坂井郡公田二町、荒田八十四町賜諱、（淳和天皇上諱）○戊申、山城國葛野郡公田二町賜從三位和氣朝臣清麻呂、○己酉、遊獵于栗前野、○乙卯、山城國人正六位下御犬連廣額等賜姓御坂連、○冬十月己未、正六位上御長眞人廣岳等歸自渤海國、其王啓曰、嵩璘啓、差使奔波、貴申情禮、佇承休眷、瞻望徒勞、天皇頓降敦私、貺之使命、佳問盈耳、珍奇溢目、俯仰自欣、伏增懽悅、其定琳等、不料邊虜、被陷賊場、俯垂憐存、生還本國、奉惟天造、去留同賴、嵩璘猥以寡德、幸屬時來、官承先爵、土統舊封、制命策書、冬中錫及、金印紫綬、遼外光輝、思欲修禮勝方、結交貴國、歲時朝覲、桅帆相望、而巨木楡材、土之難長、小船汎海、不沒卽危、亦或引海不諧、遭罹夷害、雖慕盛化、如艱阻何、儻長尋舊好、幸許來往、則送使數不過廿、以玆爲限、式作永規、其隔年多少、任聽彼裁、裁定之使、望於來秋、許以往期、則德隣常在、事與望異、則足表不信、其所寄絹廿匹、絁廿匹、絲一百絇、綿二百屯、依數領足、今廣岳等、使事略畢、情求迨時、便欲差人送使奉謝新命之恩、使等辭以未奉本朝之旨、故不敢淹滯、隨意依心、謹因廻

○盛化、西本化を紀に作る
○不信、原本信を依に作る類史に據て改む
○領足、類史足を之に作る
○奉謝、原本謝を論に作る類史に據て改む
○不敢淹滯、類史敢を致に作る
○大原野、山城國乙訓郡にあり今大原野村の地
○紫野、同愛宕郡、今京都市に入る
○日野、同宇治郡今醍醐村大字となる
○今所上之啓、紀略啓を書に作る
○周日、類史周世に作る
○慕聲、考異に慕舊作墓據類史訂とあり
○風區、風化の及ぶ區域を云
○悔中間之迷圖、近世表文を上らず或は上りても不遜の辭句ありしを改めたるを云
○白環西貢云々、文選丘遲與陳伯之書に當今皇帝盛明天下安樂白環西獻楛矢東來、注に善曰世本曰舜時西王母獻白環及佩家語孔子曰昔武王剋商於是肅愼氏貢楛矢石

次、奉付土物、具在別狀、自知鄙薄、不勝羞愧、○辛酉、正六位上御長眞人廣岳授從五位下、正六位上桑原公秋成外從五位下、並以奉使稱旨也、○壬戌、遊獵於大原野、始置典藥寮史生四人、造酒司史生二人、○癸亥、遊獵于紫野、賜五位已上衣、○丙寅、遊獵於日野、賜五位已上衣、○戊辰、造宮職竿師爲從八位官、○辛未、始置主鷹司史生二人、○壬申、先是渤海國王所上書疏、體無定例、詞多不遜、今所上之啓、首尾不失禮、誠款見乎詞、羣臣上表奉賀曰、臣神等言、臣聞、大人馭時、以德爲本、明王應世、懷遠是崇、故有殷代則四海歸仁、周日則九夷順軌、伏惟、天皇陛下、仰天作憲、握地成規、窮日域而慕聲、布風區而向化、誠可以孕育千帝、苞懷百王者矣、近者送渤海客使御長廣岳等廻來、伏見彼國所上啓、辭義溫恭、情禮可觀、悔中間之迷圖、復先祖之遺跡、況復緣山浮海、不顧往還之路難、克己改過、始請朝貢之年限、與夫白環西貢、楛矢東來、豈可同日而道哉、臣等幸奉周行、得逢殊慶、不任鳧藻之至、謹詣闕奉表以聞、詔曰、獻表濃見行都、然卿等乃勤之久供奉爾依氏之、水表乃國毛順仕良之止奈毛所思

努とあり楛は字書に木名似荊而赤莖似蓍可爲矢幹と注す楛楨は東に在り故に楛矢東より來ると云
○本周行、原本本を忝に作り西本蒸に作る類史に據て改む周行は毛詩周南卷耳章に出づ大道也また周之列位と注す
○鳧藻、後漢書杜詩傳に將帥和睦士卒鳧藻、注に言其和睦歡悅如鳧之戲於水藻也とあるに據れり
○因幡國造淨成女卒、國字は西本に據て補ふ
○是日、紀略癸酉に作る
○登勒野、上に出づ
○野足爲下野守、同に野足舊脫據下文補と云
○爲兼鎭守將軍、考異に舊脫據公卿補任補と云
○吹部、職員令鼓吹司に吹部卅人とあり
○大寶降、大寶の下恐くは以字を脫す
○角吹、三代格延暦十九年十月九日太政官符に令有吹角長上二人云々とあり角は大小角を云
○勘籍、民部省の戸籍を勘檢するを云位子雜色諸衞の輩は徭役を除くべき

行之、嘉備悅備御坐止詔天皇詔旨乎、衆聞食宣、正四位上因幡國造淨成女卒、淨成女、元因幡國高草郡之采女也、天皇特加寵愛、終至顯位、
○癸酉、志摩國飢、遣使賑給、是日遊獵于登勒野、
○甲申、從五位上橘朝臣安麻呂爲少納言、正五位上大原眞人美氣爲諸陵頭、外從五位下尾張宿禰弓張爲主油正、外從五位下桑原公秋成爲大和介、正五位下巨勢朝臣野足爲下野守、從五位下多治比宿禰眞淨爲肥後介、從五位下三諸朝臣綿麻呂爲近衞將監、從五位下藤原朝臣最乙麻呂爲內兵庫正、近衞少將從四位下坂上大宿禰田村麻呂爲兼鎭守將軍、□□爲軍監、一定鼓吹司吹部號、置員卅四人、初大寶降、或注吹人、或著角吹、或稱番上、或號吹部、名既不定、數亦無限、今定名吹部、准雅樂寮雜色生、乃聽勘籍焉、己卯、陸奧國博士醫師官位准少目、奉授陸奧國多賀神從五位下、先是請四十僧、一七日於宮中行藥師悔過、是日事畢焉、
○十一月戊子朔、曲宴、賜侍臣已上被、
○己丑、遊獵於北野、河內國志紀郡荒田一町賜正七位下秋篠朝臣清野、陸奧國伊治城、玉造塞、相去卅五里、

に由りて勘籍して其の合不を定む故に聽勘籍とさは徭役を免する意なり勘籍の事は戸令及民部式に詳なり
○己卯、此條塙本に甲申の上に之を置き考異に己卯以下廿七字舊在甲申條下今推干支改さあり然るに三代格卷五太政官符に陸奧國博士云々を十月廿八日とし紀略に先是請册僧云々廿一字を甲申條任官の下に置けり矢野玄道翁私記に按己卯二字當衍或與昇字草體相涉而誤者歟とあり其說の如何に拘らす輙く塙氏の說に從ひ難し故に西本に據て姑く舊のまゝとし之を改めす
○多賀神、神名式陸奧國宮城郡多賀神社是なり
（十一月）曲宴、節々の大宴にあらさる宴を云字書に有旨內苑留臣下賜宴謂之曲宴とあり
○北野、北嵯峨野なるべし山城國葛野郡にあり三禁野の一なり
○伊治城、栗原郡にあり續紀景雲元年十一月乙巳（下一六四頁）に見ゆ
○玉造塞、陸前國玉造郡

中間置驛、以備機急。○辛卯、陸奧國人從五位下道嶋宿禰赤龍貫于右
京。○壬辰、賜故右大臣贈從一位藤原朝臣繼繩度七人。○外正六位上
上毛野朝臣益成、吉彌侯部弓取、巨勢部楯分、大伴部廣椅、尾張連大食、
授外從五位下、以戰功也。○乙未、詔曰、周胡撫曆、肇開九府之珍、漢室膺
期、爰設三官之貨、用能遷有無以均利、通□夷而得宜、濟民之要須、乃益
國之嘉策、然而□機適時、賢哲所以成務、權輕作重、母子於是並行、頃者
私鑪滋起、奸鑄紛然、施之交關、既爲輕賤、宛之貯蓄、不堪寶用、即欲禁止、
卒難懲淸、事須平量以救流弊、是以、更制新錢、仍增其直、文曰隆平永寶、
宜以新錢一當舊錢十、新舊兩色、兼使行用、但舊錢者、始自來歲、限以四
年、然後停廢、遣伊勢、參河、相摸、近江、丹波、但馬等國婦女各二人於陸
奧國、教習養□、□以二年。○丁酉、無位嶋野女王、百濟王孝法、百濟王惠
信、和氣朝臣廣子、橘朝臣常子、紀朝臣內子、紀朝臣殿子、藤原朝臣川子、
錦部連眞奴等授從五位上、無位弓削宿禰美濃人從五位下。○庚子、勅、
納貢之本、任於土宜、物非所出、民以爲患、今備前國、本無鍫鐵、每至貢調、

長道郡にあり天平九年紀(續紀上二六四頁)始見
○中間置驛、詳ならず
○九府、周代に財幣を掌る官にして大府玉府內府外府泉府天府職內職金職幣なり漢書の上に見ゆ
○三官、史記平準書に「令上林三官鑄」とあり注に三官は均輸鍾官辨銅の三令なるべしと云
○□夷、□は華字なるべし
○□機過時、□は或は合字なるにや
○權輕作重、重量の輕きを偽りて重しとなすを云ふ
○寳用、原本用を由に作る西本に據て改む
○卒難懲清、原本難を雖に作る西本に據て改む
○隆平永寳、拾芥抄に隆平永寳延暦十五年十一月八日作錢自今年至弘仁八年「經二廿二箇年」と見ゆ
○停廢、原本廢を癈に作る西本に據て改む
○教習養□□以二年、私記に「疑當」填二鑄限二字」と云
○美濃人、西本人字なし恐くは衍
○納貢之本云々、此勅三代格卷八に見ゆ

常置比國、自今以後、宜停貢鐵、非絹則糸、隨便令輸、○辛丑、始用新錢、奉伊勢神宮、賀茂上下二社、松尾社、亦施七大寺及野寺、賜皇太子親王已下職事正六位已上、僧都律師等、各有差、○甲辰、宴羣臣、賜帛有差、從四位上和氣朝臣廣虫授正四位上、无位藤原朝臣名子從五位上、外從五位下刀佩首廣刀自從五位下、○戊申、遊獵於日野、發相摸、武藏、上總、常陸、上野、下野、出羽、越後等國民九千人、遷置陸奧國伊治城、○己酉、令天下諸國搜捕逃亡飛驛工、若有容隱、科違勅罪、安藝國沼田郡采女佐伯直那賀女授外從五位下、○丙辰、遊獵於栗栖野、○十二月辛酉、從五位下多治比宿禰眞淨爲內匠頭、正四位下藤原朝臣雄友爲兼中衞大將、參議大藏卿如故、從四位下三嶋眞人名繼爲左衞士督、從五位下藤原朝臣清主爲內廐頭、從五位下都努朝臣筑紫麻呂爲助、外從五位下阿倍安積臣繼守授外從五位上、禁鑄帶、以支鑄錢也、○癸亥、大和國十市郡荒田一町賜左衞士督從四位下三嶋眞人名繼、○丙寅、詔曰、皇親之蔭、事具令條、而宗室之胤、枝族已衆、欲加榮班、難可周及、是以

○民以爲患、三代格以た是に作る
○今備前國、同に今字の下に闕字あり
○蠻璽、拾謂度部に蠻璽名苑云蠻（七道反字亦作鏁久波）珍寶部に纘說文云（他結反久路加禰此間一訓二禰利一）黑金也とありまた播磨風土記賀毛郡の條に多良知志吉備纖伐蠻拝如田打手拍子等音等爲（歌）と見ゆ
○貢蠻、三代格貢を取に作る
○奉伊勢神宮云々、錢貨を以て幣と爲す事の史に見えし始なり
○七大寺、東大興福元興大安藥師西大法隆の七寺　○野寺、官寺に對して云り　○日野、上に出づ　○沼田郡采女、西本に郡字なし　○栗栖野、山城國宇治郡（【十二月】）銙帶、唐書柳渾傳に玉工爲帝作帶誤毀一銙、字書に帶は帶具或以金或以犀爲之猶今之帶鉤版とあり　○皇親、繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲親王以外並爲諸王自親王五世雖得王名不在皇親之限、選叙令に凡蔭皇親者親王子從四位下諸王子從五位下其五世王者從五位下子降一階庶子又降一階唯別勅處分不拘此令とあり　○宗室、原本皇室に作る選叙令集解に據て改む西本に白木に作るは宗字の誤なり　○白首不調、漢書張釋之傳に爲騎郎十年不得調、師古注に調選也とあり頭髮白に至るも選に預るを得ざるを云　○而後永以爲例、選叙令集解には以後立爲恒例に作る　○土佐國、西本佐を左に作る　○上毛野陸奥公、陸奥は本居の地によりて名く

【延暦十六年】束帛、字書に束五兩有以帛兩端相向卷之共成一兩一兩謂一匹也五兩爲一束謂之束帛とあり

進仕無階、白首不調、眷言於此、實合矜恕、宜其四世五世王、及五世王嫡子年滿廿一者叙正六位上、但庶子者降一階叙、自今而後、永以爲例、○辛未、巡幸京中、便御三品朝原內親王第、賜五位以上物、○戊寅、流出雲臣家繼於土佐國、家繼與叔父乙上不協、謀相傷、事覺及罪、乙上任佐渡權目、不預釐務、唯給公廨而已、○辛巳、少僧都行賀爲大僧都、○丙戌、勅免流人氷上川繼課役、○陸奥國人外少初位下吉彌侯部善麻呂等十二人、賜姓上毛野陸奥公、

十六年春正月戊子朔、皇帝御大極殿受朝賀、大宰府獻白雀、宴侍臣已上於前殿賜被、○甲午、宴五位已上、賜束帛有差、從五位上篠嶋王授正五位下、正六位上坂本王、安曇王從五位下、從四位下百濟王玄鏡、藤原

○正五位下從五位下藤原朝臣、此十二字考異に舊脫據下文補こあり
○永繼、考異に云繼舊脫、據下文補こ
○巨都雄、原本巨な臣に作る西本及類史に據て改む下同じ
○嵩山忌寸、西本嵩を高に作る
○大伴白河連、大伴氏の同祖にて白河は其本居の地白河郡に據れる名なり
○曰理郡、原本曰な亘に作る西本に據て改む西本曰を日に作るは誤なり
○大伴曰理連、大伴氏の同祖にて曰理は其本居の地に據れる名なり
○大伴行方連、同上

朝臣乙叡、多治比眞人海從四位上、正五位下紀朝臣作良、羽栗臣翼、橘朝臣綿裳正五位上、從五位上阿保朝臣人上、藤原朝臣大繼、紀朝臣□□正五位下、從五位下藤原朝臣仲成、藤原朝臣今川、蜷淵眞人岡田、和朝臣入鹿麻呂從五位上、外從五位上麻田連眞淨、伊勢朝臣諸人、正六位上多治比眞人道作、淡海眞人福良麻呂、多治比眞人今麻呂、大原眞人眞福、藤原朝臣星雄、大中臣朝臣諸人、紀朝臣永繼、粟田朝臣入鹿、大野朝臣犬養、安倍朝臣家守、大伴宿禰大關、平群朝臣廣道、田口朝臣息繼、百濟王聰哲、佐伯宿禰鷹成、石川朝臣道益、和朝臣建男、安倍小殿朝臣野守、中臣丸朝臣豐國從五位下、正六位上錦部連春人、民忌寸廣成、山口忌寸諸上、林宿禰沙婆、中科宿禰巨都雄外從五位下、○戊戌、正六位上槻本公奈弖麻呂、嵩山忌寸道光授外從五位下、○庚子、陸奧國白川郡人外□八位□大伴部足猪等賜大伴白河連、曰理郡人五百木部黑人大伴曰理連、黑河郡人外少初位上大伴部眞守、行方郡人外少初位上大伴部兄人等大伴行方連、安積郡人外少初位上丸子部古佐美、

○大伴安積連、同上
○大伴山田連、同上、山田は郡名にも郷名にも見えざれど遠田郡の地名なるべし
○大伴宮城連、大伴氏の同祖にて宮城は本居の地に據れるなるべし
○從四位下三嶋眞人名繼云々、以下の任官は紀略之を甲午に係く
○善珠、扶桑略記に正月十六日興福寺善珠任僧正、皇太子病惱間施般若驗、仍被抽賞、去延暦四年十月皇太子早良親王將被廢時馳使諸寺、令修日業、時諸寺拒而不納、後乃到菅原寺、（興福寺沙門善珠舍）、悲出迎灑涙禮佛說之後遂契遺言前世殘業今來成害、此生絕讎、更勿結、怨使者還報、委曲親王合掌歡云自披忍辱之衣、不怕逆鱗之怒其後親王亡靈屢惱於皇太子、善珠法師應請乃祈請云、親王出都言曰早蒙遺教、乞用少僧之言、勿致悖亂之咎、朗轉讀般若說无相之理、此言未行、其病立除、因茲昇進遂拜僧正、爲人致忠自得其位也、元亨釋書に釋善

大田部山前、富田郡人丸子部佐美、小田郡人丸子部稻麻呂等、大伴安積連、遠田郡人外大初位上丸子部八千代、大伴山田連、磐瀨郡人□□□大伴宮城連、從四位下三嶋眞人名繼爲大和守、從五位下淡海眞人眞直爲伊勢介、從五位上高橋朝臣祖麻呂爲駿河守、從五位下百濟王元勝爲安房守、從五位下大野朝臣犬養爲上總介、大外記外從五位下中科宿禰巨都雄爲兼常陸少掾、從五位下大神朝臣仲江麻呂爲美濃介、從五位下百濟王聰哲爲出羽守、從五位下大枝朝臣眞仲爲能登守、從五位下石川朝臣道益爲但馬介、從五位下安倍朝臣家守爲伯耆介、從五位下紀朝臣眞賀茂爲石見守、從五位下石川朝臣嗣人爲備後守、外從五位下山口忌寸諸上爲介、從五位下巨勢朝臣訓備爲安藝守、外從五位下林宿禰沙婆爲介、從五位下多治比眞人今麻呂爲肥後介、○十四辛丑、傳燈大法師位善珠爲僧正、傳燈大法師位等定爲大僧都、傳燈大法師位施曉爲少僧都、○十五壬寅、長岡京地一町賜從四位下菅野朝臣眞道、○十六癸卯、宴五位以上賜祿、○十七甲辰、觀射於朝堂院、○十九丙午、遊獵於水

珠姓安部氏或曰大皇后藤富子之養子也延曆十六年正月侍皇太子講其年四月卒歲七十五とあり
○等定、大和東大寺の別當、東大寺別當次第本朝高僧傳に傳あり
○施曉、近江梵釋寺の僧、本朝高僧傳に見ゆ
○水生野、攝津志に島上郡水無瀨山崎舉國史作水成、在水無瀨村上方延曆中帝屢遊獵此野
○庚戌勅、三代格前田本に載せ文に異同あり參看すべし
○阿波國驛家、兵部式所載二驛
○伊豫國、同六驛
○土佐國、同三驛
○土佐、西本土左に作る下同じ
○吾椅、兵部式五椅に（九條本傍書五を吾に）作る五は吾の省文なるべし吉田氏地名辭書に長岡郡本山土居の地なりと云
○舟川、兵部式丹治川に作るされば舟は丹の訛なるべし土佐二驛考に丹治川今作立川村屬豐永鄕（長岡郡）自本山通此而入伊豫馬立是徑路也と云

生野、〇丁未、巡幸京中、〇己酉、大和國稻三百束施僧正善珠法師弟子僧慈厚、以事師无倦也、從五位下粟田朝臣入鹿爲中務少輔、外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂爲主計助、〇庚戌、勅、參議已上左右大辨八省卿、委任既高、群寮所仰、而介帶之國、遙附公文、因玆參對諸司、事不穩便、自今以後、宜停遙附焉、賑給壹伎嶋飢民、〇辛亥、能登國羽咋能登二郡沒官田幷野七十七町、賜尙侍從三位百濟王明信、〇壬子、遊獵於大原野、是日勅、山城國愛宕葛野郡人、每有死者、便葬家側、積習爲常、今接近京師、凶穢可避、宜告國郡、嚴加禁斷、若有犯違、移貫外國、〇癸丑、幸近東院、宴五位已上、賜綾有差、〇甲寅、廢阿波國驛家□、伊豫國十一、土佐國十二、新置土佐國吾椅舟川二驛、〇二月丁巳朔、巡幸京中、賜山城國相樂郡田二町六段、爲贈右大臣從二位藤原朝臣百川墓地、〇己未、置內廐寮史生四員、是日曲宴、賜五位已上綿有差、〇辛酉、遊獵于北野、〇癸亥、勅、從五位上嶋野女王、百濟王孝法、百濟王惠信、和氣朝臣廣子、橘朝臣常子、紀朝臣內子、紀朝臣殿子、藤原朝臣川子、錦部連眞奴、從五位

二月　百川墓地、山城志に相樂郡大政大臣正一位藤原朝臣百川淳和天皇外祖父在叶師村今稱長家とあり

○位田宜准男給之、田令に凡位田正一位八十町云々從五位八町女減三分之一とあり

○近江□掾、□恐くは權字

○爲大尉、考異に尉蓋貳或監誤とあり

下弓削宿禰美濃人等位田、宜准男給之、○乙丑（九）、外從五位下内藏宿禰賀茂麻呂爲大外記、從五位下淨野宿禰最弟爲兼縫殿頭、左衞士大尉近江□掾如故、外從五位下槻本公奈弖麻呂爲内藏助、從五位下淡海眞人福良麻呂爲治部少輔、外從五位下上道朝臣廣成爲玄蕃助、從五位下平群朝臣廣道爲主計助、參議從四位上藤原朝臣眞友爲兼大藏卿、右京大夫如故、從五位下中臣丸朝臣豐國爲主殿助、從五位下田中朝臣淨人爲造酒正、大納言正三位勳四等紀朝臣古佐美爲兼東宮傅、式部卿如故、文章博士外從五位下賀陽朝臣豐年爲兼學士、右大辨從四位下藤原朝臣葛野麻呂爲兼春宮大夫、從四位上藤原朝臣乙叡爲越前守、左京大夫中衞大將如故、大判事從五位下藤原朝臣繩麻呂爲兼因幡守、正五位下橘朝臣入居爲播磨守、右中辨左兵衞佐如故、從五位下多治比宿禰眞淨爲讚岐介、參議正四位下藤原朝臣雄友爲大宰帥、從五位下和朝臣建男爲大尉、○己巳（十三）、先是重勅從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野朝臣眞道、從五位上守左少辨兼行右

○續日本紀、釋紀に續日本紀四十卷無序從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野朝臣眞道等奉勅撰とあり

○三墳五典、左傳昭十二年に是(楚左史倚相)能讀三墳五典八索九丘、疏に伏犧神農黃帝之書謂之三墳、少昊顓頊高辛唐虞之書謂之五典云々とあり

○左言右事、漢書藝文志春秋の條に古之王者世有史官、君擧必書云々左史記言、右史記事、事爲春秋、言爲尚書云々とあるに據れり

○纖微、類史纖を雖に作る

○徽烈、字書に徽は善也烈は美也顯也とあり

○絢緗、字書に絢は文飾也、緗は帛淺黃色也古人寫本多用緗素、其染成淡黃色者謂之緗素謂書卷也とあり

○炯戒、炯は原本泂に類史炳に作る泂は炯の訛なれば改む字書に光也火明貌とあり炯戒は明かなる警戒を云

○照簡、原本照を昭に作る類史に據て改む

兵衛佐丹波守秋篠朝臣安人、外從五位下行大外記兼常陸少掾中科宿禰巨都雄等、撰續日本紀、至是而成、上表曰、臣聞、三墳五典、上代之風存焉、左言右事、中葉之迹著焉、自茲厥後、世有史官、善雖小而必書、惡纖微而无隱、咸能徽烈絢緗、垂百王之龜鏡、炯戒照簡、作千祀之指南、伏惟天皇陛下、德光四乳、道契八眉、握明鏡以惣萬機、懷神珠以臨九域、遂使仁被渤海之北、貊種歸心、威振日河之東、毛狄屏息、化前代之未化、臣往帝之不臣、自非魏々盛德、孰能與於此也、既而負扆餘閑、留神國典、爰勅眞道等、銓次其事、奉揚先業、夫自寶字二年、至延曆十年、卅四年廿卷、前年勅成奏上、但初起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、惣六十一年、所有曹案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存、臣等搜故實於司存、詢前聞於舊老、綴叙殘簡、補緝缺文、雅論英猷、義關貽謀者、惣而載之、細語常事、理非書策

○千祀、祀は年也
○四乳、淮南子修務訓に文王四乳是謂大仁云論衡に夫四乳聖人也とあり
○八眉、同く淮南子脩務訓に堯眉八彩云々、尚書大傳に堯八眉とあり
○貊种、貊は北狄を云
○日河、私記に河は恐域誤と云り
○毛狄、毛ある北方の夷を云
○盛德、類史盛を威に作る
○負扆、史記主父偃傳淮南子汜論訓に出つ字書に扆は屏風天子朝諸侯時背屏風而立故とあり帝王の天下を統治するを云
○留神國典、御心を國史の事に用ひさせ給ふを云
○前年勒成奏上、廿卷中寶字より寶龜八年に至る十四卷は延暦十三年八月に上奏す殘餘の寶龜九年より延暦十年に至る六卷は翌十四年或は十五年七月までの間纖纖芟去以前に上奏せり故に前年勒成奏上すと云
○但初、初は原本却に作る類史に據て改む
○曹案、考異に曹類史一本作舊とあり舊案い方

者、並從略諸、凡所刊削廿卷、并前九十五年卌卷、始自草創、迄于斷筆、七年於茲、油素總畢、其目如別、庶飛英騰茂、與二儀而垂風、彰善癉惡、傳万葉而作鑒、臣等輕以管窺、裁成國史、牽愚歴稔、伏增戰兢、謹以奉進、歸之策府、是日詔曰、天皇詔旨良麻止勅久、菅野眞道朝臣等三人、前日本紀與利以來、未修繼在留久年乃御世御世乃行事乎、勘搜修成氐、續日本紀卌卷進留勞、勤美譽美奈毛所念行須、故是以冠位擧賜治賜波久止勅御命乎、聞食止宣、從四位下菅野朝臣眞道授正四位下、從五位上秋篠朝臣安人正五位上、外從五位下中科宿禰巨都雄從五位下、○辛未十五、勅、故從三位勳二等坂上大宿禰苅田麻呂、正四位上勳二等道嶋宿禰嶋足等、寶字之歳、卒遇不虞、奮不顧身、共著其效、是以叙勳之日授二等、加賜功田廿町、並傳其子、而後特以嶋足准之大功、所賜之田、世々不絶、功既同等、賞何殊科、疇庸之典、恐有未允、宜其嶋足功田依前年勅同傳子之限、從五位下多治比眞人八千足爲少納言、從五位下廣庭王爲侍從兼河内守、侍從從五位下大庭王爲兼左大舍人頭、讃岐守如故、從五

位上三諸朝臣眞屋麻呂爲右大舍人頭、內匠頭從四位下川村王爲雅
□□正、從五位下藤原朝臣二起爲雅樂頭、從五位下田口朝臣息繼爲
助、從五位下大伴宿禰大關爲主計助、從五位下田中朝臣淸人爲宮內
少輔、從五位下田中朝臣大魚爲造酒正、從五位下坂本王爲園池正、從
五位下紀朝臣永繼爲左京亮、從五位下橘朝臣嶋田麻呂爲春宮亮、從
五位下平群朝臣廣道爲攝津介、從五位下紀朝臣奥手麻呂爲土佐守、
○壬申（十六）、遊獵於登勒野、是日、停給畿內國司事力幷職田、○癸酉（十七）、太政
官史生從七位下安都宿禰笠主、式部史生賀茂縣主立長、叙位二階、中
務史生大初位下勝繼成、民部史生大初位下別公淸成、式部書生無位
雀部豐公一階、以供奉撰日本紀所也、○甲戌（十八）、朝原內親王獻物、賜五位
已上綿、○丙子（廿）、巡幸京中、○丁丑（廿一）、參議左大辨近衞大將兼神祇伯正四
位上大中臣朝臣諸魚卒、諸魚者、故右大臣正二位淸麻呂之第四子也、
寶龜初、授從五位下、爲衞門員外佐、八年爲員、擢遷中衞少將、兼下野守、
至正五位上、延暦中遷式部大輔、兼右京大夫、俄授從四位下、拜參議、兼

是なるに似たり曹案は曹司にて作れる草の意か
○石川朝臣名足、續紀解說に注す
○滄海眞人三船、同上
○當麻眞人永嗣、同上
○分帙修撰、卷帙を分ち各分擔して修撰せしを云
○前紀、日本書紀を云
○寶字元年之紀、現存卷二十なり
○司存、論語泰伯篇に籩豆之事則有司存とあり
○貽謀、毛詩大雅文王有聲篇に貽厥孫謀とあるに據れり貽は遺傳なり後にのこし傳ふる意又蔡邕詩に詒謀と見ゆ貽詒通ず
○略諸、略するを云諸は助字にて意義なし
○七年於茲、此に據れば詔を下されしは延暦十年なるべし然るに此事十年の紀に見えず
○油素、文選任彥昇表に人蓄油素家懷鉛筆注に油素絹也とあり油は油煙にて墨、素は白色の生帛なり油素鉛筆は紙に書き筆るを云類史には緗素に作る
○飛英騰茂、司馬相如賦に蜚英聲騰茂實とあるに據れり

近江守、尋授從四位上、爲神祇伯、兼近衛大將、授正四位上、卒。時年五十五、諸魚性好琴歌、无他才能、雖在哀制、乘輿忘□、貪冒財貨、營求産業、時議以此鄙之、○戊寅、長岡京地二町賜諱、淳和太上天皇○庚辰、從五位下中臣朝臣宅成爲雅樂助、從五位下田口朝臣息繼爲鑄錢次官、○甲申、勅、租稅之本、備於水旱、錢帛之財、飢而不食、今聞、京職多有收錢、事須賤末貴本、一絕收錢、但恐民有貧富、不必蓄穀、宜聽貧乏之徒進錢、通計不得過四分之一、○三月戊子、先是甲斐相摸二國相爭國堺、遣使定甲斐國都留郡□留村東邊砥澤、爲兩國堺、以西爲甲斐國地、以東爲相摸國地、○己丑、宴侍臣、奏樂、賜祿有差、○甲午、勅、畿內國司新至任者、皆限八月卅日、依式給粮、今停職田、割租爲料、收租之後、須得其分、宜改舊例、限十一月卅日、○丁酉、正四位下菅野朝臣眞道爲左大辨、東宮學士左兵衛督伊勢守如故、參議正四位上石川朝臣眞守爲兼刑部卿、從五位下大伴宿禰大國爲春宮大進、參議刑部卿正四位下藤原朝臣內麻呂爲兼近衛大將、參議左京大夫從四位上藤原朝臣乙叡爲兼中衛大將、參議正四位

○彰善癉惡、尙書畢命に出づ、注に謂明其爲善、病其爲惡也とあり、類史癉を疾に作る
○萬葉、萬世に同じ、類史百世に作る
○策府、祕府と云に同じ
○前日本紀、日本書紀を云ふ、此に日本紀とありて日本書紀と無きに據れば當時は日本紀と稱せしなるべし、此事書紀解說を參看すべし
○治賜波久止、考異に舊撰類史補とあり
○實字之歲、天平寶字八年八月惠美押勝の亂を云ふ
○加門功田、葛田麻呂に功田を賜へること續紀神護二年二月丁未紀に見ゆ
○疇庸之典、疇庸通す、功に報ゆるなり
○土佐守、西本佐を左に作る、下同じ
○事力、大宰府及國司等に賜はり職分田を耕さしむる人を云ふ、軍防令に見ゆ
○撰日本紀所、續日本紀を編修する官衙、卽ち修史局なり
○大中臣朝臣諸魚卒、續紀寶龜七年正月丙申に始見、敍任年月補任に詳なり
○乘輿忘□、□は憂字な

るべきか
○不必蓄穀、西本蓄上に衆字あり
(三月)□留村、抄に甲斐國都留郡都留郷見え夫木集にも都留の里見ゆれは□は都字なるべし新編武藏風土記には鹿留なりとすれど恐くは非ならむ
○紙澤、地名辭書に今の津井郡名倉村と云甲斐名勝志は今の戸澤なりとす
○正四位上石川朝臣、考異に上舊作下據下文訂
○左京大夫、同に左舊作右據上文訂
○勝虞、大和元興寺の僧本朝高僧傳に傳あり
○如寶、唐人なり元亨釋書卷十三に傳見ゆ
○大田親王、桓武天皇々女、母は百濟敎仁、大同三年二月薨
○安坂、信濃國筑摩郡(今東筑摩郡)の地名今坂井村と改む
○並槻忌寸、錄に見えず
○刀西、詳ならず
○安野造、錄に見えず
○貞嗣、考異に嗣舊脫據下文補さあり西本眞の一字に作る
○延久六年云々、西本亦同じ

位下和朝臣家麻呂爲兼衞門督、傳燈大法師位勝虞、如寶、並爲律師、長岡京地五町賜從四位下多治比眞人邑刀自、同京地一町賜大田親王、○癸卯、信濃國人外從八位下前部綱麻呂賜姓安坂、令遠江、駿河、信濃、出雲等國進雇夫二万册人、以供造宮役、○丙午、遊獵於北野、宴飮奏樂、賜四位已上衣、正六位上並槻忌寸荻麻呂授外從五位下、右京人正七位上刀西他麻呂等賜姓安野造、○癸丑、甲斐、下總兩國飢、遣使賑給、從四位下多治比眞人繼兄爲中務大輔、從五位下坂本王爲雅樂頭、從五位上笠朝臣江人爲民部大輔、信濃守如故、從五位下藤原朝臣貞嗣爲少輔、外從五位下葛井宿禰松足爲主計助、從五位下紀朝臣千世爲刑部少輔、外從五位下並槻忌寸荻麻呂爲園池正、從四位下紀朝臣勝長爲右京大夫、左衞士督造東大寺長官美作守如故、從四位下百濟王英孫爲右兵衞督、○乙卯、武藏、土佐所飢、遣使賑給之、

日本後紀卷第五

延久六年六月廿七日未時比按了

(三條西家本奧書)　大永四年九月十九日以中書王御本書寫之

日本後紀卷第八

起延暦十八年正月盡十二月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

皇統彌照天皇　桓武天皇

十八年春正月丙午朔、皇帝御大極殿受朝、文武官九品以上蕃客等各陪位、減四拜爲再拜、不拍手、以有渤海國使也、諸衞人等並擧賀聲、禮訖、宴侍臣於前殿、賜被、○壬子、七 豐樂院未成功、大極殿前龍尾道上構作借殿、葺以彩帛、天皇臨御、蕃客仰望、以爲壯麗、命五位已上宴樂、渤海國使大昌泰等預焉、賚祿有差、○甲寅、九 賜五位已上新錢、三位三千文、四位二千文、五位一千文、○丁巳、十二 從五位下多治比眞人豐繼、石上朝臣眞家授從五位上、正六位上川邊朝臣宅從五位下、正六位上鴈高朝臣笠繼、正七位上谷忌寸家刀自、正七位下次田連宅足、從七位上山田連乙□、從八位下高安連眞笠外從五位下、○戊午、十三 勅、冒蔭之徒、若能自首、宜從改

○桓武天皇、西本此四字なし

【延曆十八年】減四拜爲再拜、四拜は所謂兩段再拜にて我國の古禮なり彼國と風儀を異にするを以て再拜の禮を用ひしなり拍手は儀式大嘗祭辰日の條に獻物拍手四段段別八度所謂八開手也とあり八開手を拍つを云唐には拍手の禮を行はざるを以て之を止めしなり

○龍尾道、大極殿の前庭なり龍尾壇とも云

○賚祿、類史賚を賜に作る

○鴈高朝臣、原本鴈を鷹に作る西本に據て改む

○山田連乙□、狩谷氏の説に類史九十九云大同三年正月丁未正六位上山田連弟分授外從五位下疑當是人と云

○冒蔭之徒、他の蔭を冒して出身するを冒蔭と云卽ち外家の蔭を冒し孫にして子と稱し僧の子にして人の蔭を冒すが如きなりまた假蔭とも僞蔭とも云
○把笏之色、笏を把ることを聽されたる人を云
○先經駈策、駈策は鞭打ちて馬を走らするなり冒蔭の徒旣に任官と發覺するまでに官の爲に使役せられて相當に勞苦したるを云八月丁酉の條を參考すべし
○蓁揩衣、天武紀朱鳥元年正月紀に出づ榛の樹汁を以て摺りたる衣なり榛は漢名赤楊と云
○紀朝臣作良卒、續紀寶龜九年正月紀に始て見ゆ
○乙丑、清麻呂傳には十九日とす
○和氣朝臣廣虫卒、續紀神護元年正月紀に始見
○今上思勞舊云々、天長二年の事なり下文幷に清麻呂傳を參考すべし
○玳瑁帶、帶は衣服令朝服の中に金銀裝腰帶とあるは是なり倭名抄に令按革帶以其所附金玉石角等爲名故有白玉帶紀伊石

正、把笏之色、先經駈策、宜特寬恕、官位如舊、長岡京地一町賜從五位下藤原朝臣奈良子、○辛酉（十六）、御大極殿、宴群臣並渤海客、奏樂、賜蕃客以上蓁（ハリズリ）揩衣、並列庭踏歌、大學頭從四位下紀朝臣作良卒、少遊大學、頗覽經史、起家爲少判事、遷式部大丞、寶龜九年授從五位下、延曆四年叙從五位上、歷上野丹波二國守、除大學頭、後授從四位下、爲人質直、無所容舍、吏有小過、必糺以法、以此爲下所惡、尤勤公政、晨出昏入、老而無倦、○癸（十八）亥、於朝堂院觀射、五位已上射畢、次蕃客射焉、正五位上紀朝臣兒原授從四位下、○乙丑（二十）、典侍正四位上和氣朝臣廣虫卒、從三位行民部卿兼攝津大夫清麻呂姉也、少而出家爲尼、供奉高野天皇（稱德）、爲人貞順、節操無虧、事見清麻呂語中、皇統彌照天皇（桓武）甚信重焉、今上（淳和）思勞舊、追贈正三位、薨時年七十、○庚午（廿五）、勅、玳瑁帶者、先聽三位已上著用、自今以後、五位得同著、○癸酉（廿八）、散位從四位上安倍朝臣東人卒、○甲戌（廿九）、外從五位下桑原公秋成爲主計助、外從五位下葛井宿禰松足爲大和介、從五位下內眞人他田爲伊賀守、近衞將監從五位下三諸朝臣綿麻呂爲兼近江大掾、

帶等之名」と云ふが如く全體は革にて作り裝飾するものに據て種々の名を付たるにて琥珀帶は琥珀にて飾れるなど云
○安倍朝臣東人、續紀寶字八年十月庚午紀始見中務宮內大藏刑部の大輔豐後守刑部卿等を歷任す
○內眞人、詳ならす
○內匠頭、考異に內匠二字舊脫據上文補とあり
○川村王、考異に村舊脫據上文補と見ゆ
○法琬、西本琬を涴に作る恐くは非
○淸根忌寸、阿直史と同氏なるべし阿直史に淸根宿禰の姓を賜ふ事仁明紀承和元年九月壬申條に見ゆ
○羈旅、羈は覊の俗字
(二月)乙亥朔、考異に朔舊脫推干支補とあり
○從五位下三原朝臣、西本下三の二字なし考異に下舊脫據上文補とあり

從五位下甘南備眞人國成爲若狹守、從五位上石淵王爲越中守、外從五位下村國連息繼爲介、從五位上藤原朝臣仲成爲越後守、內匠頭從四位上川村王爲兼丹波守、從五位下藤原朝臣眞野麻呂爲周防守、外從五位下槻本公奈弖麻呂爲長門守、從五位上淺井王爲伊豫守、從四位下藤原朝臣葛野麻呂爲大宰大貳、從五位下石川朝臣淸直爲少貳、從五位下藤原朝臣河主爲豐前守。唐人大學權大屬正六位上李法琬、大炊權大屬正六位上淸川忌寸斯麻呂、造兵權大令史正六位上榮山忌寸千嶋、官奴令史正六位上榮山忌寸諸依、鼓吹權大令史正六位上淸根忌寸松山等給月俸、愍其羈旅也。○二月乙亥朔、無位安賀女王授從五位下。○丙子、從八位下佐味朝臣枚女授從五位下。○庚辰、從五位上藤原朝臣繼彥爲左少辨、從五位下石川朝臣魚麻呂爲右少辨、從五位下三原朝臣弟平爲內藏助。○辛巳、諱嵯峨太上天皇於殿上冠、賜五位已上衣被。從五位下淸野宿禰家弟授從五位上、從三位百濟王明信正三位、正五位上三嶋宿禰廣宅從四位下、從五位下高倉朝臣殿嗣爲主計

○出擧私稻云々、內年食乏しきを以て特に私稻を出擧することを聽されしなり
○謝崇道天皇靈、諸陵式に八嶋陵崇道天皇在大和國添上郡とあり紀略延暦四年九月庚申條に皇太子(早良親王)不自飲食積十餘日、遣宮內卿石川垣守等、駕船移送淡路比至高瀬橋頭已絶載屍至淡路葬云々とあり淡路に葬り奉りしを崇あるによりて此に幣帛を奉りて鎭謝し翌十九年七月崇道天皇と追稱し勅使を遣して祭らしめ又親王の骨を大和八嶋寺に納め奉り陵を作りて崇め奉らる八嶋陵是なり
○假蔭入色、假蔭は冒蔭と同じ他の蔭を冒すなり入色は官職に就くを云
○從四位下多治比眞人、從四位下四字西本になし考異に從四位下四字舊脫據上下文補とあり
○正五位上秋篠朝臣、考異に上舊作下據下文訂とあり
○從四位下紀朝臣勝長、西本下を上に作るは非、補任に十九年正月丙午從

頭、○壬午、(八)行幸交野、○己丑、(十五)勅、出擧私稻、先已禁制、如或違犯、卽有嚴科、而去年不稔、百姓乏食、諸國出擧、定難周贍、因時弛張、古今通典、宜寬前制、暫任民情、其收息利、率十收三、如過此限、罪亦如前、遣從五位上行兵部大輔兼中衞少將春宮亮大伴宿禰是成、傳燈大法師位泰信等於淡路國、令賚幣帛謝崇道天皇(早良親王)靈、○癸巳、(十九)主菓餅從七位下宍人朝臣宮人假蔭入色、改正還本、特免其罪、復本職、○甲午、(二十)正六位上石川朝臣乙名復本位從五位下、從四位下多治比眞人繼兄爲神祇伯、山城守如故、中納言從三位藤原朝臣雄友爲兼中務卿、從五位下登美眞人藤津爲左大舍人助、從五位下藤原朝臣岡繼爲圖書頭、從五位上橘朝臣安麻呂爲內藏頭、中納言從三位和朝臣家麻呂爲兼治部卿、從五位下百濟王鏡仁爲少輔、正五位下文室眞人波多麻呂爲雅樂頭、從四位下粟田朝臣鷹守爲大藏卿、外從五位下嵩山忌寸道光爲大炊權助、從五位上小倉王爲典藥頭、正五位上秋篠朝臣安人爲中衞少將、左中辨丹波守如故、從五位下菅原朝臣門守爲隼人正、從四位下百濟王英孫爲右衞

四位上とあり
○磐梨別公、神護景雲三年六月壬戌紀に備前國藤野郡人別部、忍海部、財部、同邑久郡人別部、同御野郡人物部等六十四人に石生別公を賜る事見ゆ
○藤野和氣眞人、原本野を原に作る類史紀略清麻呂傳及續紀天平神護元年三月甲辰紀に據て改む
○匪躬之節、清麻呂傳匪躬の上に有字あり
○笄年、禮記內則に女子十有五年而笄とあり
○葛木宿禰戸主、廣虫傳に葛井宿禰とす
○隨出家、紀略此上に廣虫の二字あり
○位祿、西本此二字なし
○太保、原本大保に作る今續紀の例に據て改む
○忍勝、續紀押勝に作る
○流徙、流罪及徙罪なり
○同名養子賜葛木首、續紀に天平勝寶八歲十二月乙未先是有恩勅收集京中孤兒而給衣糧養之至是男九人女一人成人因賜葛木連姓編附紫微少忠從五位上葛木連戸主之戸以成親子之道とあり
○號曰法王、神護二年十

士督、攝津守如故、從四位下紀朝臣勝長爲左兵衛督、近江守如故、從四位下紀朝臣兄原爲右兵衛督、肥後守如故、從五位下安倍朝臣小笠爲佐、○（廿一）乙未、流陸奧國新田郡百姓弓削部虎麻呂、妻丈部小廣刀自女等於日向國、久住賊地、能習夷語、屢以謾語騷動夷俘心也、美濃備中二國飢、遣使賑給、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、本姓磐梨別公、右京人也、後改姓藤野和氣眞人、清麻呂爲人高直、匪躬之節、與姉廣虫共事高野天皇（稱德）、並蒙愛信、任右兵衛少尉、神護初授從五位下、遷近衛將監、特賜封五十戸、姉廣虫及笄年、許嫁從五位下葛木宿禰戸主、既而天皇落飾、隨出家爲御弟子、法名法均、授進守大夫尼位、委以腹心、賜四位封并位祿位田、寶字八年、太保惠美忍勝叛逆伏誅、連及當斬者三百七十五人、法均切諫、天皇納之、減死刑以處流徙、亂止之後、民苦飢疫、弃子草間、遣人收養、得八十三兒、同名養子、賜葛木首、此時僧道鏡得幸於天皇、出入警蹕、一擬乘輿、號曰法王、大宰主神習宜阿蘇麻呂媚事道鏡、矯八幡神教言、令道鏡卽帝位、天下太平、

月紀に見ゆ
○情喜、續紀神護景雲三年九月己丑條深喜に作る
○爲奏事請尼法均、類史請を情下の二字に作る
○路眞人豐永、續紀延暦十年正月戊辰正六位上路眞人豐永授從五位下、十一月甲辰爲左京亮とこ見ゆ
○伯夷、史記伯夷傳に武王伐紂、伯夷叔齊叩馬而諫曰云々、武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、遂餓死於首陽山とあり
○致命之志、君國の爲に身を捧ぐる志なり
○神託宣云々、西本神字なし
○色如滿月、清麻呂傳に色を也に作り如の上に相字あり相は形相なり
○消魂、考異に消舊作情據傳訂とあり紀略亦情に作る
○爲因幡員外介云々、景雲三年九月己丑紀に見ゆ
○未即行、紀略及清麻呂傳行下に刑字あり
○賜姓和氣朝臣、寶龜五年九月甲子紀に見ゆ
○典藏、後宮職員令に尚藏一人掌神璽關契供御

道鏡聞之、情喜自負、天皇召清麻呂於牀下曰、夢有人來、稱八幡神使云、爲奏事請尼法均、朕答曰、法均軟弱、難堪遠路、其代遣清麻呂、汝宜早參聽神之教、道鏡復喚清麻呂、募以大臣之位、先是路眞人豐永爲道鏡之師、語清麻呂云、道鏡若登天位、吾以何面目可爲其臣、吾與二三子共爲今日之伯夷耳、清麻呂深然其言、常懷致命之志、往詣神宮、神託宣云々、清麻呂祈曰、今大神所教、是國家之大事也、託宣難信、願示神異、神即忽然現形、其長三丈許、色如滿月、清麻呂消魂失度、不能仰見、於是神託宣、我國家君臣分定、而道鏡悖逆無道、輙望神器、是以神靈震怒、不聽其祈、汝歸如吾言奏之、天之日嗣必續皇緒、汝勿懼道鏡之怨、吾必相濟、清麻呂歸來奏如神教、天皇不忍誅、爲因幡員外介、尋改姓名、爲別部穢麻呂、流于大隅國、尼法均還俗、爲別部狹虫、流于備後國、道鏡又追將殺清麻呂於道、雷雨晦冥、未即行、俄而勅使來、僅得免、于時參議右大辨藤原朝臣百川愍其忠烈、便割備後國封鄉廿戶、送充於配處、寶龜元年、聖帝（光仁）踐祚、有勅入京、賜姓和氣朝臣、復本位名、姉廣虫又掌吐納、叙從四位下、

衣服云々珍寶繒帛賞賜之事典藏二人掌同尙藏とあり
○友于天至、友于は論語爲政篇及尙書君陳篇に惟孝友于兄弟とあるに據れり天至は天性と云に同じ
○孔懷之義、毛詩小雅常棣章に兄弟孔懷とあるに據れり
○十七年正月云々、廣虫卒去の事上文十八年正月乙丑條に見ゆ此に正月十九日とあると合はす
○諸七、初七日より七々日に至までの忌日を云
○禮懺、佛を禮拜して懺悔するを云
○天長二年云々、清麻呂傳には天應二年として上文延曆十七年正月云々の前に擧げ贈正三位之告身の贈を賜に作る
○脚痿不能起立、水鏡に道鏡大に怒りて清丸かつかさをとりよぼろすぢをたちて大隅國へ流しつかはしきとあり脚痿は之に因れり
○楉田村、八幡宮本紀に今楉田村と云所なし和氣村と云あり楉田村を後に改めけるになと云

任典藏、累至正四位下、帝從容勅曰、諸侍從臣、毀譽紛紜、未嘗聞法均語他過、友于天至、姉弟同財、孔懷之義、見稱當時、延曆十七年正月十九日薨、與弟卿約期云、諸七及服闋之日、勿勞追福、唯與二三行者、坐靜室、事禮懺耳、後世子孫、仰吾二人、以爲法則、天長二年、天皇追思舊績、贈正三位之告身、弟清麻呂脚痿不能起立、爲拜八幡神、輿病即路、及至豐前國宇佐郡楉田村、有野猪三百許、挾路而列、徐步前駈十許里、走入山中、見人共異之、拜社之日、始得起步、神託宣賜神封綿八萬餘屯、即頒給宮司以下國中百姓、始駕輿而往、後馳馬而還、累路見人、莫不歎異、清麻呂之先、出自垂仁天皇々子鐸石別命、三世孫弟彥王、從神功皇后征新羅、凱旋、明年忍熊別皇子有逆謀、皇后遣弟彥王於針間吉備堺山誅之、以從軍功、封藤原縣、因家焉、今分爲美作備前兩國也、高祖父佐波良、曾祖父波伎豆、祖宿奈、父乎麻呂墳墓、在本鄉者、拱樹成林、清麻呂被竄之日、爲人所伐除、歸來上疏陳狀、詔以佐波良等四人幷清麻呂、爲美作備前兩國々造、天應元年授從四位下、拜民部大輔、爲攝津大夫、累遷中宮大夫

民部卿、授從三位、延暦十七年上表請骸骨、優詔不許、仍賜功田廿町、以傳其子孫、清麻呂練於庶務、尤明古事、撰民部省例廿卷、于今傳焉、奉中宮教、撰和氏譜奏之、帝甚善之、長岡新都、經十載未成功、費不可勝計、清麻呂潜奏、令上託遊獵相葛野地、更遷上都、清麻呂爲攝津大夫、鑿河内川、直通西海、擬除水害、所費巨多、功遂不成、私墾田一百町在備前國、永爲振給田、鄕民惠之、薨時贈正三位、年六十七、有六男三女、長子廣世、起家補文章生、延暦四年坐事被禁錮、特降恩詔、除少判事、俄授從五位下、爲式部少輔、便爲大學別當、墾田廿町入寮爲勸學料、請裁闡明經四科之第、又大學會諸儒、講論陰陽書新撰藥經大素等、大學南邊以私宅置弘文院、藏内外經書數千卷、墾田卌町永充學料、以終父志焉、○辛丑、遊獵於栗前野、○壬寅、大和國飢、遣使賑給、○三月乙巳朔、震民部省廩、○丙午、近江紀伊二國飢、遣使賑給、○戊申、陸奥國柴田郡人外少初位下大伴部人根等賜姓大伴柴田臣、○庚戌、近江國淺井郡人從七位下穴太村主眞杖賜姓志賀忌寸、○辛亥、陸奥國富田郡併色麻郡、讀馬郡併

○賜神封綿、清麻呂傳に神封の二字を神釼雄雄一雙并の七字に作る　○驍馬、清麻呂傳驍を驕に作る　○藤原縣、後の和氣郡なり神龜三年十一月備前國藤原郡を改めて藤野郡とし景雲三年六月更に改めて和氣郡とす　○波伎豆、清麻呂傳伎波豆に作る　○乎麻呂、同に乎を平に作る　○被竄、原本被を投に作る清麻呂傳に據て改む　○民部省例、本朝書籍目錄に民部省例廿卷民部卿和氣清麻呂撰と見ゆ　○中宮、高野新笠姫なるべし　○和氏譜、和氏即ち高野朝臣の家譜なるべし桓武天皇の御外祖父和系譜を撰りて其家系を明かにせし故に帝甚だ善みし給ひしなり一説には和氣氏の系譜とす類史に據れるものなれど恐くは非なり　○葛野地、即今の平安京の地なり上都は平安京を云ふ　○河内川、攝津志に住吉郡今川舊名河内川自二河

州丹北郡流至本郡喜連西曰息長川云々至東生郡舍利寺村入平野川今水道與古頗異因曰今川とあり
○振給田、清麻呂傳振た賑に作る振賑通用す
○大素、經名なり典藥式に大素經准大經と見ゆ
○弘文院、拾芥抄中末に和氣氏諸生別當爲荒廢之地在勸學院北清麿卿建立之云々とあり
（三月）大伴柴田臣、大伴氏の同祖柴田郡に住めり故に柴田臣と賜ふ
○志賀忌寸、錄攝津諸蕃に後漢孝獻帝之後也とあり
○富田郡、郡廢せらるとも富田鄕はあるべきに其地聞えざるは名の變更せられしなるべし
○色麻郡、郡鄕考に今併加美郡とあり
○讃馬郡、栗原郡に佐沼鄕あり佐沼卽ち讃馬なるべし
○新田郡、郡鄕考に或併栗原郡或併加美郡とあり
○登米郡、此時小田郡に併せ後に又置けり
○小田郡、民部式に見ゆ

新田郡、登米郡併小田郡、○壬子、停出羽國山夷祿、不論山夷田夷、簡有功者賜焉、○甲寅、伯耆、阿波、讃岐等國飢、遣使賑給、從五位下入間宿禰廣成爲造東大寺次官、正六位上野王賜姓清瀧朝臣、○丁巳、正四位下行左大辨兼右衞士督皇太子學士伊勢守菅野朝臣眞道等言、己等先祖、葛井、船、津、三氏墓地、在河内國丹比郡野中寺以南、名曰寺山、子孫相守、累世不侵、而今樵夫成市、採伐冢樹、先祖幽魂、永失所歸、伏請依舊令禁、許之、○夏四月乙亥朔、河内國飢、遣使賑給、從五位下御中眞人廣岳爲大學助、攝津國人正八位上須美開德賜姓葛澤造、○丁丑、故正五位下上毛野朝臣稻人賤宅敷女男二人賜姓物部、○癸未、勅、澇水經日、苗稼腐損、窮弊之民、不得更播、宜令山城、河内、攝津等國巡撿貧民、以正稅給之、攝津國人從七位上乙麻呂等給姓豐山忌寸、起從五位下和氣朝臣廣世復本官、○乙酉、從五位上藤原朝臣繼彦爲上總介、陰陽頭如故、從五位上藤原朝臣繼業爲大學頭、侍從信濃介如故、正四位下藤原朝臣乙叡爲兵部卿、中衞大將越前守如故、從五位下安倍朝

後廢せられて遠田郡に併せらる
○山夷、田夷に對して山間に住めるを云
○田夷、山夷に對して云、農を主とする夷なり
○清瀧朝臣、原本清瀧を瀧清に作るは誤なれば改む、按に續後紀承和九年六月丙辰紀に忍壁親王六世孫保雄王男長宗等に清瀧眞人姓を賜ふ事見ゆ
○野中寺、丹南郡野上村（今南河内郡埴生村大字野々上）にあり
（四月）御中眞人、續紀寶龜二年七月紀に天武天皇々子舍人親王の孫王蒼王以下十人に天平寶字八年姓三長眞人を賜ふことあり同氏なり
○大學助、原本助を頭に作る西本及下文に據て改む
○葛澤造、詳ならず
○豐山忌寸、詳ならず
○正四位下藤原朝臣乙叡、此上に恐くは參議の二字を脫す
○近衛中將、補任中を少に作る
○太昌泰、原本太を大に作る西本に據て改む
○占雲之譯、梁元帝職貢

臣家守爲刑部少輔、從五位下紀朝臣千世爲彈正弼、正五位下橘朝臣入居爲左京大夫、右中辨右兵衛佐播磨守如故、參議從四位下藤原朝臣縄主爲春宮大夫、式部大輔近衛中將如故、中納言從三位藤原朝臣内麻呂爲兼造宮大夫、近衛大將但馬守如故、○十五己丑、賑給左右京貧民、是日、渤海國使太呂泰等還蕃、遣式部少錄正六位上滋野宿禰船白等押送、賜其王璽書曰、天皇敬問渤海國王、使呂泰等隨賀萬至、得啓具之、王遜慕風化、重請聘期、占雲之譯交肩、驟水之貢繼踵、每念美志、嘉尚無已、故遣專使、告以年期、而猶嫌其遲、更事覆請、夫制以六載、本爲路難、彼如此不辭、豈論遲促、宜其修聘之使、勿勞年限、今因呂泰等還、差式部省少錄正六位上滋野宿禰船白充使領送、幷附信物、色目如別、夏首正熱、惟王平安、略此代懷、指不繁及、○十六庚寅、從五位下中臣丸朝臣豐國爲齋宮頭、正六位上大伴宿禰峰麻呂爲遣新羅使、正六位上林忌寸眞繼爲錄事、○廿七辛丑、勅、近衛府大將元從四位上官、今爲從三位官、又加中將一員、中衛府大將元從四位上官、今爲正四位上官、衛門督元正五位上官、

圖序に占雲氣日重譯至馬とあるに據れり雲氣を占候して來るを云
○躧水之貢、躧は字書に走也とあり海水を航し來りて貢する意か
○猶嫌其遲、西本猶を期に作る
○彼如、此二字恐くは誤あらむ
○左右兵衛府、西本兵字なしされば衛下に士字を脱せるにて左右衛士府の誤か
○廢内藏寮、原本廢を撥に作る西本に據て改む
○外者之官、者は考の訛なるべし位に内外の別あり内位の人の功過を考校するを内考と云ひ外位の人の功過を考校するを外考と云郡司は外位に叙せらるる故に外考の官と云
○驅策、馬を鞭打ちて走らするが如くに使役せらるゝを云
（五月）綱主、西本綱を繩に作る考異に綱舊作繩據下文訂とあり

今爲從四位下官、佐從五位下官、今爲從五位上官、左右衛士兵衛等一准衛門府、加少尉一員、少志一員、其官位者一准衛門府、廢內藏寮主鎰四人、加少屬一員、減大藏省主鎰大少各一員、治部省解部四員、○壬寅（廿八）、公卿奏曰、大和國守從四位下藤原朝臣園人解偁、郡司之任、所掌不輕、而外者之官、不得貽謀、准於諸國、亦無潤身、是以擬用之日、各競辭退、郡務闕怠、率由於此、伏請居之內考、將勸後輩者、臣等商量、夫高爵以之彰勳、厚賞以之酬勞、所以勸勵士庶、任用得人者也、而畿內諸國、近接都下、驅策之勞、尤是殊甚、准於外國、不可同日、如今所申穩便、誠合進昇、伏望五國郡司、一居內考、許之、○五月（甲午朔）乙巳（二）、淡路國飢、遣使賑給、○庚戌（七）、正六位上紀朝臣廣濱授從五位下、○辛亥（八）、從五位上藤原朝臣仲成、從五位上住吉朝臣綱主授正五位下、正六位上紀朝臣繩麻呂從五位下、正六位上日下部連得足、正六位上粟田臣茂麻呂外從五位下、○癸丑（十）、授正六位上藤原朝臣城主、正六位上藤原朝臣藤嗣、正六位上藤原朝臣永貞、正六位上藤原朝臣廣河、正六位上紀朝臣咋麻呂、紀朝臣

彌都麻呂、安倍朝臣象主從五位下、○十二丙辰、前遣渤海使外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂等言、歸鄕之日、海中夜暗、東西掣曳、不識所著、于時遠有火光、尋逐其光、忽到嶋濱、訪之是隱岐國智夫郡、其處無有人居、或云、比奈麻治比賣神常有靈驗、商賈之輩、漂宕海中、必揚火光、賴之得全者、不可勝數、神之祐助、良可嘉報、伏望奉預幣例、許之、○十九壬戌、令諸國司講師沙汰國分寺僧、○廿六己巳、尾張國海部郡主政外從八位上刑部粳虫言、權掾阿保朝臣廣成不憚朝制、擅養鷹鷂、遂令當郡少領尾張宿禰宮守、六齋之日、獵於寺林、因奪鷹奏進、勅、須有違犯、先言其狀、而淩慢國吏、輙奪其鷹、宜特決杖、解却其任、○廿七庚午、勅、撫俗宣風、任屬郡司、今停譜第、妙簡才能、而宿衞之人、番上之輩、久經馳驅、頗効才能、宜不經本國、令式部省簡試焉、○廿八辛未、遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣弟枚改作伊勢大神宮正殿、讃岐國飢、出穀萬二千斛、賑贍乏絕戶、○廿九壬申、停遣新羅使、

○六月甲戌朔、省中衞左右衞士三府醫師一員、○四丁丑、遣左衞士志矢田部常陸麻呂於平城、捕內豎雀部廣道、決杖一百、以強姧法華寺尼、

○智夫郡、抄國郡部に隱岐國知夫とあり
○比奈麻治比賣神、神名式に隱伎國知夫郡比奈麻治比賣命神社とあり同郡黑木村大字宇賀に坐す
○商賈之輩、考異に賈舊作貴紀略作賣據類史訂とあり
○嘉報、原本嘉を喜に作る西本及類史紀略に據て改む
○擅養、原本擅を檀に作る類史に據て改む
○六齋、雜令に凡月六齋日公私皆斷殺生、義解に謂六齋八日十四日十五日廿三日廿九日卅日とあり
○馳駈、原本駈[]に作る西本に據て補ふ
(六月)左衞士志、考異に士舊作少據類史訂とあり西本も亦士を少に作る

〇懼甚履氷懍乎御朽、陳後主改元(至德元年)大赦詔に懼甚踐氷懍同馭朽とあるに據れり御朽は馭朽に同じく尙書五子之歌に予臨兆民懍乎若朽索之馭六馬とあるに出づ
〇昧旦、原本旦を且に作る類史に據て改む
〇日昃、字書に日昃昳(スグル)中也とあり原本昃を吳に作る類史に據て改む
〇冀、原本冀を翼に作る類史に據て改む
〇擧數、原本數を穀に作る類史に據て改む擧數は稻の出擧の數なり
〇宜停徵焉、徵焉の二字は西本及類史になし
〇耶法、耶は邪に同じ
〇內敎、佛敎を云
〇山林精舍、西本山林の二字なし佛寺を精舍と稱することは晉の孝武の時に起る學林新編に晉孝武立靜舍于殿門引沙門居之、因此俗謂佛寺曰靜舍亦曰精舍と見ゆ
〇朝代、代は恐くは誤字なるべし
〇祀無報應、考異に祀舊作禮據本朝月令訂とあ

也、〇戊寅、詔曰、惟王經國、德政爲先、惟帝養民、嘉穀爲本、朕以寡薄、忝承洪基、懼甚履氷、懍乎御朽、昧旦丕顯、日昃聽朝、思弘政治、冀宣風化、時雍未洽、陰陽失和、去年不登、稼穡被害、眷言其弊、有憫于懷、宜敷寬恩、答彼咎祥、其被損尤甚之處、美作、備前、備後、南海道諸國、肥前、豐後等十一國、去年田租、特全免之、〇癸未、勅、前停止公廨混合正稅、兼減擧數、以省民煩、然諸國稱任中之未納、徵公廨之息利、百姓受弊、艱苦實深、自今以後、宜停徵焉、如有違者、隨即科之、〇乙酉、勅、沙門擅去本寺、隱住山林、受人屬託、或行耶法、如斯之徒、往々而在、國憲內敎、同所不許、宜諸國司巡撿部內所有山林精舍幷居住比丘優婆塞、具錄言上、不得疎漏、〇戊子、勅、祭祀之事、在德與敬、心不致敬、神寧享之、廣瀨龍田祭、所以鎭弭風災、禱祈年穀也、而大和國司、觸事怠慢、都無肅敬、差遣史生、祇承朝代、祀無報應、職此之由、自今以後、守介一人、齋戒祇承、若有事故、聽遣判官、〇己丑、從五位下石川朝臣魚麻呂爲左少辨、從五位下百濟王鏡仁爲右少辨、中納言從三位和朝臣家麻呂爲兼中務卿、相摸守如故、正五位下大庭

り

○正五位下藤原朝臣大繼、考異に正舊作從據上文訂さあり

○正六位上桑田眞人、正六位上の四字は西本に據て補ふ

○尅己、類史尅を克に作る

○刑措、史記周本紀に成康之際天下安寧刑措四十餘年不用さあり、刑罰を行はずして治まるなり

○鉗鏁囚徒、抄調度部刑罰具に鉗漢書注云鉗（奇炎反加奈岐）以鐵束頸也、鏁唐韻云鏁（蘇果反日本紀私記云加奈都賀利）鐵鏁也さあり

王爲大輔、從五位下淡路眞人福良麻呂爲少輔、侍從從四位下中臣王爲兼左大舍人頭、從五位下粟田朝臣入鹿爲治部少輔、中納言從三位藤原朝臣雄友爲兼民部卿、從五位下甘南備眞人眞野（錫太上天皇諱故改神備眞）爲主稅頭、正五位下藤原朝臣大繼爲大藏大輔、下總守如故、從四位下大原眞人美氣爲大膳大夫、外從五位下村國連息繼爲阿波權介、○癸巳、勅、去年不稔、百姓乏食、暫任民心、出擧私稻、一張一弛、因時垂教、宜更禁斷、罪依前格、廿三○丙申、從五位下紀朝臣嗣梶、從五位下藤原朝臣綱主授從五位上、正六位上桑田眞人甘南備從五位下」是日詔曰、朕祗纂丕業、撫臨黎元、尅己勤躬、不遑寧處、思欲輯煕四海、期之刑措、弘濟百姓、致之壽域、而近巡京中、過堀川處、鉗鏁囚徒、暴體苦作、興言於茲、憮然于懷、雖生民之愚、自招罪惡、而爲彼父母、寧不哀愍、其在役見徒、及天下見禁囚等、罪無輕重、並宜赦除、令得自新、但私鑄錢、謀殺故殺、及被問民苦使推訪諸國郡官吏百姓等、不在赦限、其謀殺故殺配役者、停役配流、普告遐邇、令知朕意、廿五○戊戌、越中國飢、遣使賑給、廿六○己亥、免山城國乙訓、葛野、

（七月）大伴宿禰助等、助字は西本及類史に據て補ふ
○齋宮新嘗會、齋宮式に野宮及伊勢齋宮に於ける供新嘗料見ゆ
○歌舞伎、考異に伎舊脫、據類史紀略補ふとあり、齋宮寮の人々の九月神嘗祭に歌舞を仕奉ることは儀式帳に齋宮諸司官人は倭儛齋宮釆女等は五節儛を儛ふこと見ゆ
○九月祭、神嘗祭を云
○肥伊牧、大和志宇陀郡村里に檜牧あり卽是なり
○崑崙、舊唐書南蠻傳に自林邑以南皆拳髮黑身通號爲崑崙とあり
○一弦琴、類史弦を絃に作る唐書南蠻驃國傳に驃國貢樂凡曲名十有二云々六日龍首獨琴驃云彌思彌此一絃而五音備とあり
○綿種、綿は草綿なり
（八月）池成、考異に成舊作戊據類聚國史訂とあり
○甲戌、西本戊申に作る此月壬申朔なれば戊申なし恐くは倒置
○那加、抄目郡部に那珂とあり
○多珂、西本多河に作る

愛宕三郡負租。○（廿七）庚子、屈僧三百人沙彌五十人於禁中及東宮朝堂、奉讀大般若經。○秋七月癸卯朔、攝津國人正七位上大伴宿禰助等貫于右京。○（七）己酉、停伊勢齋宮新嘗會、但以歌舞伎供九月祭。○（十七）己未、置判事史生四員、掃部司史生二員。丹後國飢、遣使賑給。○（廿三）乙丑、越中國飢、遣使賑給。免備中國去年租、以風旱爲災、五穀不登也。是日曲宴、賜四位已上衣。○（八）庚午、停大和國宇陁肥伊牧、以接民居損田園也。遣使祓畿内七道諸國、以齋内親王將入伊勢也。是月有一人、乘小船漂著參河國、以布覆背、有犢鼻、不著袴、左肩著紺布、形似袈嫐、年可廿、身長五尺五分、耳長三寸餘、言語不通、不知何國人、大唐人等見之、僉曰、崑崙人、後頗習中國語、自謂天竺人、常彈一弦琴、歌聲哀楚、閲其資物、有如草實者、謂之綿種、依其願令住川原寺、卽賣隨身物、立屋西郭外路邊、令窮人休息焉、後遷住近江國々分寺。○八月（壬申朔）癸酉、長岡京地一町賜民部少輔從五位下菅野朝臣池成。○（三）甲戌、從五位下登美眞人藤津爲少納言。○（五）丙子、常陸國言、鹿嶋那加久慈多珂四郡、今月十一日、自晨至晩、海潮去來凡十

○埴川、高野川の古名なり又松崎川と云ふ靈所七瀬の一、山城志愛宕郡に見ゆ
○幸大堰、紀略幸の下に于字あり大堰川は又大井川に作る一名葛野川又桂川と云
○酒井勝、系詳ならず
○隱伎國、原本伎を岐に作る西本に據て改む
○幸北野、紀略幸の下に于字あり

(九月)○齋內親王發野宮、野宮は葛野郡嵯峨天龍寺の北にあり凡そ齋宮は定め畢て宮城內の初齋院に入り明年七月まで此院にて齋し八月野宮に入り明年八月まで齋し九月上旬伊勢齋宮に參入せらるゝなり

五度、滿則過常涯一町許、涸則踰常限廿餘町、海畔父老僉云、古來所未見聞也、○戊寅、巡幸京中、○己卯、禊於埴川、○癸未、幸大堰、○丙戌、遣使於畿內諸國以校田、豐前國宇佐郡人酒井勝小常依有惡行、配隱伎國、○己丑、幸北野、○癸巳、伊豫國人從七位下越知直祖繼貫于左京、是日遊獵於栗前野、○丙申、奉幣帛於伊勢大神宮、以齋內親王將入齋宮也、○丁酉、勅、擇才擢用、不必資蔭、今衞府舍人及衞門々部、僞蔭之侶、其數資多、而緣許還本事乖弘恕、宜特寬宥、任用如舊、至于昭穆、據實改正、其詐蔭未經敍位、任後依選得敍者、矜彼勞効、勿追位記、但先後資蔭得敍、或更歷選加階者、宜計蔭敍之階、追後加之階、是日遊獵於水生野、
○九月癸卯、從五位下百濟王貞孫授從五位上、○甲辰、齋內親王發野宮、赴伊勢、遣侍從々四位下中臣王、參議正四位下藤原朝臣乙叡等送焉、○戊申、暴風、京中屋舍倒壞者多、○辛亥、從四位下藤原朝臣園人爲右大辨、大和守如故、東宮傅從三位大伴宿禰弟麻呂爲兼治部卿、正五位下藤原朝臣仲成爲大輔兼山城守、正五位下阿倍朝臣弟當爲兵部

○從五位下和氣朝臣、考異に下舊作上、據上下文訂とあり
○阿智驛、兵部式に信濃國驛馬阿知卅疋とあり信濃地名考に阿智驛已廢其地未詳唯阿智川の名ありと云
○小神舊牧、近江國栗太郡上田上村大字牧なりと云山槐記に阿見牧とあり牧村の山を小神山といへば此なるべし
○滋野宿禰船代、上文及類史代を白に作る
○准數、類史依數に作る
○求縮程期、西本此下約四字闕蝕す
○筐篚、毛詩小雅鹿鳴章の詩序に實幣帛筐篚以將其厚意云々とあり字書に竹器方曰筐圓曰篚筐は說文に飯器篇海に盛物竹器也と見え篚は如筐者とあり
○攸行、類史攸を所に作る
○允依、字書に允は信也相從也依は據也附也倚也とあり倚り從ふ意
○惣華、逸史所引の類史に華を萃に作る
○班霑變理、班は位也次也變理は尙書周官に

大輔、正四位下百濟王玄鏡爲刑部卿、從五位下菅原朝臣門守爲主殿助、從五位下石川朝臣道成爲左京亮、神祇伯從四位下多治比眞人繼兄爲兼右京大夫、從五位上百濟王教德爲上總守、從五位下都努朝臣筑紫麻呂爲介、近衞少將從五位上大伴宿禰是成爲兼下野守、從五位下百濟王教俊爲介、式部少輔從五位下和氣朝臣廣世爲兼阿波守、外從五位下村國連息繼爲介、○甲寅、（十三）信濃國伊那郡阿智驛々子、永免調庸、以道路險難也、○丁巳、（十六）近江國小神舊牧賜諱、（嵯峨太上天皇）○辛酉、（二十）正六位上式部少錄滋野宿禰船代等到自渤海國、々王啓曰、嵩璘啓、使船代等至、枉辱休問、兼信物絁絹各卅匹、絲二百絇、綿三百屯、准數領足、懷愧實深、嘉貺厚情、伏知稠疊、前年附啓、請許量載往還、去歲承書、遂以半紀爲限、嵩璘情勤馳係、求縮程期、天皇舍己從人、便依所請、筐篚攸行、雖無珍奇、特見允依、荷欣何極、比者天書降渙、制使莅朝、嘉命優加、寵章惣華、班霑變理、列等端揆、惟念寡菲、殊蒙庇蔭、其使呂泰等、才慙專對、將命非能、而承貺優容、倍增喜慰、而今秋暉欲暮、序雜涼風、遠客思歸、情勞望日、崇

立太師太傅太保茲惟三公論道經邦燮理陰陽とあるに據れり
○端揆、通鑑綱目集覽に僕射參總百揆故曰端揆とあり宰相を云
○殊蒙庇蔭、類史蔭を庇に作る蔭字通用し庇護を被る意
○期限、類史期を馴に作る
○陶野、山城志に在嵯峨淸涼寺東南居民姓深草者以造土盆爲業とあり
○的野、同じく嵯峨に近き所
○北辰燈、北斗星に燈明を奉るなり公事根源に延曆十五年三月に始て北辰をまつらるとあり
（十月）交野、河內國交野郡にあり三禁野の一
○西野、大原野なるべし
○泣辜解網、泣辜は夏の禹王罪人に會ひて己が不德を泣きし故事、解網は殷の湯王網の三面を解きて生物を憐みし故事に據れり何れも續紀に注す舊唐書樂章に恒思解網每軫泣辜とあり
○宥過刑故、尙書大禹謨に宥過無大刑故無小

迨時節、无滯廻帆、既許隨心、正宜相送、未及期限、不敢同行、謹因廻使、奉附輕尠、具如別狀、○（廿二）癸亥、遊獵於陶野、賜四位以上衣、○（廿四）乙丑、遊獵於的野、賜五位以上衣、是月禁京畿百姓奉北辰燈、以齋內親王入伊勢齋宮也、○冬十月（辛未朔）（二）壬申、信濃國地百町賜左大辨正四位下菅野朝臣眞道、○（九）己卯、遊獵于交野、○（廿二）壬辰、遊獵于西野、○十一月（辛丑朔）（四）甲辰、地震、○（八）戊申、從五位下橘朝臣眞甥爲少納言、從五位下石川朝臣淨濱爲陰陽頭、從五位上三諸朝臣眞屋麻呂爲宮內大輔、外從五位下民忌寸廣成爲隼人正、免淡路國今年調庸、以風水爲災、百姓被害也、○（九）己酉、曲宴、賜五位以上布有差、○（十一）辛亥、巡幸京中、○（十四）甲寅、備前國言、兒嶋郡百姓等、燒鹽爲業、因備調庸、而今依格、山野濱嶋、公私共之、勢家豪民、競事妨奪、强勢之家彌榮、貧弱之民日弊、伏望任奪給民、勅、乘勢迫貧、事乖共利、宜加禁制、莫令更然、淡路國澇、以播磨國隨近郡穀、賑給乏絕戶、○（廿四）甲子、勅、先遣問民苦使、採訪政迹、思明激揚、以嚴黜陟、今閱使狀、違犯者多、理須峻刑永懲後輩、但以泣辜解網、叡哲良規、宥過刑故、古今通典、去延曆十四年簡

さあり故は故意に犯せる罪を云

（十二月）楓、葛野郡にあり

○佐比、同上

○丙寅歳、聖武天皇神龜三年か、其前ならば天智天皇五年なり百濟高麗唐の爲に滅されし結果歸化せしならむには天智天皇五年なるべし

○石川、地名なるべけれど詳ならず

○廣石野、同

○後部、及前部上部下部は何れも高麗の部落の名にて其本國にありし時の部落を以て假に氏とせしなり卦婁も同じく內部の舊名なり

○天平勝寶九歳勅、續紀（卷上四一六頁）に見ゆ

差使者、擬遣巡察、慮彼自新、未遽發遣、而慢法不悛、縱慾无厭、此而可原、孰不可恕、其延暦十五年以還、有犯國司以下、宜依法斷、以懲將來、但犯佃田三町以下、及驅使兵士者、特從寛宥、其十四年以往所犯、積習已久、卒難洗盪、宜事無輕重、一從原免、○十二月（庚午朔）癸酉（四）、勅、山城國葛野川、近在都下、毎有洪水、不得徒涉、大寒之節、人馬共凍、來往之徒、公私同苦、宜楓（カツラ）佐比二渡、各置度子、以省民苦、○甲戌（五）、甲斐國人止彌（トミ）若虫、久信耳鷹長等一百九十人言、己等先祖、元是百濟人也、仰慕聖朝、航海投化、卽天朝降綸旨、安置攝津職、後依丙寅歳正月廿七日格、更遷甲斐國、自爾以來、年序既久、伏奉去天平勝寶九歳四月四日勅、偁、其高麗百濟新羅人等、遠慕聖化、來附我俗、情願□姓、悉聽許之、而己等先祖、未改蕃姓、伏請蒙改姓者、賜若虫姓石川、鷹長等姓廣石野、又信濃國人外從六位下卦（ケ）婁（ルノ）眞老、後部黑足、前部黑麻呂、前部佐根人、下部奈弖麻呂、前部秋足、小縣郡人无位上部豐人、下部文代、高麗家繼、高麗繼楯、前部貞麻呂、上部色布知（シコフチ）等言、己等先高麗人也、小治田（推古）、飛鳥（舒明）二朝庭時節、歸化來朝、自爾

○改大姓、狩谷氏曰大姓疑无姓之譌
○須々岐、神祇志料に須々岐水神、今筑摩郡薄町村穂屋野にあり舊址は入山家の大明神平なる須々岐の水源に在を以て須々岐水神と云とある須々岐の名に因れるなるべし
○豐岡、詳ならず
○村上、抄國郡部安曇更級の兩郡各村上鄕あり其何れかに因れる姓なるべし
○篠井、更級郡篠野井の地に因れり
○玉川、詳ならず、清岡御井、朝治等何れも詳ならず、玉井は山梨郡玉井鄕あり之に據れるか
○土佐國、西本佐を左に作る
○傳燈大法師位、原本傳を傅に作る誤なれば改む
○側力劣則止、狩谷氏曰側下恐脫聞
○玄門、道教を指ていへど此は佛教を云
○檀林、寺院を云
○婆離、優婆離なり釋迦十大弟子の一人にて持律第一の比丘
○鶖子、又鶖鷺子に作る舍利弗の譯名なり同十大

以還、累世平民、未改本號、伏望依去天平勝寶九歲四月四日勅、改大姓者、賜眞老等姓須々岐、黑足等姓豐岡、黑麻呂姓村上、秋足等姓篠井、豐人等姓玉川、文代等姓淸岡、家繼等姓御井、貞麻呂姓朝治、色布知姓玉井、〇八丁丑、發伊賀、伊勢、尾張、近江、美濃、若狹、丹波、但馬、播磨、備前、紀伊等國役夫、以充造宮、〇十六乙酉、遊獵于水生野、〇陸奥國言、俘囚吉彌侯部黑田、妻吉彌侯部田苅女、吉彌侯部都保呂、妻吉彌侯部留志女等、未改野心、往還賊地、因禁身進送、配土佐國、〇廿一庚寅、大僧都傳燈大法師位等定言、側力劣則止、著在丘典、心惛不極、光于彝倫、等定落髮玄門、棲形檀林、羞戒婆離、恥智鶖子、豈須辱帶綱任、久亂維務哉、恥方濫吹、恐同醆火、是以懸車之歲、數陳口辭、不被詔許、既經數年、當今年垂八十、步行不正、進退失儀、强以抱任、慙天愧地、庸身無厝、伏願去大僧都、以開賢路、退息耄情、兼望當糧、上崇養老之德、下免尸位之刺、不任瀝款之至、上表以聞、詔報曰、忽省口表、知辭綱任、委寄未幾、告老何早、欽慕其德、感悽无已、但退讓再三、謙光難逆、故許所請、以遂來意、其梵釋寺事者、休息之閑、時加撿挍、

弟子の一人にて智慧第一の比丘
○綱任、綱は僧綱なり
○維務、綱任に同じ
○濫吹、韓非子內儲說上に出づ無能者の有能を粧ふを云
○□表、□は來字なるべし
○梵釋寺、續紀延曆五年正月壬子紀(下四四九頁)に於近江國滋賀郡始造梵釋寺矣とあり
○從五位上小倉王、考異に上舊作下據上文訂とあり
○大田親王、上に見ゆ
○私墾田、原本墾を懇に作る西本に據て改む
○和氣云々等八郡、民部式倭名抄亦同じ但し式抄共に三野を御野に作る
○譜講、狩谷氏曰講恐諜之誤と云るが如く譜諜なるべし諜は牒に同じ
○本系帳、氏族の本系を書したるものなり中臣氏延喜本系帳に夫本系者所以立祖宗分昭穆正濫吹表後生之書也とあり

時寒、想和適也、指不多云、○(廿二)辛卯、從五位下安曇宿禰大丘爲□大舍人助、從五位上小倉王爲內膳正、○(廿四)癸巳、巡幸京中、攝津職舊荒田五十七町賜大田親王、○(廿七)丙申、從五位下小野朝臣田刀自授從五位上、○(廿八)丁酉、式部少輔從五位下和氣朝臣廣世言、亡考淸麻呂平生常言、身食厚祿、無益於公、兼忝國造、無德於民、懷抱戀々、顧念故鄕、憐彼窮民、不能忘焉、願以私墾田一百町、擬和氣、磐梨、赤坂、邑久、上道、三野、津高、兒嶋等八郡卅餘鄕賑救之分、然一處混置、諸鄕難及、若遭班田、奏聞、以此墾田、班田口分、彼鄕分田量換、置名爲賑救田、以仍其地子、季夏之月、賑給飢人、以救民命、以報國恩、隙駒不駐、所願未果、仍表先志、許之、○(廿九)戊戌、勅、天下臣民、氏族已衆、或源同流別、或宗異姓同、欲據譜講、多經改易、至檢籍帳、難辨本枝、宜布告天下、令進本系帳、三韓諸蕃亦同、但令載始祖及別祖等名、勿列枝流幷繼嗣歷名、若元出于貴族之別者、宜取宗中長者署申之、凡厥氏姓、率多假濫、宜在確實、勿容詐冐、來年八月卅日以前、惣令進了、便編入錄、如事違故記、及過嚴程者、宜原情科處、永勿入錄、凡庸之徒、

惣集爲卷、冠蓋之族、聽別成軸焉、

日本後紀卷第八

（三條西家本奥書）

天文二三廿一一見加朱點了

○起延曆廿三年、以下廿四年六月に至る十四字西本なし

【延曆廿三年】皇統彌照天皇、以下曲宴其内親王之房に至るまで西本に缺く蓋塙氏類史に據て補へるならむ但し考異には辛巳以下內親王之房に至る十字舊脫據類聚國史補ふと云りされば原本は西本とは全く別にて其以外の文は存せしにや
○木連理、治部式に仁木也異本同枝或枝旁出上更還合と見え下瑞とす
○白雀、同式に中瑞とす
○戊寅云々、此條原本なし紀略に據て補ふ
○茨田親王、桓武天皇皇子
○其內親王、高志內親王なり紀略に大同四年五月壬子三品高志內親王薨桓武天皇第二女天皇尤所鍾愛薨時年廿一とあり
○池田朝臣、考異に田類

日本後紀卷第十二

起延曆廿三年正月盡廿四年六月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

皇統彌照天皇　桓武天皇

(甲申)
廿三年春正月丁丑朔、御大極殿、受朝賀、武藏國言、有木連理、近江國獻白雀、○(二)戊寅、改茨田親王爲萬多、○(五)辛巳、曲宴其(高志)內親王之房、授親王三品、淳和贈皇后也從六位下池田朝臣苐守授從五位下、賜三位以上被、五位以上及六位以下藤原氏等綿、○(七)癸未、勅、眞如妙理、一味無二、然三論法相兩宗菩薩、目擊相諍、蓋欲令後代學者、以競此理、各深其業歟、如聞、諸寺學生、就三論者少、趣法相者多、遂使阿黨凌奪、其道疎淺、宜年分度者、每年宗別五人爲定、若當年無堪業者、闕而莫塡、不得以此宗人、補彼宗數、但令二宗學生、兼讀諸經幷疏、法華最勝、依舊爲同業、華嚴涅槃、各爲一業、經論通熟、乃以爲得、雖讀諸論、若不讀經

史作原とあり
○薭守、原本蘇守に作る類史に據て改む
○三論、中論百論十二門論の三論によりて立たる宗旨我邦には推古天皇三十三年高麗慧灌初て之を傳ふ
○法相、萬法の性相を窮明する宗の意にて法相宗と名付くと云我邦には孝德天皇白雉四年道昭和尙入唐して玄弉に就て傳授したるを第一傳とし爾後玄昉が渡唐して所謂北寺傳を傳へしまで四傳あり北寺(興福寺)傳を正傳とす
○蓋欲令、此三字及深其業歟以下十一字西本に缺く蓋類史に據て補へるならむ
○闕而莫塡、原本闕を閒に作る西本及類史に據て改む
○以爲得、以下七字西本に缺く蓋類史に據て補へるならむ
○其廣渉經論、西本其廣渉經の四字なし類史に據て補へるならむ
○勿限漢音、之に據るに當時佛敎に於ても漢音を主とせしなるべし義を習

者、亦不得度、其廣渉經論、習義殊高者、勿限漢音、自今以後、永爲恒例、○甲申、宴五位以上、賜物有差、○丁亥、勅、頃年諸國緇徒、多虧戒行、既汚法教、先從擯出、然而特降弘恕、厚優耆宿、其有改過者、聽住本寺、又簡智行可稱、堪爲人師者、擢任講師、化導釋侶、如聞、苟忝講師、或事奸濫、詐稱改過、未捨妻孥、此乃僧綱簡擇所失、國司阿容任意、違教慢法、莫過斯甚、宜有是類、一從擯却、其僧綱國司、猶不悛革、量情科貶、正五位下藤原朝臣今川、藤原朝臣縵麻呂、藤原朝臣繼業授正五位上、○己丑、左京人正六位上□□朝臣今繼等賜姓三棟朝臣、○辛卯、夷第一等浦田臣史闘儺授外從五位下、○壬辰、宴五位已上、賜物有差、○癸巳、幸馬埒殿觀射、（）○乙未、遣武藏、上總、下總、常陸、上野、下野、陸奥等國、糒一萬四千三百十五斛、米九千六百八十五斛於陸奥國小田郡中山柵、爲征蝦夷、○丙申、遊獵水生野、是日天寒、於野中賜五位已上衣、○戊戌、律師傳燈大法師位如寶言、招提寺者、斯唐大和上鑒眞爲聖朝所建也、天平寶字三年、勅以沒官地賜之、名爲招提寺、又以越前國水田六十町、備前國田地十三

町、宛給供料、令學戒法、以來殆五十年、雖有經律、未經披講、一則乖和上之素意、一則闕弘道之至志、伏望、令永代傳講、便用賜田、充律供儲、然則招提之宗、久而無廢、先師之旨、沒而不朽、許之、○[廿三]己亥、制、延暦十一年七月三日格、六世已下王、情願改姓者、注所願之姓、先申官待報、然後改之、不得輙行者、頃年之間、未有申請、既違格旨、自今以後、除承嫡之外、猶不改者、宜抑止計帳、不得疎□、○免淡路國窮民負稅九萬三千九百束、○[廿四]庚子、從五位下笠朝臣庭麻呂爲大和介、外從五位下津宿禰源爲山城介、從五位下大中臣朝臣弟枚爲伊賀守、從五位下大荒城臣忍國爲遠江介、從五位上高倉朝臣殿繼爲駿河守、從五位下藤原朝臣眞雄爲近江權介、大內記從五位下平群朝臣眞常爲兼大掾、從五位下和朝臣弟長爲信濃介、中衞少將從四位下巨勢朝臣野足爲兼下野守、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲介、從五位下佐伯宿禰社屋爲出羽守、從五位下藤原朝臣山人爲越中權介、從五位下和朝臣氏繼爲越後介、從四位下安倍朝臣弟當爲丹波守、從五位下淡海眞人有成爲介、從五位下大秦

ふこと殊に高きものには呉音を用ふるものにても得度せしむべしとなり
○如聞荷忝講師、西本に聞以下の五字缺く、蓋類史に據て補へるならむ
○三棟朝臣、姓氏錄に見えず三統宿禰と同族か、三統宿禰は續後紀承和十一年十月紀に日置宿禰眞淨□繼國長益繼淨海等賜姓三統宿禰と見ゆ姓氏錄に日置朝臣(皇別)日置造(蕃別)見ゆれど日置宿禰は見えず
○史闕雛、西本史下に吏字あり恐くは衍
○中山柵、今陸前國登米郡中津山村なるべしと云
○招提寺、扶桑略記に天平寶字三年八月三日大唐鑒眞和尙奉爲聖武皇帝招提寺所創建也金堂一宇少僧都唐如寶所建立也云々と見え續紀寶字七年五月紀鑒眞傳にも見ゆ
○大和上、原本上を尙に作る類史紀略及下文に據て改む
○爲聖朝、三代格略記に爲の上奉字あり
○經律、佛經には經律論の三部あり此は經と律となり

○弘道、三代格弘を佛に作る
○己亥制云々、延暦十一年七月三日格は三代格卷十七及類史七十九に出づ
○改姓、類史改を賜に作る
○猶不改者、改は西本に據て補ふ
○抑止計帳、計帳は一に大帳とも云每年一度之を造り家口年紀を注し課口不課口の區別を明にす田令に據るに皇親及五世王六世王は不課とし七世王は調を輸し傜をのみ免ぜり計帳を抑止すとは其待遇を停止するを云
○神泉苑、拾芥抄中末に天子遊覽所以近衞次將爲別當乾臨閣謂之正殿二條南大宮西八町（三條北壬生東）善女龍王常見此所上代有公卿別當長保年中道綱補之、太平記に神泉苑は大内始て成し時擬周文王靈囿方八町に被作たりし園囿是也云々と見ゆ
○高田鄕、抄郡鄕部に但馬國氣多郡高田（多加多）とあり弘安太田文にも高田鄕見ゆ國府趾は今の國分村大字府市場なるべし

公宿禰宅守爲因幡介、從五位下石川朝臣宗成爲備後守、從五位下百濟王忠宗爲伊豫介、從五位下藤原朝臣藤繼爲大宰少貳、正五位上藤原朝臣縵麻呂爲豐前守、從五位下藤原朝臣眞書爲豐後守、○辛（廿五）丑、幸神泉苑、○壬（廿六）寅、遷但馬國治於氣多郡高田鄕、○甲（廿八）辰、刑部卿陸奥出羽按察使從三位坂上大宿禰田村麻呂爲征夷大將軍、正五位下百濟王教雲、從五位下佐伯宿禰社屋、從五位下道嶋宿禰御楯爲副、軍監八人、軍曹廿四人、○乙（廿九）巳、安藝國野三百町賜南備内親王、以爲牧地、○二月丙午朔、中務大輔從四位上三嶋眞人名繼爲兼衞門督、○戊（三）申、幸西八條并五條院、賜五位已上衣、○庚（五）戌、運收大和國石上社器仗於山城國葛野郡、○甲（九）寅、從五位下淨宗王爲少納言、○癸（十八）亥、從五位下大宅眞人繼成爲大監物、從四位下大庭王爲内匠頭、從五位下大中臣朝臣魚取爲助、從五位上下毛野朝臣年繼爲諸陵助、從五位下大伴宿禰久米主爲主税頭、從五位下大宅眞人淨成爲造兵正、從五位下藤原朝臣城主爲宮内少輔、從五位下大野朝臣犬養爲左京亮、春宮權亮從五位下

と云

○甘南備内親王、紹運錄に桓武天皇皇女平城納之弘仁八年二月廿一日薨年十八と見ゆ

（二月）西八條、百練抄卷六に大治三年五月十一日兩院幸八條大宮水閣とある是なるべし

○五條院、拾芥抄中末に五條院二町五條北大宮東金岡畫水石云々とあり

○石上社器仗云々、神名式に大和國山邊郡石上坐布留御魂神社、臨時祭式に凡石上社門鑰一勾匙二口納官庫、臨祭在前遣官人神部卜部各一人開門掃除供祭、自餘正殿幷伴佐伯二殿各一口同納庫、不得輙開とあり本社には上古以來多く兵器を收めしを萬一の事を慮りて山城國葛野郡に移さしめ給ひしなり

○伊豫親王、桓武天皇皇子、紀略に大同二年十月辛巳潛謀不軌、十一月乙未母子仰藥而死とあり

○可樂埼、辛埼又韓埼或は唐埼に作る琵琶湖に臨み七瀨祓の其一所なり萬葉集以下の諸集に見ゆ

（三月）蒲生驛、兵部式

藤原朝臣眞夏爲亮、中衞權少將如故、參議從四位下藤原朝臣緒嗣爲兼山城守、右衞士督如故、從四位下三諸朝臣大原爲播磨守、免大和國田租幷地子、緣旱災也、○乙丑、（二十）巡行京中、御式部卿三品伊豫親王第、賜四位以上衣、○己巳、（廿四）幸近江國志賀郡可樂埼（カラサキ）、○庚午、（廿五）攝津國飢、遣使賑給、外從五位下殖栗連宗繼爲美濃權介、○三月戊寅、（丙子朔）（三）宴、次侍從以上、命文人賦詩、賜物有差、○庚辰、（五）遣唐使拜朝、○辛卯、（十六）賜五位以上米各有差、以霖雨也、○壬辰、（十七）從五位下藤原朝臣永眞爲權右少辨、○庚子、（廿五）大宰府言、大隅國桑原郡蒲生驛與薩摩國薩摩郡田尻驛、相去遙遠、遞送艱苦、伏望置驛於薩摩郡櫟野（イチヒノ）村、以息民苦、許之、是日、召遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂、副使從五位上石川朝臣道益等兩人、賜餞殿上、近召御床下、綸旨慇懃、特賜恩酒一杯寶琴一面、酣暢奏樂、賜物有差、○癸卯、（廿八）授大使葛野麻呂節刀、○夏四月己酉、（乙巳朔）（五）從五位下桑田眞人木津魚麻呂爲主計助、從五位下多治比眞人氏守爲主税助、從五位下田中朝臣八月麻呂爲右衞士佐、○壬子、（八）從五位下紀朝臣國雄爲右大舍

に大隅國驛馬蒲生大水各五疋とあり今姶良郡蒲生村大字蒲生是なり
○田尻驛、同式に薩摩國驛馬田後櫟野各五疋とあり田尻は今地名存せず
○櫟野村、今薩摩郡樋脇村大字市比野是なり
○是日、紀略之を壬辰十七日條に係く恐くは非
○一杯、紀略一坏に作る
○節刀、大將出征に節刀を授くること軍防令に見ゆ遣唐使に之を授くることは大寶元年五月己卯（續紀卷上二一頁）に注す
（四月）染袴、衣服令に諸臣禮服一位深紫衣白袴朝服も同じく白袴とありしを此に至て染色の袴を著用するを聽されしなり
○淺杉染、續後紀承和五年三月癸未勅に呉桃染黃墨染杉染皂染等色云々彈正式に凡淺染袴朝座公會悉聽服用と見ゆ杉は前田本塙本に木と傍訓すされはアサギと訓むべきか
○朝服、衣服に禮服朝服制服の別あり參朝の時に服するに依て朝服と云唐にては朝服公服の二種に之を區別す
○和朝臣家麻呂薨、續紀

人助、從五位下藤原朝臣城主爲民部少輔、從五位下三嶋眞人眞影爲宮內少輔、從五位下安倍朝臣宅麻呂爲主殿頭、外從五位下豐山忌寸眞足爲助、外從五位下壬生公足人爲園池正、從五位下多治比眞人家繼爲造東寺次官、外從五位下日下部得足爲造西寺次官、侍醫外從五位下倭廣成爲兼遠江權掾、侍醫外從五位下難波連廣名爲兼因幡權掾、從五位下秋篠朝臣全繼爲右衞士權佐、侍從從四位下葛野王爲兼主馬頭、從五位下紀朝臣田上爲內廐助、從五位下百濟王元勝爲內兵庫正、○丁卯、〔廿三〕勅、聽著染袴、先有限制、自今以後、淺杉染、不論高卑、宜特聽之、但著朝服時、不得同襲、其深染、及常所禁、不在聽限、○辛未、〔廿七〕制、頽壞成川之地、屢事除籍、新出爲田之狀、未聞言上、若西岸壞流、既損公田、則東邊新成、點爲私地、如此經年、公損幾何、宜天平十四年以降新出田數、細勘言上、不得疎漏、中納言從三位和朝臣家麻呂薨、贈從二位大納言、家麻呂、贈正一位高野朝臣弟嗣之孫也、其先百濟國人也、爲人木訥、無才學、以帝外戚、特被擢進、蕃人入相府、自此始焉、可謂人位有餘、天爵不

延曆五年正月（卷下四四七頁）に始見伊勢大掾造酒正造兵正内廐助衞門督治部卿相摸守等を歷任す
○贈從二位大納言、奈良本紀略には下文年七十一の次に詔贈從二位大納言とあり
○弟嗣、乙繼に同じ高野皇太后の御父なり家麻呂の父は皇太后の兄弟なれど其名は詳ならず
○相府、參議以上を云
○山村曰佐、原本曰を日に作る類史に據て改む
（五月）斯波城、今陸中國紫波郡郡山の廢墟なるべしと云
○山谷嶮□、□は恐くは峻字なるべし
○准小路例置一驛、兵部式陸奧國驛馬膽澤の次に磐基と見ゆる是なるべし九條本に之をハハキと訓るは何に據れるか其地今詳ならざれど和賀郡岩崎にあらざるか
○辛卯、善謝卒去の事紀略記共に五月辛卯の事とす辛卯は十八日なり庚寅の次にあるべし疑くは此に錯入せるならむ
○善謝卒、續紀延曆九年九月（卷下四九八頁）始見

足、其雖居貴職、逢故人者、不嫌其賤、握手相語、見者感焉、時年七十一、○（廿八）壬申、賜從四位下紀朝臣兄原度一人、右兵衞大初位下山村曰佐駒養獻白雀、賜近江國稻五百束、○五月（甲戌朔）戊（五）寅、御馬埒殿、觀馬射、○癸（十）未、陸奧國言、斯波城與膽澤郡、相去一百六十二里、山谷嶮□、往還多艱、不置郵驛、恐闕機急、伏請准小路例、置一驛、許之、○辛（十八）卯、傳燈大法師位善謝卒、法師、俗姓不破勝、美濃國不破郡人也、初就同寺理教大德、稟學法相、道業日進、尤善俱遮、遂乃超□三學、通達六宗、滋此智牙、決彼疑網、延曆五年、彌照天（桓武）皇擢任律師、榮華非好、辭職閑居、凡厥行業、必於菩提、一生期盡、終於梵福山中、遂生極樂、入同法夢、時年八十一、○甲（十一）申、幸式部卿三品伊豫親王第、○戊（十五）子、播磨國荒廢田八十二町賜□□□親王、○庚（十七）寅、制、正月齋會、得度之輩、理須舊年試才、新歳得度、而所司常致慢闕、迄于會畢、其名不定、自今以後、舊年十二月中旬以前試定、申送其狀、簡定之後、不聽改替、然則本願無虧、屬託亦止、○辛（十八）卯、散事從三位藤原朝臣延福薨、○癸（二十）巳、山城國穀四千斛賑給左右京高年、○丙（廿三）申、齋宮寮獻白

元亨釋書卷二にも見ゆ
○理敎、詳ならず
○俱遮、俱舍なり
○超□三學、超□は略記に讀誦に作る三學とは證果を得るにつき修むべき戒定慧の三學を云
○六宗、三論法相華嚴律俱舍成實なり
○梵福山中、大和志に梵福寺在添上郡鹿野園村傳云岩淵寺子院とあり岩淵寺は釋勤操の所建なり
○時年八十一、紀略時上に卒字あり
○散事、後宮職員令に諸司の掌以上（掌侍掌膳の類）を職事とし自餘（女孺采女の類）を散事と爲すとあり
○藤原朝臣延福薨、續紀延曆四年正月紀（卷下四二七頁）に始見
○上國、令制諸國を分て大上中下の四等とす上國は其上なり
○丙辰制、考異に制舊脫據類史補とあり
○鹿嶋神社、常陸國鹿嶋郡
○氣比神社、越前國敦賀郡
○氣多神社、能登國羽咋郡

雀、攝津國言、頻歲不登、百姓乏食、加以春夏水害、資粮亦盡、伏請正稅二萬束、假貸貧民、令濟家產、許之、○六月壬子、從五位下藤原朝臣貞嗣爲左少辨、從五位下豐野眞人村爲大監物、從五位下石上朝臣乙名爲散位頭、從五位上藤原朝臣道雄爲宮內大輔、從五位上中臣朝臣道成爲典藥頭、○癸丑、定越中國爲上國、○丙辰、制、常陸國鹿嶋神社、越前國氣比神社、能登國氣多神社、豐前國八幡神社等宮司、人懷競望、各稱譜第、自今以後、神祇官撿舊記、常簡氏中堪事者、擬補申官、○壬戌、幸大堰、

○癸亥、散位從三位石上朝臣家成薨、左大臣贈從一位麻呂之孫、正六位上東人之子也、才藝無取、恪勤在公、薨時年八十三、○甲子、散位正五位下小倉王上表曰、臣聞、上天開象、兩曜以之盈虛、聖人肇基、九族由其差降、是故尊卑有序、仰星辰而可知、親疎無替、命氏姓而立教、伏惟、陛下彤鏤品彙、陶冶生靈、人正其名、物安其性、小倉幸屬淳化、謬霑霈澤、□乾□弘、大造無謝、但得愚息內舍人繁野、及小倉兄別王之孫內舍人山河等款、偁、臣等智効罕施、器識庸微、忝天潢之末流、仰瓊枝而悚懼、伏請依

○八幡神社、豐前國宇佐郡
○擬補申官、神祇官に於て擬補し太政官に申告するなり
○石上朝臣家成薨、續紀寶字八年十月庚午に始見上總守勅旨少輔宮内大輔民部大輔伊豫守大宰大貳内藏頭衞門督右衞士督宮内卿等を歷任す
○八十三、紀略に八十二とあり奈良本には三とす
○小倉王、舍人親王の子御原王の子なり
○兩曜、日月を云
○彫鏤品彙、彫鏤は文選魏都賦に木無彫鏤、注に鏤鏤也とあり彫り鏤むにて陶冶と云と同じ意
○淳化、原本淳和に作る西本に據て改む
○霈澤、字書に謂雨曰霈亦以爲恩澤之喩と云
○大造無謝、大造は左傳成十三年に出で大功と云に同じ
○兄別王、兄の和氣王
○忝天潢之末流、原本忝を木に作る廿五年五月己卯紀に據て改む天潢は史記天官書に王良旁有八星絕漢曰天潢とあり天の河なりそれより轉じ

去延暦十七年十二月廿四日友上王賜姓故事、同蒙清原眞人姓、又蒙野名語觸皇子、改蒙曰夏、小倉不忘□犢、聞斯行諸、特望天恩、伏聽進止、其應賜姓人等、具目如別、不任懇迫之至、謹以申□、許之、大宰府言、壹伎嶋防人粮、受筑前穀、運漕艱苦、屢致漂失、伏望廢六國所配防人廿人、以當嶋兵士三百人、分番配置、不勞給粮、許之、○己巳、停山城國山科驛、加近江國勢多驛馬數、○庚午、勅、比年渤海國使來著、多在能登國、停宿之處、不可疎陋、宜早造客院、○秋七月癸酉朔、幸神泉苑、○丙子、幸大堰、○己卯、觀相撲、授无位明□女王從五位上、從五位上紀朝臣內子、川上朝臣眞奴、百濟王惠信、藤原朝臣川子、紀朝臣殿子正五位上、无位藤原朝臣上子、橘朝臣御井子、紀朝臣乙魚、坂上大宿禰春子從五位上、○癸未、幸葛野川、○丙申、幸與等津、○己亥、幸大堰、○辛丑、右京人門部連松原流土左國、以不孝也、○八月癸卯朔、幸大堰、○丁未、幸葛野川、○己酉、遣征夷大將軍從三位行近衛中將兼造西寺長官陸奥出羽按察使陸奥守勳二等坂上大宿禰田村麻呂、從四位上行衛門督兼中務大輔

て皇室の意に用ふ
○諱觸皇子、皇女滋野内親王と訓同じきを云ふか
○六國、筑前以下六國なり續紀神護二年四月紀に割筑前等六國兵士以爲防人とあるを云
○山科驛、山城國宇治郡山科鄕にあり
○勢多驛、兵部式に近江國驛馬勢多卅疋とあり
○客院、客館と云に同じ
（七月）與等津、山城國淀なり地名辭書に古の與等津は京津なれば紀伊郡納所（東淀）の方にやと云へど今臆斷し難し
（八月）中院、拾芥抄中末に中和院内裏西號中院神嘉殿天子祭社稷神所とあり
○左右閣、神泉苑は乾臨閣を正殿とし其東西に左閣右閣あり
○生年在丑、かくの如き迷信既に行はれしなり
○巡行京中、類史行を幸に作る
○勝長、紀略梶長に作る
○從五位上藤原朝臣繼彥、考異に上舊作下據上下文訂とあり
（九月）善原忌寸□依、善原忌寸は詳ならず

三嶋眞人名繼等、定和泉攝津兩國行宮地、以將幸和泉紀伊二國也、○八庚戌、幸葛野川、○十壬子、暴雨大風、中院西樓倒、打死牛、又壞神泉苑左右閣、京中廬舍、諸國多蒙其害、天皇生年在丑、歎曰、朕不利歟、未幾不豫、遂弃天下、○十一癸丑、地震、賜贈大納言從二位和朝臣家麻呂、從四位下尾張女王度各二人、○十三乙卯、遊獵北野、○十九辛酉、巡行京中、○廿一癸亥、遊獵大原野、○廿五丁卯、遊獵栗前野、○廿六戊辰、天皇以來冬可幸和泉國、參議式部大輔春宮大夫近衞中將正四位下藤原朝臣繩主爲裝束司長官、正五位上橘朝臣安麻呂、從五位下池田朝臣春野爲副、參議左兵衞督從三位紀朝臣勝長爲御前長官、從五位上藤原朝臣繼彥爲副、左大辨東宮學士左衞士督但馬守正四位下菅野朝臣眞道爲御後長官、從五位下紀朝臣咋麻呂爲副、○廿八庚午、從五位下大枝朝臣須賀麻呂爲主計助、外從五位下檜原宿禰鑁作爲造西寺次官、○九月壬申朔三甲戌、近江國蒲生郡荒田五十三町賜式部卿三品伊豫親王、○四乙亥、幸大堰、○八己卯、幸神泉苑、○十辛巳、從五位下紀朝臣田上爲相摸介、○十六丁亥、正六位上善原忌寸□依

○差勳位、勳位あるものを差遣するを云

○健兒、健兒の名皇極紀元年(書紀下一五一頁)に始見、續紀(卷下六三頁)天平寶字六年二月に其簡點の事見えたり

○自牒、三代格此下に申送の二字あり

○延曆廿一年九月廿三日格、三代格に見えず

○法家、三代格明法曹司の四字に作る

授外從五位下、○己丑(十八)、遣兵部少丞正六位上大伴宿禰岑萬里於新羅國、太政官牒曰、遣使唐國、脩聘之狀、去年令大宰府送消息訖、時無風信、遂變炎涼、去七月初、四船入海、而兩船遭風漂廻、二船未審到處、即量風勢、定著新羅、仍遣兵部省少丞正六位上大伴宿禰岑萬里等尋訪、若有漂著、宜隨事資給、令得還鄉、不到彼堺、冀遣使入唐、訪覓具報、○壬辰(廿一)、遊獵北野、○癸巳(廿二)、丹波國言、依格、差勳位衞護府庫、而白丁之徭、唯卅日、勳位所直、百卌日、有位白丁、勞逸不均者、制、宜以白丁爲健兒、○甲午(廿三)、式部省言、案公式令、親王一品已下、職事初位已上、並可自牒諸司、雖是三位已上、曾無以家司牒及解向官司之文、而案去延曆廿一年九月廿三日格云、親王內親王、並年滿四歲、始充帳內者、今親王內親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司、若爲申牒、又同令牒式、三位已上去名、然則親王四品已上、去名明矣、而散事數人同品及同官位姓之類、既不署名、何以辨知、仍問法家、答云、如此之類可有別式者、未審所從者、勅、幼稚親王、既不便筆、三位已上、亦無可署、准據令格、還成疑滯、必須自牒、事有不穩、自

○至牒諸司、三代格至字の下に于字牒字の下に送字あり
○恒式、三代格恒例に作る
（十月）○難破、紀略破を波に作る下同じ
○惠美原、詳ならず
○城野、所在詳ならず
○日根行宮、和泉志に日根郡（今の泉南郡）日根野莊野宮其故址也と見ゆ
○垣田野、和泉志日根郡鶴原貝田二村と見ゆ
○藺生野、和泉國日根郡土生鄕にあり今の南掃守の邊かと云
○日根野、日根郡日根野村にあり
○辛亥詔、行幸の地にての詔此に始て見ゆ續紀には例見えず
○年實、稻を云續紀神龜二年二月卽位の詔に年實をトシと訓みたれど此はイネと訓べし
○產業、總ての生產物を云
○此月波閑時爾之弖、農業の閑散なる月の意

今以後、宜親王四品已上、及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首、並具注其官品、其親王家、及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾家令已下兩人署之、无品親王內親王者、並別當官人、署名申牒、牒式准上定、別當人、依勅處分、其散事三位、元無家司、至牒諸司、宜令自署、立爲恒式、○戊戌、地震、○冬十月甲辰、行幸和泉國、其夕至難破行宮、○乙巳、賜攝津國司被衣、上御舟泛江、四天王寺奏樂、國司奉獻、○丙午、至和泉國、遊獵于大鳥郡惠美原、散位從五位下坂本朝臣佐太氣麻呂獻物、賜綿一百斤、○丁未、獵于城野、日暮御日根行宮、○戊申、獵垣田野、阿波國獻物、賜國司等物有差、左大辨正四位下菅野朝臣眞道獻物、賜綿二百斤、○己酉、獵藺生野、近衛中將從三位坂上大宿禰田村麻呂獻物、賜綿二百斤、○庚戌、獵于日根野、河內國獻物、○辛亥、詔曰、天皇詔旨良万止勅命乎、和泉攝津二國司郡司公民陪從司々人等諸聞食止宣、今年波年實豐稔弖、人々產業毛取收弖在、此月波閑時爾之弖、國風御覽須時止奈毛、常毛聞所行須、今行宮所乎御覽爾、山野毛麗、海瀲毛淸之弖、御意毛於

○眞人乎上賜比、上字は原本に缺く上文の例に據て補ふ、

○玉出嶋、紀伊國海部郡(今海草郡)にあり和歌村の南なる妹背山の舊名たるべし續紀神龜元年十月紀(卷上一八九頁)に見ゆ
○賀樂内親王、桓武天皇皇女

太比爾之弖御坐坐、故是以御坐坐世留和泉國弁攝津國東生西成二郡乃百姓爾、今年田租免賜比、又勤仕奉國郡司及一二能人等爾冠位上賜比治賜布、日以下及郡司乃正六位上乃人爾波、男一人爾位一階賜布、又行宮勤仕奉爾依弖、三嶋名繼眞人乎、上賜比治賜布、又行宮乃邊爾近岐高年八十已上幷陪從人等爾、大物賜波久止詔布勅命乎。衆聞食止宣、授攝津守從三位藤原朝臣雄友正三位、衛門督從四位上三嶋眞人名繼正四位下、散位從五位下坂本朝臣佐太氣麻呂從五位上、攝津介外從五位下尾張連粟人、和泉守外從五位下中科宿禰雄庭、攝津掾正六位上多治比眞人船主、和泉掾正六位上小野朝臣木村、散位正六位上大枝朝臣萬麻呂從五位下、又皇太子已下賜物有差、遣使於和泉日根二郡諸寺施綿、播磨國司奉獻、奏風俗歌、○壬子、(十一)幸紀伊國玉出嶋、○癸丑、(十二)上御船遊覽、賀樂内親王、及參議從三位紀朝臣勝長、國造紀直豐成等奉獻、詔曰、天皇詔旨良万止勅命乎、紀伊國司郡司公民陪從司々人等諸聞食止宣、此月波閑時爾之弖、國風御覽須時止奈毛、常母聞所行

○磯嶋毛奇麗久云々、前詔には山野毛麗云々とあるを、こゝは風色自ら異なれば語を換てかく宣給ひしなり

○熊取野、和泉國日根郡熊取村（中世熊取莊と稱す）にあり

○三王、平城、嵯峨、淳和の三代の帝王

須、今御坐所乎御覽爾、礒嶋毛奇麗久、海瀲毛淸晏爾之弖、御意母於多比爾御坐坐、故是以御坐坐世留名草海部二郡乃百姓爾、今年田租免賜比、又國司國造二郡司良爾、冠位上賜比治賜布、目已下及郡司乃正六位上乃人爾波、男一人爾位一階賜布、又御座所爾近岐高年八十已上人等爾大物賜波久止詔布勅命乎、衆聞食止宣、授守從五位下藤原朝臣鷹養從五位上、介外從五位下葛井宿禰豐繼、掾從六位下小野朝臣眞野、刑部大丞正六位上紀朝臣岡繼、中衞將監正六位上紀朝臣良門從五位下、遣使於名草海部二郡諸寺施綿、○甲寅、自雄山道還日根行宮、○乙卯、遊獵熊取野、○丙辰、御難破行宮、○丁巳、國司奉獻、遣使於西成東生二郡諸寺捨綿、○戊午、車駕至自難破、○壬戌、幸神泉苑、○甲子、勅、私養鷹鶴禁制已久、如聞、臣民多蓄、遊獵無度、故違綸言、深合罪責、宜嚴禁斷、勿令重犯、但三王臣、聽養有差、仍賜印書、以爲明驗、自餘輙養、將寘重科、其印書外過數者、捉臂鷹人進上、自餘王臣五位已上、錄名言上、六位已下及臂鷹人、並依法禁固、科違勅罪、遣使搜撿、如有違犯、國郡官司、亦與同罪、○

（十一月）栗原郡新置三驛、詳ならず地名辭書により支分し志太郡新田郡栗原郡と新驛を置かれしならむ其驛址は大略三本木高清水二迫と見るべしと云り
○大貞連、錄左京神別に大貞連饒速日命十五世孫獮加利大連之後也云々
詔阿比太連賜大俁連天平神護元年改字賜大貞連とあり
○秋田城、羽後國秋田郡今の南秋田郡寺内村高清水に遺趾あり秋田城創置の事は天平五年十二月紀に出羽柵遷置於秋田村高清水岡とある是なり
○河邊府、地名辭書に之を出羽郡井口國府（羽前國東田川郡）とし天平五年出羽の鎭城を秋田郡に移さる而も府務は之を舊城に行ひ河邊府と云最上河邊の舊府の意なりと云り
○皇太子學士、原本皇太の二字缺く西本に據て補ふ皇太子の上に左大辨正四位下の七字あるべきか
（十二月）牛之爲用云々、三代格卷十九に出づ天皇天平九年丁丑の降誕

戊辰、免越前能登二國、今年調十分之七、以桑麻有損也、○十一月壬申朔戊寅、陸奧國栗原郡、新置三驛、○己卯、遊獵日野、○壬午、制、筑前國志麻郡、自今以後、停止綿調、以令輸錢、○甲申、幸神泉苑、左京人從七位下大伴連三田次賜姓大貞連、○丁亥、幸神泉苑、○戊子、山城國乙訓郡白田六町賜甘南備內親王、○己丑、幸神泉苑、○癸巳、出羽國言、秋田城建置以來卅餘年、土地墝埆、不宜五穀、加以孤居北隅、無隣相救、伏望永從停廢、保河邊府者、宜停城爲郡、不論土人浪人、以住彼城者編附焉、○戊戌、幸神泉苑、皇太子學士但馬守菅野朝臣眞道、木工頭從五位上兼行造宮亮播磨介石川朝臣河主、監僧綱政、○十二月壬寅朔、幸神泉苑、○丙午、勅、自今以後、左右大辨、八省卿、彈正尹、准參議已上、雖開門以後、聽就朝堂、○丁未、幸神泉苑、○壬戌、勅、牛之爲用、在國切要、負重致遠、其功實多、如聞、無賴之輩、爭事驕侈、尤剝斑犢、競用鞍韉、爲弊良深、事須禁絕、自今已後、殺剝及用鞍幷胡簶等之具、一切禁斷、若有違犯、科違勅罪、主司阿容、亦與同罪、○丙寅、聖體不豫、遣使平城七大寺、賷綿五百六十斤誦經、

なり故に此勅ありしなるべし八月壬子の條に天皇生年在[壬戌]日云々とあるを參考すべし
○尤剝斑犢、三代格に尤を牧に斑を班に作る
○鞍韉、抄鞍馬具に鞍說文云鞍（和名久良）馬鞍也蔣魴切韻云韉以鞍褻馬也、韉は唐韻云韉（和名之太久良）鞍韉也とあり
○爲弊良深、三代格良深を尤甚に作る
○自今已後殺剝云々、以下十九字三代格になし
○胡祿、類史祿を錄に作る抄征戰具に胡周禮注云箙（音服和名夜奈久比唐令用胡錄二字）盛矢器也唐韻云箙（胡鹿二音）箭室也とあり
【延暦廿四年】癸酉制云々、三代格卷三延暦廿四年正月三日太政官符禁斷王臣諸家稱爲定額寺檀越寺と見ゆ
○檀越、祖庭事苑に檀越梵語此云施主越謂度越彼岸とあり
○流記、寺記に緣起流記資財帳あり流記は當寺に關係する諸般の事を記せるものを云西大寺資財流記帳法隆寺流記資財帳久

又賑恤舊都飢乏道俗、○丁卯（廿六）、詔曰、朕有所思、欲施恩澤、宜赦天下、自延暦廿三年十二月廿六日昧爽以前、大辟已下、罪無輕重、皆咸赦除、但強竊二盜、及私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、敢以赦前事、相告言者、以其罪罪之、普告天下、知朕意焉、是日賜三品式部卿諱（淳和）度一人、

（乙酉）廿四年春正月辛未朔、廢朝、聖體不豫也、○癸酉（三）、制、定額諸寺、檀越之名、載在流記、不可輙改、而愚人爭以氏寺、假託權貴、詐稱檀越、寺家田地、任情賣買、事多奸濫、宜加禁斷、○丁丑（七）、正五位上橘朝臣安麻呂授從四位下、賜五位已上物各有差、○甲申（十四）、平明、上急召皇太子、遲之、更遣參議右衛士督從四位下藤原朝臣緒嗣召之、卽皇太子參入昇殿、召於牀下、勅語良久、命右大臣（神王）以正四位下菅野朝臣眞道、從四位下秋篠朝臣安人爲參議、又請大法師勝虞、放却鷹犬、侍臣莫不流涙、奉爲崇道天皇、建寺於淡路國、是日勅、頃年爲興釋教、擯出違法之僧、今聞自悔前過、各有修行、宜赦其過、聽住本寺、若更有犯、處以恒科、又令天下諸國、修理國中諸寺塔、○乙酉（十五）、永停大替隼人風俗歌舞、是日大法師勝虞爲

米寺流記の類是なり
○氏寺、諸氏各々崇敬の寺院あり一氏力を合せて崇敬するを氏寺と云
○賣買、考異に買舊作貿據類史訂とあり
○各有差、考異に各舊脱據類史補とあり
○勝虞、大和元興寺の僧本朝高僧傳に見ゆ
○建寺於淡路國、崇道天皇(早良親王)の御陵は津名郡多賀村大字川合字高嶋にありされば寺院も其附近なるべし
○大替隼人、隼人は大衣、番上、今來、白丁の四種あり大衣は二人あり擇譜第内置左右各一人教導隼人云々とある大衣の誤かとも思へど民部式に凡點仕丁者毎五十戸二人云々其大替前年四月省預勘録應點人數申官下符國司計帳之日點定云々、衛門式に大替衛士兵仗戎具隨身領遣云々と見え仕丁にても衛士にても全體に交替せしむるを云へば大替隼人も其意なるべし
○風俗歌舞、職員令に隼人司正一人掌檢校隼人及名帳教習歌舞造作竹

少僧都、均寵爲律師、○(十六)丙戌、參議從四位下秋篠朝臣安人爲右大辨、近衛少將勘解由長官阿波守如故、從四位下橘朝臣安麻呂爲左中辨、從五位上百濟王鏡仁爲右中辨、從四位上藤原朝臣葛野麻呂爲刑部卿、越前守如故、宴五位已上、賜物有差、○(十七)丁亥、於御在所南端門外射、但乘輿不御、○(廿一)辛卯、賜散位從四位下住吉朝臣綱主度一人、○(廿二)壬辰、賜宿侍親王已下五位已上衣、是日未時、大星隕、○(廿五)乙未、地震、○(廿八)戊戌、外從五位下吉水連神德授從五位下、正六位上出雲連廣貞外從五位下、以供奉御藥、晝夜不怠也、○二月(辛丑朔)乙巳(五)、相摸國言、頃年差鎭兵三百五十人、戍陸奥出羽兩國、而今傜丁乏少、勳位多數、伏請中分鎭兵、一分差勳位、一分差白丁、許之、○(六)丙午、令僧一百五十人、於宮中及春宮坊等、讀大般若經、造一小倉於靈安寺、納稻卅束、又別收調綿百五十斤、庸綿百五十斤、慰神靈之怨魂也、○(十)庚戌、造石上神宮使正五位下石川朝臣吉備人等、支度功程、申上單功一十五萬七千餘人、太政官奏之、勅曰、此神宮所以異於他社者何、或臣奏云、多收兵仗故也、勅、有何因緣、所收之兵器、奉

笠事と見え隼人式に踐祚大嘗日に隼人風俗歌舞を奏する事見えたり
○均籠、籠は原本寵に作る西本及類史(一八七)に據て改む
(二月)靈安寺、大和國宇智郡靈安寺村にあり他戶親王の靈を祀れる神社は御靈神社と稱し同く靈安寺村にあり
○造石上神宮使、考異に造舊脫據類史補とあり
○布留宿禰高庭、錄大和皇別に布留宿禰天足彥國押人命七世孫米餅搗大使主命之後也、男木事命男市川臣大鷦鷯天皇御世達倭賀布都努斯神社於石上郷布瑠村高庭之地以市川臣爲神主とあり
○鳴鏑、字鏡に鏑奈利加夫良、抄征戰具に鳴箭漢書音義云鳴鏑如今之鳴箭日本紀私記云八目鏑(夜豆女加布良)とあり
○運遷神寶、廿三年二月庚戌の條を參看すべし
○典闈、後宮職員令に闈司尚闈一人掌宮閤管鑰及出納之事典闈四人掌同尚闈とあり
○勅諱贈天帝耳、天帝の判決を請ふ意なり石上神

答云、昔來天皇御其神宮、便所宿收也、去都差遠、可慎非常、伏請卜食而運遷、是時文章生從八位上布留宿禰高庭、即脩解申官云、得神戶百姓等款偁、比來大神、頻放鳴鏑、村邑咸恠、不知何祥者、未經幾時、運遷神寶、望請奏聞此狀、蒙從停止、官即執奏、被報宣偁、卜筮吉合、不可妨言、所司咸來、監運神寶、收山城國葛野郡訖、無故倉仆、更收兵庫、既而聖體不豫、典闈建部千繼、被充春日祭使、聞平城松井坊有新神託女巫、便過請問、女巫云、今所問不是凡人之事、宜聞其主、不然者、不告所問、仍述聖體不豫之狀、即託語云、歷代御宇天皇、以慇懃之志、所送納之神寶也、今踐穢吾庭、運收不當、所以唱天下諸神、勒諱贈天帝耳、登時入京密奏、即詔神祇官并所司等、立二幄於神宮、御飯盛銀笥、副御衣一襲、並納御櫛、差典闈千繼充使、召彼女巫、令鎮御魂、女巫通宵忿怒、託語如前、遲明乃和解、有勅、准御年數、屈宿德僧六十九人、令讀經於石上神社、詔曰、天皇御命爾坐、石上乃大神爾申給波久、大神乃宮爾收有志器仗乎、京都遠久成奴流爾依弖、近處爾令治牟止爲弖奈母、去年此爾運收有流、然爾比來之間、御體如常不

託としては天帝の語いかゞあらむ恐くは筆者の譯語なるべし
○幄、抄屏障具に四聲字苑云幄(和名阿計波利)大帳也と見えたり
○銀筒、抄器皿部に禮記注云筒(和名介)盛食器也とあり
○御鑾、抄舟車部に鑾四聲字苑云鑾(和名古之)車無輪也とあり
○令治牟止、原本令を全に作る類史に據て改む
○願坐之、原本之字を大字とす類史に據て改む
○常磐、原本磐を盤に作る西本に據て改む
○住吉朝臣綱主卒、初め姓池原公なりしを延曆十年四月住吉朝臣を賜ふ、延曆四年九月庚子紀に始見、下總大掾常陸大掾等を兼ぬ
○爲人、人字は西本に據て補ふ
○曰佐方麻呂、原本曰を日に作る上文に據て改む下同じ
○紀野朝臣、曰佐氏は錄山城皇別に紀朝臣同祖武内宿禰之後也とあれば紀野朝臣も同祖なるべし
○三園眞人、錄左京皇別

御坐有尒、大御夢尒覺志坐尒依弖、大神乃願坐之任尒、本社尒返收弖之、无驚久无咎久、平久安久可御坐止奈母念志食、是以鍛冶司正從五位下作良王、神祇大副從五位下大中臣朝臣全成、典侍正五位上葛井宿禰廣岐等乎差使弖、禮代乃幣帛、幷鏡令持弖、申出給御命乎、申給止申、辭別弖申給久、神那我良母皇御孫乃御命乎、堅磐尒常磐尒、護奉幸閇奉給閇止、稱辭定奉久止申、遣典藥頭從五位上中臣朝臣道成等、返納石上神社兵仗、散位從四位下住吉朝臣綱主卒、綱主、以善射爲近衞、後歷將曹將監、爲人恪勤、宿衞不怠、好愛鷹犬、多得士卒心、仕至少將、卒時年七十七、大和國人正六位上曰佐方麻呂、近江國人正六位上曰佐人上賜姓紀野朝臣、

○(十四)甲寅、備後國飢、遣使賑給、正五位上葛井宿禰廣岐授從四位下、○(十五)乙卯、賜脩行大法師位榮興度一人、脩行傳燈法師位聽福二人、左京人多王、登美王等十七人賜姓三園眞人、吉並□王、並王等十七人近江眞人、駿河王、廣益王等十六人清海眞人、池原王、嶋原王二人志賀眞人、貞原王、眞貞王二人淨額眞人、坂野王、石野王等十六人清岳眞人、篠井王、

に出自二天武皇子淨廣壹磯城王之後一也とあり
○近江眞人、錄左京皇別に淡海眞人出レ自二諡天智皇子大友王一也とあり淡海は近江の國名を負るもの續紀天平勝寶三年正月辛亥條に御船王淡海眞人の姓を賜れること見ゆ
○淸海眞人、以下世系詳ならざるは注せず
○淨原眞人、廿三年六月廿一日の條に見ゆ續後紀承和四年十月丁酉の條に據るに天武天皇の皇子舍人親王の御末なり姓氏錄に淸原眞人とあるは別なり
○豐岑眞人、天武天皇皇子高市皇子の裔
(三月)去返公、去返は地名なるべし羽後國雄勝郡御返事是か永慶軍記に關口合川御返事と見ゆ
○浦上臣、播磨國揖保郡に浦上鄕あり此に據れるなるべし
○己卯、此條類史になし
○吉備朝臣泉、延暦四年十月甲子紀に佐渡守に左降すとあり
○五百枝王云々、五百枝王及藤原雄依は延暦四年九月藤原種繼殺害の事に

坂合王等五人淨原眞人、十二月王、小十二月王等三人室原眞人、永世王、末成王、末繼王春原眞人、田邊王、高槻王等美海眞人、船木王長井眞人、岡山女王、廣岡女王等四人岡原眞人、廣永王、益永王等四人豐岑眞人、田村王、小田村王、金江王、眞殿王、河原王等八人長谷眞人、八上王、八嶋王山科眞人、○己未、令諸國々分寺、行藥師悔過、以聖躬未平也、○壬戌、賜傳燈大法師位安曁度僧尼各一人、脩行大法師位榮興僧一人、脩行法師位慈窓等七人各二人、從五位上平群朝臣廣道爲土左守、○三月辛未、施賜宿侍僧及五位已上被衣、○癸酉、賜少僧都傳燈大法師位勝虞度二人、○乙亥、播磨國夷第二等去返公嶋子賜姓浦上臣、○丙子、賜律師大法師位均寵、脩行滿位僧勤蓋各度二人、脩行滿位僧常江、壽全各一人、○己卯、賜傳燈法師位勤操度二人、脩行滿位僧壽全一人、○癸未、從五位下多治比眞人八千足授從五位上、○丙戌、正六位上下毛野公小建授外從五位下、○己丑、免從四位下吉備朝臣泉、幷五百枝王、藤原朝臣淨岡、藤原朝臣雄依、山上船主等罪入京、○壬辰、免伊豆國

坐して五百枝王は伊豫に雄依は隱岐に流されたり
○山上朝臣船主、船主河繼の罪に坐し左降せられて隱伎介となる事續紀延曆元年閏正月條に見ゆ
○氷上眞人河繼罪、河繼罪ありて伊豆國三嶋に配せらるゝ事續紀延曆元年閏正月丁酉に課役を免ぜらるゝ事同十五年十二月丙戌に從五位下に復したる事大同元年三月庚辰條に夫々見ゆ
○玄賓、大和興福寺の僧元亨釋書卷九に傳あり
○灌頂法、秘藏記に灌頂義灌者諸佛大悲頂者上之義菩薩初地乃至等覺究竟灑佛果時諸佛以大悲水灌頂即自行圓滿得證佛果是頂之義也とあり法水を受者の頭頂に灌ぎて以て付法の信とするものなり傳法結緣の二種あり
○凱澤、字書に謂和樂之恩澤也とあり
○令彼改過、過字は類史に據て補ふ
○猶流合移鄕、流字は類史に據て補ふ移鄕とは流刑の類にて本鄕を去て他に移らしむるを云賊盜律

流人氷上眞人河繼罪、遣使伯耆國、請玄賓法師、○（廿七）丙申、於殿上行灌頂法、是日詔曰、解網泣辜、哲王嘉訓、滌瑕蕩穢、列聖通規、朕君臨區宇、子育黔黎、念彼流移久陷刑憲、情深惻隱、無忘寢興、思播凱澤、令彼改過、且其延曆廿四年三月以前、犯謀反大逆、及自餘緣犯、已配流及移鄕者、不論道俗、悉赦除之、若身先亡、恩渙不逮者、原其妻子、但惡逆、造畜蠱毒、殺人、會赦猶流合移鄕之色、及犯盜者、不在赦限、普告遐邇、知朕意焉、○夏四月（庚子朔）（二）辛丑、授散位從六位上江沼臣小並外從五位下、○（三）壬寅、賜侍醫等衣幷絁布有差、○（四）癸卯、勅、如聞、貢調脚夫、在路留滯、或飢橫斃者衆、良由路次國郡不存法令、隨便村里無意撫養也、自今以後、如有此色、當界官司、據法科處、郡國官司、存情相救、其醫療供給、一依法令、○（五）甲辰、令諸國、奉爲崇道天皇（早良）建小倉、納正稅卌束、幷預國忌及奉幣之列、謝怨靈也、○（六）乙巳、天皇召皇太子已下參議已上、託以後事、○（十）己酉、使近衛大將藤原朝臣內麻呂、中將藤原朝臣繩上等、賜兵仗殿鎰於東宮、遣使奉幣帛於賀茂

に凡殺レ人應レ死會レ赦免者移鄕と見ゆ
(四月)國忌、儀制令に謂下先皇崩日依二別式一合二廢務一者上とあり
○奉幣、歲終荷前の奉幣を云
○土左國云々加置傳馬、土左國の驛は兵部式に頭驛五椅丹治川と見ゆ此驛を置かるゝ各郡に傳馬を加置くべしとなり
○殿鎰、抄居處部門戶具に鑰四聲字苑云鑰(音藥字亦作レ䦆今案俗人印鑰之處用二鎰字一非也云々)關具也楊氏漢語抄云鑰匙(門乃加岐)箋注に按龍龕手鑑云鑰正鎰俗蓋鑰作レ鎰者後世諧聲字也云々印鑰作レ鎰云々俗字耳と云り殿鎰とは宮殿の鎰を云
(五月)物部鏡連、鏡は香美にて土佐の地名物部氏にて香美郡に住めり之に據て名づく
(六月)對馬嶋下縣郡、下文に阿禮村に到るとあり
○田浦、續紀寶龜七年閏八月紀に松浦郡合蠶田浦と見ゆ今福江嶋久賀嶋の間に田之浦瀨戶の名存す

神社、○庚戌、任改葬崇道天皇司、外從五位下豐山忌寸眞足爲主殿助、○五月己巳朔、賜侍從及侍醫等衣、○辛未、授從五位上藤原朝臣上子正五位下、○戊寅、授土左國香美郡少領外從六位上物部鏡連家主爵二級、以撫育有方、公勤匪怠也、○己卯、加山城、大和、河內、攝津等四國、史生一員、○是日遣僧行傳燈法師位聽福於紀伊國伊都郡、立三重塔、爲聖躬平善也、○甲午、甲斐、越中、石見三國飢、遣使賑給、○六月乙巳、遣唐使第一船、到泊對馬嶋下縣郡、大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上奏言、臣葛野麻呂等、去年七月六日、發從肥前國松浦郡田浦、四船入海、七日戌剋、第三第四兩船、火信不應、出入死生之間、掣曳波濤之上、都卅四箇日、八月十日、到福州長溪縣赤岸鎭已南海口、鎭將杜寧縣令胡延沂等相迎、語云、當州刺史柳冕、緣病去任、新除刺史未來、國家大平者、其向州之路、山谷嶮隘、擔行不穩、因廻船向州、十月三日到州、新除觀察使兼刺史閻濟美處分、且奏、且放廿三人入京、十一月三日、臣等發赴上都、此州去京七千五百廿里、星發星宿、晨昏兼行、十二月廿一日、到上都長

即ち此地なるべし
○福州長溪縣赤岸鎭、唐書地理志江南道に福州長樂郡長溪縣あり今の福建省閩江縣の地なり
○鎭將、原本時の一字に作る西本及類史に據て改む
○星發星宿、夙に出發し夜に入て宿するを云
○上都長樂驛、上都は長安なり洛陽を東都或は東京と云に對して云唐書地理志に上都初曰京城天寶元年曰西京云々肅宗元年曰上都とあり長樂は長安志に長樂驛在萬年縣(今併長安縣)東十五里長樂坡下とあり
○飛龍家細馬、細馬は良馬なり飛龍家は詳ならざれど唐書百官志に武后萬歲通天元年置仗內六閑一曰飛龍、また李白の詩に勅賜飛龍內廐馬等あるを云か
○明州、唐書地理志江南道に明州餘姚郡と見ゆ今の浙江省鄞縣なり
○長安城、陝西省長安縣、唐の都なり
○宣化殿、長安志に見えず宣政殿の誤にあらざるか通鑑胡三省注に唐時四

樂驛宿、廿三日、內使趙忠、將飛龍家細馬廿三匹迎來、兼持酒脯宣慰、駕即入京城、於外宅安置供給、特有監使、高品劉昴、勾當使院、第二船判官菅原朝臣清公等廿七人、去九月一日、從明州入京、十一月十五日、到長安城、於同宅相待、廿四日、國信別貢等物、附監使劉昴、進於天子、劉昴歸來、宣勅云、卿等遠慕朝貢、所奉進物、極是精好、朕殊喜歡、時寒、卿等好在、廿五日、於宣化殿禮見、天子不衙、同日於麟德殿對見、所請並允、即於內裏設宴、官賞有差、別有中使、於使院設宴、酣飮終日、中使不絕、頻有優厚、廿一年正月元日、於含元殿朝賀、二日、天子不豫、廿三日、天子雍王适崩、春秋六十四、廿八日、臣等於承天門立仗、始著素衣冠、是日太子即皇帝位、諒闇之中、不堪萬機、皇太后王氏、臨朝稱制、臣等三日之內、於使院朝夕擧哀、其諸蕃三日、自餘廿七日而後就吉、二月十日、監使高品宋惟澄、領答信物來、兼賜使人告身、宣勅云、卿等銜本國王命、遠來朝貢、遭國家喪事、須緩々將息歸鄉、緣卿等頻奏早歸、因玆賜纏頭物、兼設宴、宜知之、却廻本鄉、傳此國喪、擬欲相見、緣此重喪、不得宜之、好去好去者、事畢首

夷入朝貢者皆引二見於宣政殿一とあり
○麟德殿、長安志に（東內大明宮）仙居殿西北有二麟德殿一云々凡內宴多在二於此殿一と見ゆ
○含元殿、長安志に丹鳳門內當中正殿曰二含元殿一云々と見ゆ
○天子雍王适、德宗なり唐書に貞元二十一年正月癸巳皇帝崩二于會寧殿一年六十四とあり貞元廿一年は延曆廿四年に當る
○函天門、承天門の誤ならむか長安志に西內正殿南承天門云々とあり
○太子、順宗なり
○皇太后王氏、唐書に順宗母曰二昭德皇后王氏一とあり
○告身、唐書選擧志に主者受レ旨而奉行焉謂二之奏受一視品及流外則判補皆給以レ符謂二之告身一とあり今の辭令なり
○緩々將息、將息は字書に將養休息也とあり緩々と養生休息して後歸鄕すべしとなり
○纒頭物、通鑑胡三省注に舊俗賞二歌舞人一以二錦綵一置二之頭上一謂二之纒頭一とあり、卽かづけものな

途、勅令內使王國文監送、至二明州一發遣、三月廿九日、到二越州永寧驛、越州
卽觀察府也、監使王國文、於二驛舘一喚二臣等一、附二勅書函一、便還二上都一、越州更差
レ使監送、至二管內明州一發遣、四月一日、先レ是去年十一月、爲レ廻二船明州一、留二錄
事山田大庭等一、從二去二月五日一發二福州一、海行五十六日、此日到來、三日、到二
明州郭下一、於二寺裏一安置、五月十八日、於二州下鄮縣一、兩船解レ纜、六月五日、臣
船到二對馬嶋下縣郡阿禮村一、其唐消息、今天子、諱誦、大行皇帝之男只一
人而已、春秋卌五、有二卅餘男女一、皇太子廣陵王純、年廿八、皇太后王氏、今
上之母、大行皇帝之后也、年號貞元廿一年、當二延曆廿四年一、淄青道節度
使青州刺史李師古、（正己孫納之男）養二兵馬五十萬一、朝庭以二國喪一告二于諸道節度使一、
入二青州界一、師古拒而不レ入、□兵十萬以レ弔二國喪一爲レ名、自襲二鄭州一、諸州勠レ力、
逆戰相殺、卽爲レ宣二慰師古一、差二中使高品臣希倩一發遣、又蔡州節度使吳少
誠、多養二甲兵一、竊挾二窺窬一、又去貞元十九年遣二龍武將軍薛審一和二親吐蕃一、到
則拘□、不レ得二復命一、審歎レ之云、所二以來和一者、欲レ嫁二公主一也、吐蕃卽令二審歸娶一、
天子嗔レ之曰、嫁娶者、非二朕所一レ知、宜二更廻允前旨一、若事不レ遂、不レ得二入來一、審還

到吐蕃界、拒而不入、在於今日、猶往兩界頭、去年十二月、吐蕃使等歸國、尋彼來由、在娶公主、天子嗔之不聽、故不會賀正也、其吐蕃在長安西北、數興兵侵中國、今長安城、去吐蕃界五百里、內疑節度、外嫌吐蕃、京師騷動、無蹔休息、〇丁未、近江、丹波、丹後、但馬、播磨、美作、備前、備後、紀伊、阿波、伊豫等十一國、停進彩帛、依舊貢絹、〇辛亥、正六位上難破連廣成、若江造家繼授外從五位下、〇癸丑、伊賀國飢、遣使賑給、〇甲寅、遣唐使第二船判官正六位上菅原朝臣清公、來到肥前國松浦郡鹿嶋、附驛上奏、事多不載、〇丙辰、授從五位下紀朝臣廣濱從五位上、正六位上犬上朝臣望成外從五位下、〇庚申、近衞中將從三位勳二等坂上大宿禰田村麻呂爲參議、〇辛酉、傳燈大法師位常騰爲律師、

り
〇越州永寧驛、越州は唐書地理志に江南道越州會稽郡(中)都督府とあり下文の觀察府は都督府の意なるべし永寧驛は詳ならず
〇觀察府、事物紀原に唐明皇開元二年置十道按察採訪處置使、肅宗改曰觀察處置、唐書方鎭表に至德元載置觀察使とあり之に因りて觀察府と稱せしなるべし
〇便還上都、原本便を使に作る西本に據て改む
〇州下鄖縣、唐書地理志明州の管縣に鄮縣あり鄖は鄮の訛ならむか
〇阿禮村、今下縣郡佐須村字阿連の地
〇淄靑道節度使、河南道淄州靑州以下の數州を有せる節度使なり
〇李師古、唐書卷二百十三に傳あり
〇靑州、唐書地理志に河南道靑州北海郡とあり今の山東省昌樂縣なり
〇鄭州、同志に河南道鄭州滎陽郡とあり今の河南省鄭縣
〇中使、宮廷の使
〇蔡州、地理志に河南道

蔡州汝南郡とあり今の河南省汝南縣なり
○吐蕃、原本吐を咄に作る西本及類史に據て改む下同じ
○松浦郡鹿嶋、血鹿嶋の血字脫ちたるか或はシカツ嶋と訓むべく色都嶋を指せるか、值嘉嶋及色都嶋は天平十二年十一月紀(續紀上二九三頁)に見ゆ
○常騰、大和大安寺の僧弘仁六年九月辛未紀及元亨釋書卷二に傳見ゆ

日本後紀卷第十二

日本後紀卷第十三

起延暦廿四年七月盡大同元年五月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

皇統彌照天皇　桓武天皇

秋七月戊辰朔、遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上節刀。○(九)丙子、尾張國智多郡地十三町賜中納言從三位藤原朝臣內麻呂。○(十四)辛巳、葛野麻呂等上唐國答信物。○(十五)壬午、賜傳燈大法師位常騰、安置玄賓等卅七人、并三品美努摩內親王度五十九人、每人三人已下一人已上。○(十六)癸未、大宰府言、遣唐使第三船、今月四日、發自肥前國松浦郡庇良(ヒラ)嶋、指遠値(アチカ)嘉嶋、忽遭南風、漂著孤嶋、船居巖間、淦水盈溢、判官正六位上三棟朝臣今嗣等脫身就岸、官私雜物、不遑下收、射手數人、留在船上、纜絕船流、不知何去者、勅、使命以國信爲重、船物須人力乃全、而今不顧公途、偏求苟存、泛船無人、何以能濟、奉使之道、豈其然乎、宜加科責、以峻懲沮。○(十七)甲申、地

【延暦廿四年】上節刀、葛野麻呂は廿三年三月節刀を授けられて出發し廿四年六月歸朝此に之を返上す

○常騰、六月辛酉紀に注す

○玄賓、考異に賓舊脱據類聚國史補さあり此人の事三月壬辰紀に注す

○美努摩内親王、紹運錄に彌奴麿に作る光仁天皇第三皇女母嶋姫縣主毛人女なり

○庇良嶋、抄に肥前國松浦郡庇羅郷、兵部式に肥前國庇羅嶋牧あり卽今の平戸嶋なり

○遠値嘉嶋、今の五嶋列嶋中の福江嶋なるべし天平十二年十一月紀(續紀上二九五頁)に注す

○淦水盈溢、淦は玉篇に水入船中也とあり船中に水溢るゝを云

〇珠洲郡、今も同じく珠洲郡と稱す
〇不通水火、疾疫の傳染を恐れて水をも火をも與へざるを云
〇匍匐、毛詩邶風谷風章に凡民有喪匍匐救之とあるに據れり匍匐は手足並行狀急遽之甚也と注す他事を捨て急ぎて之を救ふ意なり
〇贈從四位下、原本贈を賜に作る紀略及下文に據て改む
〇甘南備眞人信影、信影の事紀略に之を清公の下に接叙す
〇後田原、桓武天皇御父光仁天皇山陵なり
〇崇道天皇、早良親王、天皇御同母弟延暦四年廢太子
（八月）相樂郡、抄國郡部に相樂（佐賀良加）とあり今サガラと呼べり
〇白田、畠を云抄天地部に白田搜神記云江南之白田種豆（白田一曰陸田和名波多介或以白田二字作畠字訛也）とあり
〇葛井親王、紹運錄に桓武天皇皇子母坂上春子大納言田村丸女とあり源平盛衰記に門居と書けり

震、〇（二十）丁亥、常陸國人生部連廣成特授從八位下、以出私物、屢救貧民也、
〇（廿二）己丑、能登國言、船一艘漂著珠洲郡、遣使撿船上雜物、〇（廿四）辛卯、賜親
王已下參議已上及內侍唐國彩帛各有差、〇（廿五）壬辰、勅、如聞、疫癘之時、民
庶相憚、不通水火、存心救療、何有死亡、父子至親、畏忌無近、隣里疎族、
更復何言、亡者衆多、事在於此、宜喩所司、務存匍匐、若不遵改、隨即科處、
是日遣唐大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂授從三位、判官正六位上
菅原朝臣清公從五位下、故副使從五位上石川朝臣道益贈從四位下、
判官正六位上甘南備眞人信影從五位下、道益者、從三位中納言石足
之孫、從五位上人成之子也、略涉書記、頗有才幹、美於風儀、卒於大唐明
州、朝廷惜之、卒時年卅三、〇（廿六）癸巳、遣使奉幣於畿內名神、祈雨也、〇（廿七）甲午、
獻唐國物于山科（天智）後田原（光仁）崇道天皇（早良）三陵、〇八月丁酉朔、山城國相樂郡
白田十三町賜葛井親王、〇（七）癸卯、從五位下川原女王、上道朝臣千若授
正五位下、正六位上安太女王、賀茂朝臣□女、從六位上縣犬養宿禰淨
濱、丈尼或圖從五位下、正六位下小槻連濱名、服部三船、凡直古刀自、從

〇丈尼或圖、西本圖字明白ならず
〇古刀自、考異に古舊作右據下文訂とあり
〇入唐求法僧最澄、延曆廿三年七月出帆廿五年五月長門に著く卽ち上京持來れる天台法門幷眞言法門道具等を奉進す（叡山大師傳に詳なり）
〇肆闕、考異に闕舊作開據類史訂とあり
〇供奉師、內道場に供奉する十禪師を云
〇豐山忌寸、詳ならず
〇林朝臣、錄左京皇別に石川朝臣同祖武內宿禰之後也とあり
〇中篠忌寸、詳ならず
〇壹志濃王、十一月丁丑紀に傳あり
〇太白、金星を云
〇鎭星、土星を云
〇紀朝臣眞人卒、眞は原本直に作る系圖に據て改む眞人は寶龜十一年正月癸酉紀に始て見え大學頭右京亮相摸守征東副使等を歷任す
〇年五十九、年字は西本及類史に據て補ふ
（九月）賜親王以上衣、上恐くは下の誤なるべし
〇壬申、類史に此下に曲

六位上朝野宿禰宅成、從六位下船連志賀、從七位上勝部造眞上、因幡國造苗取、正八位上平群黑虫、從八位下田邊史東女外從五位下、〇（九）乙巳、地震、是日請入唐求法僧最澄於殿上、悔過讀經、最澄獻唐國佛像、〇（十一）丁未、傳燈法師位肆闕、傳燈滿位僧景錺補供奉師、〇（十六）壬子、賜正四位上藤原朝臣產子度二人、故入唐副使贈從四位下石川朝臣道益一人、〇（二十）丙辰、從五位下菅原朝臣清公安藝國賀茂郡地五十町賜仲野親王、〇（廿一）丁巳、攝津國人外從五位下豐山忌寸眞足附于右京、近江國人正六位上林朝臣茂繼、肥後國人從六位下中篠忌寸豐次等附于左京、〇（廿三）己未、大納言正三位壹志濃王抗表請骸骨、優詔不許、〇（廿七）癸亥、太白與鎭星見東方、常陸守從四位下紀朝臣眞人卒、眞人者、中納言從三位麻路之孫、正五位下廣名之子也、爲人溫潤、頗有文藻、歷官內外、無有毀譽、終以天命、卒時年五十九、〇九月（丙寅朔）（五）庚午、曲宴、賜親王以上衣、〇（六）辛未、施禪師等衣、〇（七）壬申、賜五位已上綿有差、〇（八）癸酉、左京人永嗣王等賜姓河上眞人、〇（十七）壬午、令僧最澄於殿上行毗盧舍那法、〇（廿四）己丑、傳燈

宴の二字あり
○河上眞人、姓氏錄及其他にも見えず
○越前國小虫神、神名式に越前國丹生郡小虫神社とあり
○（十月）千葉國造、考異に造舊脫據下文補とあり國造本紀に見えず千葉は下總國千葉郡千葉鄕あり是なるべし
○大私部、錄右京皇別に開化天皇皇子彥坐命之後也とありオホキサイは大后にて皇后なり私を充てたるは漢書張放傳注に私官皇后之官とあるに據れり

大法師位常騰爲少僧都、從五位上百濟王聰哲爲主計頭、從四位下橘朝臣安麻呂爲常陸守、從五位下大伴宿禰眞城麻呂爲能登守、○壬辰、（十七）奉授越前國小虫神從五位下、出雲國造外正六位上出雲臣門起授外從五位下、○冬十月丙申朔丁酉、（二）野鳥飛入殿中、○己亥、（四）從五位上藤原朝臣繼彥爲左中辨、讃岐守如故、從五位下多治比眞人今麻呂爲式部權少輔、從五位下安倍朝臣犬養爲大藏少輔、從五位上和氣朝臣廣世爲美作守、式部少輔大學頭如故、從四位下橘朝臣安麻呂爲備前守、從五位下巨勢朝臣諸成爲介、從五位下讃岐公千繼爲權介、○癸卯、（八）正六位上笠臣田作、千葉國造大私部直善人授外從五位下、○甲辰、（九）宴樂終日、賜五位已上錢有差、○丙午、（十一）從四位下勳三等三諸朝臣大原爲備前守、從四位下橘朝臣安麻呂爲播磨守、○甲寅、（十九）授入唐留學生无位粟田朝臣飽田麻呂正六位上、○乙卯、（二十）神祇伯從四位上多治比眞人繼兒爲兼右兵衞督、○戊午、（廿三）播磨國俘囚吉彌侯部兼麻呂、吉彌侯部色雄等十人配流於多褹嶋、以不改野心、屢違朝憲也、○庚申、（廿五）佐渡國人道公全成配伊豆

〇官鵜、古は供御の鮎を捕らしむる爲に官に於て多くの鵜を飼はしめられたり之を云鵜養の事は神武天皇の御製にも既に見えたり
〇鳥取驛、其地詳ならざれど佐倉町と臼井町との間に羽鳥あり是ならむかと云
〇山方驛、埴生郡(今長生郡に入る)山方郷にあり其地詳ならざれど成田町の附近なるべし
〇眞敷荒海等驛、眞敷は今香取郡大須賀村に大字南敷あり此地なるべし荒海は印播郡久住村大字荒海是かと云
(十一月)頃年之間云々、三代格卷十七に延暦廿四年十一月一日太政官符官人等連署事と見ゆ
〇若情懷、三代格に若の上疑字あり
〇不慝、原本慝を愢に作る三代格に據て改む
〇豈合得然、三代格豈下に夫字あり
〇榎撫、桑名郡にあり兵部式に榎撫驛驛馬十疋と見ゆ桑名驛の古名なるべしと云
〇朝明、朝明郡にあり兵

國、以盜官鵜也、廢下總國印播郡鳥取驛、埴生郡山方驛、香取郡眞敷、荒海等驛、以不要也、授正六位上安倍朝臣眞勝從五位下、奉爲崇道(早良)天皇寫一切經、其書生隨功敘位及得度、○癸亥、於前殿讀經三日、○十一月丙寅朔、制、頃年之間、諸司諸國所進解文、官人等名下、或多不署、若情懷不穩、忍而默爾、爲當執見各殊、上下不慝歟、縱使託事應被勘問、則稱某甲不署解文、既備員品、豈合得然、自今以後、宜令盡署、其緣病及假使等類、隨即顯注、不得令名下空、有所疑涉、○丁卯、授唐人正六位上清河忌寸斯麻呂外從五位下、○己巳、山城國紀伊郡地一町賜典侍從四位下葛井宿禰廣岐、授無位紀朝臣弟魚正五位上、無位石川朝臣伊勢子從五位下、○壬申、先是伊豆國掾正六位上山田宿禰豐濱奉使入京、至伊勢國榎撫朝明二驛之間、就村求湯、有人與之、更復煖酒相飲、其後嘔吐、至伊賀國堺、豐濱從者死、豐濱情知毒酒、勤加療治、至京遂死、遣使左兵衛少志從六位下紀朝臣濱公勘問、无得、隱岐國人外從八位上服部松守、釆女外從五位下服部美船女等三人賜姓臣、○丁丑、大納

部式に朝明驛驛馬十疋傳馬五疋と見ゆ今三重郡朝日村の地なるべしと云榎撫と朝明とは相距ること一里許なり
○勘問、原本問を之に作る西本に據て改む
○壹志濃王薨、補任延暦六年の下にも傳見ゆ延暦十三年十月中納言に、十七年八月大納言に任ず
○大住郡、今中郡に入る
○淨村宿禰、續紀寶龜九年十二月庚寅玄蕃頭袁晉卿に淸村宿禰の姓を賜ふと見え姓氏錄にも載す
○袁常照、原本袁を表に作る類史に據て改む
○延暦十八年三月廿二日格、詳ならず
○徵章、徵字は徽に作るべきか
○春科宿禰、姓氏錄には見えず
○江頭、大江の渡邊なり國郡沿革考に攝津職は初め西成郡雄伴鄕に在り後江頭に遷す今天滿橋を古國府渡といひ終に其地を渡邊と稱すといふ時は江頭は此なること必せりと云
○坂本親王、桓武天皇皇子四品治部卿母川上貞奴

言正三位、兼彈正尹壹志濃王薨、詔贈從二位、壹志濃者、田原（施基）天皇之孫、湯原親王之第二子也、質性矜然、不護禮度、杯酌之間、善於言咲、每侍酣暢、對帝道疇昔、帝安之、薨時年七十三、○戊寅（十三）、停陸奧國部內海道諸郡傳馬、以不要也、○庚辰（十五）、曲宴、賜次侍從已上衣、相摸國大住郡田二町賜從四位下百濟王教法、○甲申（十九）、左京人正七位下淨村宿禰源言、父賜綠袁常照、以去天平寶字四年奉使入朝、幸沐恩渥、遂爲皇民、其後不幸、永背聖世、源等早爲孤露、无復所恃、外祖父故從五位上淨村宿禰晉卿養而爲子、依去延曆十八年三月廿二日格、首露已訖、儻有天恩、无追位記、自天祐之、欣幸何言、但賜姓正物、國之徵章、伏請改姓名、爲春科宿禰道直、許之、○乙酉（二十）、遷攝津國治於江頭、許之、○戊子（廿三）、坂本親王於殿上冠、賜參議從三位坂上大宿禰田村麻呂、大藏卿從四位上藤原朝臣園人、少納言從五位下多朝臣入鹿等衣被、○甲午（廿九）、攝津國人外從五位下出雲連廣貞等附于左京、○十二月（丙申朔）庚子（五）、地震、○壬寅（七）、公卿奏議曰、伏奉綸旨、營造未已、黎民或弊、念彼勤勞、事須矜恤、加以時遭灾疫、頗損農桑、今

（十二月）令得存濟、令字類史に據て補ふ
○卜部之委、考異に委舊作レ妾據二類史一訂とあり字書に委積牢米薪芻之總名少曰レ委多曰レ積とあり神祇官の卜部の廩米を運び薪芻を採る男女を云るか
○斷丁、賦役令に凡仕丁者毎二五十戸一二人以二一人一充二斷丁一、義解に謂斷猶レ使也言給二使於汲炊一、字彙に斷與レ斷同史張耳傳斷養卒韋昭曰折レ薪爲レ斷炊烹爲レ養とあり
○封祖、類史祖を租に作る古は相通ず
○或國三箇日、類史三の上に役字あり考異に箇舊脫據二類史一補ふと云
○神石、今も神石郡と稱す
○奴可三上惠蘇、三郡共に比婆郡に入る
○甲努、今甲奴に作る
○世羅、今も同じ
○三谿三次、二郡を合せて雙三郡と稱す

雖レ有レ年、未レ聞レ復レ業、宜二量レ事優矜、令下得二存濟一者、臣等商量、伏望所二點加一仕丁一千二百八十一人、依レ數停却、又衞門府衞士四百人、減二七十人一、左右衞士府各六百人、毎減二一百人一、隼人男女各卌人、毎減二廿人一、雅樂歌女五十人、減二卅人一、仕女一百十人、減二廿八人一、停二卜部之委男女斷丁等粮一、又諸家封祖、蹔停二舂米一、交二易輕貨一、又諸國貢調脚夫、或國役二五箇日一、或國三箇日、役限不レ均、勞逸各殊、須下共役二二日一、以同中苦樂上、又備後國神石、奴可、三上、惠蘇、甲努、世羅、三谿、三次等八郡調糸、相二換鍬鐵一、又伊賀、伊勢、尾張、近江、美濃、若狹、越前、越中、丹波、丹後、但馬、因幡、播磨、美作、備前、備中、備後、紀伊、阿波、讃岐、伊豫等國、殊免二當年庸一、許レ之。是日中納言近衞大將從三位藤原朝臣內麻呂侍二殿上一、有レ勅、令下參議右衞士督從四位下藤原朝臣緖嗣、與二參議左大辨正四位下菅野朝臣眞道一、相中論天下德政上、于時緖嗣議云、方今天下所レ苦、軍事與二造作一也、停二此兩事一、百姓安レ之、眞道確二執異議一、不二肯聽一焉、帝善二緖嗣議一、卽從二停廢一、有識聞レ之、莫レ不二感歎一。○[八]癸卯、免二淡路國浪人今年調庸一。○[十]乙巳、廢二造宮職一。○[十四]己酉、施二賜僧幷宿侍五位以上大袍一、

從五位下文室眞人長谷爲周防守、○庚戌、從五位下和朝臣建男爲近江介、從五位下藤原朝臣友人爲播磨權介、○甲寅、從五位下岳田王爲甲斐守、外從五位下紀朝臣廣河爲阿波介、○乙卯、甲斐國巨麻郡弓削社預官社、以有靈驗也、河内國交野郡白田二町賜仲野親王、○丁巳、勅、大和國畝火、香山、耳梨等山、百姓任意伐損、國吏寛容、不加禁制、自今以後、莫令更然、○戊午、山城國乙訓郡白田一町賜大判事從五位下讃岐公千繼、○庚申、僧綱言、延暦年中改諸國國師曰講師、一任之後、不聽輙替、講説之外、莫預他事、欲能弘道教以利人也、今聞、或身期老死、情無知足、既倦講席、何堪誨導、遂使汚法墮罪、背師弃資、加以當國司等、撿掌伽藍、諸寺綱維、趍走府廳、此非道俗異形、魚鳥殊性之意、伏望簡大智而任講師、擧小識而補讀師、限以六年爲期、其寺委寄講師、然則用人之策永存、媚俗之辱自息、勅、其講師年限、一依來請、但淺學之輩、未練戒律、年少之人、時聞違犯、宜簡年卅五已上心行已定、始終不易者補之、簡才用讓、申官經奏等、一同前格、若有自事衒賣、妄求俗擧者、永從擯出、以懲後

○弓削社、神名式に甲斐國八代郡弓削神社とあり市川郷大門に祀る倭名抄には市川郷は巨摩郡に收む八代巨摩兩郡の境に近き地にあるを以て時代に依て或は甲に屬し或は乙に屬せしなるべし今西八代郡に屬す

○仲野親王、上に見ゆ

○畝火香山耳梨等山、畝火山は高市郡香山耳梨山は十市郡（今磯城郡に入る）にあり三山鼎立す之を大和の三山と稱す

○僧綱言云々、三代格卷三に延暦廿四年十二月廿五日太政官符として載す

○延暦年中云々、國師を改て講師とせしは延暦十四年八月十三日なり

○限以六年、以字は西本及格に據て補ふ

○一同前格、三代格に格を符に作る

輩、如綱維受囑、亦撰情論之、其讀師者、依舊用之、又部內諸寺者、講師國司、相共撿挍、不得獨恣、

大同元年（丙戌）春正月丙寅朔、廢朝、聖躬不豫也、宴次侍從已上於前殿、賜衣、

五 ○庚午、右京人外從五位下堅部使主廣人賜姓豐宗宿禰、賜大法師永忠度二人、僧最澄三人、治部卿四品葛原親王二人、七 ○壬申、勅、永停五位以上進裝馬、十七 ○壬午、射、天子不御、左京人正七位上阿倍小殿朝臣眞直、從五位下阿倍小殿朝臣眞出等賜姓阿倍朝臣、廿六 ○辛卯、勅、攘災植福、佛教最勝、誘善利生、無如斯道、但夫諸佛所以出現於世、欲令一切衆生悟一如之理、然衆生之機、或利或鈍、故如來之說、有頓有漸、所有經論、所趣不同、開門雖異、遂期菩提、譬猶大醫隨病與藥、設方萬殊、共期濟命、今欲興隆佛法、利樂群生、凡此諸業、廢一不可、宜華嚴業二人、天台業二人、律業二人、三論業三人、法相業三人、分業勸催、共令競學、仍須各依本業疏、讀法華金光明二部經、漢音及訓、經論之中、問大義十條、通五以上者、乃聽得度、縱如二業中无及第者、闕置其分、當年勿度、省寮僧綱、相對案記、

○綱維、同に僧綱に作る
○撰情、原本撰を擇に作る三代格に據て改む
【大同元年】賜衣、類史衣を被に作る
○堅部使主、養老元年二月紀（續紀上一二四頁）に堅部使主石前見ゆ參看すべし
○阿倍小殿朝臣、天平神護二年三月戊午秦毗登淨足等十一人賜姓阿倍小殿朝臣と見ゆ（續紀下一三一頁）此に至て本氏に復せしなり此後國史に見えず
○攘災植福云々、三代格卷二に延暦廿五年正月廿六日太政官符應分定年料度者數幷學業事とあり植は三代格に殖に作る
○最勝、三代格に最を尤に作る
○有頓有漸、頓漸の二教ありとなり其名傍倒經に出づ頓教は頓に悟を開くことを得る教、漸教は漸次に修業して後に證果を得る教なり
○利樂、類史三代格樂を益に作る
○華嚴業二人云々、三代格に華嚴業二人並令讀五教指歸綱目天台業二

人一人令レ讀二大毗盧舍那經一一人令レ讀二摩訶止觀一律業二人並令レ讀二梵網經若瑜伽聲聞地一三論業三人二人令レ讀二三論一一人令レ讀二成實論一法相業三人二人令レ讀二唯識論一一人令レ讀二倶舍論一とあり
○羯摩四分律鈔、聖教日錄に四分律藏六十卷姚秦佛陀耶舍共二佛念等一譯とあり
○立義、勅會論義の時論題に就て義を竪つる事を掌る故に亦竪（リフ）義とも云南北二京の僧臨時に之を勤め宣旨を以て補す
○複講、複は類史に復に作る複講は複師なるべし複師は講師の講述せし所を再び講じて義理を明にする役、華嚴宗の僧職なり
○莫聽任用、三代格莫を不に作る
○兵部大輔正五位上、考異に上舊作レ下據二上文一訂とあり

待レ有二其人一後年重度、遂不レ得レ令二彼此相奪廢二絕其業一若有二習レ義殊高一勿レ限二漢音一受戒之後、皆令下先必讀二誦二部戒本、諳案一卷、羯摩四分律鈔上更試二十二條一本業十條、戒律二條、通二七以上一者、依レ次差二任立義複講及諸國講師一雖レ通二本業一不レ習二戒律一者、莫レ聽二任用一自今以後、永爲二恒例一○癸巳、廿八從四位下藤原朝臣仲成爲二大和守一從五位上百濟王鏡仁爲二河內守一從五位下紀朝臣南麻呂爲レ介、兵部大輔正五位上藤原朝臣繼業爲二兼山城守一從四位下和朝臣入鹿麻呂爲二伊勢守一齋宮頭從五位下中臣丸朝臣豐國爲二兼介一從五位下藤原朝臣眞川爲二尾張守一從五位下菅原朝臣清公爲レ介、從五位下路眞人年繼爲二參河介一從五位下大枝朝臣菅麻呂爲二遠江守一從五位下大宅眞人繼成爲二駿河介一中納言從三位藤原朝臣內麻呂爲二兼武藏守一近衞大將如レ故、從五位下桑田眞人甘南備爲レ介、從五位上安曇宿禰廣吉爲二安房守一宮內大輔從五位上藤原朝臣道雄爲二兼上總守一從五位下石川朝臣道成爲レ介、右衞士佐從五位下田中朝臣八月麻呂爲二兼權介一外從五位下千葉國造大私部直善人爲二大掾一參議從三位

○常陸守、西本に越前守に作る下文に三嶋眞人名繼爲二越前守一とあれば原本に從ふべし

○貞嗣、考異に貞舊作レ眞據二上下文一訂とあり

紀朝臣勝長爲二兼下總守一、左兵衞督如レ故、從五位下藤原朝臣城主爲レ介、從四位下葛野王爲二常陸守一、主馬頭如レ故、左兵衞權佐從五位下安倍朝臣鎰成爲二兼權介一、大內記從五位下平群朝臣眞常爲二兼近江權介一、左衞士佐從五位下百濟王敎俊爲二兼美濃守一、從五位上坂本朝臣佐太氣麻呂爲二信濃介一、侍從從四位下大庭王爲二兼上野守一、正四位下三嶋眞人名繼爲二越前守一、從五位下和朝臣氏繼爲二越後守一、從五位下紀朝臣百繼爲レ介、近衞將監如レ故、左少辨從五位下藤原朝臣貞嗣爲二兼丹後守一、外從五位下山田造大庭爲レ介、參議右衞士督從四位下藤原朝臣緖嗣爲二兼但馬守一、從五位下佐伯宿禰淸岑爲レ介、內廐頭從五位下坂上大宿禰石津麻呂爲二兼因幡介一、從五位下作良王爲二伯耆守一、從五位下大中臣朝臣全成爲二出雲守一、從五位下安倍朝臣宅麻呂爲レ介、從五位下秋篠朝臣全繼爲二石見守一、從五位下藤原朝臣友人爲二播磨介一、中內記外從五位下出雲連廣貞爲二兼美作權掾一、從五位下藤原朝臣諸主爲二備中守一、外從五位下掃守宿禰弟足爲二安藝介一、從五位下紀朝臣國雄爲二讚岐介一、參議正四位下菅野

○承前出擧雜稻云々、此勅は三代格に見えず
○收半倍利、雜令に凡以稻粟出擧者云々不得過一倍其官半倍とあるを云
○延暦十四年、閏七月一日勅なり本紀及三代格卷十四弘仁元年九月廿三日官符中に出で末文に但陸奥出羽兩國不在此限と見ゆ
(二月)從四位下藤原朝臣大繼、考異に下舊作上據下文訂とあり

朝臣眞道爲兼大宰大貳、從五位下大野朝臣犬養爲肥前守、從五位下多治比眞人氏守爲介、從五位上高倉朝臣殿繼爲肥後守、從五位下小野朝臣木村爲豐前介、○甲午(廿九)、勅、承前出擧雜稻、收半倍利、法令恒規、不易之典、延暦十四年改率十束、利收其三、此欲民阜財用、俗期隆泰也、如聞、富豪之輩、競求多得、貧弊之家、倶苦不贍、吏或愚闇、治乖淸公、遂令百姓不免罄乏、倉廩徒致減損、革弊之途、於此爲切、加以收納官稻、不免死人、思彼孤遺、深以矜愍、自今以後、論定、公廨及雜色稻、出擧息利、收半倍利、死者負稻、依舊免除、○二月丙申(乙未朔 二)、外從五位下秦宿禰都伎麻呂爲少工、○丁酉(三)、停造宮職、併木工寮、事務繁多、因加史生六員、合前十二員、從四位下藤原朝臣大繼爲伊勢守、神祇伯從四位下和朝臣入鹿麻呂爲兼常陸守、○甲辰(十)、從五位上多治比眞人八千足爲少納言、從五位下安倍朝臣鷹野爲治部少輔、從五位下路眞人年繼爲兵部少輔、從五位下高澄眞人名守爲左京亮、從五位下大中臣朝臣諸人爲右京亮、從五位下佐伯宿禰鷹成爲參河介、外從五位下豐山忌寸眞足爲駿河介、從

○貞嗣、原本嗣を繼に作る上文考異の訂及補任に據て改む

五位下御長眞人仲繼爲伊豆守、從五位下大伴宿禰長村爲安房守、○（十三）丁未、勅、准令、大宰大貳是正五位上官、宜改爲從四位下官、○（十四）戊申、從五位下藤原朝臣貞嗣授從五位上、○（十五）己酉、正六位上下道朝臣繼成、安都宿禰豐永授外從五位下、○（十六）庚戌、參議正四位下藤原朝臣繩主爲左大辨、近衞中將如故、正五位下御長眞人廣岳爲左中辨、從五位上藤原朝臣貞嗣爲右中辨、丹後守如故、從五位下石川朝臣清直爲左少辨、從五位下多治比眞人今麻呂爲右少辨、從五位下文室眞人乙直爲左大舍人助、從五位下紀朝臣岡繼爲右大舍人助、參議正四位下藤原朝臣繩主爲陰陽頭、左大辨近衞中將如故、從五位上和氣朝臣廣世爲式部大輔、大學頭美作守如故、從五位下藤原朝臣永貞爲少輔、從五位下紀朝臣良門爲大學助、從五位下藤原朝臣綱繼爲治部少輔、從五位下大春日朝臣魚成爲玄蕃助、從五位下乙野王爲諸陵頭、從五位上藤原朝臣繼彥爲民部大輔、從五位下大伴宿禰久米主爲少輔、外從五位下日下部連得足爲主稅助、從四位下藤原朝臣仲成爲兵部大輔、從五位上藤

○戊午、午字原本缺く西本に據て補ふ戊午は廿四日なれば當に丁巳の下にあるべし

○八卿、八省の卿を云弟麻呂延曆十八年九月辛亥兼治部卿に任ぜらる故にいふ

原朝臣道雄爲刑部大輔、上總守如故、從五位下淡海朝臣貞直爲少輔、從四位上藤原朝臣園人爲宮內卿、相模守如故、從五位上石川朝臣吉備人爲大輔、從五位下和朝臣男成爲主殿頭、外從五位下出雲連廣貞爲典藥助、美作權掾如故、從五位下百濟王元勝爲鍛冶正、從五位上下毛野朝臣年繼爲官奴正、從五位下藤原朝臣千引爲彈正弼、從三位藤原朝臣葛野麻呂爲春宮大夫、從五位下大伴宿禰人益爲伊豆守、從五位下安倍朝臣鷹野爲下總介、從五位下葛井宿禰豐繼爲安藝介、從五位下小野朝臣眞野爲紀伊介、從五位下安倍朝臣兄雄爲中衛少將、從五位下平群朝臣加世麻呂爲隼人正、從四位下巨勢朝臣野足爲左衛士督、下野守如故、從五位下紀朝臣眞鴨爲權佐、從五位下紀朝臣八原爲主馬助、○（廿四）戊午、從五位下藤原朝臣城主爲典藥頭、○（十七）辛亥、皇太子（平城）奉獻、以贍皇后（高志）（淳和后也）誕皇孫（恒世）也、○（二十）甲寅、從三位行皇太子傅大伴宿禰弟麻呂上表言、臣幸遇昌運、見列貴班、如狗伏砌、于今卅有餘年、遂位昇三品、職參八卿、又東宮之傳、忝當此選、續門華族、聖恩難測、顧影捫躬、靦顏亦

甚、心謂策駑引搵、奉國損生、授命輸誠、破家甘死、而今年逮八十、進退不
便、自悲老猨、前却失據、疾侵力衰、素食責重、鐘鳴漏盡、骸骨願歸、漣石餘
輝、顧東天而匿影、就木危魄、仰北闕而奉辭、謹詣朝堂、陳乞以聞、遣中納
言近衞大將從三位藤原朝臣內麻呂就第宣勅、許之、令奉朝請、○（廿三）丁巳、
先是尙縫正四位下五百井女王爲令聖躬平善、造寫藥師佛像幷法華
經、至是功畢、因屈僧廿一人、設齋於前殿、百官供事、○（廿八）庚申、和泉國人陵
戶村主黑人賜姓村主、收故從五位下箭集宿禰虫麻呂功田五町、養
老六年以删定律令功所賜也、依無胤子收焉、○三月（乙丑朔）（十四）戊寅、右京人從八
位下物部首緩麻呂賜姓高狩忌寸、○（十五）己卯、上病大漸彌留、召五百枝王、
○（十六）庚辰、復五百枝王本位從四位上、氷上眞人川繼、藤原朝臣淸岡從五
位下、○（十七）辛巳、勅、緣延曆四年事配流之輩、先已放還、今有所思、不論存亡、
宜敍本位、復大伴宿禰家持從三位、藤原朝臣小依從四位下、大伴宿禰
繼人、紀朝臣白麻呂正五位上、大伴宿禰眞麻呂、大伴宿禰永主從五位
下、林宿禰稻麻呂外從五位下、奉爲崇道天皇、令諸國國分寺僧春秋二仲

○引搵、搵は字書に擿也或作擫と云
○今年逮八十、補任に七十五歳とあり
○老猨、毛詩豳風狼跋章の傳に老狼有胡進則躐其胡退則跲其尾進退有難云々とあるに據れり
○漣石餘輝、淮南子天文訓に日出于暘谷云々至于漣石是謂下舂、注に漣石西北山名言將欲冥下象悉舂故曰下舂とあり老年を以て日暮に喩へて斯く云るなり
○就木危魄、就木は左傳僖廿三年に見え注に言將死入木とあり木は棺槨を意味す、魄は字書に體也形也とあり死に瀕せる危き體の意なり
○宣勅許之、勅字は類史に據て補ふ
○廿一人、原本廿を卅に作る今類史及紀略に據る
○供事、原本事を奉に作る西本及類史に據て改む
（三月）物部首、錄攝津皇別河內神別及山城未定雜姓に見えその何れなるか詳ならず
○高狩忌寸、他に見えず
○大漸彌留、尙書顧命篇に嗚呼疾大漸惟幾病日臻

既に彌留とあるに出づ病勢日に進みて彌々甚しく危篤に遷するを云ふ
○復五百枝王本位、王は延暦十四年三月免罪入京此に至て本位に復す
○氷上眞人川繼、延暦元年閏正月謀叛して伊豆に流されしが同廿四年三月罪を免さる
○藤原朝臣淸岡、五百枝王と同時に免罪入京す
○延暦四年事、大伴繼人等藤原種繼を殺せるを云
○奉爲崇道天皇云々、此官符三代格卷三に見ゆ
○春秋二仲月云々、私記に或曰今以彼岸供佛蓋時此時とあり
○擗踊、孝經喪親章に孝子之喪親也云々擗踊哭泣哀以送之とあり禮記檀弓下の注に擗（同擗）拊心也踊躍とあり
○劍櫃、類史此下に奉東宮の三字あり
○故關、三關は延暦八年七月甲寅之を停廢す故に故關と云
○正四位下藤原朝臣繩主、考異に正舊作從下作上據上下文訂とあり
○散位從四位上、同に上舊作下據上下文訂

月別七日、讀金剛般若經、有頃天皇崩於正寢、春秋七十、皇太子哀號擗踊、迷而不起、參議從三位近衛中將坂上大宿禰田村麻呂、春宮大夫從三位藤原朝臣葛野麻呂、固請扶下殿、而遷於東廂、次璽幷劍櫃、近衛將監從五位下紀朝臣繩麻呂、從五位下多朝臣入鹿相副從之、遣使固守伊勢、美濃、越前三國故關、是日有血、灑東宮寢殿上、○十八壬午、中納言從三位藤原朝臣內麻呂、率參議正四位下藤原朝臣繩主、從四位下藤原朝臣緒嗣、從四位下秋篠朝臣安人、散位從四位上五百枝王等奉御斂、正三位藤原朝臣雄友、從三位藤原朝臣內麻呂、藤原朝臣葛野麻呂、從四位上五百枝王、正四位下藤原朝臣繩主、從四位上藤原朝臣園人、正五位下御長眞人廣岳、從五位上藤原朝臣繼彥、石川朝臣河主、從五位下池田朝臣春野、藤原朝臣永貞、紀朝臣咋麻呂、息長眞人家成、六位以下七人爲御裝束司、從三位藤原朝臣乙叡、紀朝臣勝長、從四位上吉備朝臣泉、從四位下藤原朝臣仲成、文室眞人八太麻呂、正五位下藤原朝臣黑麻呂、布勢朝臣尾張麻呂、從五位上淡海眞人福良麻呂、從五位

○御斂、斂は名義抄に斂の俗字とあり說文に斂は收也とありて御棺を云
○藤原朝臣黑麻呂、原本黑を里に作る類史に據て改む
○淡海眞人福良麻呂、原本海を路に作る西本及類史に據て改む西本良を長に作る
○直雄、類史直を眞に作る
○宇太野、山城名勝志に宇多野在仁和寺北十町許山間方十町餘悉原野也と見ゆ
○上著服、十七日桓武天皇崩御十九日皇太子素服を著給ふ喪葬令に凡天皇爲本服二等以上親喪服錫紵義解に依儀制令天皇爲二考妣一令條無文依式處分也錫紵者細布卽用淺墨染也とあり
○貲布、抄布帛部に貲布唐韻云帯（音與貲同）布名也唐式云貲布（楊氏漢語抄云佐與美乃沼能）とあり
○厚繒、字書に繒絲織物之總名古謂之帛漢謂之繒說文繒與帛互用と云
○百官初素服、考異に恐舊作初據類史一本訂と

下路眞人年繼、六位以下八人爲山作司、從五位下田口朝臣息繼、田中朝臣八月麻呂、六位以下六人爲養役夫司、從五位下安倍朝臣益成、外從五位下秦宿禰都伎麻呂、六位以下三人爲作方相司、正五位上大野朝臣直雄、從五位下百濟王教俊、六位以下三人爲作路司、發左右京五畿內近江丹波等國夫五千人、從三位藤原朝臣葛野麻呂、從四位上藤原朝臣園人、並爲權參議、〇十九癸未、以山城國葛野郡宇太野爲山陵地、是日上著服、服用遠江貲布、頭巾用皂厚繒、百官初素服、西北兩山有火自焚、〇二十甲申、有司言上、生年及重復日、並依故事停擧哀、不許、〇廿一乙酉、是夜月蝕之、〇廿二丙戌、日赤無光、兵庫夜鳴、是夜月蝕之、上謂公卿曰、奄丁酷疚、若寘湯火、今灾告頻見、責深在予、但崇德消灾、著在前修、內外群官、勤匡治道、以補不逮、其近仗之甲、盡從脫却、其諸國關津、宜停其守、公卿言、近仗著甲、及固守關津、往古恒制、不唯今日、報曰、大行天皇、聖德弘茂、海內清平、有何疑貳、喪服加甲、非所以枕伏草土、攀慕哀號者也、又固絕關津、令人擁滯、煩民害農、無深於此、宜下所司咸以開通、〇廿三丁亥、行大

て初を悤に改めたるは非なり西本及類史何れも初とあり是日著服百官も初めて素服を著けしなり悤にては通ぜず
○生年、生年の干支に當る日なり
○重復日、簠簋內傳二に復日重日有二箇日取者善事吉惡事凶とあり陰陽家の說行はれし以來擧哀を停むる例となりしなり故に有司之を言上せり
○醋孩、原本孩を移に作る西本に據て改む
○大井比叡小野栗栖野、大井山は葛野郡、比叡小野栗栖野等は愛宕郡なり（比叡山は近江國なれど其西麓は愛宕郡に屬す小野栗栖野は宇治郡にもあれど其にはあらず
○米粥、米の粥なり和名抄に唐韻云饘（加太賀由）厚粥也粥（之留加由）薄糜也とあり
○齋內親王歸京、親王歸京の式西宮記江家次第等に見ゆ
（四月）誄人、左方右方の別あること此文にて明なり
○奉誄曰、按に國風の誄詞を奏して御謚號を奉り

行天皇初七齋於京下諸寺、是日、日赤無光、大井、比叡、小野、栗栖野等山共燒、煙灰四滿、京中晝昏、上以爲、所定山陵地、近賀茂神、疑是神社致災火乎、卽決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今災異頻來、可不愼歟、卽自禱祈、火災立滅、○戊子（廿四）、新任國司、准公廨四分之一、聽借官稻、未及得分有遷代者、於後任塡納、○己丑（廿五）、先是命所司、每日進米粥、爲勿進餘味、是日群臣固請進膳、從之、○癸巳（廿九）、令大和伊賀兩國造行宮、爲齋內親王（布施）歸京也、○夏四月甲午朔、中納言正三位藤原朝臣雄友、率後誄人左方中納言從三位藤原朝臣內麻呂、參議從三位坂上大宿禰田村麻呂、侍從從四位下中臣王、侍從從四位下大庭王、參議從四位下藤原朝臣緒嗣、右方權中納言從三位藤原朝臣乙叡、參議從三位紀朝臣勝長、散位從四位上五百枝王、參議正四位下藤原朝臣繩主、從四位下秋篠朝臣安人等、奉誄曰、畏哉、平安宮爾御坐志天皇乃、天都日嗣乃御名事乎、恐牟恐母誄白、臣未、畏哉日本根子天皇乃天地乃共長久、日月乃共遠久、所白將去御謚止稱白久、日本根子皇統彌照尊止稱白久止、恐牟

恐母誄白、臣末、○庚子、葬於山城國紀伊郡柏原山陵、天皇、諱山部、天宗高紹（光仁）天皇之長子也、前史闕而不載、故具於此也、母曰高野太皇太后、龍潛之日、授從四位下、歷官侍從大學頭、寶龜元年授四品、二年拜中務卿、四年爲皇太子、天宗天皇、心倦萬機、慮深釋重、遂讓位于天皇、初有童謠曰、於保美野邇、多太仁武賀倍流、野倍能佐賀、伊太久那布美蘇、都知仁波阿利登毛、有識者以爲、天皇登祚之徵也、天皇性至孝、及天宗天皇崩、殆不勝喪、雖踰歲時、不肯釋服、天皇德度高峙、天姿嶷然、不好文華、遠照威德、自登宸極、勵心政治、內事興作、外攘夷狄、雖當年費、後世賴焉、○辛丑、行三七齋於山陵、○乙巳、從五位下大中臣朝臣眞廣爲神祇大副、從五位下藤原朝臣綱繼爲少納言、從五位下高村忌寸田使爲大外記、從五位下野倍王爲大監物、外從五位下道朝臣繼成爲主計助、中衞少將從五位下安倍朝臣兄雄爲兼內膳權正、從五位下石川朝臣魚麻呂爲左京大夫、從五位下藤原朝臣城主爲下總介、右衞士佐從五位下田中朝臣八月麻呂爲兼越後守、從五位下藤原朝臣伊勢人爲安藝守、○丙午、右大臣神

しこと大寶三年十二月癸酉紀に大倭根子天之廣野日女尊（持統）慶雲四年十一月紀に倭根子豐祖父天皇（文武）と見え寶字二年八月紀に天璽國押開豐櫻彥尊（聖武）天應元年十二月紀に天宗高紹天皇（光仁）と見えたれど誄詞は見えず其詞の見えたるは之を始とす

○畏哉、續紀宣命の例に據らば挂畏支とあるべし

○平安宮爾御坐志、西本安と宮字との間二字許空白なるに據れば大字などありしか考ふべし坐字は原本座に作る西本に據て改む

○天都日嗣乃御名事、此語古例に據て書けるなるべしいとめでたし

○恐牟恐母、牟は美の誤か恐美とあるべきなり

○臣末、末は某なり

○日本根子天皇、日本根子と申すは御歷代の天皇の御通號なり

○所白將去、申しゆかむにて將來久遠に稱奉る意

○皇統彌照尊、纂輯御系圖にはスメイヤテリと訓みたれど皇統はアマツヒツギと訓べしスメにては

言葉足らず彌照はイヤテラスと訓べし聖德を稱讃し奉れるにて天都日嗣の御光を彌々かゞやかし給へる意なり下文に遠照威德とある是なり
○柏原山陵、諸陵式に柏原陵平安宮御宇桓武天皇在山城國紀伊郡、陵墓要覽に紀伊郡堀內村大字堀內とあり
○天皇諱山部、御諱以下の事續紀には載せざるに依て此に記し奉れるなりそは續紀は延曆十三年及十五年に奏上し天應元年以降桓武天皇の御代の記事は現代の事なれば撰者注意して載せざりしは當然の事なり故に其闕を補はむが爲に此に記せるにて後紀撰者の用意蓋し到れりと云べし
○慮深釋重、天下の重任を釋かむとする意
○於保美野邇云々、大宮に直に向へる八重の坂痛くな踏みそ土にはありともなりヤヘノサカは靈異記に山部之坂とありされぱヤの下麻字を脱せるか大宮に直に向へるは大統を繼ぎ給ふべき意をほのめかし痛くな踏みそ土に

王等上啓曰、惟天爲大、運四序以授時、惟辟奉天、括三才而育物、故能撫龍圖而朝萬國、握鳳紀而撫八荒、斷業於是永隆、風聲所以自遠、大行天皇、膺通三之嘉命、乘得一之昌期、籠軒昊而功成、躡殷周而治定、奄棄率土、遄及登仙、徒仰弓劒、痛踰湯火、伏惟皇太子殿下、稟惟叡之神姿、承元嗣之洪緒、誠孝過禮、哀慕靡追、神等遐觀往冊、緬歷前脩、莫不儼就弘規、式纂洪業、伏乞殿下、可割荼毒而存至公、奉典章而昇寶位、裁成四海、字濟萬方、无任懇性之至、謹奉啓以聞、是日從四位下藤原朝臣緒嗣、秋篠朝臣安人授從四位上、從五位上和氣朝臣廣世、石川朝臣河主正五位下、從五位下平群朝臣眞常、池田朝臣春野從五位上、並以奉侍先帝、兼監護山陵也、○丁未、无位和氣朝臣嗣子授從五位下、正五位下和氣朝臣廣世之母也、廣世請以位讓母、上愍其志、故有此授、是日參議從四位上兼行右衞士督但馬守藤原朝臣緒嗣、正五位下行侍從左兵衞佐藤原朝臣嗣業等、返上先帝所賜別勅封三百戶、即令從五位下中衞權少將兼春宮亮藤原朝臣眞夏勅曰、先帝特所賞封也、不可更納、○

はありさもは今は常の皇子に坐せどやがて天にも上りますべければ心して尊敬し奉るべしとなり土は地にて天に對して云り
○內事興作、平安の奠都を始め其他の工事を指せり
○外攘夷狄、蝦夷を征討して邊境を鎭定し給ひしを云
○從五位下石川朝臣、考異に五舊作レ四據二上文一訂さあり
○左京大夫、下文五月壬申左京大夫藤原朝臣大繼見ゆ恐くは誤あらむ
○四序、四季なり
○三才、天道地道人道なり易繫辭傳下に出づ
○據龍圖、隋書經籍志に先聖據二龍圖一握二鳳紀一南面以君二天下一とあり龍圖鳳紀何れも天子たる徵の符瑞なり
○八荒、八方荒忽極遠の地なり賈誼過秦論に出づ
○斷業、斷は字書に音鼎鎗也三足兩耳とあり
○通三、舊唐書音樂志に得レ一流二玄澤一通レ三御二紫宸一と見ゆ
○徒仰弓劍、黃帝の上遷後弓及劍のみ遺り居りし

戊申〔十五〕、行四七齋於佐比、烏戶、崇福寺、是日遣右兵庫頭從五位下佐伯王、左衞士佐從五位下百濟王敎俊等、迎齋內親王於伊勢國、○己酉〔十六〕、遣使奉幣於伊勢大神宮、以齋內親王歸京也、○辛亥〔十八〕、百官重復上啓曰、夫令者、隨代垂制、臨時定議、依事改張、備於權宜、謹案禮家、先君崩、嗣子位定於初喪、卽位既明、无疑遵行、臣等今月十三日奉啓、率迪(シタガヒテ)舊章、欲申(ベムト)禮典、荼毒之始、不許所請、伏惟殿下、叡情天縱、孝心自然、哀痛攀慕、抑禮不從、綸旨尚稱令、敷奏每曰啓、稽之禮家、當爲違失、求於人事、亦有不慥、臣等愚情、竊懷不穩、伏望改令稱勅、使易施行、報曰、余小子未忍卽稱帝號、然卿等數有上啓、義在難違、不果窮心、唯增擗感、是日正三位藤原朝臣雄友、從三位藤原朝臣內麻呂爲大納言、從三位藤原朝臣乙叡、坂上大宿禰田村麻呂、紀朝臣勝長爲中納言、從三位藤原朝臣葛野麻呂、從四位上藤原朝臣園人爲參議、文章博士從五位下賀陽朝臣豐年爲兼陰陽頭、從三位藤原朝臣葛野麻呂爲式部卿、正五位上三諸朝臣綿麻呂爲播磨守、從五位下多朝臣入鹿、從五位下藤原朝臣眞雄爲近衞少將、

といふ故事（史記封禪書及列仙傳に出づ）に據て斯く云り李白の飛龍引に鼎湖流水清且閑軒轅去時有弓劍とさ見ゆ
○荼毒、荼毒は先帝を喪悼し給ふ苦痛を云
○字濟、字は字書に愛也とあり
○佐比鳥戸崇福寺、佐比寺（拾芥抄に佐井寺）は山城國紀伊郡、鳥戸寺（拾芥抄に法皇寺號鳥部野寺とあり）は洛東鳥部野、崇福寺（志賀寺とも云ふ十五寺の一）近江國滋賀郡にあり
○越後介、考異に後舊作前據上文訂とあり
○乙卯、同に乙卯以下十三字舊在丙辰條下今推干支改とあり
○大安秋篠等寺、大安寺は大和國添上郡（今廢寺、村名となる）秋篠寺は同添下郡（今生駒郡平城村大字秋篠）にあり
○神王薨、補任寶龜十一年に傳見ゆ延曆廿五年をも參看すべし
○田原天皇、二品施基皇子、天智天皇の皇子なり
○左大舍人頭、考異に左舊脱據續日本紀補とあ

從五位下安倍朝臣鷹野爲衞門權佐、右大辨從四位上秋篠朝臣安人爲兼左衞士督、從五位下紀朝臣百繼爲右衞士權佐、越後介如故、從四位下巨勢朝臣野足爲左兵衞督、下野守如故、從五位下紀朝臣繩麻呂爲佐、從四位下藤原朝臣仲成爲右兵衞督、兵部大輔如故、從五位下藤原朝臣山人爲主馬權助、○（廿一）甲寅、從五位下安倍朝臣鷹野爲少納言、衞門權佐如故、從三位藤原朝臣乙叡爲兵部卿、中納言如故、近衞少將從五位下多朝臣入鹿爲兼武藏權介、中納言從三位坂上大宿禰田村麻呂爲兼中衞大將、○（廿二）乙卯、行五七齋於大安秋篠等寺、○（廿三）丙辰、少僧都大法師勝虞、大法師玄賓爲大僧都、律師大法師如寶、大法師泰信爲少僧都、大法師永忠爲律師、正六位上錦部足人授外從五位下、○（廿四）丁巳、攝津國住吉郡住吉大神奉授從一位、以遣唐使祈也、侍醫外從五位下出雲連廣貞爲兼但馬權掾、外從五位下若江造家繼爲典藥允、是日右大臣從二位神王薨、詔贈正二位、大臣者、田原天皇（施基）之孫、榎井親王之子也、天平神護三年授從五位下、及天宗高紹天皇登極、授從四位下、尙美

り
○高天彥神、神名式大和國葛上郡高天彥神社名神大月次相嘗新嘗とあり
○四時幣帛、二月祈年六月十二月月次十一月新嘗祭を云
○吉野皇太后、蓋井上內親王、聖武天皇皇女光仁天皇皇后寶龜三年三月廢せられ同六年四月卒延曆十九年詔して后位を復す
(五月)疏潤天津、天津は晉書天文志に天津九星橫河中一曰天漢一曰天江主四瀆津梁云々とあり皇族たるを云
○分景扶木、扶木は淮南子地形訓に扶木在陽州日之所瞶(猶照也)とあり此は皇統に喩ふ景は日影、扶木は扶桑なり
○正五位上藤原朝臣繼業、考異に正舊作從據上下文訂
○從五位上百濟王、同に上舊作下據上下文及類史訂とあり
○天應元年有詔、天應元年二月丙午能登內親王薨去を弔ふ詔(續紀下三六三頁)に見ゆ
○倚殿、後宮職員令に倚殿一人掌供奉輿繖膏沐

弩摩內親王、爲左大舍人頭、延曆初授正四位下、除彈正尹、十二年授從三位、拜中納言、十五年轉大納言、拜右大臣、性恭謹少文、接物淡若、雖居顯貴、克有終焉、時年七十、○(廿六)己未、大和國葛上郡正四位上高天彥神、預四時幣帛、緣吉野皇太后願也、○(廿九)壬戌、行六七齋於崇福寺、○五月甲子朔、諱(淳和)上表曰、臣聞、崇高者、天理忌其滿盈、卑下者、神道祐其謙虛、古今之攸同、聖哲之遺訓、臣諱疏潤天津、分景扶木、每以沖退爲心、悚懼爲念、今陛下龍德嗣興、鴻基紹構、萬物改旦、千齡配長、普天率土、沐浴恩波、凡厥臣子、孰不幸甚、唯臣之私情、宿懷降挹、事隨宜制、當在今辰、伏願陛下、納臣揆分之言、許捨親王之號、矜臣竭愚之志、垂同諸臣之姓、事君之道、無敢所隱、伏瀝中誠、實非外飾、无任懇款之至、謹奉表以聞、有勅不許、是日正五位下和氣朝臣廣世爲左中辨、大學頭美作守如故、從四位下吉備朝臣泉爲式部大輔、正五位上三諸朝臣綿麻呂爲侍從、播磨守如故、正五位上藤原朝臣繼業爲兵部大輔、從五位上百濟王聰哲爲越後守、從五位下安倍朝臣小笠爲介、○(四)丁卯、勅、天應元年有詔、從四位上五

燈油火燭薪炭之事」とあり
○和朝臣家吉卒、續紀延暦二年正月戊子紀（下四一頁）に授女孺無位和史家吉外從五下」と見ゆると同人なるべし
○結保給之云々、保は戸令に凡戸皆五家相保一人爲長以相檢察勿造非違」とあるを云五家相保は後の所謂五人組制度なり結保は五家を結合せしめ之に對して正稅を貸し若し逃亡者あれば五家をして塡補せしむるなり
○德被无方、易益卦の象傳に天施地生其益无方とあり
○化覃有截、有截は毛詩商頌長發章に海外有截、箋に截整齊也云々四海之外率服截爾整齊とあるに據れり覃は字書に及也延也と注す
○至殷、殷は字書に衆也盛也とあり
○凝旒、旒は旒字の訛、旒は字書に冕旒以絲繩貫玉垂冕前後也とあり天子の禮冠の飾なり白虎通に垂旒者示不視邪と見ゆ凝は字書に嚴貌とあり

百枝爲二世王、而延暦四年有罪降貶、宜依先詔爲二世王、○戊辰、尚殿從四位下和朝臣家吉卒、○己巳、行七七御齋於寢殿、是日勅、今聞、頻年不登、民食惟乏、雖出擧公稻、而猶多阻飢、因茲私託民間、更事乞假、報償之時、息利兼倍、遂使富强之輩、膏粱有餘、貧弊之家、糟糠不厭、宜停正稅、濟彼絕乏、須差使實錄貧人、結保給之、若有亡者、令保內塡、其情涉愛憎、退弱進强、及補塡未納、兼收私債者、發覺之日、必處重科、待民稍給、乃從停止、○庚午、奉讀大般若經於大極殿幷東宮、是日群臣上表曰、臣等近稽之舊章、請以昇朝位、陛下不垂省納、未允懇誠、在於聖躬、實雖盡美、議諸凡厥、竊恐未安、豈有德被无方者、殉疋夫之小節、化覃有截者、略皇王之宏規哉、天下至大、庶政至殷、一日萬機、不可暫曠、伏願陛下、上念社稷之重、下從黎元之望、負扆臨朝、凝旒布政、則小大之心允睦、遠近之情克諧、國家惟寧、天下幸甚、臣等請擇良辰、班示有司、不勝憂惶之至、謹詣闕以聞、勅、近省公卿等表請、以宗社事重、哀慟之情、不能弭忘、而再三敦逼、因依來請、其左右京幷天下諸國、待大祓使到祓淸、然後釋服、不得

因此飲宴作樂幷著美服、○（九）壬申、三品伊豫親王爲中務卿兼大宰帥、三品諱淳和爲治部卿、四品葛原親王爲大藏卿、三品諱嵯峨爲彈正尹、左京大夫從四位下藤原朝臣大繼爲兼典藥頭、從五位下大中臣朝臣諸人爲伊勢介、○（十）癸酉、散位從四位下粟田朝臣鷹守卒、○（十四）丁丑、勅、備後、安藝、周防、長門等國驛館、本備蕃客、瓦葺粉壁、頃年百姓疲弊、修造難堪、或蕃客入朝者、便從海路、其破損者、農閑修理、但長門國驛者、近臨海邊、爲人所見、宜特加勞、勿減前制、其新造者、待定樣造之、○（十六）己卯、從四位上五百枝王上表曰、臣稟散樗之微質、忝天潢之末流、世依寵昇、位非才授、叨榮過分、奉國無效、喜懼交幷、□魂飛越、臣五百枝往年運値長險、忽放海南、自悲革命、永淪（シヅム）邊壤、而今猥蒙恩宥、重謁宸嚴、萬死百生、臣幸已足、況復列昔日之周行、飛故年之華蓋、抃躍之至、倍百恒情、但慮葵藿之誠徒切、止足之道未申、若不自新、恐黷戚族、臣誠撿舊章、諸王自願改爲臣姓、依請聽之、伏望改此皇親、就彼臣氏、被賜春原朝臣姓、伏冀長沐霈澤、保終吉於一門、遠貽孫謀、榮宗枝於萬葉、無任懇情之至、謹詣闕庭、奉表以聞、勅

○左京大夫、四月乙巳條に石川魚麻呂左京大夫と爲る何れか誤あらむ
○粟田朝臣鷹守卒、續紀天平神護二年十一月丁巳紀に始見、安房因幡甲斐上野長門肥後等國守及左兵衛佐大藏大輔主馬頭民部大輔大藏卿等を歴任す
○瓦葺粉壁、此文に據て當時驛館のみ瓦葺粉壁にて一般の民屋は然らざりしを知るべし
○散樗、散木樗櫟の略にて不才無用の義莊子逍遥遊篇に出づ
○天潢之末流、字書に皇族曰天潢とありもと天漢を絶る八星の名なり史記天官書に出づ
○海南、延暦四年九月事に坐して伊豫に流されしを云（續紀下四四二頁注）
○周行、朝廷の列位を云毛詩周南卷耳章に出づ
○葵藿之誠、文選求通親親表に若葵藿之傾葉太陽雖不爲之廻光終向之者誠也とあるに據れり君を慕ふ誠心を云葵は向日葵、藿は藿香にて共に草名なり
○春原朝臣、五百枝王は天智天皇皇子施基皇子の

玄孫にて父は市原王なり
○停獻、獻字は類史に據て補ふ
○腹赤魚、抄龍魚部に鮹魚辨色立成云鮹（音宜波良可今案所ㇾ出未ㇾ詳式文用腹赤二字）とあり倭訓栞に和名抄に鮹魚をよめり新撰字鏡同じ江次第官曹事類風土記には鱒也といへり腹黑の反なれば腹赤の贄を奏するも赤心の表示なるべしと云り
○木蓮子、抄果蓏部に崔禹食經云木蓮子（和名以太比）箋注に按本草拾遺に薜荔一名木蓮とある是なりと云り

許ㇾ之。是日停ㇾ獻諸國雜贄腹赤魚木蓮子等、以息ㇾ民肩ㇾ也。

日本後紀卷第十三

（三條西家本奥書）

天文二五月命大史于恒宿禰令書寫同一校了

○奉勅撰、西本此三字缺く

【即位前紀】日本根子天推國高彦天皇、紀略に天長元年七月甲寅(七日)平城天皇崩丙辰(九日)奉諡曰云々日本根子天推國高彦尊止稱白久止云々とあり

○平城天皇、西本日本根子云々の首に朱書せり

○天皇諱安殿、紹運錄に平城天皇諱安殿治四年母皇太后藤原乙牟漏贈太政大臣良繼女寶龜五年八月十五日降誕延暦四年十一月廿五日立太子(十二)同七年正月十五日元服(十五)同廿五年三月十八日受禪(三十一)同年五月十八日即位大同四年四月一日禪位同日尊號とあり

【大同元年】改元大同非禮也、私記に皇年代記和漢合符云本朝天子踐祚以前以禪讓而爲前代之

日本後紀巻第十四

起大同元年五月盡九月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

日本根子天推國高彦天皇　平城天皇

天皇諱安殿、皇統彌照天皇(桓武)之長子、母曰藤原贈太皇太后(乙牟漏)、寶龜五年、生於平城宮、延暦四年十月、皇太子(早良)被廢、即立諱爲皇太子、及長精神聰敏、玄鑒宏達、博綜經書、工於文藻、

大同元年(丙戌)五月辛巳(十八)、即位於大極殿、詔給諸社禰宜祝、及諸寺智行僧尼、孝義人等、位一階、又五畿內鰥寡孤獨之不能自存者給物、又免天下言上未納、改元大同、非禮也、國君即位、踰年而後改元者、緣臣子之心不忍一年而有二君也、今未踰年而改元、分先帝之殘年、成當身之嘉號、失愼終无改之義、違孝子之心也、稽之舊典、可謂失也、是日、叙位有差、○壬午(十九)、追尊皇太后(新笠)爲太皇太后、皇后(乙牟漏)爲皇太后、詔、彈正尹某定賜皇太

年踰年即位是舊例也而我朝當年即位翌年改元爲流例但禪讓之年即位改元又非無先例和銅八年九月元明天皇禪位即日元正天皇即位改元爲靈龜也養老八年二月元正天皇禪位聖武天皇即位改元爲神龜也天平廿一年四月聖武禪位同年七月孝謙天皇即位改元爲天平勝寶也神護景雲四年八月稱德天皇崩同年十月光仁天皇即位十一月改元爲寶龜也德治三年八月後二條院崩同年十一月花園院即位々々之歲十月改元爲延慶也即位以前改元其例亦稀也又踰年不改元例天平寶字之年淡路廢帝即位不改元仁和三年宇多院即位不改元隔年爲寬平也云々
○愼終无改之義、論語學而篇に愼終追遠民德歸厚及三年無改於父之道可謂孝矣とあるを云
○叙位有差、補任を参考すべし
○皇太后、原本太を大に作る西本に據て改む前後の太皇太后の太も亦同じ
○彈正尹某、原本某下に嵯峨の二字を分注す西本

弟、宮內卿藤原朝臣園人爲皇太弟傳、林宿禰沙婆爲學士、秋篠朝臣安人爲春宮大夫、○廿四丁亥、始置六道觀察使、○廿六己丑、勅、公使之政、既立程限、私暇之期、必有日數、如聞、諸國牧宰之輩、或就使入京、公務已畢、或緣事歸舍、暇日方滿、而經過宮闕、留連閭里、量彼景迹、不可不肅、又上下殊等、所掌各別、若長官出行、須佐職留守、而或有掾已上官、共離任所、付印主典、綦甚之至、一復如此、其奉使過限者、勘由申之、暇滿未來者、錄名同言、若隱忍不告者、事覺之日、准狀科附、不得阿容、○六月癸巳朔、山陽道觀察使正四位下藤原朝臣園人言、西海道年中入京雜使、其數繁多、而此道疲弊、殊於他堺、撿察其由、率緣迎送无息、不得顧私、伏望西海道府國五位已上、自今以後、自非秩滿解任者、不聽輙入京者、許之、是日勅、池之爲用、必由灌溉、栗林之用、良爲得實、今諸國所有蓮池幷栗林等、或決灌田之水、潤彼芙蓉、或占无實之林、寄言供御、如此之類、必妨百姓、宜遣使子細勘定之、又東宮舍人者、依令、取蔭子孫及位子、儀容端正、工於書筭者補之、而頃年乖令、兼取白丁、宜改此例、一依令條、○六戊戌、正三位守右

大臣兼行近衞大將藤原朝臣內麻呂上表曰、伏見群臣議奏、大臣食封增加千戶、所以崇優高德、歷代不易之典也、臣運遇聞泰、曲荷鴻貸、起歷等次、辱尸斯位、恩深寵盈、待災人神、今復厚祿豐秩、一倍前數、物極則變、樂往哀來、臣之昧德、不知所爲、伏請名帶二千、俟後來之賢臣、實食千戶、省素食之切責、率由懇衷、非敢詭傍、特願靈鑒、以降天從、无任悾款之至、謹奉表以聞、勅不聽、○己亥、(七)公卿奏言、量事制宜、聖皇茂典、隨時分職、哲后良規、頃年令大宰府帶筑前國、兼廢品官、庶存簡要、而今管攝多事、充用少人、伏望增置官員、得濟繁劇者、勅增加大少監大少典各一員、○辛(九)丑、詔曰、尊祖追榮、先王之茂範、敦親贈號、曩哲之嘉猷、朕以菲薄、嗣守洪基、思欲率脩舊章、篤崇典禮、宜朕外祖父贈從一位內大臣藤原朝臣良繼追贈正一位太政大臣、外祖母贈從一位尙藏安倍朝臣古美奈贈正一位、又詔、藤原某朝臣追贈皇后、遣伊勢守藤原朝臣大繼等、告於皇后陵、皇后諱帶子、贈太政大臣正一位藤原朝臣百川之女也、帝在儲宮、納之爲妃、○壬寅、手詔曰、朕以庸虛、謬承先業、雖奉丕訓、猶暗政治、負重

になし後人の加筆なること明なり故に除く
○闈人、考異に舊脫據下文補とあり
○六道觀察使、參議を以て之に任ず翌二年四月參議を罷めて觀察使を置く是に於て八人とし五畿七道に各一人を置く
○泰甚之至、泰は太過也甚しきを云漢書黃霸傳に凡治道去其泰甚者耳とあり
○若隱忍、若字は西本に據て補ふ
(六月)癸巳朔、考異に舊脫一代要記曰五月十八日辛巳據之推干支補之云
○西海道年中入京云々、三代格卷七に見え入京を上都に作る
○伏望、格に望請に作る
○栗林、クルスは文字の如く栗の林を云
○芙蓉、抄草木部に爾雅云荷芙蕖郭璞曰芙蓉江東呼爲荷また爾雅云其子蓮也其中菂郭璞曰蓮謂房也ともあり
○東宮舍人者云々、軍防令に凡五位以上子孫年廿一以上見無役任者每年京國官司勘檢云々式部隨

狀充大舍人及東宮舍人さある是即ち蔭子孫なり又同令に凡內六位以下八位以上嫡子年廿一以上見無役任者毎年京國官司勘撿云々儀容端正工於書筭爲上等云々上等爲大舍人云々如不足者通取庶子さある是位子なり
○大臣食封、祿令に太政大臣三千戶左右大臣二千戶さあり
○鴻貸、字書に鴻は大也貸は寬免也さあり
○名帶二千、左右大臣の食封二千戶なるを云
○實食千戶、半減を請ふなり
○素食、素は尸位素餐の素に同じく功無くして其位に居て其事を爲さず空く食ふなり
○天從、從は聽從なり
○悾款、字書に悾款は誠也さ注す
○己亥、此條紀略五月に係く五月には己亥なし誤なり
○品官、官位令に見ゆる位階の相當ある官を云寶龜二年十二月筑前國司を廢して大宰府に屬せしむ守以下目以上廢官さなれ

春氷、取喩方易、御朽、秋駕、比懼非難、伏惟先帝、括地宣風、統天立化、布堯心而撫育、垂禹泣而哀矜、謹讀延暦五年四月十一日詔下者、備請國庸調支度等物、毎有未納、交闕國用、良由國郡司遞相怠慢、又苟政治民、多乖朝委、宜量其狀迹、隨事貶黜、所司宜作條例奏聞、公卿即依制旨、上一十六條事、自茲厥後、既經年所、空設憲章、未聞遵行、是則國郡官司不練之所致也、今爲行十六條、量置六道觀察使、道別一人、判官一人、主典一人、所以移風淳風、易俗雅俗、激揚清濁、黜陟幽明也、其事有大小、使有輕重、自非國由廢興、政關成敗、宜遣判官以下督察、兼復取所司清廉幹了、官差發撿挍、庶富之詞、聞諸先聖、安集之語、在於風人、凡厥使手、副朕意焉、又勅、諸王及五位已上子孫、十歲以上、皆入大學、分業教習、依蔭出身、猶合上寮、經一選□□大舍人、但情願遂業者聽之、是日正三位守右大臣兼行近衞大將藤原朝臣內麻呂上表曰、臣瀝顙露丹、上表祈哀、叫閽之誠靡遠、聽卑之意未徵、是用踢影脩形、如寘炎熾、鎖神驚魂、若履輕氷、臣內麻呂誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪、臣聞、德薄位尊、功微賞重、古

○ろを云
○尚藏、後宮職員令に尚藏一人掌神璽關契供御衣服云々之事とあり
○皇后諱帶子、紀略に延曆十三年五月己亥皇太子妃諱帶子忽有病移木蓮子院頓逝とあり
○負重春氷云々、文選王元長曲水詩序に念負重於春冰懷御奔馬於秋駕とあるに據る注に明君之治人若負重而履冰恐不勝其重懼見陷於冰若御奔馬於秋駕恐有覆敗也秋駕天子法駕也とあり御朽は尙書五子之歌篇に予臨兆民凜乎若朽索之馭六馬とあるに出づ
○禹泣、劉向說苑君道篇に禹出見罪人下車問而泣之とあるを云
○延曆五年四月詔、續紀卷下(四五一頁)及三代格卷七に見ゆ
○庶富之詞、論語子路篇に子適衞冉有僕子曰庶矣哉冉有曰旣庶矣又何加焉曰富之曰旣富矣又何加焉曰敎之とあるを指せるなるべし
○安集之語、毛詩小雅鴻雁篇序に鴻雁美宣王也

人知其因濟、前哲誡其終凶、況乎累日駢時、人臣位極、超倫轢輩、寵光惣萃、訪諸天道、速屡之府、毎興斯思、居榮爲慼、雖知嚴命不可違、聖恩宜祗貳、而固陋之情、莫能自奪、非曰鳴謙、豈敢矯餝、伏乞曲廻鑒許、賜矜前請、臣之在生志願足矣、不任悚迫之至、謹重奉表以聞、手詔報曰、重省表□、固辭益封、雖崇沖讓、未允□情、何者堂高階遠、位尊祿厚、問古稽今、有因无替、其大臣者、望高端右、貴冠群后、禮數袂服、明載國典、又祿之所得、先哲不辭、況今日增戸、是復本數、明知此意、宜斷表請、○[十二]癸卯、律師永忠言、伏見公私齋會、預先備擬造食、或炎夏盛熱、鬱爛醭生、或正冬嚴寒、熱羹凍陵、遠近馳逐、糜費資財、飲食麁惡、不堪入口、元擬招福、反致譏嫌、伏請自今以後、一依本教、均平行食、施者心行平等、受者少欲知足、又佛法本意、深信肅淸、設齋之日、必須飲食豐濃、不得輕尠不足、亦請頒示天下、曉喩百姓者、許之、○[十三]乙巳、奉爲先帝、度僧一百五十人、尼五十人、○[十九]辛亥、制、頃年追孝之徒、心存哀慕、事務豐厚、眩人耳目、各競求名、至於貧者、或賣却田宅、還滅家途、凡功德之道、信心爲本、因物多少、寧有輕重、宜誦經布

施者、親王、一品商布五百段已下、二品三百段已下、三品四品各二百段
已下、諸王諸臣、一位五百段已下、二位三百段已下、三位二百段已下、四
位一百段已下、五位五十段已下六位已下卅段已下、宜依件差、莫令相
超、又世俗之間、每至七日、好事修福、既无紀極、爲弊不少、宜三七日、若七
七日、一度施捨、其非商布者、亦宜准此數、○閏六月壬戌朔己巳、八勅、王臣神寺、占
山河海嶋濱野林原等者、從乙亥年、曁于延曆廿年、一百廿七歲之間、或
頒詔旨、或下格符、數禁占兼、頻斷獨利、加以、氏氏祖墓及百姓宅邊、栽樹
爲林等所許步數、具有明文、又五位已上六位已下、及僧尼神主等違犯
之類、復立科法、今山陽道觀察使參議正四位下守皇太弟傅藤原朝臣
園人言、山海之利、公私可共、而勢家專點、絕百姓活、愚吏阿容、不敢諫止、
頑民之亡、莫過此甚、伏望依慶雲三年詔旨、一切停止者、今如所言、則知
徒設憲章、曾无遵行、率由所司阿縱、而令百姓有妨、宜一切收入、公私共之、
若有犯者、依延曆年中格、一无所宥、自今已後、立爲恒例、但山岳之體、或
於國爲禮、漆菓之樹、觸用亦切、事須蕃茂、並勿伐損、其菓實者、復宜相共、

萬民離散不安其居而能勞來還定安集之至于矜寡無不得其所焉とあるに據れり
○風人、詩人を云風は毛詩國風の風なり
○諸王及五位以上子孫云々、學令に凡大學生取五位以上子孫云々爲之云々並取年十三以上十六以下聰令者爲之さあるを十歲以上に改められしものなり
○瀝額露丹、額は款の誤なるべし瀝款露丹は誠款を瀝ぎ丹心を披露するを云
○祈哀、訴哀の誤なるべきか
○叫閽、原本叫を叩に作る西本に據て改む閽は宮門なり門衞に取次ぎを乞ふを云
○聽卑之意未徹、聽卑は天は卑に聽く意にて內廂呂の上表を聽納せられざるを云
○是用云々、恐懼措く所を知らざるを云
○因濟、因は冈の誤なるべし冈は罔也罔濟は成すこと無きを云
○惣萃、原本萃を華に作る類史に據て改む

又山城國葛野郡大井山者、河水暴流、則堰堤淪沒、採材遠處、還失灌溉、因茲國司等量便、禁制河邊、无令他斫、諸國若有斯類者、不論公私、不在收限、其寄語有要、輙占无要者、事覺之日、必處重科、○丁丑十六、廢勘解由使、

○戊子廿七、賜諸道觀察使印、

○秋七月壬辰朔、北陸道觀察使右大辨從四位上秋篠朝臣安人爲周忌御齋會司、○乙未四、勅、關津之制、爲察衆違、苟有阿容、何設朝憲、今聞、長門國司、勘過失理、衆庶嗷嗷、自今以後、不得更然、若有違犯、特寘重科、○戊戌七、勅、今聞、畿內勅旨田、或分用公水、新得開發、或元墾埆地、遂換良田、

○速戾之府、速戾は尙書太甲篇中に出づ召罪なりと注す ○祗貳、祗は祇に同じ祇は敬也貳は副貳也とあり敬みて御心に副ひ奉るを云 ○鳴謙、易謙卦六二に鳴謙貞吉とあるに出づ謙遜の意 ○表口、恐くは表請或は表は來の誤にて來請なるべし ○沖讓、字書に沖は虛也と注す謙退なり ○端右、朝端國右の略にて朝廷の首臣の義既に注せり ○今日增戶云々、此文に據るに是より先令制より封戶を減ぜられしを是に至りて本數に復せられしなり ○醭生、字書に凡物腐敗而生白花者皆曰醭とあり ○凍陵、陵は淩に同じ字書に積冰曰淩とあり ○亦請、亦字類史になし (閏六月)己巳、此二字原本なし三代格に六月八日とあるに據て補ふ ○勅、三代格卷十六に大同元年閏六月八日太政官符として之を載す ○神寺、神社と佛寺なり格諸寺に作る ○乙亥年、天武天皇四年なり ○數禁占兼、原本禁字缺け占兼を兼占に作る禁は三代格に據て補ひ占兼は西本及格に據て改む ○百姓、百の字は三代格に據て補ふ ○爲林等、原本等を□寺とす三代格に據て改む ○諫止、原本陳正に作る三代格に據て改む ○代望、三代格望を請に作る ○慶雲三年詔旨、同年三月十四日詔に氏々祖墓及百姓宅邊栽樹爲林并周二三十許歩不在禁限とあり ○所言、三代格言を申に作る ○阿縱、原本縱を從に作る西本及三代格に據て改むおもねりゆるすを云 ○延曆年中格、延曆十七年十二月八日格なり三代格卷十六に載す ○菓實者、者字は三代格に據て補ふ ○又山城國、考異に又舊作人據類聚三代格訂とあり ○堰堤、同に堤舊作瀝據三代格訂とあり格には壞に作る ○寄語有要、原本寄語を語寄に作る西本及三代格に據て改む ○廢勘解由使、天長元年九月に復置、此より後常職となる

(七月)勅旨田、勅旨を以て開墾する田を云 ○安諦郡、古くは阿提或は阿氐足代等の文字を用ひたり ○在田郡、靈異記に安諦郡荒田村見ゆ在田の郡名は此に取れるなるべし ○營搆者、私記に此上世新天子不嘗御舊宮之徵

文德天皇朱雀天皇紀亦有左契と云り下文に亮陰之後更建新宮古往今來以爲故實とあるにて上古より當時に至る迄新帝の御代に必ず宮殿を新に建造せられし事明なり
○漢代露臺云々、漢書文帝紀贊に帝嘗欲作露臺召匠計之直百金上曰百金中人十家之產也吾奉先帝宮室常恐羞之何以臺爲とあるを云
○非一木之枝、同叔孫通傳贊に語曰廊廟之材非一木之枝とあるに據れり
○揄揚郁烈、文選兩都賦序に雍容揄揚とあり稱譽を云なり
○亭毒、老子に出づ化育の意既に注す
○燾載、中庸に出づ覆載と云に同じ既に注す
○肸蠁、漢書司馬相如傳(上林賦)に肸蠁布寫、注に肸蠁盛作也とあり
○激大雅之風、激は發感也雅は正也
○道融有截、有截は毛詩商頌長發章に海外有截、箋に截整齊也云々四海之外率服截爾整齊とあり融は通也

加以託言勅旨、遂開私田、宜遣使勘察、若王臣家有此類、亦宜同換改紀伊國安諦郡、爲在田郡、以詞涉天皇諱也、○十二壬寅、聽以白丁百人補東宮舍人、永以爲例、勅、如聞、民部省所收戸籍、遠近紛雜、觸事多煩、宜一依令條、庚午年(天智九年)幷五比籍之外、依次除之、○十三甲辰、詔曰、比公卿奏、日月云除、聖忌將周、國家恒例、就吉之後、遷御新宮、請預營搆者、此上都先帝所建、水陸所湊、道里惟均、故不憚暫勞、期以永逸、棟宇相望、規摸合度、欲使後世子孫、无所加益、朕忝承聖基、嗣守神器、更事興作、恐乖成規、夫漢代露臺、尚愛十家之產、大厦層搆、亦非一木之枝、朕爲民父母、不欲煩勞、思據舊宮、禮亦宜之、卿等合知朕此意焉、於是百官奉表拜賀曰、亮陰之後、更建新宮、古往今來、以爲故實、臣等准據舊例、預請處裁、伏奉今月十三日勅偁、朕爲民父母、不欲煩勞、思據舊宮、禮亦宜之、臣等忝聞綸旨、載喜載悲、誠以孝子充成父志、遂昌堂搆者也、凡厥百僚、幸々甚々、臣聞、明王軌俗、溫恭寘懷、哲后經邦、澹泊爲德、伏惟皇帝陛下、聲韜嗣禹、業劭纂文、順稟成規、捴揚郁烈、亭毒被於萬品、燾載苞於兩儀、玄功肸蠁、而激大雅

○无垠、垠は字書に界限也とあり
○雲搆非加、文選王元長曲水詩序に慮擔雲搆、注に雲搆言高與雲齊也とあり大廈を云非加は更に手を加へざるを云
○抃東海鼇、抃は字書に俗弄字とあり
○伐南山竹、漢書公孫賀傳に南山之竹不足受我辭とあり南山の竹を伐りて共に書くも書き盡されずとなり
○鳧藻、後漢書杜詩傳に出づ上下の和睦歡悅するを云
○中內記、職員令に中務省中內記二人掌同大內記とあり
(八月)惟溝軫慮、惟字疑くは推の訛ならむ推溝は納溝と云に同じく孟子萬章下篇に匹夫匹婦有不與被堯舜之澤者若己推而內之溝中とある に出づ軫は楚辭に痛也と注す
○僣度、僣は愆の誤なるべし
○日本書紀、日本書紀の文字此に初て見ゆ但し嘉祿元年卜部兼直所寫古語拾遺奥書所引に書の字な

之風、神用周流、以布中和之樂、道融有截、化溢无垠、猗歟偉歟、盡善盡美、仍恐環瀛之表、无擊壤歌、浹寓之涯、有向隅歎、遂乃苞軌貢璽、事從簡寘、文書調役、務期單疎、雲搆非加、省□於梓匠、露臺輟作、愛費於金直、沓砌之荒涼、再迎鳳蓋、栢梁之寂寞、重轉鑾輿、臣等就日喰和、望雲沐霈、抃東海鼇、而无喩、仰德、伐南山竹、而未足書恩、无任鳧藻之至、謹詣闕奉表陳賀以聞、○庚戌(十九)、制、蔭子孫、先勘籍、後叙位、夫五位以上、冠蓋惟貴、子孫勘籍、事涉細碎、自今以後、宜停勘籍、但冐名被蔭、登孫爲子之類、所司不存撿察、若有此類、所貢官人、依法科罪、○壬子(廿一)、廢中內記、○庚申(廿九)、置內記史生四員、○八月(辛酉朔)癸亥(三)、詔曰、朕以眇眇、嗣奉丕基、負天下之重任、當海內之深責、常以履冰疚懷、惟溝軫慮、勵精克己、詳永至治、而誠未動天、皐聽罔照、陰陽僣(タガヘ)度、霖雨爲災、靜言厥咎、在予一人、或由政道不洽、仁風未靡、何用招此漂損、害及黎元、夫股肱之任、爕理斯存、公卿宜扶輔朕躬、匡其不逮、共除妖祥、庶答靈心、其百姓因水流失資產者、量加支給、所須事條、具狀奏聞、普告遐邇、知朕意焉、○甲子(四)、免畿內被水害百姓調傜、其正稅者、

く一本にはあり
○宣祓詞、考異に詞舊脫據神祇令補
○供幣帛、同に帛舊脫據神祇令補とあり
○功德之興云々、此勅三代格卷三に見ゆ
○資財、考異に財舊脫據類聚國史補とあり
○改替綱維、下文丁亥條に改補三綱とあるに同じ
○或賣或耕、考異に賣或二字舊脫據類史補とあり
○名僞已寺、類史僞を稱に作る
○斯類、原本斯を期に作る西本類史及三代格に據て改む
○在弘道者、類史三代格在を存に作る
○葛野麻呂言云々、三代格卷八に大同元年八月廿五日太政官符として載す
○盡穎爲穀、穎はカヒなり穗のまゝなるを云諸國正稅帳に穎幾千束とあり穀はモミなり穀は何百何十斛とあり古は種子には穎を用ひたり故に盡く穀と爲しては種子辨じ難しと云り
○公廨利稻、考異に稻舊

聽明年納之、七道諸國、且令賑給、○十庚午、先是中臣忌部兩氏各有相訴、中臣氏云、忌部者、本造幣帛、不申祝詞、然則不可以忌部氏爲幣帛使、忌部氏云、奉幣祈禱、是忌部之職也、然則以忌部氏爲幣帛使、以中臣氏可預祓使、彼此相論、各有所據、是日勅命、據日本書紀、天照大神閉天磐戶之時、中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、下枝懸靑和幣白和幣、相與致祈禱者、然則至祈禱事、中臣忌部並可相預、又神祇令云、其祈年月次祭者、中臣宣祝詞、忌部班幣帛、踐祚之日、中臣奏天神壽詞、忌部上神璽鏡劔、六月十二月晦日大祓者、中臣上御祓麻、東西文部上祓刀、讀祓詞、訖、中臣宣祓詞、常祀之外、須向諸社供幣帛者、皆取五位以上卜食者充之、宜常祀之外、奉幣之使、取用兩氏、必當相半、自餘之事、專依令條、○十九己卯、武藏國獻白烏、賜獲者伊福部淨主稻五百束、○廿二壬午、勅、夫功德之興、因心各別、何則或甲搆堂宇、乙寧得爲己、是以大小諸寺、每有檀越、田畝資財、隨分施捨、累世相承、崇敬至今、如聞、王臣勢家、不顧本願、而

脫據三代格補さあり
○收穎穀、同に穎舊脫據類史補さあり三代格に穎穀を糙の一字に作る
○糙、抄稻穀類に唐韻云糙(漢語抄云糙米毛美與禰一云加知之禰)米穀雜也さありモミさ米さ相雜れるを云
○伏望、三代格望請に作る
○延曆十一年十一月廿八日格、本文見えず大同元年八月廿五日格中に見ゆ
○或佃寺田、三代格或を種に作る
○不事燃燈、三代格に不燃夜灯に作る
○經年、考異に年舊脫據類史補さあり
○三綱、上座寺主都維那を云
○而後若有犯者、而後若者の四字類史三代格に據て補ふ
○知而容隱、考異に而舊作寺據三代格訂さあり
(九月)功在一簣、勞力少きを云簣は字書に土籠也さありモッコを云
○多壞、原本壞を懷に作る西本に據て改む
○山埼津、山城國乙訓郡淀川の沿岸なり催馬樂諸

追放檀越、改替綱維、田園任意、或賣或耕、名係己寺、還致損穢、若有斯類者、五位已上錄名奏聞、六位已下禁身進上、又其檀越子孫、惣攝田畝、專養妻子、不供衆僧、宜簡氏中情在弘道者充。○廿五乙酉、參議東海道觀察使從三位藤原朝臣葛野麻呂言、延曆十七年格、出擧正稅、給穀收穀、立爲恒例者、而今奉勅、稻有早晚、各任土宜、而盡穎爲穀、種子難辨、宜本者收穎、利者納穀、不絕本穎、廻充種子、本稻之外、不得收穎、若有過限收穎者、國郡官司、科違勅罪者、今或國司等、偏執此格、公廨利稻幷年中雜用、皆悉令糙、其收穎穀之意、本爲遠貯、而今日勞糙、明年盡用、徒有民弊、曾无公益、伏望依延曆十一年十一月廿八日格、年中雜用幷公廨等稻、不勞爲糙、以省民弊者、許之。○廿七丁亥、勅、如聞、七道諸寺檀越等、或佃寺田、不納租米、或費燈分稻、不事燃燈、或傾用錢物、經年不還、或奴婢牛馬、役用私家、如此之流、觸類繁多、加以寺山樹木、任意斫損、愛憎自由、改補三綱、有一於此、豈謂檀越、從今而後、若有犯者、科違勅罪、國司三綱衆僧知而容隱、亦與同罪、是月、霖雨不止、洪流汎濫、天下諸國、多被其害、○九月庚寅朔癸巳四、

に難波の海漕もて上る云々今少し上れ山崎までにさある是なり
○難破津、類史破を波に作る

勅、水之浸損、積微爲害、屬于小決、功在一簣、而无人監修、致此多壞、宜衞門衞士府專當左右京堤溝、勤加修補、○壬子、遣使封左右京及山崎津難破津酒家甕、以水旱成災、穀米騰躍也、

日本後紀卷第十四

○平城天皇、西本此四字なし
【大同三年】內舍人、左右親近の官中務省に屬す令制九十人大同三年減じて四十人とす
○少監物、中務省に屬し相當正七位下
○馬料、式部式上に馬料錢七位官二貫三百五十とあり四季に之を給ふ馬を飼養する料なり其規程は式部式に詳に見ゆ
○若犬養門、拾芥抄中末に皇嘉門若犬甘氏造之號雅樂寮御門西端南面二條大路とあり後の皇嘉門を云
○樹枝、紀略柳樹に作る
○交頭、類史及紀略頭を頸に作る

日本後紀巻第十七

起大同三年四月盡四年四月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

天推國高彥天皇　平城天皇

夏四月壬子朔甲寅三、令山陰道觀察使正四位上兼民部卿菅野朝臣眞道攝行東海道事、山陽道觀察使正四位下兼皇太弟傅宮內卿藤原朝臣園人攝行北陸道事、右少辨從五位下大中臣朝臣智治麻呂爲兼神祇大副、○己未八、從五位下紀朝臣咋麻呂爲中務少輔、從五位下安倍朝臣眞勝爲治部少輔、陰陽頭備中守如故、從五位下淡海朝臣貞直爲雅樂頭、從五位上菅野朝臣庭主爲木工頭、○甲子十三、內舍人廿人進少監物、賜馬料、以出納官物也、○丁卯十六、有二烏集於若犬養門樹枝上、接翼交頭倶死、終日不墜、遂爲人被打墜、時人以爲、北陸道觀察使從四位上藤原朝臣仲成、與侍正三位藤原朝臣藥子、兄妹招尤之兆也、○庚午十九、外從五位下飛

驛國造祖門爲主計助、○壬申、淡路國飢、以播磨國穀賑給、○癸酉、從四位下□田女王卒也、○乙亥、幸神泉菀、賜五位已上衣被、○辛巳、驛鈴遺在廊下者自鳴、○五月壬午朔、曲宴、賜五位已上衣被、○癸未、廢但馬國[　]三驛、以不要也、○甲申、先是詔衞門佐從五位下兼左大舍人助相摸介安倍朝臣眞直、外從五位下侍醫兼典藥助但馬權掾出雲連廣貞等、撰大同類聚方、其功既畢、乃於朝堂拜表曰、臣聞、長桑妙術、必須湯艾之治、太一祕結、猶資鍼石之療、莫不藥力迥助、拯殘魂於阽厄、醫方所鍾、續遺命於斷[　]雖一貫典墳、澄心顯、猶復降懷醫家、汎觀攝生、乃詔右大臣、宜令侍醫出雲連廣貞等依所出藥、撰集其方、臣等奉宣修[　]在尋詳、愚情所及靡敢漏、□成一百卷、名曰大同類聚方、宜按始訖、謹以奉進、但凡厥經業不詳習、年代懸遠、注紀絲錯、臣等才謝稽古、學拙知新、輙呈管窺、當彰紕謬、不足以對揚天旨、酬答聖恩、悚恧之□隣氷谷、謹拜表以聞、帝善之、○丙戌、停馬射、以天下疫病也、勅、如聞大同元年、洪水爲害、餘弊未復、去年以來、疫病流行、横斃者衆、顧彼困厄、深懷矜

○倶死、考異に死舊作飛據紀略訂とあり
○終日、紀略經日に作る
○菀、字類抄に園圃苑菀圃以上同とあり
○驛鈴遺云々、私記に一作匱職員令曰少納言三人掌奏宣小事請進鈴印傳符進付飛驛函鈴兼監官印延喜式云凡行幸從駕內印并驛鈴傳符等皆納漆櫃子主鈴與少納言共預供奉とあり
（五月）但馬國[　]三驛、詳ならず
○左大舍人助、考異云左人助三字舊脫據下文補
○眞直、西本直を點に作り本朝書籍目錄眞に作る
○大同類聚方、本朝書籍目錄に大同類聚方百卷安部眞貞出雲廣貞等奉勅撰大同三年戊子成とあり現存類聚方卷首に此表文及前後の文を載するも後人此紀に據て加ふる所にて補修の文字極めて杜撰なり故に採らず
○長桑妙術、長桑は扁鵲に醫方を傳へし奇人、史記扁鵲傳に出づ
○湯艾之治、湯は藥湯、艾は艾炷卽ち灸治を云
○太一秘結、雷公者號

太乙黃帝之臣也善醫術とあり太一は太乙に同じきか
○鍼石之療、古治病の術鍼は針なり鍼を以て病を刺すなり石は砭石卽ち石鍼なり古へ砭石を以て病を攻めたり今其術絕えたりと云
○阽厄、厄は危の訛なり字書に近邊欲墮曰占故言危曰阽危とあり此語漢書食貨志に出づ
○續遺命於斷□、續は原本缺く西本及類史に據て補ふ斷の下原本約三字缺くるも西本には約十四字缺けたり
○典墳澄心顧、典墳は三墳五典、卽ち經典の意なり顧字疑くは頭字の訛にあらざるか
○氷谷、履薄氷臨深谷の略、恐懼するを云
○顧役困厄、考異云彼舊作被據類聚國史訂
○黎烝、文選司馬相如封禪頌に覺悟黎烝とあり烝は爾雅釋詁に衆也と注す
○齋宮頭、原本齋を齊に作る西本に據て改む
○履薄如傷、薄は薄氷也傷は類史惕に作る

愍、思施恩德、以慰黎烝、宜大同元年被水損七分已上戸、所擧正稅未納、悉從免除、是日曲宴、○戊子[七]、幸神泉苑、令畿內七道諸國停貢相撲人、○己丑[八]、遣使療治左右京病民、勅、去年□用□□□百姓之間、新錢未多、宜新舊列用、暫濟民乏、○庚寅[九]、從五位下田口朝臣息繼爲右少辨、阿波守如故、從五位下藤原朝臣安繼爲雅樂助、從五位下紀朝臣貞成爲河內守、從五位下藤原朝臣伊勢臣爲齋宮頭、○辛卯[十]、詔曰、朕以寡昧、虔嗣丕基、履薄如傷、黔首之隱是恤、馭奔若厲、紫宸之尊非寧、尅己思治、勵精施政、而仁無被物、誠未感天、自從君臨、咎徵斯應、頃者天下諸國、飢饉繁興、疫癘相尋、多致夭折、朕之不德、害及黎元、撫躳責躬、慙焉疚首、或恐政刑乖越、上爽靈心、漫汗煩苛、下貽人瘼、此皆朕之過也、兆庶何辜、靜言念之、無忘監寐、詩不云乎、民亦勞止、汔可小康、其畿內七道言上飢疫諸國者、今年之調、宜咸免除、仍國司親巡鄕邑、醫藥營救、兼令國分二寺轉讀大乘一七箇日、左右京亦宜遣使普加振贍、庶幾爲善有効、濟困窮於畝糧、脩德不虛、返遊魂於岱錄、務崇寬惠、副朕意焉、○甲午[十三]、幸神泉苑、宴

○黔首之隱、黔首は人民、隱は痛なり民の苦痛を云
○馭奔苦厲、說苑に子貢問二治レ民於孔子一孔子曰懍々乎如下以二腐索一御中奔馬上とあるに據れり厲は岸危處曰レ厲とあり奔馬を馭することの危きが如しとなり
○仁無被物、無以下九字西本缺く
○黎元、類史黎庶に作る
○惄焉疚首、西本疚を疾に作る毛詩小雅小辨章に我心憂傷惄焉如レ擣云々心之憂矣疢如レ疾レ首、注に惄は思也疢は猶レ病也と云疢或は疾の訛ならむか
○政刑乖越、政事刑罰のそむき違ふを云
○靈心、天の心なり
○漫汗、類史渙汗に作る
○貽人瘼、考異に瘼舊作レ庶據二類史一訂とあり瘼は病なり
○監寐、後漢書劉陶傳に出づ注に監寐猶二寤寐一とあり類史には寤寐に作る
○詩不云乎、以下の二句は毛詩大雅民勞章の句、汔は箋に幾也とあり勞止の止は語助の辭なり
○醫藥營救、考異に醫舊

群臣、賜レ錢有レ差、○十四乙未、從四位上巨勢朝臣野足爲二兼近江守一、左兵衛督左京大夫如レ故、從五位下紀朝臣國雄爲レ介、式部大輔從四位下賀陽朝臣豐年爲二兼下野守一、從五位下谷忌寸野主爲二土佐守一、從五位下紀朝臣長田麻呂爲二筑前守一、是日、置二筑前國守介掾大少目各一員一、先レ是令二府官攝二行國政一、彼此相讓、心非二專一一、事多二廢闕一、因レ茲改焉、○十五丙申、播磨國獻二白鷁二一、○十七戊戌、東宮奉獻、賜二五位已上衣被一、○十九庚子、從四位下民部大輔安倍朝臣枚麻呂以二年老一致仕、許レ之、山陽道觀察使正四位下皇太弟傳兼宮內卿藤原朝臣園人奏言、當道播磨、備中、備後、安藝、周防等五箇國、去延曆四年以降、廿四年已往、庸并雜穀等未進、其數不レ少、良由二頻年不レ稔、人民彫弊一也、今將レ追二辨本色一、國司則或死或替、相續難レ成、百姓則且病且飢、運進太難、伏望未進代、一收二穎稻一、混二合正稅一、庶於レ公無レ損、於レ私得レ便、但任二觀察使一以來、一依二舊令一辨進、許レ之、○廿一壬寅、奉二黑馬於丹生川上雨師神一、以レ祈レ雨也、從四位上吉備朝臣泉爲二左大辨一、左衛士督從四位上藤原朝臣仲成爲二兼右大辨一、從四位下藤原朝臣藤麻呂爲二右大舍人頭一、

作將據類史訂とあり營は類史寮に作る
○振贍、類史振を賑に作る賑振相通ず
○岱録、岱は泰山なり博物志に泰山一曰天孫言爲天帝孫也主召人魂東方萬物始成故知人生命之長短とあり、岱録は猶ほ鬼録と云が如し
○筑前國守、類史守を司に作る恐くは非
○各一員、各一は考異に二字舊脱據類聚三代格補とあり
○心非專一、心字原本闕字とす三代格に據て補ふ
○廢闕、原本闕廢に作る西本に據て改む
○本色、本の品を云
○雨師神、神名式に大和國吉野郡丹生川上神社とあるは是なり水神を祭り雨師と稱することは此に始て見ゆ雨師は周禮大宗伯に見え春秋緯に雨師は畢也(星名)と注し一説に共工氏之子爲雨師也といひ亦雨師謂之屛翳天神使也とも云
○月料、毎月の食料なり太政官式に凡親王以下月料云々毎月申官出充とあり續紀寶字五年二月丙

美濃守如故、從五位下雄川王爲散位頭、從五位上藤原朝臣繼彦爲治部大輔、右京大夫從四位下藤原朝臣藤繼爲兼兵部大輔、從五位上和朝臣建男爲少輔、侍從從五位下藤原朝臣世繼爲兼宮内卿、外從五位下山田連弟分爲内掃部正、從五位下藤原朝臣弟貞爲攝津介、内匠頭從五位上平群朝臣眞常爲兼尾張守、從五位下佐伯宿禰社屋(モリヤ)爲美濃守、從五位下□志可□眞廣爲介、從五位下紀朝臣長田麻呂爲大宰少貳、從五位下大中臣朝臣鯛取爲筑前守、○(廿三)甲辰、雨、群臣言、今日甘雨、不可不賀、皇帝曰、朕亦有此情、群臣稱萬歳、仍飲宴終日、有司奏樂、賜物有差、○(廿四)乙巳、停有品親王月料、○(廿八)己酉、從六位下坂上大宿禰大野授從五位下、正四位下安倍朝臣兄雄爲畿内觀察使、從四位上藤原朝臣緒嗣爲東山道觀察使、從五位下藤原朝臣安繼爲左大舍人助、從五位下安倍朝臣眞直爲右大舍人助、右衞士佐相摸介如故、從五位上藤原朝臣道雄爲治部大輔、從五位下藤原朝臣山人爲雅樂頭、但馬介如故、從五位上藤原朝臣繼彦爲民部大輔、從四位下藤原朝臣今川爲美濃守、從

辰條を參看すべし

（六月）

○非據、易繫辭傳下に非所據而據焉身必危とあるに據れり
○負乘之咎、易解封の六三に負且乘致寇至、象傳に自我致戎又誰咎也とあるに據れり
○量力就列、論語季氏篇に陳力就列不能者止とあるに據れり
○亡歿、原本亡を士に作る西本に據て改む

四位上藤原朝臣緒嗣爲陸奥出羽按察使、東山道觀察使右衛士督如故、從五位下佐伯宿禰社屋爲但馬守、從五位下坂上大宿禰六野爲陸奥鎭守副將軍、○三十辛亥、但馬國飢、遣使賑給、○六月壬子朔、曲宴、賜五位已上衣被、從五位下文室眞人正嗣爲中務少輔、豐後守如故、從五位下雄川王爲大監物、從五位下大枝朝臣永山爲大學頭、從五位下紀朝臣咋麻呂爲散位頭、外從五位下山田連弟分爲伊賀守、東山道觀察使從四位上守刑部卿兼右衛士督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言、伏奉去月廿八日勅、以臣遷任東山道觀察使、兼帶陸奥出羽按察使、臣以弱庸、躡□非據、負乘之咎、年月積淹、今復恩寵崇重、方任加授、無所逃責、禁悚相交、臣聞、簡才官人、聖上之通範、量力就列、臣下之恒分、臣性識羸劣、久纏疾痾、戎旅之圖、未嘗所學、而委愚臣、專總邊鎭、軍機多變、兵術靡常、若萬一有躓、事意相違、卽非啻微臣之死罪、還亦國家之大勞也、當今天下困疫、亡歿殆半、丁壯之餘、猶未休息、是知民窮兵疲、而守不可止、忽有不虞、何用支防、又臣前屢言、軍事難成、今當其位、益知不堪、伏願

陛下、曲賜鑒察、特愍臣之駑駘、免有臨時之失、不任悚懼屛營之至、謹昧
死奉表以聞、觸輕宸威、罔識攸措、○甲寅、山城國久世郡地六町賜高丘
親王。散位從三位藤原朝臣乙叡薨、右大臣從一位豐成之孫、右大臣
贈從一位繼繩之子也、母尙侍百濟王明信被帝寵渥、乙叡以父母之故、
頻歷顯要、至中納言、性頑驕好妾、而緣山臨水、多置別業、以信宿之、必備
內事、推國天皇（平城）爲太子時、乙叡侍宴、瀉酒不敬、天皇含之、後遜伊豫親王
事、辟連乙叡、免歸于第、自知無罪、以憂而終、時年卌八、○己未、增大宰府
幷管內諸國官人歷、以爲五年、停賜交替料、○庚申、從五位下多治比眞
人全成爲雅樂助、從五位下笠朝臣庭麻呂爲玄蕃助、正五位下百濟王
聰哲爲刑部大輔、越後守如故、從五位下紀朝臣良門爲大和介、鎭守將
軍從五位下百濟王敎俊爲兼陸奧介、從五位下坂上大宿禰大野爲權
介、從五位上藤原朝臣清主爲左馬頭、從五位上坂上大宿禰石津麻呂
爲右馬頭、外從五位下道嶋宿禰御楯爲陸奧鎭守副將軍、○壬戌、西海
道觀察使兼大宰帥從三位藤原朝臣繩主上表曰、伏奉發中之詔、擢臣

○高丘親王、平城天皇第一皇子大同四年四月立太子、後之を廢す
○藤原朝臣乙叡薨、續紀延曆三年五月紀に始見、少納言右衞士佐中衞中將下總守信濃守等を歷任す
○而緣山臨水、原本而を馬に作る補任に據て改む補任緣山臨水を緣山晴水に作る
○信宿、左傳莊三年に一宿爲舍再宿爲信とあり
○瀉酒、補任瀉を傾に作る
○發中之詔、文選羊祜表に出づ中は中心の意 心を感發せしむる詔を云

○食封、大納言以上及從三位以上に之を賜ふ例なるが觀察使として特に之を賜ひしなり
○卿爲方牧、原本卿下有字あり衍なり西本及類史に據て削る方牧は觀察使を云
○蕃鎭、大宰帥を云
○分憂、晉書宣帝紀に（天子加帝給事中錄尙書事、帝固辭）天子曰、吾於庶事、以夜繼晝、無須臾寧息、此非以爲榮、乃分憂耳とあるに據れり
○忠肅之懿、左傳文十八年に忠肅共懿、注に肅敬也懿美也とあり
○橘樹、私記に禁祕御抄編年記拾芥抄所謂橘樹蓋是とあり禁祕抄に南殿橘遷都已前人家橘也康保二年正月廿七日仰左右近府被移と見ゆ
○安倍朝臣弟當卒、續紀寶龜四年正月紀に始見、主稅頭少納言大藏少輔右少弁左少弁下野守等を歷任す
○擁門、詳ならず
○莫男驛、兵部式に見えず今詳ならず
○道俣驛、同じく兵部式に見えず今の智頭町大字

爲西海道觀察使、兼賜食封、忝聞顯命、恩越恒品、心魂震奮、啓處無地、臣聞、諸道觀察使、任在內官、更無外澤、至于賜封、固其宜矣、於臣身居當道、饒給公廨、兼亦食邑、偏濫殊甚、又臣性識庸虛、一無足取、況乎奉使經歲、政達未聞、伏願奉返使封、少免素飡、區區丹懇、伏待矜允、謹遣少典正七位下臣山田造益人、奉表以聞、詔報曰、忽省來表、獨辭使封、執志謙退、聲溢時聽、但遠出外州、人之所苦、卿爲方牧、兼居蕃鎭、思欲分憂同康景化、忠肅之懿、優賞斯期、宜得此意、無煩重表、○甲子、禁中有一株橘樹、彫枯經日、生意既盡、忽生花葉、楚楚可愛、因玆右近衛府奉獻、宴飮、賜物有差、散位從四位下安倍朝臣弟當卒、正五位上勳五等船守之孫、美作守從五位上意比麻呂之男也、寶龜四年叙從五位下、延曆廿年授從四位下、淸愼作性、夙夜在公、不過擁門、無事資産、家風也、○壬申、省因幡國八上郡莫男驛、智頭郡道俣驛馬各二匹、以不緣大路、乘用希也、東山道觀察使從四位上守刑部卿兼右衛士督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言、臣染疾已還、年月久矣、幸沐天地覆燾之恩、遂荷聖明昌泰之運、

智頭宿なるべしと云
○鴻私、鴻恩と云に同じ唐章懐太子請修書表に出づ
○平反所由、辭源に輕重酌中曰平盡翻舊案曰反謂廉察寃獄而出其罪也とあり平反の文字は漢書雋不疑傳に出づ
○方任、地方官の任務
○葛野河、類史河を川に作る古の京都は東西に分れ西の京は葛野川に近くして同川汎濫すれば其害を受けし故に特に其防禦に力を用ひられしなり
○御長眞人、西本なし考異に四字舊脫據上下文訂とあり
○用印之事云々、公式令に內印五位以上位記及下諸司公文則印外印六位以下位記及太政官文案則印諸司印(謂省臺寮司等各皆有印也)上官公文及案移牒則印とあり
○右大舍人頭、考異に右舊脫據上文補とあり

臣至今日、實賴鴻私、臣聞、定刑名決疑讞者、刑官之職掌也、然則罪之輕重、人之死生、平反所由、最合留意、又禁衛宮掖、撿挍隊仗者、衛府之守局也、然則以時巡撿、臨事陳設、若有闕失、罪更寄誰、是故快課拙、常慮其難、況今以庸愚、當出遠鎭、每思方任、未遑內官、豈帶宿衛、遙臨邊要、伏望解辭文武兩職、且避賢路、且專劣懷、斯臣之中識、匪敢外飾、無任丹款懇切之至、謹味死奉表陳情以聞、是日、令有品親王幷諸司把笏者進役夫、各有差、爲防葛野河也、從五位下葛井宿禰豐繼爲右京亮、從五位下大中臣朝臣魚取爲大和介、從五位下紀朝臣百繼爲上野權介、右衛士佐如故、從五位下紀朝臣良門爲越後守、○廿四乙亥、從五位下和朝臣男成爲大監物、從五位下礒野王爲圖書頭、駿河守如故、從五位下永原朝臣最弟麻呂爲諸陵頭、從五位下中臣丸朝臣豐國爲大炊頭、從五位下雄川王爲正親正、從五位下御長眞人仲嗣爲左兵庫頭、勅、用印之事、應據令格、宜諸國觀察使印、一從停止、若事可行下、准諸司請印、○廿五丙子、內匠助從五位下安倍朝臣益成爲兼常陸介、右大舍人頭從四位下藤原

○從五位下大中臣朝臣、同に下舊作上據下文訂とあり

○民部卿、原本民を式に作る西本及補任に據て改む

（七月）畝野牧、攝津志河邊郡に東西畝野村あり是なるべし

○七夕、陰暦七月七日を云天河の東に織女あり此夜河西の牽牛郎と會すと傳ふ荊楚歲時記に見ゆ

○從五位上多治比眞人、考異に上舊作下據上下文訂

○從五位下小野朝臣、同に從舊作正據上下文訂とあり

○掃部□、□恐くは頭字なるべし

朝臣緌麻呂爲兼美濃守、從四位下藤原朝臣今川爲越前守、○己卯、（廿八）從五位下小野朝臣眞野爲少納言、正四位上菅野朝臣眞道爲左大辨、山陰道觀察使如故、從五位下田口朝臣息繼爲左少辨、阿波守如故、神祇大副從五位下大中臣朝臣智治麻呂爲兼右少辨、從五位下藤原朝臣承之爲大監物、正四下藤原朝臣園人爲民部卿、山陽道觀察使東宮傅如故、從四位上吉備朝臣泉爲刑部卿、○秋七月辛巳朔、日有蝕之、○甲（四）申、勅、夫鎭將之任、寄功邊戍、不虞之護、不可暫闕、今聞、鎭守將軍從五位下兼陸奧介百濟王敎俊、遠離鎭所、常在國府、儻有非常、何濟機要、邊將之道、豈合如此、自今以後、莫令更然、○廢攝津國河邊郡畝野牧、爲牧馬逸出損害民稼、○丁（七）亥、幸神泉苑、觀相撲、令文人賦七夕詩、○己（九）丑、從五位上多治比眞人八千足爲少納言、正五位下安倍朝臣鷹野爲內藏頭、右近衛少將武藏守如故、從五位下小野朝臣眞野爲木工助、從五位上藤原朝臣眞雄爲主殿頭兼備前守、右近衛少將如故、從五位下紀朝臣岡繼爲掃部□、正五位下布勢朝臣尾張麻呂爲攝津守、右衛士佐從五

○土佐守、原本左を佐に作る西本に據て改む
○八屯之士、文選西京賦に衞尉八屯警夜巡書注に衞尉帥吏士周宮外於四方四角立八屯士さあり屯は字書に聚也勒兵而守曰屯さ見ゆ
○七華之卒、三代格華を萃に作る文選王元長曲水詩序に七萃連鑣、注に善曰周穆王傳日天子賜七萃之士郭璞曰萃聚也さあり周代の禁衞軍なりさ云
○姧宄、原本宄を究に作る三代格に據て改む宄は字書に姦也寇盜由內爲姦起外爲宄さ見ゆ
○正始、三國の魏主芳、及北魏の世宗宣武帝の代の年號なれど吏員を減ずる事考ふる所なし
○建武、後漢書光武紀建武六年六月詔に省減吏員縣國不足置長吏可併合者上奏の由を命じ因て四百餘縣、吏職減損十置其一と見ゆるを云ふか
○思從減省、原本從を從に作る三代格に據て改む
○內膳司食長上一人、考異に八字舊脫據類聚國

位下紀朝臣百繼爲兼越前介、從五位下大宅眞人淨成爲土左守、○十一辛卯、曲宴、賜侍臣衣被、○十三癸巳、禁苅麥苗、○十五乙未、從五位下多治比眞人全成爲大監物、從五位下藤原朝臣承之爲縫殿助、從五位上石川朝臣繼人爲玄蕃頭、從五位上藤原朝臣岡繼爲刑部大輔、從五位下讃岐公千繼爲少輔、備前權介如故、從五位下藤原朝臣淨岡爲典藥頭、是日、詔曰、八屯之士、本斷窺覦、七華之卒、義在禦侮、然則雖鉤陳所當、事資不虞、而變通之理、不必守株、今者亘猾無聞、姧宄不興、多置禁兵、空備警衞、靜而忖度、孔無爲也、正始之減吏員、建武之省國邑、蓋如此故也、其七衞府雜任已下、員伍稠疊、思從減省、卿等詳議、定數奏聞、○十八丙申、勅、陸奧鎭守官人、遷代之期、未有年限、宜自今以後、一同國司、其醫師以八考爲限、○二十庚子、停內藏寮御履長上一人、內膳司食長上一人、料理長上一人、藥師寺木工長上二人、東大寺別勅長上一人、金銀銅鐵長上一人、西大寺木工長上二人、法華寺一人、秋篠寺一人、○廿一辛丑、曲宴、賜觀察使已上衾、四位已上衣、是日、令內親王及命婦進堀

史補とあり食長上及料理長上は內膳司膳部卌人掌造御食とある內の一人なり
○廢衛門云々、三代格之を廿日に係く廢合の理由は職員令集解に大同三年七月廿日官奏云云々謹按令條禁衛宮掖以時巡撿斯衛士府之職也今衛門所掌復不異於此徒設官員事乖忙劇伏請一從廢省其諸門禁衛出入禮儀及門籍門牓等事同令衛士府主之然靱負爲名年祀積久今廢彼混此雖不改文字號曰左右靱負府と見えたり
○主帥、職員令に載せず
○門部、衛門府に門部二百人と見ゆる是なり
○門籍門牓、義解に載人名爲籍載物數爲牓とあり
○靱負府、靱負の名は天孫降臨の時大伴氏の祖天之押日命靱を負て奉仕せしに因れり
（〔八月〕）加少屬一員云々、三代格其官奏を七月二十六日に係く
○佑一員使部二人、使部は十人中二人を減ず
○元長官、官字は類史及

葛野川役夫、各有差、○（廿二）壬寅、廢衛門、併左右衛士府、廢衛士府主帥各六十人、置門部各一百人、其諸門禁衛出入禮儀及門籍門牓等事、令衛士府主之、仍號曰左右靱負府、其左右近衛及左右兵衛等府、近衛兵衛元各四百人、今定各三百人、使部元各卌人、今定各十人、從五位下紀朝臣百繼爲左衛士權佐、越前介如故、從五位下安倍朝臣眞直爲右衛士佐、相模介如故、○（廿七）丁未、幸大堰、賜五位已上衣被、○八月庚戌朔、曲宴、賜五位已上衣被、加太政官少納言一員、併左右大舍人寮爲一、加少屬一員、加內藏寮少允一員、其隼人司、依今年正月廿日詔書、既從廢省、併衛門府、而衛門府併左右衛士府、仍更置此司、隸兵部省、但廢佑一員使部二人、加大藏省大丞大錄、大膳職少進少屬各一員、○（三）壬子、從四位下三諸朝臣綿麻呂爲大舍人頭、右兵衛督播磨守如故、從五位下藤原朝臣安繼爲助、正五位下御長眞人廣岳爲宮內大輔、勅、齋宮寮之炊部司、元長官一人、而今改置長官主典、宜准舍人藏部等司官位、散位從四位下葛野王卒、三品薭田親王之第四男、時年卌

三代格に據て補ふ
○葛野王卒、延暦廿三年四月壬子紀に始見、主馬頭常陸守等を歴任す
○時年卅也、類史時上に卒字あり
○雜傜、雜役なり賦役令に凡令條外雜傜者毎人均使、總不得過六十日、義解に凡調庸之外國中諸事不論大小、總爲雜傜、其役法者准上條、次丁減正丁之半、中男減次丁之半也と見ゆ
○差役、木工寮に於て其工事に丁を雇ひて使役するを云、賦役令に凡雇役丁者、本司預計當年所作色目多少、申官錄付主計覆審支配、七月卅日以前奏訖、自十月一日至二月卅日内、均分上役、一番不得過五十日、若要月者不得過卅日云々とあり
○貢調庸期限、賦役令に詳なり
○積習實亦、亦は久の訛なるべし
○齋內親王、大原內親王、帝第三女、大同元年十一月卜定
（九月）大內人云々、兩宮儀式帳に大內人各三人

也、○乙卯、令諸國進傜帳、爲諸國雜傜差役各殊也、○庚申、外從五位下難波連廣成爲內藥正、○乙丑、野狐窟朝堂院中庭常棲焉、經十餘日而不見、○庚午、勅、凡貢調庸、期限已明、至有違闕、科條亦具、而諸國司等、不遵憲章、多致闕怠、積習實亦、頓難懲肅、宜後令條期、各七箇月、特莫劾罪、不得以此更爲合期、○辛未、幸神泉苑、飲宴極歡、賜五位已上綿、各有差、正五位下御長眞人廣岳爲左中辨、從五位下大伴宿禰彌繼爲中務少輔、從五位下小野朝臣眞野爲大監物、從五位下藤原朝臣承之爲大藏少輔、從五位下文室眞人正嗣爲齋宮頭、豐後守如故、從四位下紀朝臣廣濱爲美濃守、右京大夫如故、從五位下和朝臣雄成爲豐前□從五位下紀朝臣百繼爲左衛士佐、越前介如故、○癸酉、廢監物主典、○乙亥、齋內親王禊於葛野川、卽移入野宮、○丙子、夜、左右兵庫鉦鼓自鳴、○九月辛巳、勅、伊勢大神幷度會二宮大內人各三員、元是白丁、自今以後、宜預外考幷把笏、○癸未、齋內親王向伊勢、○甲申、從五位下安倍朝臣眞直爲少納言、右衛士佐相摸介如故、天文博士外從五位下志斐連國守爲

兼陰陽博士、從五位下中科宿禰雄庭爲主計頭、外從五位下犬上朝臣望成爲助、外從五位下飛驒國造祖門爲主稅助、從五位上多治比眞人八千足爲大藏大輔、正五位下百濟王教德爲宮內大輔、從五位上高橋朝臣祖麻呂爲大膳大夫、安藝守如故、從五位下大原眞人眞福爲備後守。○庚寅、十一大白晝見。○乙未、十六勅、權入食封、限立令條、比年所行、甚違先典、其招提寺封五十戶、荒陵寺五十戶、妙見寺一百戶、神通寺廿戶、宜且納穀倉院。○禁私養鷹、其特聽養者、賜公驗焉。○戊戌、十九幸神泉苑、有勅、令從五位下平群朝臣賀是麻呂作和歌曰、伊賀爾布久、賀是爾阿禮婆可、於保志万乃、乎波奈能須惠乎、布岐牟須悲太留、皇帝歎悅、即授從五位上。勅、去五月詔書曰、言上飢疫諸國者、今年之調、宜咸免除者、然則遭疫國內、理須咸免、詔旨分明、不足致疑、今聞、或國司等、免見病之輩、徵未病之民、愚吏之失、還致民憂、宜早下知、莫令更然、其浪人調、幷中男作物、亦准於此。○己亥、二十詔曰、官多則政黷、人少則事瞀、故省併量宜、委寄期要、昔諸司百寮、有閑有劇、是以資俸賞賜、或厚或薄、今官既從改、賞何依舊、宜要

さあり大神宮式には各四人さす後一人づゝを増加せるなり○大白、金星をいふ抄天地部に兼名苑云大白星一名長庚(此間由布都々)暮見於西方爲長庚耳さあり○招提寺、十五大寺の一大和國添下郡都迹村字五條にあり○荒陵寺、攝津志に東生郡四天王寺、天王寺村山號荒陵一名三津寺又名難波大寺さあり四天王寺をいふ○妙見寺、拾芥抄下本に在王城四方又號靈巖寺歟さあり○神通寺、大和志葛上郡神通寺村あり此地にありしなるべし○穀倉院、拾芥抄中末に二條南朱雀西在大學西納畿內諸國銅錢無主位職田及沒官田大宰稻等諸庄物云々さあり○伊賀爾布久云々、如何に吹く風にあればか大嶋の尾花の末を吹結びたるなり大嶋は神泉苑の池中の嶋にて大さは尊稱なり佞齋の說に其曰大者以御苑尊之也さ云り神泉

苑は本朝文粹に禁苑之其一也とあり方八町ありて苑中に丘あり野あり池あり瀧ありて幽邃の地なり九月中旬に行幸あり賀是麻呂をして季秋の實景を詠しめ給ひしなり

○歎悅、類史歎を歡に作る

○飢疫、西本疫を病に作る

○要劇、官に繁閑あれば特に劇務に當る人に之を給す

○時服、春夏秋冬の四時に給ふ故に時服と云諸司の長上番上に分ち上日を計算して二季に給ふ十二月より五月までを夏時服とし六月より十一月までを冬時服とす

○普給衆司、西本普を並に作る

○不四得六、田租の十分の四を免じて六を官に納むるを云

○□河內等國、□は准字なるべし

(十月)左衞士坊、西本士坊の二字判明せず

○能登郡、今の鹿嶋郡

○越蘇、倭名抄に越蘇鄕あり是なり兵部式に越蘇驛見ゆるは更に之を置か

劇馬料時服公廨、悉革前例、普給衆司、詳爲條例、具以奏聞、○（廿二）庚子、勅、去大同元年十一月六日格云、頻年不稔、民弊特甚、非有輕租、何得自存、伊賀、紀伊、淡路、三箇國田租、始自今年六箇年、收不四得六、亦今年三月十九日格云、收備後、安藝、周防等國田租、不四得六、有疑通計、宜每戸立率、免四收六、莫用通計之法、○（廿六）乙巳、大和國言、此國水田一萬七千五百餘町、河內、和泉兩國田一萬七千餘町、以此比彼、多少無異、而班田使員、已倍兩國、伏請□河內等國、省使員數、除民之弊、許之、仍省次官一人、判官二人、主典二人、○冬十月己酉朔、宴五位已上、賜綿有差、從五位下佐伯王爲大監物、從五位下多治比眞人全成爲縫殿助、大外記從五位下豐宗宿禰廣人爲兼主稅頭、山陰道觀察使判官、陰陽助如故、○（七）乙卯、遊獵北野、布勢內親王奉獻、飲宴極日、有司奏樂、賜五位以上衣被、○（八）丙辰、左衞士坊失火、燒百八十家、賜物有差、○（十九）丁卯、廢能登國能登郡越蘇、穴水、鳳至郡三井、大市、待野、珠洲等六箇驛、以不要也、東山道觀察使左近衞中將正四位下行春宮大夫安倍朝臣兄雄卒、從五位上粳虫之孫、

无位道守之子也、乏文堪武、性好犬、高直有耿介之節、所歷之職、以公廉稱、伊豫親王無罪而廢、當上盛怒、群臣莫敢諫者、兒雄抗辭固爭、雖不能得、論者義之、○廿二庚午、群烏集朝堂院東一殿、啄剝座茵、○廿七乙亥、行幸近江國大津、修禊、以御大嘗也、○廿九丁丑、制、稽於前例、大嘗散齋三月也、自今以後、以一月爲限、○戊寅朔十一月四辛巳、從四位上秋篠朝臣安人爲右大辨、左大辨正四位上菅野朝臣眞道爲兼大藏卿、從五位下谷忌寸野主爲內掃部正、左兵衞督從四位上巨勢朝臣野足爲兼春宮大夫、近江守如故、是夜、有盜入內藏寮府、爲人所圍、時屬大嘗、恐其自殺、遣使告喩、投昏出去、○十一戊子、勅、如聞、大嘗會之雜樂伎人等、專乖朝憲、以唐物爲餝、令之不行、往古所譏、宜重加禁斷、不得許容、○十四辛卯、奉幣帛於伊勢大神宮、以行大嘗事也、是夜、御朝堂院、行大嘗之事、○十五壬辰、於豐樂殿宴、五位已上、二國奏風俗歌舞、賜五位已上物、及二國獻物班給諸司、○十六癸巳、宴飮終日、賜五位以上衣衾、○十七甲午、奏雜舞幷大歌五節舞等、賜由貴主基兩國國郡司役夫物、各有差、是日、從五位下葛井王授從五位上、正六位上新

れしなるべし越蘇は後世江曾と書けり
○穴水、今の穴水町なり
○鳳至郡、抄國郡部に鳳至(不布志)とあり字類抄にフゲシと訓り今も亦同じ
○三井、三州志に三井鄕見ゆ
○大市、詳ならず郡の西南仁岸阿岸二鄕の地なるべしと地理志料に云り
○待野、倭名抄に待野鄕あり後に町野莊と稱す
○珠洲、珠洲郡珠洲鄕なり後正院鄕と稱す按に延曆廿四年紀に珠洲郡の名見えたれば珠洲の上に珠洲郡の三字脫ちたるか
○安倍朝臣兒雄卒、大同元年二月庚戌紀に始見、中衞少將內膳權正畿內觀察使等を歷任す
○耿介、志節ありて人と苟合せざるを云
○座茵、紀略一褥に作る
○大津、輿地志略に志賀郡の境區にあり日本廣邑三十六のその一にして近江二湊(大津八幡)の第一なりと云
○大嘗散齋、山槐記に元曆元年八月十一日條に抑大嘗會潔齋元三月也而大

同三年改爲二一月一仍被レ載二延喜式一とさ見え此事平戸記（仁治三年）にも見ゆ
（（十一月））以唐物爲餝、大嘗祭は純粹なる古風の祭祀にして其粧飾にも唐物を用ふべきにあらず然るに標山等に支那風の飾をなし弊風甚しかりし故に此勅ありしなり
〇御朝堂院行大嘗之事、大極殿の前庭龍尾壇上に大嘗宮を設けて祭祀を行はせ給ひしなり
〇二國、悠紀主基の二國なり
〇大歌、續紀天應元年十一月己巳の條（下三八一頁）に注す
〇五節舞、上に注す
〇兩國國郡司、考異に下國舊脫據二類史一補さあり
〇賜五位已上摺衣、類史賜の上に又字あり
〇姉繼、考異に繼舊脫據二類史一補さあり

城王從五位下、從四位下三諸朝臣眞屋麻呂、藤原朝臣大繼從四位上、正五位上藤原朝臣繼業、正五位下安倍朝臣鷹野從四位下、從五位上高橋朝臣祖麻呂、藤原朝臣繼彥、藤原朝臣道雄、紀朝臣田上、藤原朝臣眞雄正五位下、從五位下永原朝臣最弟麻呂、大伴宿禰人益、石川朝臣繼人、三嶋眞人年嗣、百濟王元勝、多治比眞人今麻呂、紀朝臣繩麻呂、讃岐公千繼、藤原朝臣山人、安倍朝臣眞勝、大中臣朝臣智治麻呂從五位上、正六位上大中臣朝臣弟守、紀朝臣越永、安倍朝臣寬麻呂、藤原朝臣弟葛、多朝臣人長、安倍朝臣淸繼、齋部宿禰廣成從五位下、外從五位下秦宿禰都伎麻呂外從五位上、正六位上名草直道主外從五位下」、賜二五位已上摺衣一、〇丙申（十九）、從四位上藤原朝臣緒嗣、吉備朝臣泉授二正四位下」、正四位上五百井女王、藤原朝臣勤子從三位、從四位下藤原朝臣藥子正四位下、无位紀朝臣田村子從四位下、從五位上三善宿禰姉繼、无位伊勢朝臣繼子正五位下、无位藤原朝臣佐爾子從五位上、无位坂上大宿禰井手子、大中臣朝臣百子、藤原朝臣高子、藤原朝臣岡子、正六位上

粟田朝臣仲繼從五位下、從七位上尾張連眞縵外從五位下、○甲辰、（廿七）從五位下大中臣朝臣常麻呂爲神祇大副、從五位下藤原朝臣弟葛爲陰陽助、正五位上大野朝臣直雄爲兵部大輔、從五位下谷忌寸野主爲主殿助、從五位下新城王爲內掃部正、從四位下藤原朝臣繼業爲左京大夫兼大和守、侍從如故、從四位下紀朝臣廣濱爲右京大夫、美濃守如故、從五位上藤原朝臣鷹養爲造西寺長官、從五位下安倍朝臣清繼爲下野介、從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲丹波守、左兵衞佐從五位下藤原朝臣貞本爲兼但馬介、內藏助如故、式部少輔從五位下御室朝臣今嗣爲兼出雲介、從五位下安倍朝臣清足爲美作介、從五位下大中臣朝臣弟守爲備前介、從五位下紀朝臣越永爲讚岐介、雅樂頭從五位上藤原朝臣山人爲兼伊豫守、從五位上多治比眞人今麻呂爲大宰少貳、從五位下巨勢朝臣諸成爲右兵庫頭、○丁未、（三十）右衞士坊失火、燒七十八家、賜物有差、○十二月戊申朔、曲宴奏樂、五位以上賜衣被、○辛亥、（四）外從五位下日下部連高道爲造酒正、從五位下伊勢朝臣繼麻呂爲園池正、助

○廣濱、西本濱を清に作る

（十二月）

○定額隼人、隼人式に凡番上隼人廿人有闕者取五畿內及近江丹波紀伊等國隼人幹了者申省補之不在給時服及粮之限とあり

○永原朝臣、姓氏錄に見えず永原は近江國野洲郡の地名なり是に據れるか六月乙亥紀に永原朝臣最弟麻呂見ゆ同姓なるべし

○丘山非重、莊子に丘山積卑而爲高と見ゆ

○奥郡、陸前國黑川郡以北を云

○作梗、字書に梗は塞也害也とあり

○韜略、軍略の意にて六韜三略の約語、崔日用並に羅隱の詩等に出づ

○朝廷之威、原本廷を庭に作る西本に據て改む

教外從五位下名草直道主爲兼越中權掾、○壬子、勅、定額、隼人、若有闕者、宜以京畿隼人、隨闕便補之、但衣服粮料、莫同舊人、特准衞士給之、其女者不在補限、○甲寅、大雪、宴飲終日、五位已上賜綿有差、○丙辰、從五位上藤原朝臣子伊太比、從五位上藤原朝臣惠子、賜姓永原朝臣、○甲子、東山道觀察使正四位下兼行右衞士督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言、臣以空虛、謬叨非據、司帶兩使、封食二百、兼復預武禁、寄備宿衞、荷恩則丘山非重、議勞則涓塵未効、心□神飛、罔知所厝、臣聞、擇才官人、聖上之宏規、量力取進、臣下之恒分、故名器無濫、授受惟宜、臣前數言、陸奥之國、事難成熟、至于今日、用臣委彼、退慮前言、益知不堪、加以今聞、國中患疫、民庶死盡、鎭守之兵、無人差發、又狂賊無病、強勇如常、降者之徒、叛端既見、因茲奥郡庶民、出走數度、儻乘隙作梗、何以支擬、臣生年未幾、眼精稍暗、復患脚氣、發動無期、此病歲積、兼乏韜略、若不許賤臣、猶任其事、縱令萬一有失、非只臣身之伏誅、還紊天下之大事、然則上損朝廷之威、下敗先人之名、伏願皇帝陛下、更簡良材、以代愚臣、方隅之鎭、速寄

○封職、食封と官職となり
○熟國、陸奥出羽の如く皇化に從はざる夷族ある國に對して人民のよく皇化になれたる國を云
○製錦之誠、製錦には左傳襄卅一年に子有美錦不使人學製焉大官大邑身之所庇也而使學者製焉其爲美錦不亦多乎とあるに出づ製は裁也と注す未熟の者に地方の政を委ぬるは美錦を裁方を辨へぬ者に裁たしむるが如しといふなり此にては地方の政を預るを云

【大同四年】

○正月七日十六日兩節會、白馬節會と踏歌節會となり
○從五位下大伴宿禰、考異に下舊作上據類史訂とあり

其人、臣生長京華、未閑宜風、望請、咸返進所帶封職、被任熟國長官、且問百姓之苦、且療一身之病、雖製錦之誠慙於前古、特願天鑒紆光、曲賜矜允、無任競懼慊懇之至、謹奉表以聞、經黷嚴扆、伏深戰越、有勅不許、○戊（廿二）辰、從六位下息長丹生眞人文繼授從五位下、外從七位下日置臣登主外從五位下、无位笠朝臣道成從五位下、道成、皇太弟（嵯峨）乳母也、特有此敍、○丙（廿九）子、免伊賀國大同元年正稅未納一萬九千束、以水害殊甚、百姓彫弊也、

四年（己丑）春正月戊寅朔、廢朝、風寒異常也、宴五位已上於前殿、賜物有差、正三位藤原朝臣內麻呂授從二位、○己（二）卯、正四位下藤原朝臣葉子授從三位、○甲（七）申、宴侍臣賜衣被、○丁（十）亥、令諸國停獻正月七日十六日兩節會珍味、以煩民也、○壬（十五）辰、有犬登大極殿西樓上吠、烏數百群翔其上、○癸（十六）巳、春宮亮從五位下藤原朝臣冬嗣爲兼侍從、齋宮頭從五位下文室眞人正嗣爲兼上總守、從五位下息長丹生眞人文繼爲介、左近衞少將從五位下大伴宿禰和武多麻呂爲兼常陸權介、從五位下百濟王敎俊

○名神、臨時祭式に載する名神祭に預り給ふ諸神なり

○三諸朝臣、紹運錄に二品長親王三世孫綿麻呂延曆十二賜三緒（恐くは諸の誤）朝臣、大同四正改賜三山朝臣、同六月改三山姓賜文室眞人とあり

（二月）倭漢惣歷帝譜圖、當時此の如き譜圖ありて世に洽く流布せしなるべし故に之を沒收して姓氏の混亂を防がせ給ひしなり

○大原內親王、紹運錄に桓武天皇々女齋宮と爲給ひ貞觀九年十月九日薨、母伊勢鸂子とあり

○中紫朝服、衣服令に諸臣禮服一位深紫衣三位以上淺紫衣朝服衣色同禮

爲下野守、從五位下谷忌寸野主爲豐後介、從五位下佐伯宿禰耳麻呂爲陸奥鎭守將軍、○乙未、十八令天下諸國、爲名神寫大般若經一部、奉讀供養、安置國分寺、若无國分寺者、於定額寺、○戊戌、廿一曲宴奏樂、賜四位已上被、從四位上三諸朝臣眞屋麻呂、從四位下三諸朝臣綿麻呂等賜姓三山朝臣、○庚子、廿三從五位下息長丹生眞人文繼爲內藥正、上總介如故、從五位下多治比眞人全成爲上總守、陰陽博士外從五位下志斐連國守爲兼因幡權掾、從五位下豐宗宿禰廣人爲肥後介、主稅頭大外記如故、從五位下文室眞人正嗣爲豐後守、起從五位下安倍朝臣淸繼復本官、○二月丁未朔、曲宴、賜四位已上被、○辛亥、五勅、倭漢惣歷帝譜圖、天御中主尊標爲始祖、至如魯王、吳王、高麗王、漢高祖命等、接其後裔、倭漢雜糅、敢垢天宗、愚民迷執、輙謂實錄、宜諸司官人等所藏皆進、若有挾情隱匿、乖旨不進者、事覺之日、必處重科、○甲寅、八山城國乙訓郡地六町賜大原內親王、○丁巳、十一宴五位已上、賜布有差、有勅聽右大臣從二位藤原朝臣內麻呂著中紫朝服、○己未、十三從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲神

服一とあり其中間の色を著せしめ給ひしなり
○清岳、三年七月乙未紀淨岡に作る
○佐渡、西本佐度に作る
(閏二月)給要劇錢云々、三代格卷六に載す
○普給、原本普を善に作る三代格に據て改む
○每人給米二升、三代格に據るに人下恐くは日字を脱す原本升を舛に作る格に據て改む字書に舛背也と云
○上日、出勤の日を云

祇大副、從五位下藤原朝臣冬嗣爲右少辨、侍從春宮亮如故、從五位下安倍朝臣兄麻呂爲大監物、從五位下巨勢朝臣諸成爲圖書助、從五位下文屋眞人正嗣爲陰陽頭、豐後守如故、從五位上安倍朝臣眞勝爲大學頭、備中守如故、從五位上百濟王元勝爲大判事、從五位下伊勢朝臣繼麻呂爲主殿助、從五位下氷上眞人河繼爲典藥頭、從五位下藤原朝臣伊勢人爲齋宮頭、正五位下坂田宿禰奈弖麻呂爲造東寺長官、從五位下藤原朝臣清岳爲筑後守、從五位下安倍朝臣眞直爲左近衞少將、侍從少納言如故、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲右衞士佐、從五位下佐伯王爲右兵庫頭、○己巳(廿三)、加少納言一員、中監物二員、少監物二員、○(廿四)庚午、置佐渡隱岐兩國掾各一員、○壬申(廿六)、皇帝不豫、○閏二月(丁丑朔)庚辰(四)、勅、前例特簡劇官、給要劇錢、准其官位、多少有差、仍革前例、官無閑劇、皆令普給、但米價已貴、懸倍往年、依舊給錢、事乖隨時、加以食料之儲、豈有多少之異、改張前例、四位已下初位已上、每人給米二升、但觀察使不預此例、夫奉公之道、清愼爲先、無功之賞、廉吏所耻、宜細勘上日、依實申送、務從

○安部朝臣鷹野卒、大同元年二月甲辰紀に治部少輔と爲すと見え下總守右衛門權佐少納言內藏頭等を歷任す
○時變臣激帝、時字は西本に據て補ふ變は左右の近習者なり
○大杖、獄令に杖皆削去節目（フシメ）長三尺五寸訊囚及常行杖大頭徑四分小頭三分とあり
（三月）狠籍、籍は當に藉に作るべし

正直不得踈畧、○〔九〕乙酉、令天下諸國進膂力人、○〔十四〕庚寅、廢減供御并年中
雜用、諸司官人已下月料、○〔十七〕癸巳、屈淸行僧廿人於內裏讀經、○〔廿一〕丁酉、制、
越前國氣比神、豐前國八幡大菩薩宮司等、遷替之日、准國司與解由、○
〔廿五〕辛丑、始遷志摩國國分二寺僧尼安置伊勢國國分寺、○〔廿八〕甲辰、外從五位
下山田連弟分爲伊賀守、從四位下安部朝臣鷹野卒、鷹野者、從五位
下猪名麻呂之子也、有仁慈之性、多所汲引、侍從中臣王連伊豫親王之
事、經拷不服、時變臣激帝令加大杖、王背崩爛而死、□○三月〔丙午朔〕〔二〕丁未、
前上總介石川朝臣道成、大掾千葉國造大私部直善人、並授本位、道成
從五位下、善人外從五位下、在任之日、贓汙狠籍、並追位記、矜有其老舊
之勞、故忖復焉、○〔八〕癸丑、外從五位下犬上朝臣望成爲日向守、○〔九〕甲寅、雷
雨雹、○〔十一〕丙辰、從五位下大中臣朝臣常麻呂爲兵部少輔、右衛士佐如故、
從五位上和朝臣建男爲駿河守、圖書頭從五位下礒野王爲兼武藏守、
從五位上多治比眞人八千足爲下總守、外從五位下難波連廣名爲丹
波掾、○〔十四〕己未、始置左右兵庫史生各二員、內藥司二員、造兵司二員、鼓吹

司二員、隼人司二員、囚獄司二員、織部司二員、内膳司二員、主水司二員、加左右辨官各四員、内藏寮二員、陰陽寮二員、兵部省四員、大藏省八員、大膳職四員、主殿寮二員、左右馬寮各二員、減内記二員、内匠寮二員、散位寮二員、雅樂寮一員、木工寮四員、園池司一員、彈正臺一員、東西市司各一員、○庚申、定賜諸司史生以下雜色人以上時服幷月料之法、○辛酉、山城國獻白鼠、○癸亥、長岡京地四町賜四品坂本親王、○丙寅、定雅樂寮雜樂師、歌舞師四人、笛師二人、唐樂師十二人、横笛師二人、高麗樂師四人、横笛箜篌莫目舞等師也、百濟樂師四人、横笛箜篌莫目舞等師也、新羅樂師二人、琴舞等師也、度羅樂師二人、鼓舞等師也、伎樂師二人、林邑樂師二人、○戊辰、山城國葛野郡地八町賜大原内親王、是日、東山道觀察使正四位下兼行右衞士督陸奧出羽按察使藤原朝臣緒嗣、爲入邊任、辭見内裏、召昇殿上、令典侍從五位上永原朝臣子伊太比賜衣一襲被等、○己巳、緣修宮殿、欲暫御於辨官廳、而役夫一人自辨官南門墜死、仍停焉、○乙亥、從三位坂上大宿禰田村麻呂、藤原朝臣葛野麻呂、

○大藏省八員、考異に五字脱據類史補とあり
○坂本親王、桓武天皇々子なり
○丙寅、職員令集解に此符を載せて廿八日とす
○歌舞師四人、職員令に歌師四人儛師四人とあり
○笛師二人、令同じ
○唐樂師十二人、令同じ
○横笛師二人、唐樂の横笛師なり
○高麗樂師四人、令同じ
○横笛箜篌莫目舞、横笛は高麗笛（百濟樂師の下に横笛とあるは百濟の笛）箜篌は抄調度部音樂具に本朝格云箜篌師一人（箜篌俗云空古ゝ、案箜字未詳）また之と相並て箜篌を擧げたるが箋注の說に箜篌は竪箜篌と稱し箜篌は臥箜篌と稱するものなりと云（續紀寶龜八年三月戊辰紀を參看すべし）莫目舞は同じく抄に莫目本朝格云莫牟師一人（牟或作目俗云万玖毛）とあり
○百濟樂師四人、令同じ
○新羅樂師二人、令四人
○度羅樂師二人、令になし
○伎樂師二人、令一人、

義解に謂吳樂とあり
○林邑樂師二人、令になし
○入邊任、按察使として奥羽に赴くを云
○從五位上永原朝臣、考異に上舊作下據上文訂とあり
(四月)京下、類史下を中に作る
○風病、醫心方三に黃帝大素經云風者百病之長也至其變化爲他病也とあり奇魂一には今俗にいふ癇とみえたり風の病には非る也と云り
○淸眞心、眞或は直の誤ならむか然らばキヨキナホキコヽロと訓むべし
○後太上天皇、嵯峨天皇に坐す
○因攸寄顏、寄顏は原本缺字とす西本に據て補ふ
○皇階、皇位に同じ
○半武、武は步武の武、字書に六尺爲步半步爲武とあり俗にいふ一足の處でと云意なり
○濫庶績於一簣、所謂九仞の功を一簣に缺く意なり
○丁丑、私記に玄道按文正元年淸原氏勘例曰天皇大同四年四月戊子即位

並授正三位、正四位上菅野朝臣眞道、正四位下藤原朝臣園人、並從三位、○夏四月丙子朔、讀經宮中、又遣使於京下諸寺誦經、天皇自從去春寢膳不安、遂禪位於皇太弟(嵯峨)、詔曰、現神等大八洲所知倭根子天皇我詔旨良末止勅御命乎、親王等王等臣等百官乃人等天下公民衆聞食止宣、朕躬劣弱弖洪業爾不耐己止乎、本自思畏利賜許止暫毛不息、加以朕躬元來風病爾苦都々身體不安志弖、經日累月弖、万機缺懈奴、今所念久、此位波避天、一日片時毛御體欲養止奈毛所念須、故是以皇太弟止定賜流某親王爾天下政波授賜布、諸衆此狀乎悟、淸眞心乎毛知、此皇子乎輔導天下百姓乎可令撫育止勅、天皇御命乎、衆聞食止宣、後太上天皇涕泣固辭、乃上表陳讓曰、臣幽昧自天、教訓無染、逸遊率性、機務未涉、陛下奬飭、忝茲儲貳、顧惟重託、因攸寄顏、頃者聖體乖和、淹除日月、醫藥無驗、責在臣躬、今忽遜神器、傳之虜蒙、事殊恒制、聞命兢惕、若登此皇階、當彼大寶、人神之聖既缺、中外之心又沮、冀日復嘗藥、祈天遠壽、佇昇平於半武、濫庶績於一簣、無任懇迫之至、謹奉表以聞、天皇不許、○丁丑、天皇避御於東宮、

於大極殿、辛丑、參河國爲悠紀、美作國爲主基、中原氏勘文後紀纂亦同、則辛丑爲是とあり
○一物、禮記文王世子に行一物而三善皆得者唯世子而已、其齒於學之謂也、疏に物猶事也、謂與國人齒讓之一事、而三善者謂衆知父子、衆知君臣、衆知長幼、是其三善とあり
○三朝、古へ天子に三朝あり燕朝内朝外朝是なり
○鄙衷、原本衷字缺く西本に據て補ふ
○檮昧、字書に無知貌とあり
○穆卜有効、尚書金縢に我其爲王穆卜、傳に穆は敬也とあり
○齒冑、原本冑を胃に作る西本に據て改む
○事乖釋重、釋重は重位を釋く意即ち讓位の實に乖けりとなり
○太上天皇之旨、天字は類史に據て補ふ

上未敢當命、○戊寅、上復抗表曰、臣聞、天下神器、不可輕傳、皇業大寶、非聖不踐、抗表冒請、庶蒙優容、丹款不孚、玄鑒悠邈、俯仰焦惶、心魂靡居、臣學慙一物、勤缺三朝、生長深宮、素闇稼穡、常欲靜忝宸位、周施聖訓、頌王澤於泰平、視至治之欝起、而陛下不察鄙衷、强授鼎祚、臣之檮昧、何堪之有也、但以君唱臣和、上下之分、綸詔忽降、敢不對揚、苟欲遂志、還懼稽命、臣冀咨詢公卿、擁攝万機之務、穆卜有効、當待翌日之瘳、然後臨學、齒冑、□道終年、在臣至願、實爲欣幸、無任悚戰之至、謹重詣闕、奉表以聞、詔不許、天皇遂傳位、避病於數處、五遷之後、宮于平城、而事乖釋重、政猶煩出、尚侍從三位藤原朝臣藥子常侍帷房、矯託百端、太上天皇甚愛、不知其奸、遷都平城、非是太上天皇之旨、天皇慮其亂階、擯於宮外、官位悉免焉、太上天皇大怒、遣使發畿內幷紀伊國兵、與藥子同輿、自川口道向於東國、士卒逃去者衆、知事不可遂、廻輿旋宮、落髮爲沙門、

日本後紀卷第十七

（三條西家本奥書）

天文元臘廿八書寫了

日本後紀卷第二十

起弘仁元年九月盡十二月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

太上天皇　嵯峨

九月戊戌朔、遣使畿內、班民口田、勅、大和國田租地子稻永充平城宮雜用料、○[六]癸卯、依太上天皇（平城）命、擬遷都於平城、正三位坂上大宿禰田村麻呂、從四位下藤原朝臣冬嗣、從四位下紀朝臣田上等爲造宮使、○[七]甲辰、播磨國言、據格、可以勳位人差點□兒、而國內勳位、或死或逃、見在之徒、□□老疾、不堪防守、伏望差白丁補其闕、□之、○[十]丁未、緣遷都事、人心騷動、仍遣使鎭固伊勢近江美濃等三國府幷故關、正四位下巨勢朝臣野足、從五位下佐伯宿禰永繼爲伊勢使、正五位下御長眞人廣岳、從五位下小野朝臣岑守、坂上大宿禰廣野爲近江使、正五位上大野朝臣直雄爲美濃使、擊右兵衞督從四位上藤原朝臣仲成於右兵衞府、詔曰、

【弘仁元年】坂上大宿禰原本禰を稱に作る誤なれば改む
○差點□兒、□は健字なるべし健兒はチカラビトといひ又コムニと云後にコムデイと云り倭訓栞に武家の足輕の類也といひ貞丈雜記に健兒所は中間の居る所也と云諸國に之を置き其數少きも二十人多きは二百人あり國司に屬して國庫其他の守衛に任ず故に弓馬に練習せる壯丁を採れり
○□□老疾、□□は多是の二字なるべし
○□之、□は許字なるべきか西本には二字空白とす
○緣遷都事云々、大同四年四月戊寅紀に尙侍藥子常侍帷房、矯託百端、太上天皇甚愛、不知其姧、遷都平城、非是太上天皇之旨とある如く遷都の事

は藥子の奸計に出て騷亂の階とならむことを恐れて人心恟々たりしなり
○國府、國衙所在の地を云諸國必す國府あり現今も地名として存するもの多し
○故關、當時は三關既に廢せられて其舊趾存す故に故關と云
○從四位上藤原朝臣仲成、考異に上舊作レ下據二上文及類史紀略一訂とあり
○詔曰、尙侍藤原藥子同仲成を處置し給ふ詔なり
○趁逐、原本逐を遂に作る西本及下文に據て改む
○擅、原本檀に作る西本及類史に據て改む
○御坐、原本坐を座に作る西本及類史に據て改む
○二所朝庭、太上天皇と天皇とを申奉る
○先帝、平城天皇
○萬代宮、萬代不易の意にて永世此に都し給ふを云
○先帝乃親王夫人乎云々、親王は高岳、巨勢、阿保の三親王並に内親王御四方坐しき、凌侮り奉れる事實は詳ならざれど種々に苦しめ奉りしなる

天皇詔旨良麻止勅御命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、尚侍正三位藤原朝臣藥子者、挂畏柏原朝廷乃御時爾、東宮坊宣旨止爲氐仕賜比支、而其爲性能不能所乎知食氐、退賜比去賜氐支、然物乎百方趁逐氐、太上天皇爾近支奉流、今太上天皇乃讓國給閇流大慈深志乎不知之氐、己我威權乎擅爲止之氐、非御言事乎御言止云都々、褒貶許止任心氐曾无所恐憚、如此惡事種種在止毛、太上天皇爾親仕奉爾依氐、思忍都々御坐、然猶不飽足止之氐、二所朝庭乎母言隔氐、遂爾波大亂可起、又先帝乃萬代宮止定賜閇流平安京乎、棄賜比停賜氐之平城古京爾遷左牟止奏勸氐天下乎擾亂、百姓乎亡弊、又其兄仲成、己我妹乃不能所乎波不教正之氐、還恃其勢氐、以虛詐事、先帝乃親王夫人乎凌侮氐、棄家乘路氐東西辛苦世之牟、如此罪惡不可數盡、理乃任爾勘賜比罪奈閇賜布閇久有止毛、所思行有依氐、輕賜比宥賜比氐、藥子者位官解氐自宮中退賜比、仲成者佐渡國權守退止宣天皇詔旨乎衆聞食止宣、又遣使告于柏原陵曰、天皇

御命坐、挂畏支柏原大朝庭爾申賜閇止申久、內侍尚侍正三位藤原朝臣藥子者、初太上天皇乃東宮止坐之時爾、東宮宣旨止爲氏仕賜比支、而其爲性乃不能所乎知食氏、退賜比去賜氏支、然物乎百方趁逐氏、太上天皇爾近支奉氏、非御言事乎御言止云都々、褒貶任意氏、曾无所恐憚、又萬代宮止定賜之平安京乎毛、棄賜比停賜氏之平城古京爾遷左牟止奏勸氏、天下乎擾亂、百姓乎亡弊、又其兄仲成、恃己妹勢氏、以虛詐事親王夫人乎凌侮氏、棄家乘路氏東西辛苦世之牟、如此罪惡不可數盡、因茲藥子者官位解氏、自宮中退賜、仲成者佐渡國權守退賜比都、又續日本紀所載乃崇道（早良）天皇與贈太政大臣藤原朝臣不好之事、皆悉破却賜氏支、而更依人言氏、破却之事如本記成、此毛亦无禮之事奈利、今如前改正之狀、差參議正四位下藤原朝臣緒嗣、畏彌畏牟毛申賜久止奏、是日、宮中戒嚴、藤原朝臣雄友授本位正三位、正五位下御長眞人廣岳、坂田宿禰奈氏麻呂、石川朝臣清直、多治比眞人今麻呂從四位下、正六位上弟村王、高瀨王、廣

べし
○又遣使、考異に使舊脫據類史補とあり
○而其爲性云々、而以下去賜氏支に至る十九字は考異に舊脫據類史補とあり但し類史には而字なし
○奏勸氏、類史奏を奉に作る紀略は此に同じ奏は奏上し勸は勸め奉るを云ふ
○續日本紀所載云々、崇道天皇卽ち早良太子藤原種繼と隙あり延曆四年人をして之を殺さしめ給ひしかば桓武天皇怒りて太子を廢し淡路に流し給ひし事實を續日本紀に詳に記載せしを祟ありしかば後に其記事を悉く削除せしめ給ひしを仲成藥子等が更に其記事を本の如くに挿入せしめたるは無禮なれば復前の如くに改正し削除せしめられたりとなり仲成が削除せし記事を本の如くに加へしは種繼は其父なればなり
○雄友授本位、大納言正三位藤原雄友伊與親王の事に坐し大同二年五月十一日伊豫國に流さる外舅たりしに依てなり

○從四位下紀朝臣、考異に四舊作五據上下文訂

○從五位上大伴宿禰、同に上舊作下據上下文訂さあり

根朝臣諸勝、紀朝臣末成、坂上大宿禰廣野、藤原朝臣廣敏、多治比眞人育治、安倍朝臣雄能麻呂、安倍長田朝臣節麻呂從五位下、從四位上秋篠朝臣安人爲參議兼右衞士督、左大辨如故、正五位下藤原朝臣道雄爲左中辨、權右中辨正五位下田口朝臣息繼爲眞、阿波守如故、正五位下小野朝臣野主爲權右中辨、左近衞少將從五位下良岑朝臣安世爲兼左少辨、丹波介如故、從五位下藤原朝臣福當麻呂爲右少辨、右近衞少將從五位下藤原朝臣三守爲兼內藏頭、美作權介如故、正五位下御室朝臣今嗣爲大學頭、從四位下坂田宿禰奈氐麻呂爲大和守、從四位下藤原朝臣繼彥爲山城守、從五位下廣根朝臣諸勝爲介、從四位下紀朝臣田上爲尾張守、從五位下藤原朝臣山人爲駿河守、正四位下藤原朝臣眞夏爲伊豆權守、從五位上大伴宿禰和武多麻呂爲武藏權介、正五位下藤原朝臣貞繼爲近江守、式部少輔從五位下小野朝臣岑守爲兼介、從五位下多治比眞人育治爲美濃介、從五位下藤原朝臣貞本爲飛驒權守、從五位下登美眞人藤津爲越前介、從五位上大中臣朝臣常

○安倍朝臣男笠、下文男を雄に作る
○川口道、他に見えず川は木津川なるべし下文に添上郡越田村に至るとあるに據るに奈良より木津に出で山城近江を經て東國に入らむとし給ひしならむ
○宿衞之兵、紀略兵を者に作る
○募將同行、同に募を冀に作る
○宇治山埼兩橋、宇治橋は宇治川に架く山城國宇治郡にあり山埼橋は淀川に架く同乙訓郡にあり
○與渡市津、延曆廿三年七月紀に幸與等津延喜主稅式に與渡津とあり市は與渡の市なり

麻呂爲備前權守、從五位下安倍朝臣淸繼爲安藝權守、從四位下多朝臣入鹿爲讃岐守、從四位下藤原朝臣眞雄爲伊豫守、從五位下藤原朝臣安繼爲薩摩權守、正五位上大野朝臣直雄爲左近衞少將、春宮大夫從四位上藤原朝臣藤嗣爲兼右近衞中將、從五位下紀朝臣百繼爲少將、下野介如故、從五位下安倍朝臣雄能麻呂爲右衞士佐、從五位下佐伯宿禰永繼爲左兵衞佐、參議正四位下藤原朝臣緖嗣爲右兵衞督、從五位下坂上大宿禰廣野爲佐、從五位下安倍朝臣男笠爲左馬頭、○戊申、正四位下藤原朝臣眞夏、從四位下文室朝臣綿麻呂等被召自平城宮來、禁綿麻呂於左衞士府、大外記外從五位下上毛野朝臣頴人從平城急來言、太上天皇今日早朝取川口道入於東國、凡其諸司并宿衞之兵、悉皆從焉、于時遣大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂等、率輕鋭卒、從美濃道邀之、田村麻呂奏請、綿麻呂武藝之人、頻經邊戰、募將同行、卽授正四位上拜參議、以遣之、歡喜踊躍、卽駕兵馬、又置宇治山埼兩橋、與渡市津頓兵、是夜、令左近衞將監紀朝臣淸成、右近衞將曹住吉朝臣豐

○壹岐權守、西本岐を伎に作る

五位下藤原朝臣弟貞爲丹後守、正四位下藤原朝臣眞夏爲備中權守、從五位下當麻眞人鱸麻呂爲淡路權守、從五位上大中臣朝臣常麻呂爲伊豫守、從五位下田口王爲土佐權守、從五位下紀朝臣良門爲肥前權介、從五位上大伴宿禰和武多麻呂爲日向權守、從五位下御室朝臣是嗣爲大隅權守、從五位下眞菅王爲壹岐權守、○癸丑(廿六)、從五位下大中臣朝臣諸人爲神祇大副、左近衞中將正四位下巨勢朝臣野足爲兼中務大輔、從五位下安倍朝臣宅麻呂爲大舍人助、從五位下弟村王爲圖書頭、從五位下小野朝臣岑守爲內藏頭、式部少輔近江介如故、從五位下藤原朝臣眞書爲縫殿頭、從五位下伊勢朝臣德繼爲助、左衞士督從四位下藤原朝臣冬嗣爲兼式部大輔、美作守如故、從五位下多治比眞人船主爲雅樂助、從五位下紀朝臣南麻呂爲民部少輔、從五位下藤原朝臣友人爲兵部少輔、參議正四位上文室朝臣綿麻呂爲大藏卿兼陸奧出羽按察使、從五位上池田朝臣春野爲大輔、從五位下三國眞人氏人爲木工頭、正三位藤原朝臣雄友爲彈正尹、從五位下高瀨王爲弼、從

○兼攝津守、兼字は西本に據て補ふ
○直世王、原本直を眞に作る西本及下文に據て改む
○愛筌、續後紀天長十年六月甲子條愛鑒に作る但し楓本西本尾本等には筌とあり

五位下秋篠朝臣全繼爲造西寺次官、右近衞中將從四位上藤原朝臣藤嗣爲兼攝津守、從四位下御長眞人廣岳爲伊勢守、内匠頭從五位下直世王爲兼相摸守、參議正四位下藤原朝臣緒嗣爲兼美濃守、右兵衞督如故、左兵衞佐從五位下佐伯宿禰長繼爲兼丹波介、左近衞少將從五位下良岑朝臣安世爲兼但馬介、左少辨如故、中務少輔從五位下藤原朝臣清繩爲兼出雲介、從四位下賀陽朝臣豐年爲播磨守、○[十七]甲寅、越前介從五位下阿倍朝臣清繼、權少掾百濟王愛筌等聞太上天皇幸伊勢國、擧兵應之、捕新任介從五位下登美眞人藤津、不受替、遣民部少輔從五位下紀朝臣南麻呂等勘問、服罪、清繼已下原死處遠流、侍從從四位下大庭王爲兼大舍人頭、陰陽博士外從五位下志斐連國守爲兼石見權掾、天文博士如故、大法師永忠爲少僧都、大法師長惠爲律師、○[十八]乙卯、權右中辨正五位下小野朝臣野主爲眞、從五位下大野朝臣眞菅爲權右少辨、從五位下文室眞人弟直爲大藏少輔、大納言正三位藤原朝臣園人爲兼東宮傅、民部卿如故、左大辨從四位上秋篠朝臣安人爲

○右衞士督、考異に衞士舊作兵衞、據上下文訂とあり
○照臨四海于茲二周、大同四年四月戊子受禪卽位
○有年、豐年を云
○宗廟之靈、皇祖皇宗の神靈を云
○社稷之祐、天神地祇の祐助を云
○阿保親王爲大宰權帥、親王は平城天皇皇子、廢太子と同一の事情に因れり
○諸國出擧官稻云々、三代格卷十四に載す紀の文よりは詳細なり宜しく參看すべし
○率十束收利三束、稻十束を出擧して利三束を徵收するなり是延曆十四年閏七月の制なり大同初年以來之を改めて五束とせしを十四年の制に復せられしなり
○大臣身帶二位者云々、深紫は令制一位の服色なり又二位以下淺紫を着せしを改て中紫とせらる衣服令を參看すべし
○紀朝臣岡繼、原本岡を國に作る類史及下文弘仁二年五月丁未條に據て改む

兼越後守、右衞士督如故、從四位下多朝臣入鹿爲安藝守、從四位上春原朝臣五百枝爲讃岐守、○丙辰、（十九）詔曰、飛鳥以前、未有年號之目、難波御宇、始顯大化之稱、爾來因循歷世、至今是用、皇王開國承家、莫不登極稱元、隨時施號也、朕以眇虛、嗣守丕業、照臨四海、于茲二周、雖日月淹除、而未施新號、方今時屬豐稔、人頌有年、實賴宗廟之靈、社稷之祐、非朕之寡德、所能可致也、念與天下、嘉斯休祥、宜改大同五年爲弘仁元年、宜告遐邇、知朕意焉、大法師脩圓爲律師、從五位下佐伯王爲大監物、從五位下伊勢朝臣德繼爲縫殿頭、從五位上稻城王爲大膳大夫、從五位下藤原朝臣眞書爲亮、從五位下安倍朝臣犬養爲尾張守、四品阿保親王爲大宰權帥、○（廿二）己未、大法師脩哲爲律師、○（廿三）庚申、制、諸國出擧官稻、率十束收利三束、但陸奧出羽二國、不在此限、○（廿五）壬戌、制、大臣身帶二位者、聽着中紫、今宜改着深紫、又諸王二位已下五位已上、及諸臣二位三位者、依令條、着淺紫、今改着中紫、又去大同二年制、四窠已上不得服用者、今聽五位已上服用、正六位上紀朝臣岡繼、伊勢朝臣繼麻呂授從五位下、

正六位上雁高宿禰氏成外從五位下、正五位下永原朝臣子伊太比從
四位下、正六位上池田朝臣幡子從五位下、〇廿七甲子、正五位上大野朝臣
直雄授從四位下、正六位上佐伯宿禰金山從五位下、從五位上藤原朝
臣鷹養爲民部大輔、從五位下田中朝臣清人爲造西寺長官、右兵衛佐
從五位下佐伯宿禰長繼爲兼下總介、從五位下藤原朝臣眞川爲左衞
士佐、參議正四位下藤原朝臣緒嗣爲兼右衞士督、美濃守如故、從四位
下大野朝臣直雄爲左兵衛督、從五位上藤原朝臣道繼爲佐、左大辨從
四位上秋篠朝臣安人爲兼右兵衛督、越後守如故、從五位下佐伯宿禰
金山爲右兵庫頭、〇廿八乙丑、公卿奏言、謹案大同二年九月廿八日詔書偁、
日者盧傳、千妨輻湊、占人妄告、万忌森羅、又大會小會之言、歲對歲位之
說、天恩發於五辰、將軍行於四仲、斯等並出堪輿雜志、非擧正之典、宜據
賢聖格言、一除曆注者、臣等商量、曆注之興、歷代行用、男女嘉會、人倫之
大也、農夫稼穡、國家之基也、伏望因順物情、依舊具注、又去大同二年
八月十九日下彈正臺例云、雜石腰帶、畫餝大刀、及素木鞍橋、獨射犴韋

〇雁高宿禰、考異に雁舊作鷹、據下文及類史訂さあり西本には鴈に作る卽雁の字
〇從五位下田中朝臣、同に下舊作上、據下文訂さあり
〇從四位上秋篠朝臣、同に上舊作下、據上下文訂さあり
〇日者盧傳、陰陽師等説く所の拘忌の説を斥けむさ奏せしなり日者は字書に謂推算星命者さ注す
〇歲對歲位之説、曆林問答に子歲者大歲位子也對午也さあり歲星のある位置を歲位さいひ之さ相對する方位にあるを歲對さ云
〇天恩發於五辰、甲子より癸亥に至る六十日の中に甲子より戊辰に至り、己卯より癸未に至り甲午より戊戌に至り、己酉より癸丑に至る各五日を天の恩澤を降す日なりさ陰陽家にて說けるを云
〇將軍行於四仲、拾芥抄下末に大將軍大白之精天之客太一紫微宮方角之神不居四孟常行四仲以上四方三歲一移百事不

可犯云々とあり

○堪輿雜誌、漢書藝文志に堪輿金匱の書あり五行家に屬す師古注に許愼云堪天道輿地道也とあり一說に神名造圖宅書者とも云り支那にて相地者を堪輿家と贈す西本志を忌に作る

○男女蕃會、嫁迎犂取等の日の吉凶を載するを云

○農夫稼穡、草木蔬穀等の下種の時期を始め農稼に必要なる事項を詳に載するを云

○素木鞍橋、抄鞍馬具に楊氏漢語抄云鞍橋（久良保禰）云鞍瓦、西宮記には鞍骨と書けり

○獨射犴、抄毛群部に獨犴唐韻云犴（今按和名未詳但本朝式云葦鹿皮獨犴皮云々犴音如簡此名所出亦未詳）胡地野犬名也

○葦鹿、抄毛群部に葦鹿本朝式云葦鹿皮（和名阿之賀）見于陸奥出羽交易雜物中矣本文未詳（箋注に按本草拾遺云海獺大如犬脚下有皮如人胼拇毛着水不濡是可以充葦鹿也とあり

○猍、字彙に與貍同說文鼠形飛走且乳之鳥毛紫赤

鹿猍羆皮等、一切禁斷者、臣等商量、雜石易得、造賣多人、至于着用、亦復難損、銅鋳具者、以漆塗成、動易剝落、今難易各異、價直是同、爲弊一也、又毛皮之類、不聽犯用、鞍具之要、唯須皺文、是以无賴之徒、竊蹔牛馬、爲弊二也、又節會之義、蕃客之朝、歳時不絶、必須餝刀、今惣被斷、恐損國威、伏望雜石及毛皮等、悉聽用之、其餝刀者、除節會蕃客之外、將加禁制、鞍橋者、除桑棗之外、不論素漆、隨心通用、庶隨民便、蒙得其所、並許之、散事從四位下川邊女王卒、○丙寅（廿九）、渤海國遣使獻方物、其王啓云、南容等廻、遠辱書問、悲切二考、慰及藐孤、捧讀之時、無任哀感、伏承先帝、仙馭昇遐、太上天皇、怡神閑舘、萬機之重、卑識所歸、孟秋尚熱、伏惟天皇、起居萬福、卽此元瑜蒙免、天皇繼登寶位、晋命惟新、歡洽兆民之心、賴及一方之外、在於文好、休感攸同、事貴及時、不可淹滯、重差和部少卿兼和幹苑使開國子高南容等、奉啓、用申慶賀之禮、兼上土物、具在別錄、況南容等、再駕窮船、旋涉大水、放還之路、恐動不虞、伏望遠降彼使、押領同來、實謂當仁、伏惟照諒、封域遙隔、拜賀未由、

似二蝙蝠一一名飁鼠一名飛生、抄毛群部に飁鼠(和名毛美俗云无佐々比)とあり
○銙、字書に帶具或以レ金或以二犀爲一レ之猶二今之帶銙一見二唐書一とあり
○皷文、字書に革之麄也とありヒキハダは蝦蟇膚の意
○川邊女王卒、續紀寶龜二年七月乙未紀に三嶋王之女河邊王とあるさ同人なるべし
○藐孤、藐は小弱なり孤は孤兒の意左傳僖九年に出づ
○先帝、桓武天皇に坐す
○太上天皇、平城天皇に坐す、大同四年四月一日御讓位
○朱由、朱は原本末に作る西本に據て改む
(十月)從五位上御室朝臣、考異に上舊作レ下據二類史一訂さあり
○勇山、錄河內神別に勇山連神饒速日命三世孫出雲醜大使主命之後也さあり勇山は豐前國下毛郡諫山鄕に據れるなるべし
○松崎川、山城國愛宕郡高野川西美曾呂池東にあり靈所七瀨の一なり

○冬十月己巳(戊辰朔 二),從五位下名草直道主爲二大學博士一,越中權掾如レ故,侍從從四位上藤原朝臣繼業爲二兵部大輔一,近江守如レ故,從五位下田中朝臣清人爲二左京亮一,內藥正外從五位下若江造家繼爲二兼尾張權介一,侍醫如レ故,左近衞中將正四位下巨勢朝臣野足爲二兼備中守一,中務大輔如レ故,從五位下藤原朝臣眞川爲二安藝守一,從五位下石川朝臣道成爲二周防守一,從四位下多朝臣入鹿爲二讃岐權守一,從五位上安曇宿禰廣吉爲二伊豫權介一,從五位上御室朝臣是嗣爲二筑後權介一,從五位上御室朝臣氏繼爲二薩摩權守一,從五位下登美眞人藤津授二從五位上一,○甲戌(七),從五位下廣根朝臣諸勝爲二攝津介一,○己卯(十二),正六位上采女朝臣枚麻呂授二從五位下一,○丙戌(十九),從五位下文屋眞人弟直爲二少納言一,從五位下藤原朝臣眞書爲二大藏少輔一,外從五位下綬連家繼爲二大膳亮一,從五位下伊勢朝臣德成爲二上野權介一,○戊子(廿一),河內國人從七位下勇山國嶋,正七位下家繼,正八位上眞繼,從八位下文繼等賜二姓連一,○甲午(廿七),禊二於松崎川一,縁二大嘗會事一也,陸奧國言,渡嶋狄二百餘人來二着部下氣仙郡一,非二當國所管一,令二之歸去一,狄等云,

○渡嶋狄、書紀下齊明天皇四年四月紀に見ゆ北海道卽ち渡嶋なり
（十一月）豐樂院、大同三年十一月壬辰紀に見ゆ
○悠紀主基兩國、參河美作なり下文甲子條に見ゆ
○土風歌舞、悠紀主基兩國風俗の歌舞なり
○大歌、大同三年十一月甲午紀に見ゆ
○雄笠、上文男笠に作る
○豐野眞人仲成、考異に仲舊脫據類史補之あり
○賀祜麻呂、原本祜を祐に作る西本及類史に據て改む下同じ
○山主、考異に山舊脫據類史補之あり

時是寒節、海路難越、願候來春、欲歸本鄕者、許之、留住之間、宜給衣粮、○十一月丁酉朔甲寅十八、雷、○乙卯十九、行大嘗於朝堂院、○丙辰二十、御豐樂院、悠紀主基兩國獻添好雜物、奏土風歌舞、五位已上賜衣被、○戊午廿二、宴五位已上、奏雅樂幷大歌、從四位下大庭王授從四位上、從五位下弟野王、作良王從五位上、正六位上貞代王、御井王從五位下、從四位下橘朝臣安麻呂、藤原朝臣冬嗣從四位上、正五位下藤原朝臣貞繼從四位下、從五位上紀朝臣繩麻呂正五位下、從五位下田中朝臣淨人、大中臣朝臣諸人、佐伯宿禰鷹成、安倍朝臣雄笠、甘南備眞人諸野、安倍朝臣淨足、藤原朝臣三守從五位上、外正五位下秦宿禰都伎麻呂、正六位上長岡朝臣岡成、豐野眞人仲成、畝火眞人莵原、藤原朝臣賀祜麻呂、多治比眞人繼益、藤原朝臣文山、坂上大宿禰眞弓、橘朝臣永繼、藤原朝臣葛成、小野朝臣諸野、從六位下藤原朝臣濱主、安倍朝臣弟雄、正六位上縣犬養宿禰淸繼、佐伯宿禰弟成、忌部宿禰比良麻呂從五位下、正六位上林朝臣山主、志賀忌寸周興、賀茂縣主立長、藏人根主外從五位下、宴訖、賜祿有差、○己未廿三、正

（十二月）芹川野、山州名跡志に芹河在城南宮南五町許民居凡方一町爲村名とある是なり
〇樫日廟、二十二社式に香椎宮筑前國糟屋郡式外、神功武内八幡住吉）或書曰加襲宮者昔仲比古天皇（仲哀）之后息長足比咩神（神功）及大臣武内宿禰命今夜（誤字か）此行宮謀伐新羅從爾已來便爲廟堂后宮在東臣廟在西さあり
〇賽靜亂之禱、藥子の亂を云
〇吉野陵、春日宮天皇（施基皇子）の妃贈皇太后橡姬吉隱陵を云大和國磯城郡初瀨町大字角柄にあり
〇客作兒、原本客を容に作る西本及類史に據て改む抄人倫部に楊氏漢語抄云客作兒（都久乃比々止）箋注に按都久乃比比止償人之義謂受價勞力償之也、私記に支道按古本訓云安比都久里相作之義さあり
〇賜祿有差、類史祿を物に作る
〇詔曰、三代格卷四に載す
〇鈎陣、鈎字原本缺く三

四位下橘朝臣諱（嘉智子）嵯峨太皇太后多治比眞人高子授從三位、无位廣長女王從五位上、正六位上藤野女王、无位繼子女王從五位下、從五位下藤原朝臣松子正五位下、无位藤原朝臣緒夏、坂上大宿禰御井子從五位上、无位藤原朝臣葛子、橘朝臣安万子、三善宿禰弟姉、三國眞人眞主從五位下、〇辛酉（廿五）、正六位上朝野宿禰道守、丹波史烏守授外從五位下、〇甲子（廿八）、免參河美作兩國田租、以供奉大嘗也、〇十二月（丁卯朔）庚午（四）、從六位上林宿禰東人爲送渤海客使、大初位下上毛野公繼益爲錄事、〇甲戌（八）、外正六位上上毛野公賀美麻呂授外從五位下、〇己卯（十三）、遊獵于芹川野、賜五位已上衣被、〇壬午（十六）、遣參議正四位下巨勢朝臣野足奉幣帛於八幡大神宮樫日廟、賽靜亂之禱也、〇甲申（十八）、遣僧七口讀經於吉野陵、〇丙戌（二十）、鑄錢司用乘銅鑄進新錢一千卌貫、因茲鑄錢長官從五位上三嶋眞人年嗣授正五位下、次官從五位下大枝朝臣繼吉從五位上、自餘六位已下客作兒已上叙位賜祿有差、〇癸巳（廿七）、詔曰、天文垂象、鈎陣列衞於紫微、地理分區、金石効用於緗錄、除兇禁暴、七德照其威、靜亂禦侮、四海服其武、弧矢之

代格に據て補ふ鉤陣は共に星の名六星あり紫微垣內に在りて最も北極に近し
○金石、武器を云周禮秋官職金に凡國有大故而用金石則掌其令、注に用金石者作槍雷椎椁之屬(皆謂守城禦捍之具)とあり
○緗錄、書籍の意、緗は帛の淺黄なる者古人寫本多く之を用ふ武器の有用なる事は歷史に見えたりとなり
○七德、武の七德卽ち禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豐財を云左傳宣十二年に出づ
○弧矢、弧は木弓なり易繫辭傳に弦木爲弧とあり
○匪獨茲日、匪字は三代格に據て補ふ
○何以應卒、原本卒を乖に作る三代格に據て改む卒は急也速也、速急に應じ難しとなり

用焉、自往昔甲兵之儲、匪獨茲日、今左右近衞、其數減少、脫有機警、何以應卒、一張一弛、文武之道所先、觀時適時、廢置之宜斯在、其左右近衞可復舊數焉、

日本後紀卷第二十

日本後紀卷第廿一

起弘仁二年正月盡閏十二月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

太上天皇　嵯峨

(辛卯)二年春正月丙申朔、皇帝御大極殿臨軒、皇太弟(淳和)文武百官藩客朝賀、如常儀、○庚子(五)、制、上殿舍人一百廿人、復舊名爲內豎、○壬寅(七)、宴五位已上并藩客、賜祿有差、○丙午(十一)、於陸奥國、置和(ワ)我(カ)、薭(ヒエ)縫(ヌヒ)、斯(シ)波(ハ)三郡、從五位下大野朝臣眞營爲右少辨、從五位下秋篠朝臣全嗣爲治部少輔、從五位下藤原朝臣眞書爲雅樂頭、從五位下橘朝臣永繼爲民部少輔、從五位上大枝朝臣永山爲大判事、從五位下淡海眞人有成爲大藏少輔、左兵衞督從四位下大野朝臣直雄爲兼左京大夫、正五位下三嶋眞人年繼爲造西寺長官、從五位下藤原朝臣文山爲次官、鑄錢長官從五位上大枝朝臣繼吉爲兼山城介、從五位下紀朝臣南麻呂爲河內守、正五位下

○太上天皇嵯峨、西本此六字なし

【弘仁二年】臨軒、字書に天子不御正座而御平臺謂之臨軒とあり

○藩客、類史紀略藩を蕃に作る藩蕃と通す

○內豎、原本豎を竪に作る紀略に據て改む

○和我薭縫斯波三郡、按に和我薭縫は民部式及倭名抄には見えず伊呂波字類抄拾芥抄以下の諸書に見ゆされば弘仁二年に置れて延喜式時代には廢せられ後更に置れしにや或は此時權に置れ後に眞郡とせられしなるべしとも云和我は今二郡に分ち東和賀西和賀と云薭縫は稗貫と稱す斯波は民部式には見えざれど神名式に見ゆ是より先志波村志波城の名は既に見えしが此に至て郡とせらる今は紫波郡と書けり

藤原朝臣道雄爲紀伊守。○戊申（十三）、河內國人從八位上玉作鯛釣賜姓高道連。○壬子（十七）、御豐樂院觀射、蕃客賜角弓射焉。○乙卯（二十）、遣大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂、中納言正三位藤原朝臣葛野麻呂、參議從三位菅野朝臣眞道等、饗渤海使於朝集院、賜祿有差。○丙辰（廿一）、參議從三位宮內卿兼常陸守菅野朝臣眞道上表致仕曰、臣聞、晨行暮息、身事之恒分、壯仕老休、禮制之通範、所以崇名事主、保身終命也、臣本庸品、才用無取、涉學謝於甲科、干祿朝於下士、徒以早因多幸、忝質先朝、爰自儲闈、泊臨宸極、夙夜軒陛、緜歷歲序、遂乃曲蒙□奬、濫廁簪纓、兼文武之崇班、帶中外之厚秩、以至今日、累沐天恩、顧惟尸素、伏深戰慄、但臣歷事三朝、齒登七十、痾隨年積、志與身衰、雖疲駿輕馭、非無顧戀之心、而漏盡夜行、恐乖止足之誠、伏願歸骸舊里、收迹蓬廬、養疾以存餘生、杜門而待終日、無任慊懇之至、謹詣闕奉表以聞、許之、但常陸守如故。○丁巳（廿二）、渤海國使高南容歸蕃、賜其王書曰、天皇敬問渤海國王、南容入賀、省啓具之、惟王資質宏茂、性度弘深、敦惠輯中、盡恭奉外、代居北涯、與國脩好、沃日滄溟、企乃

○高道連、錄河內諸蕃に高道連漢高祖男齊悼惠王肥之後也とあり
○角弓、抄征戰具に角弓爾雅注云弭（亡耳反都能由美）今之角弓也とあり神功紀出雲風土記にも見ゆ
○渤海使、考異に渤舊脫據類史補とあり紀略にも此二字あり
○干錄、錄は祿なるべし干祿は食祿を干むるを云論語爲政篇に出づ
○忝質、宮仕へするを云左傳僖廿三年に出づ
○儲闈、文選沈約彈事に升采儲闈、注に儲闈東宮也とあり
○夙夜軒陛、軒陛は宮禁を云朝夕宮中に仕奉れりとなり
○簪纓、簪は首笄連冠於髮者、纓は冠系所以結冠之組と注し何れも貴者の冠飾なり故に身分貴き者を云
○疲駿、駿は字書に騑馬也謂駕車之馬在兩旁者又一說左曰驂右曰騑とあり
○止足、老子に知足不辱知止不殆とあり分を知りて其に滿足するを云

○沃日滄溟、文選海賦に蕩雲沃日、注に日光浮於中故沃之とあり大海の形容なり
○葦能亂之、葦は一葦卽ち小舟の意、毛詩衛風河廣章に誰謂河廣一葦抗之とあり亂は爾雅釋水に正絶流曰亂、注に横流而濟之也とあり天に接する波浪をも小舟を以て能く渡り來れりとなり
○賫琛、原本賫深に作る類史に據て改む琛は珍寶なり珍寶を貢獻するを云
○虔承睿圖、原本虔を處に作る西本に據て改む
○善隣、左傳隱六年に親仁善隣國之寶也とあり隣國と好を修むるを云
○事大、孟子に惟智者爲能以小事大とあり大國に事ふるを云
○謇志、類史志を心に作る謇志は謇々の志卽ち忠貞の心を云
○產子授從三位、考異に三舊作二、今從紀略とあり產子は嵯峨天皇の夫人
○明日香親王、紹運錄に明日香親王桓武皇子母紀若子贈左大臣船守女
○坂本親王、同に同皇子母川上眞奴とあり

到矣、接天波浪、葦能亂之、賫琛効精、慶賀具禮、詧彼情欵、嘉賞何止、朕嗣膺景命、虔承睿圖、尅己以臨寰區、丕顯以撫兆庶、德未懷邇、化曷覃遐、王念濬善隣、心切事大、弗難劬勞、聿脩先業、况南容荐至、使命不墮、船舶窮危、謇志增勵、雖靡來請、豈能忍之、仍換駕船、副使押送、同附少物、至宜領之、春寒、惟王平安、指此遺書、旨不多及、○戊午（廿三）、正四位上藤原朝臣產子授從三位、○己未（廿四）、无品明日香親王、坂本親王、授四品、○甲子（廿九）、從四位上藤原朝臣冬嗣爲參議、餘官如故、從七位下菅原朝臣清人、正六位上朝野宿禰鹿取、授從五位下、從六位下勇山連文繼外從五位下、正五位下小野朝臣野主爲左中辨、從五位上藤原朝臣伊勢人爲右中辨、從五位上登美眞人藤津爲治部大輔、從五位下橘朝臣永嗣爲越前介、從五位上藤原朝臣藤成爲播磨介、山城國乙訓郡白田一町、賜從四位下百濟王教法、是日、勅、占野開田之徒、就國請地之日、不顯町段、遠包四至、損公妨民、莫甚於此、自今以後、宜勘町段、勿依四至、又陸奥出羽兩國、土地曠遠、民居稀少、百姓浪人、隨便開墾、國司巡撿、隨卽收公、是以

人民散走、無有靜心、宜兩國開田、雖无公驗、不得收公、○二月(丙寅朔)丁卯、授外從五位下志斐連國守從五位下、緣陰陽之道勝於傍人也、○(五)庚午、山城國乙訓郡藥園一町賜施藥院、○(六)辛未、勅、據令條、凡祭祀者、所司預申官、官散齋日平旦、頒告諸司、夫散齋之內、不得弔喪問疾食宍、不判刑殺、不決罰罪人、不作音樂、不預穢惡之事、今至散齋之日、乃頒告諸司、則諸司惰事、或犯禁忌、宜改令條、自今以後、散齋前一日、頒告諸司、○(八)癸酉、勅、諸國之夷、唯仰公粮、宜其男女皆悉給粮、但不得及孫、○(十)乙亥、分縫殿寮宮人卅人、配大藏省、以縫作幄幔等類也、○(十一)丙子、遊獵于北野、五位已上賜衣被、○(十三)戊寅、外從五位下朝野宿禰道守爲大炊助、從五位下藤原朝臣賀祐麻呂爲右京亮、從五位下葛井宿禰豐繼爲造東寺次官、外從五位下山田連弟分爲河內介、外從五位下勇山連文繼爲相摸權掾、紀傳博士如故、○(十四)己卯、詔曰、應變設教、爲政之要樞、商時制宜、濟民之本務、朕還淳返朴之風、未覃下土、興滅繼絕之恩、常切中襟、夫郡領者、難波朝庭(孝德)、始置其職、有勞之人、世序其官、逮乎延曆年中、偏取才良、永廢譜第、今省大

○白田、西本畠の一字に作る
○百濟王敎法、桓武天皇の女御
○占野開田之徒云々、三代格卷十六に弘仁二年二月三日太政官符應占田地依町段數事と見ゆ但し陸奥出羽兩國以下を同正月廿九日太政官符不可收百姓墾田事（陸奥出羽）として別に載す
○請地、三代格請を受に作る
（二月）據令條凡祭祀者云々、三代格卷一に載す令條とは神祇令を指す
○官散齋日、考異に散舊脫令據令及類聚三代格補とあり散齋は致齋に對して云アライミなり
○夫散齋之內、三代格夫を其に作る
○不作音樂、神祇令義解に謂不作絲竹歌儛之類也とあり
○穢惡之事、同義解に謂穢惡者不淨之物とあり
○頒告、考異に頒舊缺據三代格補とあり西本須に作るは頒の訛れるなり
○宮人、考異に宮舊作官據類史訂とあり西本

及格亦宮に作る宮人は女子の宮仕へする人の總稱なり此は縫女を云り
○紀傳博士、類史百七に大同三年二月丙辰減二大學直講博士一員一置二紀傳博士一とあり原本紀を記に作る類史に據て改む下同じ
○應變設敎云々、此郡司採用に關する詔は三代格卷七に載す
○延曆年中、延曆十七年三月廿九日なり類史十九及三代格卷七に載す
○庸材之賤下、原本材を才に作る西本及三代格に據て改む
○改爲大國、大寶の制國司を置く分ちて大及上中下の四等とす民部式所載大國凡十三上國三十五中國十一下國九なり
○年中、中の字は三代格に據て補ふ
○常陸國去京遙遠云々、此勅三代格卷十四に載す
○郡發稻、賦役令義解に割二置田租一以充二雜用一是爲二郡稻一也下條云諸國貢獻物者皆以二官物一買充亦是郡稻也凡官稻之源出自二田租一即分爲二三一一曰二大税一二曰二粈穀一三曰二郡

納言正三位藤原朝臣園人奏云、有勞之亂、奕世相承、郡中百姓、長幼託心、臨事成務、實異他人、而偏取藝業、永絶譜第、用庸材之賤下、處門地之勞上、爲政則物情不從、聽訟則決斷無伏、於公難濟、於私多愁、伏請郡司之擬、先盡譜第、遂無其人、後及藝業者、實得其理、宜依來奏、○十五庚辰、遷御於西宮、○大宰府官幷所管國司、聽公廨四分之一、年漕于京、遂授之官半分焉、○上野國元上國、今改爲大國、○十七壬午、勅、常陸國、去京遙遠、貢調脚夫、路粮多費、去靈龜年中、守從四位上石川朝臣難波麻呂、始置稻五万束、毎年出擧、以利充粮、名曰郡發稻、其用度者、載帳言上、而所司勘出、不聽出擧、宜令依舊、參議正四位下行右衞士督兼美濃守藤原朝臣緒嗣言、臣材無足取、器實空虚、病患染躬、久積日月、是以前日抗表、悉辭所居之官、今陛下無遺微臣、復參朝議、聖恩不測、徒跼高天、臣比者沈滯惡瘡、療治無驗、似損不損、終至大漸、劇職事重、懼切曠日、伏望解罷所帶、養疾私門、上除朝庭空位之譏、下遂愚臣避賢之願、不任丹款懇迫之至、謹臥病拜表以聞、不許、○十八癸未、皇太弟(淳和)遷於東宮、○二十乙酉、外從五位下勇

稻一也とある是なり
○載帳、三代格載を附に作る
○所司勘出、原本所を諸に作る西本及類史に據て改む
○大漸、病の進み重るを云此語尙書顧命篇に出で天子に用ふるを普通とすれど文選（褚淵碑文）列子（力命篇）等に常人に用ひし例あり此も其の一なり
○鼓岑四天王寺、筑前國御笠郡（今筑紫郡に入る）にあり續風土記に四王院のある所より南の方まですべて山の峰を大城山といふ其頂を鼓の峯といふよし日本後紀に見えたりとあり四天王寺は四王寺とも大野山寺とも又大山寺ともいふ寶龜五年三月創立す
（三月）丙申朔、按に下文に四月甲午朔御大極殿視朔とあり之に據れば乙未朔にて丙申は二日なり朔字恐くは衍なるべし
○常磐、原本磐を盤に作る西本及類史紀略に據て改む
○秋篠朝臣、錄右京神別秋篠朝臣土師朝臣同祖乾

山連文繼爲大學助、紀傳博士相摸權掾如故、從五位下柿本朝臣弟兄爲肥前守、○庚寅、於大宰府鼓岑四天王寺、造釋迦佛像、○癸巳、皇太弟奉獻、宴飮極歡而罷、五位已上賜衣被、○三月丙申朔、河內國人從七位下土師宿禰常磐賜姓秋篠朝臣、山城國人正六位上土師宿禰百枝菅原朝臣、○庚子、安房國人正六位下大伴直勝麻呂賜姓大伴登美宿禰、○癸卯、武藏國人正六位下小子宿禰身成、貫于左京、○乙巳、始令諸國進俘囚計帳、○戊申、勅、左右近衞兵衞等、劍帶同色、彼此難辨、改舊色、右近衞用緋絁纈、右兵衞用靑褐纈、賜大外記從五位上上毛野朝臣穎人度一人、○壬子、停攝津國川邊郡揩戶十烟、豐嶋郡二烟、爲平民、○甲寅、勅、陸奧出羽按察使正四位上文室朝臣綿麻呂、陸奧守從五位上佐伯宿禰淸岑、介從五位下坂上大宿禰鷹養、鎭守將軍從五位下佐伯宿禰耳麻呂、副將軍外從五位下物部匝瑳連足繼等曰、去二月五日奏偁、請發陸奧出羽兩國兵合二萬六千人、征爾薩體、幣伊二村者、依數差發、早致襲討、事期殄滅、不得勞軍以遺後煩、又得三月九日奏、知減軍士一

飯根命七世孫大保度連之後也とあり土師菅原秋篠大枝四氏は何れも同祖なり
○大伴直、神龜元年二月（續紀上一八四頁）に大伴直南淵麻呂同國持同宮足等見ゆ同族なるべし登美宿禰は下總國印幡郡登美鄕（倭名抄版本には言美とあり村岡氏地理志料に據る）に據れるなるべし
○緋絁纈、絁は字書に粗紬也とあり纈は絞染なり
○青褐纈、カチは節用集に紺地と書けり藍染なり
○揩戶、山藍紫根忍草などを布帛に揩付くることを職業とする民を云
○爾薩體、陸奧國二戶郡仁佐平村あり卽ち爾薩體村にて馬淵川水城の全體の名なり下文爾を貳に作る
○幣伊、陸中國閉伊郡是なり幣は西本幣に作る
○伴渠、詳ならず
○鄴令復生、鄴令は西門豹なり史記滑稽列傳に西門豹爲鄴令云々發民鑿十二渠引河水灌民田云々至今皆得水利とあり
○阿牟公、景行紀四年に

万人、將軍等、憂國之情、中心是深、然而搜窮巢窟、衆力是資、故依先奏、不勞減定、將軍等宜知之、勠力同意、相共畢功、于時出羽守從五位下大伴宿禰今人、謀發勇敢、俘囚三百餘人、出賊不意、侵雪襲伐、殺戮爾薩體、餘孽六十餘人、功冠一時、名傳不朽也、又今人前任備□守之時、與掾正六位上河原連廣法謀、穿山破磐、以開大渠、百姓難以慮、始嗷々不止、成功之後、多蒙其利、追以稱嘆、是謂伴渠、縱鄴令復生、不能加也、○己未、阿牟公人足授外從五位下、人足者、大安寺僧泰仙也、以工術聞、令造漏刻、積年乃成、帝嘉其巧思、還俗叙位、雖機巧可奇、而隻辰易差、遂不爲用、○辛酉、出雲國造外從七位下出雲臣旅人授外從五位下、緣神賀事也、○夏四月甲子朔、御大極殿、視朔也、○丙寅、內宴、奏妓、○丁卯、陸奧國人外正六位下志太連宮持、俘吉彌侯部小金授外從五位下、褒勇敢也、○戊辰、四品明日香親王爲彈正尹、侍醫從五位下出雲連廣貞爲兼內藥正、但馬權掾如故、從五位下藤原朝臣文山爲玄蕃頭、正三位藤原朝臣雄友爲宮內卿、從五位下御井王爲正親正、造西寺次官從五位下秦宿禰都

日向襲津彦皇子是阿牟君之始祖也とあり
○漏刻、時計なり三才圖會に漏刻盛水於桶量所漏水知時刻其巧甚精矣天智帝十年始作漏刻撞時辰之鍾焉とあり齊明紀六年（紀下二一八頁）を參看すべし
○隻辰、一辰と云ふに同じ辰は時なり
○緣神賀事、臨時祭式に國造奏神壽詞玉六十八枚金銀裝橫刀一口鏡一面倭文二端白眼鴾毛馬一疋白鵠二翼御贄五十昇右國造賜負幸物還國潔齋一年訖卽國司率國造諸祝部并子弟等入朝卽於京外便處修飾獻物神祇官長自監視絹卜吉日申官奏聞宣示所司又後齋一年更入朝奏神壽詞如初儀、太政官式及式にも見え任國造儀は儀式に見ゆ
（四月）視朔、告朔又は視告朔と云毎月朔天皇大極殿に御して諸司の進奏せる公文を視給ふ朝儀なり延喜の頃に至りては四孟月にのみ之を行へり告朔の事天武天皇五年九月丙寅紀に始て見え視朔の文字は左傳僖五年に出づ

伎麻呂爲兼伯耆權介、從五位下大中臣朝臣鯛取爲筑後守、○（六）己巳、幸神泉苑、賜親王已下及諸衛人綿各有差、○（十一）甲戌、勅、河內國稅分錢三百貫、便充當國、限三箇年、出擧收利、爲造堤料、又彼國課丁少數、無人差役、其散位々子、留省之徒、不直本司、常在鄕里者、宜限三年、補國中雜任、計其上日行事與考言上、又割公廨息利、充堤所食料、其代者、廻給隨便國、三年以後復舊焉、○（十二）乙亥、幸神泉苑、右京人正六位上高田首淸足等七人賜姓田村臣、○（十三）丙子、山城國紀伊郡田二町賜從四位下伊勢朝臣繼子、○（十四）丁丑、勅、苅麥爲萓、禁制久矣、今聞、京邑百姓、未秋之前、沽之給急、計其所得、倍於收實、利苟在民、何勞禁制、自今以後、永聽賣買、○（十五）戊寅、近江國乘田廿八町賜中務省、○（十七）庚辰、正四位上文室朝臣綿麻呂爲征夷將軍、從五位下大伴宿禰今人、佐伯宿禰耳麻呂、坂上大宿禰鷹養爲副、○（十八）辛巳、幸神泉苑、侍臣已上賜衣被、○（十九）壬午、勅征夷將軍等曰、夷狄干紀、爲日已久、雖加征伐、未盡誅鋤、今依來請、今將出兵、其軍監軍曹等、且簡用且奏上、但犯軍法、禁身請裁、隊長已下、依法決斷、國之安危、在此一擧、

將軍勉之、○乙酉、（廿二）公卿奏、依去大同二年詔書、七道諸國調物、權從輕減、欲待人殷即復恒式、而於民未聞繼業、於公有乏支用、更別買求、還致勞擾、伏望改彼權制、復厥恒典、冀得百姓守常、國用有足、許之、○廢陸奥國海道十驛、更於通常陸道、置長有高野二驛、爲告機急也、○丙戌、（廿三）宮內卿正三位藤原朝臣雄友薨、雄友者、參議兵部卿從三位乙麻呂之孫、右大臣贈從一位是公之第二子也、延曆二年授從五位下、爲美作守、遷兵部少輔、位至正五位上、除左衞士權督、俄而爲眞、六年授從四位下、歷左京大夫兼播磨守、九年爲參議、兼大藏卿、十五年授正四位下、十六年任大宰帥、十七年授從三位、拜中納言、廿三年授正三位、大同初拜大納言、雄友性溫和、不妄喜怒、姿儀可觀、音韻淸朗、至於賀正宣命、推之爲師、伊豫親王之遭害也、以舅流于伊豫國、弘仁元年免罪、授本位、拜宮內卿、薨于位、時年五十九、詔贈大納言、○丁亥、（廿四）從六位下笠朝臣梁麻呂授從五位下、正七位下當宗忌寸家主外從五位下、從五位上紀朝臣梶繼爲玄蕃頭、從五位下笠朝臣梁麻呂爲民部少輔、從

○奏妓、私記に恐脫樂字と云り
○陸奥國人、考異に國舊缺據例補とあり
○志太連、續紀養老七年三月戊子條に常陸國信田郡人物部國依改賜信太連姓と見ゆ
○造堤料、河內國堤防料は主稅式上に正稅一万束とあり其額少きを以て稅分錢を出擧して併て造堤料に充るなり
○散位々子、六位七位の人の子を云蔭子（五位以上の人の子）に對して云り
○留省、考課令に凡貢人皆本部長官貢送太政官大學擧人具狀申太政官與諸國貢人同試試訖得第者奏聞留式部とあり貢人及擧人を考試し及第者を奏聞して式部省に留むるを云此外に帳內資人にも留省といふ事あり
○高田首、錄右京諸蕃に高田首高麗國人多高子使主之後也とあり
○田村臣、田村は大和國にありそれに據れるか
○蒭、芻に同じ玉篇に蒭同芻、芻刈草也飼牛馬之草とあり

五位下尾張連粟人爲主稅頭、從五位下御長眞人仲繼爲刑部少輔、從五位下小野朝臣諸野爲典藥助、外從五位下當宗忌寸家主爲伊賀守、從五位下朝野宿禰鹿取爲左衞士佐、○己丑、廿六阿波國人百濟部廣濱等一百人賜姓百濟公、○庚寅、廿七幸神泉苑、右近衞府奉獻、侍臣賜衣被、是日、遣渤海國使正六位上林宿禰東人等辭見、賜衣被、○五月甲午朔戊戌、五御馬埒殿、觀馬射、○辛丑、八勅、諸國所進、春米庸米、去大同三四兩年、遭旱不得悉進、若隨色辨備、恐致民苦、今官庫之貯、頗有盈餘、宜任土所生、貸與調物、進成輕貨、但畿內者、混合正稅、○癸卯、十勅征夷將軍正四位上文屋朝臣綿麻呂等曰、塞下之俘、其數稍多、出軍之後、慮生野心、將軍等、勤加綏撫、勿致驚擾、威惠兼施、稱于朝制、許之、從五位上高階眞人遠成爲主計頭、從五位下小野朝臣眞野爲齋宮頭、○乙巳、十二幸神泉苑、帝自茲以後、每至假日、避暑於此、○丁未、十四制、夫飛驛工者、貢進之年、課役倶免、至于逃亡而不役、何異調庸之未進、自今以後、檢返抄、拘解由、一同調庸、從四位上藤原朝臣繼業爲神祇伯、侍從近江守如故、從四

○乘田、餘れる田を云田令義解に公田者乘田也云々凡乘田限一年賃云々
○今將出兵、今字或は誤か
○且奏上、原本且を具に作る西本に據て改む
○大同二年詔書、類史八十に大同二年十二月乙丑詔曰宜百姓所輸調庸雜物推改常法今須一丁輸絹若絁長一丈闊一尺四丁成疋其餘准此云々將待人給家足復於恒典とあり
○長有高野、兵部式に陸奧國驛馬長有高野各二疋とあり當時常陸國に屬せしが後陸奧國に入りしに因れり高野は今岩代國東白川郡棚倉にして長有は常陸國久慈郡下宮なるべしと云
○藤原朝臣雄友薨、雄友の任官敍位年月補任延暦九年に見ゆ
○贈從一位是公、考異に贈舊作賜據例訂とあり
○位至正五位上、原本位字任に作るを改む
○初拜大納言、大同元年四月十八日
○不妄喜怒、妄字は西本に據て補ふ

○推之爲師、原本師を帥に作る類史に據て改む
○流于伊豫國、大同二年五月十一日
○百濟公、錄左京諸蕃に百濟公百濟國都慕王三十世孫汶淵王之後也、同和泉諸蕃には酒王之後也とあり
(五月)貿、貿と同じ玉篇に貿は易財也とあり
○許之、二字恐くは衍なり
○假日、假は暇なり休暇なり
○飛驛工、原本驛を彈に作る類史に據て改む
○課役俱免、賦役令に凡斐陀國庸調俱免每里點匠丁十人每四丁給廝丁一人、式部式に凡飛驒國每年貢匠丁一百人其返抄准諸國調庸例とあり
○賀祜麻呂、原本祜を祐に作る類史に據て改む
○徽音、猶德音と云が如し毛詩大雅思齊章に出づ
○少選、須臾なり
○批挑、字書に批は凡數多而分次運送者謂之批、挑は擇取之也とあり
○國家之忌及大歲、國家は天皇を指奉れり嵯峨天皇は延曆五年丙寅九月御

位下藤原朝臣縵麻呂爲大舍人頭、從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲治部大輔、從五位上登美眞人藤津爲兵部大輔、從四位上春原朝臣五百枝爲宮內卿、右近衞中將從四位上藤原朝臣藤嗣爲兼右京大夫、攝津守如故、從五位下紀朝臣岡繼爲亮、從五位下藤原朝臣賀祜麻呂爲武藏介、從五位下藤原朝臣友人爲讃岐守、○己酉(十六)、賜玄賓法師書曰、眞俗殊趣、禮接自疎、渴仰徽音、不捨少選、屬夏景爍條、炎風扇物、想禪場被服、與時宜改、聊附法服一具、至宜領之、○壬子(十九)、勅征夷將軍正四位上兼陸奧出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰、將軍等去二月五日奏狀偁、來六月上旬、兩國軍士、分頭發入、其糒鹽器仗等、先已貯備、不可更勞者、以此觀之、緣軍資物、皆已批挑、而今月十二日來奏偁、軍士食料、幷雜物等、且仰國司令儲備、及絁幕且用縫作、又出羽守大伴宿禰今人、巡行管內、簡閱軍士者、是知、征戰之具、猶有寥落、前從來奏、事何相乖、加以國家之忌、及大歲同在東方、兵家所避、不可抵觸、宜緣軍庶事、今年備畢、來年六月發入、又撿去延曆十三年例、征軍十萬、軍監十六人、軍曹五十八人、廿

降誕あらせらる弘仁二年辛卯は天皇の御爲に忌むべき年なりとなり大歳は十二年に一周し卯年には卯方卽ち東方にあり兵家にて避くる所なりとなり

○自存、考異に存舊作在據例訂とあり

○延暦十九年例、類史八十三に十一月詔曰云々其今年不登言上之國宜免田租と見えたるのみにて其他は詳ならず

○坂上大宿禰田村麻呂薨、傳は田邑麻呂傳記に詳なり

○帶方、後漢末に樂浪郡の南部を割きて帶方郡とす今の朝鮮京畿道及忠淸道の地なり

○年五十四、此四字類史紀略及田村麻呂傳に據て補ふ

○戊午信濃國獻白烏、此八字類史及紀略に據て補ふ

年、征軍四万、軍監五人、軍曹卅二人、今將軍等、准承前例、所定卅七人、權用十五人者、今所興征軍一万九千五百餘人、然則四万之日、軍吏不滿五十、今日二万、何超六十、仍折衷所定、軍監十人、軍曹廿人、宜精選堪戰者充用言上、○（二十）癸丑、勅、天下諸國、昔遭疾疫、續以旱災、百姓彫弊、于今未復、興言念此、深疚于懷、宜簡鰥寡孤獨及貧窮老疾不能自存者、早加賑給、但給法者、准延暦十九年例、○（廿一）甲寅、勅、農人喫魚酒、禁制惟久、而國司寬縱、無情糺斷、今須遣使重加督察、宜令國司在前禁止、若有輙喫幷與者、卽禁其身、使到之日、付行決罰、不得慣常寬容、○（廿三）丙辰、大納言正三位兼右近衞大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨、正四位上犬養之孫、從三位苅田麻呂之子也、其先阿智使主、後漢靈帝之曾孫也、漢祚遷魏、避國帶方、譽田天皇之代、率部落內附、家世尚武、調鷹相馬、子孫傳業、相次不絕、田村麻呂、赤面黃鬚、勇力過人、有將帥之量、帝壯之、延暦廿三年拜征夷大將軍、以功叙從三位、但往還之間、從者無限、人馬難給、累路多費、大同五年轉大納言、兼右近衞大將、頻將邊兵、每出有功、寬容待士、能得

○勝悟卒、元亨釋書二にも傳見ゆ
○神叡、同卷十六に傳あり

死力、薨于粟田別業、贈從二位、時年五十四、○(廿五)戊午、信濃國獻白烏、○六月癸亥朔、正四位下巨勢朝臣野足授從三位、從五位下直世王從五位上、從四位上春原朝臣五百枝正四位下、從五位上藤原朝臣道繼正五位下、從五位下紀朝臣百繼、良岑朝臣安世從五位上、正六位上藤原朝臣清本、藤原朝臣總繼、紀朝臣和氣麻呂、多治比眞人弟笠、石川朝臣弟助、大伴宿禰山道從五位下、正六位上廣井宿禰眞成外從五位下、從五位上直世王爲中務大輔、相摸守如故、從五位下藤原朝臣總繼爲少輔、從五位下石上朝臣美奈麻呂爲兵部少輔、從四位下大野朝臣直雄爲左近衞中將、左京大夫如故、參議從三位巨勢朝臣野足爲右近衞大將、參議左大辨從四位上秋篠朝臣安人爲兼左兵衞督、越後守如故、參議右大辨從四位下紀朝臣廣濱爲兼右兵衞督、從五位下藤原朝臣清繩爲佐、出雲介如故、○(三)乙丑、令諸國進武藝人年卅已下、補左右近衞、是日、奉幣於伊勢大神宮、○(六)戊辰、大僧都傳燈大法師位勝悟卒、法師俗姓凡直、阿波國板野郡人也、法師初爲尊應大德弟子、是則芳野神叡大德

○入室、高弟を云
○非空非有之宗、諸法の實相は有にもあらず空にもあらず中道なりと説く宗旨を云
○時議、原本議を儀に作る西本に據て改む
○十三大寺、東大寺以下十五大寺の中より二寺を除けるなるべし
(七月)藤原朝臣眞雄卒、延暦廿二年正月庚子紀に始て見ゆ
○朱鈎、鈎は鉤車の略ならむか禮記明堂位に鉤車夏后氏之路也、注に鉤有曲輿者也とあり天子の御車を云

之入室也、道業清高、洞明經戒、姿儀不凡、言語可愛、至於非空非有之宗、當時推而相讓、護命、慈寶、泰演等英傑、皆自其門而出焉、聖朝嘉尚、授以僧統、時議稱任得其人、緇徒之中、濫行不聞、政迹之所致也、薪盡火滅、嗚呼哀哉、春秋八十、○庚午、正六位上清原眞人夏野授從五位下、○戊寅、從五位下高階眞人遠成爲民部少輔、從五位下尾張連粟人爲主計頭、從五位下笠朝臣梁麻呂爲豐後介、○辛巳、十三大寺僧尼年八十已上者、各賜絁二疋布四端、○丁亥、主殿寮釜殿自倒、○秋七月(癸巳朔)乙未、出羽國鎭兵賜復三年、以在邊戍家業絶亡也、○己亥、幸神泉苑、觀相撲、○庚子、備前守正四位下藤原朝臣眞雄卒、左京大夫正四位下鷹取之男、左大臣正二位魚名之孫也、勇力過人、頗有武藝、爲推國天皇(平城)之近臣、延暦廿二年叙從五位下、任近江權介、廿五年授從五位上、歷近衞少將、大同三年授正五位下、同年□從四位下、遷左馬頭、自守清廉、不論入短、身帶弓劍、常侍朱鈎、屬天皇遷御平城、分局追從、既而一女進謀、天皇擬入于伊勢、眞雄遮輿而伏、忘死固爭、蓋魏臣斷鞦之志乎、可謂歲寒而知松柏之

○魏臣斷鞦之志乎、故事未だ考へず
○綿麻呂等、考異に等舊脫據例補とあり
○省今月四日奏狀、原本省を看に作る例に據て改む下同じ
○彼村夷俘、夷字西本に據て補ふ
○臨討、西本類史討を伐に作る
○詳議、原本詳を評に作る西本に據て改む
○速谷神、神名式に安藝國佐伯郡速谷神社名神大月次新嘗、今同郡平良村大字上平良にあり國幣中社に列す
○伊都岐嶋神、同式に同國同郡伊都岐嶋神社名神大、今同郡嚴嶋町にあり官幣中社に列す

後凋者也、今上嘉其忠情、特授正四位下、拜備前守、在任而卒、時年卌五、○[十二]甲辰、幸神泉苑、陪侍之人、賜錢有差、○[十三]乙巳、勅、聞平城宮諸衞官人等、出入任意、不勤宿衞、宜直彼參議加督察焉、○[十四]丙午、勅征夷將軍正四位上兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰、省今月四日奏狀、具知以俘軍一千人、委吉彌侯部於夜志閇等、可襲伐弊伊村、彼村夷俘、黨類巨多、若以偏軍臨討、恐失機事、仍欲發兩國俘軍各一千、來八九月之間、左右張翼、前後奮□、宜與副將軍及兩國司等、再三詳議、具狀奏上、國之大事、不可輕畧、○[十五]丁未、大極殿龍尾道上有雲氣、狀如烟、須臾竭滅、○[十七]己酉、安藝國佐伯郡速谷神、伊都岐嶋神、並預名神例、兼四時幣、○[廿三]乙卯、侍從從五位下藤原朝臣世嗣爲兼右少辨、從五位下多治比眞人弟笠爲中務少輔、正五位下石川朝臣河主爲內匠頭、從五位下豐野眞人仲成爲主稅頭、從五位上田中朝臣淨人爲大藏少輔、從五位下淸原眞人夏野爲宮內少輔、從五位下淡海眞人有成爲左京亮、從五位下藤原朝臣總繼爲相摸介、從五位下大野朝臣眞菅爲下總守、從五位下藤原朝

○朝原忌寸、寶龜七年十二月戊申紀（續紀下三〇〇頁）に見え本姓は秦忌寸なり朝原は葛野郡の地名
○邑良志閇村、今羽後國北秋田郡荒瀨村なるべしと云
○貳薩體村、上文に貳を爾に作る
○都母村、今陸奧國上北郡都母村是なり
○幣伊村、幣は上文弊に作り下文閇に作る
（八月）甘南備內親王、桓武天皇皇女母藤原東子中納言種繼女
○若遭水旱、三代格若を等に作る
○主戶損、戶字は三代格に據て補ふ

臣濱主爲出羽介、大學頭正五位下御室朝臣今嗣爲兼越後守、右近衞大將從三位巨勢朝臣野足爲兼備前守、左大辨從四位上秋篠朝臣安人爲兼備中守、左兵衞督如故、從五位上安倍朝臣眞直爲周防守。山城國乙訓郡地四町賜左衞士督從四位上藤原朝臣冬嗣。○（廿九）辛酉、右京人正六位上朝原忌寸諸坂、山城國人大初位下朝原忌寸三上等賜姓宿禰。出羽國奏、邑良志閇村降俘吉彌侯部都留岐申云、己等與貳薩體村夷伊加古等、久搆仇怨、今伊加古等、練兵整衆、居都母村、誘幣伊村夷、將伐己等、伏請兵粮、先登襲擊者、臣等商量、以賊伐賊、軍國之利、仍給米一百斛、獎勵其情者、許之。○八月（癸亥朔）（三）乙丑、上總國海上郡加置主政一員。○（十）壬申、山城國乙訓郡地二町、田十町、池一處、栗林一町、賜甘南備內親王。○（十一）癸酉、勅、諸國俘浪人、若遭水旱者、准平民免調庸、但人之寄住、各有其主、宜勸其主戶損免之、不得因茲濫致奸詐。○（十二）甲戌、幸神泉苑、五位已上賜綿有差。是日、一星乍合乍離、狀似相鬪。大宰府言、新羅人金巴兄、金乘弟、金小巴等三人申、去年被差本縣運穀、海中逢賊、同伴盡沒、唯己

○仁渙、字書に渙は散釋之名、大德之人、建功立業散難釋險、故謂之渙とあり
○春日內親王、桓武天皇皇女、天長九十二薨、母坂上春子大納言田村丸女
○萩原名草賀太三驛、兵部式紀伊國驛馬萩原賀太各八疋と見ゆ萩原は伊都郡笠田村大字萩原、名草は名草郡（今海草郡）山口村大字瀧畑、賀太は海部郡（今海草郡）加太町なり萩原賀太二驛は後更に置かれしなり故に兵部式に載するなり
○廣宗連、弘仁十四年に廣宗連糸繼見ゆ
○漆部、職員令漆部司に漆部廿人と見ゆ
○齋內親王、仁子內親王嵯峨天皇皇女母大原氏
（九月）今月、考異に月舊缺據類史補類史一本作日とあり
○祭北辰云々、齋宮式に凡齋王將入大神宮之時自九月一日迄三十日京畿內伊勢近江等國不得奉燈北辰及擧哀改葬とあり北辰を祭る事は公事根源に延曆十五年三月にはじまると見ゆ

等幸頼天祐、儻著聖邦、雖沐仁渙、非無顧戀、今聞鄕人流來、令得放歸、伏望寄乘同船、共還本鄕者、許之、○十四丙子、山城國乙訓郡地一町賜春日內親王、○十五丁丑、廢紀伊國萩原名草賀太三驛、以不要也、○十六戊寅、遊獵于北野、五位已上賜衣被、是日有狼、入造兵司、爲人所殺、○廿七己丑、山城國人正六位上高麗人東部黑麻呂、賜姓廣宗連、是日廢漆部八烟、從公戶、○廿八庚寅、勅、留庚午年幷五比籍、自餘遠年之籍、宜依令除之、○廿九辛卯、齋內（己子）親王禊于葛野川、諸司陪從如常、●九月壬辰朔、禁今月祭北辰擧哀改葬等事、以齋內親王入伊勢也、出羽國人少初位下无耶志直膳大伴部廣勝賜姓大伴直、○四乙未、齋內親王入伊勢、諸司陪從如常、右京人正六位上吉田連宮麻呂等賜姓宿禰、○八己亥、令諸國依舊出擧修理國分寺料、○九庚子、曲宴前殿、命文人賦詩、其文人五位已上賜被、自餘五位、幷文人六位已下衣、○十二癸卯、大風破京中廬舍、○十三甲辰、被風損者、給米有差、○十六丁未、勅、侍平城宮諸衞府官人等、任意不直、已闕宿衞、宜改前勅、即命少將已上、便撿挍焉、○十九庚戌、停內舍人奏、依舊令闈司奏之、○廿六丁

〇大伴直、三月庚子紀に見ゆ
〇吉田連、錄左京皇別吉田連大春日朝臣同祖天帶彦國押人命四世孫彦國葺命之後也云々神龜元年賜吉田連姓今上弘仁二年改賜宿禰姓也とありよく符合せり
〇闈司、後宮職員令に闈司尚闈一人掌宮閤管鑰及出納之事典闈四人掌同尚闈とあり類史に大同二年五月庚寅停闈司奏事令内舍人奏之と見え内舍人に掌らしめられしを更に復舊せられしなり
（十月）至自渤海國、國字は西本に據て補ふ
〇看、省の字の訛なるべし
〇長野牧、上野國利根郡古馬牧村大字上牧下牧蓋是なり左馬寮式御牧に上野國久野牧とある久は長の草體より誤れるなるべしと地理志料に云り
〇葛原親王、桓武天皇皇子
〇別君、西本君を公に作る
〇御林宿禰、錄大和諸蕃に三林公已智同祖諸齒王

已、遊獵于紫野、五位已上賜衣被、是月桃李華、〇冬十月癸亥、正六位上林宿禰東人等、至自渤海國、奏曰、國王之啓、不據常例、是以去而不取、其錄事大初位下上毛野公嗣益等所乘第二船、發去之日、相失不見、未知何在、〇乙丑、勅征夷將軍參議正四位上大藏卿兼陸奧出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰、看去九月廿二日奏云、隨機量便、更分四道、士卒數少、充用處多、加以霖雨無息、轉餉有滯、不加輜重、恐乏兵糧、伏望點加陸奧國軍士一千一百人者、依奏、〇丙寅、上野國利根郡長野牧賜三品葛原親王、攝津國人正七位上別君清名、賜姓御林宿禰、〇壬申、詔曰、衛士兵衛四府者、宮掖是守、戒嚴非輕、所以警偵姦邪、防遏虐猾、雖綏撫瀛表、專叶禮樂之風、而備豫機先、必資弧矢之利、皇明建極、大聖乘乾、取適於時、須有沿革、其左右衛士兵衛等、宜依舊數、從五位下藤原朝臣淨本爲宮內少輔、從五位上安倍朝臣眞直爲主殿頭兼豐後守、參議從四位上左衛士督藤原朝臣冬嗣爲兼春宮大夫、美作守如故、從五位下淨原眞人夏野爲亮、從五位下文室眞人正嗣爲周

之後也とあると同じきか
○衞士兵衞云々、三代格巻四に見ゆ
○警偵、原本偵を愼に作る西本及三代格に據て改む
○資弧矢之利、字書に弧木弓也とあり弧矢は弓矢といふに同じ
○大聖乘乾、天皇の天下を統治し給ふを云ふ三代格に乘を垂に作るは非なり
○淨原、上下の例に據るに清原とあるべきなり
○省、原本看に作る類史に據て改む
○騷擾、原本騷を勞に作る西本及類史に據て改む
○新獲之夷、考異に獲舊作羅據類史訂とあり
○墓地、田邑麻呂傳記に宇治郡栗栖村今俗呼爲馬背坂とあり山城志に在栗栖野今曰花木冢又曰馬背と云り
（十一月）營造神宮、弘仁三年九月外宮遷宮の事大神宮例文に見ゆ原本營を勞に作る誤なること明なれば改む
○勞止、毛詩民勞章に民亦勞止とあるに據れり止は助字

防守、○（十三）甲戌、勅征夷將軍參議正四位上行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰、省今月五日奏狀、斬獲稍多、歸降不少、將軍之經略、士卒之戰功、於此而知矣、其蝦夷者、依請須移配中國、唯俘囚者、思量便宜、安置當土、勉加教喩、勿致騷擾、又新獲之夷、依將軍等奏、宜早進上、但人數巨多、路次難堪、其強壯者歩行、羸弱者給馬、○（十四）乙亥、大和國添上郡地二町賜左近衞府、○（十七）戊寅、賜山城國宇治郡地三町、爲故大納言贈從二位坂上大宿禰田村麻呂之墓地、○（十九）庚辰、從五位下伊勢朝臣德成爲上野介、從五位下豐野眞人仲成爲肥前守、○（二十）辛巳、講仁王經、○（廿四）乙酉、遊獵于栗前野、賜五位已上衣被、○（廿七）戊子、遊獵于紫野、○十一月（壬辰朔）（九）庚子、詔曰、伊勢國頃年多事、百姓勞擾、往年供奉大嘗、頗疲轉運、重屬兵革、共廢農畝、今亦營造神宮、未遑息肩、尋縁齋内親王相替迎送、祇供不息、念其勞止、殊疚于懷、悦以使民、歷代之洪猷、救弊可康、曩哲之恒範、宜今年田租、悉免勿徵、○（十三）甲辰、賜書存問玄賓法師、又施綿百屯布卅端、法師郎上表謝恩、○（廿一）壬子、賜聽福法師書曰、煙霞澹泊、素是戰勝之場、京洛囂塵、

誠爲染衣之地、和上超俗雲霄、味道巖穴、慧炬有晃、戒珠無玷、國之元老、人之師範、披薜蘿而長往、賞風月以忘歸、朕嘉爾令德、夢想猶存、謂予不信、有如皦日、今故行李知聞、兼附送綿百屯布卅端、至宜充頭陁資耳、時寒、想善加珍衛、從五位下坂上大宿禰眞弓爲大舍人助、從四位下多治比眞人今麻呂爲式部大輔、大和國添下郡白田一町賜從五位下三國眞人氏人、○己未(廿八)、改左右衞士府爲左右衞門府、○十二月(壬戌朔)辛未(十)、彈正臺置史生六員、○癸酉(十二)、始令諸司史生參國忌齋會、○甲戌(十三)、詔曰、天皇詔旨良麻止勅命乎、衆聞食止宣、陸奧國乃蝦夷等、歷代涉時弖、侵亂邊境、殺略百姓、是以掛畏柏原朝庭乃御時爾、故從三位大伴宿禰弟麻呂等乎遣弖、伐平之米給比支、而餘燼猶遺弖、鎭守未息、又故大納言坂上大宿禰田村麻呂等乎遣弖、伐平之米給不爾、遠閇伊村乎極弖、略掃除弖之可止毛、逃隱山谷弖、盡頭弖究殄己止不得奈利爾太利、因茲正四位上文室朝臣綿麻呂等乎遣弖、其頑覆勢爾乘弖、伐平掃治之牟流爾、副將軍等、

○洪獄、考異に洪舊作レ供、據二類史一訂
○無玷、同に玷舊作レ沾、據二類史一訂
○嘉爾令德、同に嘉舊作レ喜、今從二類史一とあり
○謂予不信有如皦日、毛詩王風大車章に出づ注に若謂二我此言爲一レ不レ信乎我言之信有レ如二皦然之白日一言二其明而可一レ信也とあり
○行李、使者を云左傳襄八年に亦不レ使二一介行李告一于寡君一注に行李行人也とあり
○卅端、逸史所引類史卅を廿に作る
○充頭陁資、類史充を實に作る頭陀は翻譯名義集に此云二抖擻一亦云二修治一云々抖擻煩惱一故也とあり修行と同義なり十二種の行ありと云
○加珍衛、類史に加字無し
○左右衞門府、大同三年七月衞門府を罷め之を衞士府に附け左右衞士府と號せしが是に至て衞士府を改て衞門府とす兵庫頭佐伯金山等の請に依れり
(十二月)國忌齋會、治部式に凡國忌日各請二當寺僧一百口一轉レ經禮レ佛輔

丞錄各一人、玄蕃寮五位一人六位已下官二人皆詣寺以供事とあり式部式にも詳なり
○侵亂邊境、紀略侵を擾に作る
○閇伊村、上文閇を幣又弊に作る
○冠位、位字は西本に據て補ふ
○物部匝瑳連、承和二年三月紀物部匝瑳連熊猪奏狀に詳に見ゆ
○追贈從六位下、原本贈を賜に作る類史及紀略に據て改む
（閏十二月）日抱翼、翼は星座の名、廿八宿の一なり
○寇、寇字の譌體なり下文遺寇及邊寇も亦同じ

各同心勠力、忘殉心以弖、不惜身命、勤仕奉利、幽遠久薄伐、巢穴乎破覆之弖、遂其種族乎絶弖、復一二乃遺毛無、邊戎乎解却、轉餉乎毛停廢都、量其功勞波、上治賜爾足止奈毛御念須、故是以其仕奉狀乃重輕乃隨爾、冠位上賜比治賜久止宣天皇御命乎、衆聞食止宣、正四位上文室朝臣綿麻呂授從三位、從五位下佐伯宿禰耳麻呂正五位下、從五位下大伴宿禰今人、坂上大宿禰鷹養從五位上、外從五位下物部匝瑳連足繼外從五位上、○乙亥、十四故遣渤海錄事大初位下上毛野公嗣益追贈從六位下、以身死王事也、○丙子、十五地震、○丁丑、十六遊獵于大原野、右大臣藤原朝臣內麻呂幷山城國奉獻、雅樂寮奏樂、賜五位已上衣被、○閏十二月辛卯朔己亥、九日抱翼、○辛丑、十一征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奧出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言、今官軍一擧、寇賊無遺、事須悉廢鎮兵、永安百姓、而城柵等所納器仗軍粮、其數不少、迄于遷納、不可廢衛、伏望置一千人充其守衛、其志波城、近于河濱、屢被水害、須去其處、遷立便地、伏望置二千人、暫充守衛、遷其城訖、則留千人、永爲鎮戍、自餘悉從解却、又兵士之設、

○水生野、攝津國嶋上郡（今三嶋郡に入る）
○山埼驛、山城國乙訓郡、兵部式に山城國驛馬山埼廿疋とあり最も要驛なり
○藤代宿禰、藤代は紀伊國名草郡（今海草郡に入る）の地名
○吉原宿禰、吉原は紀伊國有田郡の地名
○大俣連、原本俣を役に作る類史に據て改む錄左京神別に大貞連（貞一作眞下同）饒速日命十五世孫彌加利大連之後也上宮太子攝政之年任大椋官于時家邊有大俣楊樹云々郎詔阿比太連賜大俣連天平神護元年改字賜大貞連とあり
○大眞連、延暦廿三年十一月甲申紀並に承和四年四月丁酉紀には大貞連とあれど錄一本並に靈異記にも大眞とあれば核齋の說の如く大眞なるべし按

爲備非常、既無遺寇、何置兵士、但邊國之守、不可卒停、伏望置二千人、其餘解却、又自寶龜五年、至于當年、惣卅八歲、邊寇屢動、警□無絕、丁壯老弱、或疲於征戍、或倦於轉運、百姓窮弊、未得休息、伏望給復四年、殊休疲弊、其鎭兵者、以次差點、輪轉復免者、並許之、○十四甲辰、遊獵于水生野、御於山埼驛、山城攝津二國奉獻、賜五位已上衣被、○十五乙巳、紀伊國人紀直祖刀自賣之子嗣宗言、天下之人、皆承父姓、身爲公民、長貢調庸、而嗣宗獨身無所貫、久背課役、是以欲附母戶、外戚不許、且爲他子、假濫有制、伏望因親母之居、賜姓藤代宿禰、勅賜吉原宿禰、貫于左京、○十八戊申、左京人從六位下多治比連年繼賜姓宿禰、大和國人從八位下大俣連福貴麻呂賜姓大眞連、○十九己酉、出羽國百姓、賜復三年、勞軍役也、○廿五乙卯、正六位上宍人朝臣高志、正六位下物部田繼、正六位下飯高宿禰姉綱授外從五位下、○廿七丁巳、大和國人正六位下賀茂宿禰河守、正七位上賀茂宿禰關守等賜姓朝臣、右京人從五位上高村忌寸田使、故從五位下高村忌寸眞木山等賜姓宿禰焉、

に大俣を大眞と改めしは俣と云るを忌避けたるにて眞にては似合しからず○宍人朝臣、考異に宍舊作レ宗今從二類史一とあり

日本後紀卷第廿一

右日本後紀殘冊第十二第廿一門人稻山行敎於京都寫之以類聚國史

日本紀略等諸書挍合畢

享和元年十一月　日　　檢校保己一

日本後紀卷第廿二

起弘仁三年正月盡四年二月

左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

〔弘仁三年〕宴侍臣於前殿、考異に宴以下四字舊脫據類史紀略補とあり

○佐須浦、今の小茂田浦を云八幡愚童記に文永十一年十月五日對馬の西おもて佐須浦に異國船見ゆとあり

太上天皇　嵯峨

(壬辰)三年春正月庚申朔、皇帝御大極殿、受朝賀、宴侍臣於前殿、賜御被、○甲子、大宰府去十二月廿八日奏云、對馬嶋言、今月六日新羅船三艘浮□西海、俄而一艘之船著於下縣郡佐須浦、船中有十人、言語不通、消息難知、其二艘者、闇夜流去、未知所到、七日、船廿餘艘在嶋西海中、燭火相連、於是遂知賊船、仍殺先著者五人、五人逃走、後日捕獲四人、卽衞兵庫、且發軍士、又遙望新羅、每夜有火光數處、由玆疑懼不止、仍申送者、爲問其事、差新羅譯語幷軍毅等發遣已訖、且准舊例應護要害之狀、告管內幷長門石見出雲等國訖者、所奏消息、旣是大事、虛實之狀、續須言上、而久移年月、遂無所申、又要害之國、必發人兵、應疲警備、解却之事、期於何日、

○佐味親王、桓武天皇第十六皇子
○眞屋麻呂、類史屋を室に作る
○繩繼、考異に繩舊脫、據類史補さあり
○惠師、下文弘仁六年七月辛未紀に畫師とあり

宜言其由、不得更怠、又量事勢、不足爲虞、宜令停出雲石見長門等國護要害事、○丙寅、无品佐味親王授四品、正五位下多賀王正五位上、无位石野王、正六位上原王從五位下、從四位上文室朝臣眞屋麻呂正四位下、從四位下藤原朝臣今川從四位上、正五位下百濟王教德、小野朝臣野主從四位下、從五位上紀朝臣百繼正五位上、從五位上池田朝臣春野、佐伯宿禰清岑、安倍朝臣眞勝正五位下、從五位下紀朝臣南麻呂、藤原朝臣世嗣、大原眞人眞福從五位上、正六位上文室眞人末嗣、藤原朝臣櫻麻呂、和朝臣繩繼、橘朝臣淨野、石川朝臣水長、藤原朝臣豐彥、大伴宿禰雄堅魚、粟田朝臣鯨、巨勢朝臣清野、三嶋眞人助成、從六位下安倍朝臣豐柄、粟田朝臣飽田麻呂、石川朝臣淨道、秋篠朝臣男足、從七位下八多朝臣桑田麻呂、正七位上布勢朝臣全繼從五位下、正六位上高丘宿禰弟越、滋野宿禰家譯、林忌寸眞永、勇山連家繼外從五位下、宴五位已上、賜祿有差、○丁卯、正五位上紀朝臣百繼授從四位下、正六位上布勢朝臣勝成從五位下、正六位上簀秦惠師笠麻呂外從五位下、從五位

○飛鳥戸造、錄右京諸蕃に百濟國比有王之後也また河內諸蕃に比有王男混伎王之後也また同國末多王之後也などあり
○大宰帥、原本帥を師に作る 謬なること明なれば改む

上藤原朝臣緒夏從四位下」是日、詔贈故下野介外從五位上高原連源從五位下、以其善政傳于後代也、○〔十二〕辛未、右京人正六位上飛鳥戸造善宗、河內國人正六位上飛鳥戸造名繼、賜姓百濟宿禰」、式部卿三品葛原親王爲兼大宰帥、從三位巨勢朝臣野足爲中納言、右近衛大將如故、從四位上藤原朝臣藤嗣爲參議、參議從三位藤原朝臣繩主爲兵部卿、從五位下紀朝臣長田麻呂爲玄蕃頭、從五位下藤原朝臣弟主爲大判事、從五位下藤原朝臣福當麻呂爲典藥頭、左中辨從四位下小野朝臣野主爲兼攝津守、外從五位下高丘宿禰弟越爲山城介、從五位下秋篠朝臣男足爲伊賀守、齋宮頭從五位下小野朝臣眞野爲兼伊勢權介、外從五位下滋野宿禰家譯爲尾張介、左馬頭從五位上安倍朝臣男笠爲兼參河守、從五位下淡海眞人有成爲介、少納言從五位下宇治王爲兼遠江守、從五位下氷上眞人河繼爲伊豆守、從五位下藤原朝臣眞川爲甲斐守、參議右衛門督正四位下藤原朝臣緒嗣爲兼近江守、從五位下朝野宿禰鹿取爲介、式部少輔從五位下小野朝臣岑守爲兼美濃守、

內藏頭如故、正五位下藤原朝臣道繼爲下野守、從五位下安倍朝臣豐柄爲介、正五位下佐伯宿禰耳麻呂爲陸奥守、從五位上藤原朝臣鷹養爲越中守、外從五位下秦宿禰智奈理爲越後介、右近衞中將從四位下大野朝臣直雄爲兼丹波守、從五位下尾張連粟人爲丹後守、大外記從五位上上毛野朝臣穎人爲兼因幡介、鑄錢長官從五位上大枝朝臣繼吉爲兼伯耆守、從五位下石川朝臣清道爲介、從五位下藤原朝臣清繩爲出雲守、從五位下三國眞人氏人爲美作介、參議從四位上秋篠朝臣安人爲兼備前守、左大辨左兵衞督如故、從五位下藤原朝臣廣敏爲備中守、外從五位下廣井宿禰眞成爲介、從五位下御井王爲安藝守、外從五位下當宗忌寸家主爲阿波介、參議從四位上藤原朝臣藤繼爲大宰大貳、從五位下藤原朝臣葛成爲少貳、從五位上大枝朝臣永山爲肥後守、大內記從五位下菅原朝臣清人爲兼大掾、諸陵頭從五位上永原朝臣最弟麻呂爲兼豐前守、從四位下紀朝臣百繼爲右近衞中將、從五位下坂上大宿禰廣野爲少將、從五位下布勢朝臣全繼爲左衞門佐、從五

○遊獵栗前野、類史獵下に于字あり
○乙酉制云々、三代格卷五に見ゆ正五位上に准ずる事養老五年六月十日以來の制なり
○夷外從五位上、類史上を下に作る
○色男、原本色を邑に作る類史に據て改む
（二月）慶雲三年格、同年二月十六日勅なり三代格卷十七及政事要略五十九に見ゆ
○屏風、抄調度部屏障具に西京雜記云七尺屏風（屏音薄經反）、釋名に屏風言レ可三以屏二障風一也とあり天武紀朱鳥元年四月新羅獻物中（紀下三〇九頁）に見ゆ
○障子、抄同上に楊氏漢語抄云屏風之屬也、箋注に障子障二隔物一不レ使二遙望一之物所謂賢聖障子今俗稱障子之類荒海障子昆明池障子等今俗衝立之類也云々と云り
○花宴之節、字類抄に花宴嵯峨天皇御宇弘仁三年壬辰始之、編年記に弘仁三年壬辰二月始二百華宴一此御時南殿櫻有二沙汰一被レ栽レ之取二貢諸櫻一所レ被

位下巨勢朝臣清野爲二右兵衞佐一。○（十六）乙亥、宴二侍臣一、賜レ祿有レ差。○（廿五）甲申、遊二獵栗前野一。五位已上及山城國掾已上賜二衣被一。○（廿六）乙酉、制、陸奥出羽按察使正五位上官、今改爲二從四位下官一。夷外從五位上宇漢米公色男（シコ）、外從五位下介散南公獨伎、播磨國印南郡權少領外從五位下浦田臣山人等三人、特聽二節會入一レ京。○（廿七）丙戌、正四位下春原朝臣五百枝授二從三位一。○

（戊寅朔）二月（二）辛卯、陸奥國言、慶雲三年格云、身役二十日以上免レ庸、廿日以上庸調俱免者、今征夷軍士役二卅日以上一也、伏請准二格幷延暦廿一年例一、免二除去年調庸一者、許レ之。○（三）壬辰、屏風一帖、障子卅六枚、施二入東寺一、障子卅六枚施二入西寺一。○（十）己亥、從五位下和朝臣繩繼爲二散位助一、正五位下田口朝臣息繼爲二民部大輔一、阿波守如レ故、從五位下紀朝臣和氣麻呂爲二主計頭一、從五位下石川朝臣弟道爲二木工頭一、從五位下多治比眞人繼益爲二正親正一、從四位上藤原朝臣今川爲二左京大夫一、越前守如レ故、從五位下菅原朝臣清公爲二亮一、從四位下藤原朝臣貞嗣爲二右京大夫一、外從五位上物部匝瑳連足繼爲二鎭守將軍一。○（十二）辛丑、幸二神泉苑一、覽二花樹一、命二文人一賦レ詩、賜レ綿有レ差、花宴

栽故有華遲速開落又異也其色又各別也と見ゆ

○復采女司、大同三年正月壬寅縫殿寮に併せたるを此に至て復す

○阿倍長田朝臣、元明紀和銅五年十一月紀（續紀卷上九〇頁）を參看すべし

○（三月）戊寅勅、三代格卷三及要略五十五に見ゆ

○大同之初、大同元年十二月庚申紀に見ゆ

之節始於此矣、○癸卯、遊獵水生野、○甲辰、遊獵交野、山城、攝津、河內等國獻物、賜侍從以上及國宰掾已上衣被、○庚戌、復采女司、○辛亥、山城國乙訓郡荒地賜大外記從五位上上毛野朝臣穎人、左大史正六位上朝原宿禰諸坂、左少史從七位下佐太忌寸豐長各一町、左京人從五位下阿倍長田朝臣節麻呂、從七位上阿倍長田朝臣高繼等八人賜姓阿倍朝臣、○壬子、從五位下小野朝臣諸野爲大膳亮、外從五位下縵連家繼爲典藥助、○三月己未朔、諸司要劇、停米宛錢焉、新羅人清漢波等流來、依願放還、○丙寅、封一百戶施入秋篠寺、○丁卯、異能之兵衞每府四人、准近衞給別祿月粮、○癸酉、御大極殿、出雲國造外從五位下出雲臣旅人奏神賀辭、并有獻物、賜祿如常、○丁丑、從五位下百濟王教勝爲刑部少輔、外從五位下林忌寸眞永爲大炊助、從五位下多治比眞人船主爲右京亮、○戊寅、勅、大同之初、令畿內講師專預講說、令演眞諦、其諸寺雜事并補三綱等、暫預僧綱、但國分寺者、國司講師相共撿按者、自今以後、部內諸寺、宜令講師永加撿按、其國分二寺、國司亦相共撿、其造

〇春日內親王、桓武天皇皇女
〇立麻呂、紀略立を弓に作る
((四月))定鎭守官員云々、三代格卷五に見ゆ
〇田夷、山夷に對して云り農を主とする夷族なり
〇上毛野綠野直、上野國に綠野郡あり地名によりて名づく
〇阿倍小殿朝臣、前に出づ
〇僧尼之制云々、三代格卷三弘仁九年五月廿九日太政官符中に見ゆ
〇寔繁、格に繁を多に作る
〇勝因、勝れたる因緣の意
〇淫犯之狀、原本狀を徒に作る類史及三代格に據て改む
〇顏面、目前と云に同じ
〇牓示、揭示するを云考異に示舊作爾據類史訂とあり
〇請僧、類史諸僧に作る
〇當寺內、三代格內を家に作る
〇因此、三代格此を茲に作る
〇但、三代格其に作る
〇尼寺鎭、尼寺の上首な

寺用度者、講師別亦勘錄、毎年申送於僧綱、遷替之日、令依舊例、責其解由、諸國亦宜准之、〇己卯(廿一)、山城國乙訓郡陸田一町九段賜春日內親王、外從五位下雁高宿禰氏成爲近江權大目、〇壬午(廿四)、右京人弓削宿禰立麻呂獻連理木、〇丙戌(廿八)、雨雹、〇夏四月(戊子朔)己丑(二)、定鎭守官員、將軍一員、軍監一員、軍曹二員、醫師弩師各一員也、〇癸巳(六)、幸神泉苑、賜四位已上衾、〇庚子(十三)、出羽國田夷置井出公呰麻呂等十五人賜姓上毛野綠野直、〇壬寅(十五)、右京人從七位上阿倍小殿朝臣大家賜姓阿倍朝臣、〇癸卯(十六)、勅、僧尼之制、事明令條、男女之別、非無禮法、頃者諸寺僧尼、其數寔繁、外託勝因、內虧戒律、精進之行無顯、淫犯之狀屢聞、僧綱顏面、不加捉搦、官司寬容、無心糺正、又法會之時、懺悔之日、男女混雜、彼此無別、非禮之行、不可勝論、敗道傷俗、莫甚於斯、永言其弊、理合懲肅、宜令京職幷諸國、牓示部內諸寺及所有道場等、令加禁斷、若不遵承、輙容受一人已上者、三綱幷入者等、並科違勅罪、所司不糺、亦與同罪、其病者可就寺治疾及請僧看病者、經僧綱若講師、聽其處分、檀越有可勾當寺內雜事者、聽令暫入、不得

り大鎭中鎭小鎭等の別あり
○名草驛、名草郡驛家郷にあり今山口村大字瀧畑なるべしと云之を廢せしは道路變更の結果なり
○萩原驛、二年八月之を廢せしが更に復置かる萩原は伊都郡にあり
(五月)營水陸田特立嚴制、此勅三代格卷十五に見え末文に小異あり
○先勅、三代格先格に作る
○有封神社者云々、此制三代格卷一に見ゆ文少しく異同あり參看すべし有封とは封戸即ち神戸を有するを云
○延怠、怠りて延引するを云
○不勤修理、考異に理舊脫據類史三代格補とあり
○白身、三代格に白丁とあり有位に對して無位の人を云

因此經宿留連、但寺家奴婢及尼寺鎭等不在禁限、○十九丙午、大外記從五位下豐宗宿禰廣人爲兼安藝介、大內記從五位下菅原朝臣清人爲兼肥後介、○二十丁未、廢紀伊國名草驛、更置萩原驛、○五月戊午朔三庚申、勅、諸國司、公廨田之外營水陸田、特立嚴制、而諸國不奉朝憲、專求私利、百端姧欺、一無懲革、或假他人名、多買墾田、或託言王臣、競占腴地、民之失業、莫不由此、若亦有違犯者、解却見任、科違勅罪、一如先勅、買田占地、並亦沒官、從四位下小野朝臣石子、永原朝臣惠子授正四位下、正五位下秋篠朝臣諸主、藤原朝臣松子、從五位上笠朝臣道成從四位下、從六位上安倍朝臣堅魚、大伴宿禰全刀自、秋篠朝臣室成、安都宿禰吉子從五位下、无位秦忌寸廣刀自外從五位下、是日制、有封神社者神戸修造、於無封社無人修理、自今以後、宜令禰宜祝等修造、每有小破、隨即修作、不得延怠使致大破、國司屢加巡撿、若禰宜祝等、不勤修理、令致破壞者、並從解却、其有位者、即追位記、白身者決杖一百、國吏不撿閲、有致破損者、遷替之日、拘其解由、但遭風火非常等損、不堪修作者、言上聽裁、○四辛酉、勅、伊

○多氣度會及云々、當時多氣度會兩郡は神郡にて飯高以下七郡には各若干の神戸ありしなり故に及の字を以て之を區別せり七郡は飯高飯野壹志安濃鈴鹿川曲桑名是なり飯野は寬平九年九月神郡となる
○榎撫驛、延曆廿四年十一月壬申紀に見ゆ
○衣衾、類史衾を食に作る
○朝原內親王辭職、紹運錄に桓武天皇皇女齋宮二品平城納之无寵とあり
○遣使、考異に使舊脫據類史補云
○大同之初云々、大同元年六月壬寅紀に見ゆ
○拾芥磨玉之彥、拾芥は漢書夏侯勝傳に士病不明經術、經術苟明其取靑紫如俛拾地芥耳とあるに據れり顯榮の得易きを云磨玉は聞えたるが如し彥は爾雅釋訓に美士爲彥とあり
○環林、下の璧沼に對して大學を斯く云るなるべし
○呑鳥雕蟲之髦、呑鳥は漢の揚雄太玄經を著して夢に白鳳を吐けりとの故

勢國多氣度會及飯高飯野等七郡神戸百姓等、緣徵正稅、必加刑罰、已亂齋事、或致逃散、是以昔年停出擧、自玆以後、借求富民、至于報償、加利數倍、擧者有罪、償者受弊、宜始自明年、神稅之外、擧正稅十三萬三千束、以其息利、充齋宮用、○壬戌、御馬埒殿、觀馬射、○乙丑、伊勢國言、傳馬之設、唯送新任之司、自外無所乘用、今自桑名郡榎撫驛、達尾張國、既是水路、而徒置傳馬、久成民勞、伏請一從停止、永息煩勞、許之、○丁卯、始賜大膳職印、○己巳、幸神泉苑、木工寮獻物、雅樂寮奏樂、飲宴終日、賜五位已上衣衾、○癸酉、妃二品朝原內親王辭職、許之、○乙亥、賑給京中飢民、○丁丑、遣使問玄賓法師、兼施法服并布卅端、○戊寅、勅、經國治家、莫善於文、立身揚名、莫尙於學、是以大同之初、令諸王及五位已上子孫十歲已上、皆入大學、分業教習、庶使拾芥磨玉之彥、霧集於環林、呑鳥雕蟲之髦、風馳乎璧沼、而朽木難琢、愚心不移、徒積多年、未成一業、自今以後、宜改前勅、任其所好、稍合物情、○癸未、妃四品大宅內親王辭職、許之、是日、公卿奏曰、臣聞、垂範訓人、事歸濟世、改制易俗、理會適時、寔知道尙沿革、

事(西京雜記)により文才あるをいひ雕蟲は同じく揚子法言に出で詩賦を巧にするを云ふ髦は字書に毛中之長毫曰髦因以爲才俊之稱とあり詩文の才ある俊秀の意なり
○璧沼、周代天子の學宮を辟雍と云ふ其制周圍に水を繞らすこと璧玉の如し故に之を或は璧沼と云ふ唐書師崇敬傳に出づ
○癸未、紀略癸巳に作るは非此月癸巳なし
○大宅內親王、紹運錄に桓武天皇皇女母從三位橘常子嶋田丸女とあり
○是日、類史戊寅に作る
○神護景雲三年云々、此事續紀に見えねど次に引ける延曆十年三月紀に據るに吉備眞備大和長岡等に勅して刪定せしめ給ひしなり眞備は當時右大臣にて七十六歲なりき
○數十年後乃始頒下、延曆十年三月丙寅紀に故右大臣吉備朝臣眞備云々等刪定律令廿四條辨輕重之舛錯矯首尾之差違至是下詔始行用之とあるを云ふなるべし景雲三年より延曆十年までは二十三年なり

政必裁成、苟或未弘、豈肯膠柱、今此刪定令條、是去神護景雲三年議請刪定、而事有不允、寢而莫行、數十年後、乃始頒下、自爾以降、訴訟逾繁、事不便人、理難取則、今故謹詳可不、輙請刊改、冀合機宜、用遵可久、庶望景化風行而革弊、群生日用而沐義、俗弭奸邪、家全緒業者、許之、文多不載、
○乙酉(廿八)、令河內國講師便撿校和泉國部內之定額諸寺、又上總國撿校安房國之諸寺、越中國撿校能登國之諸寺、爲元來不置講師也、○六月(丁亥朔)戊子(二)、勅、諸國夷俘等、不遵朝制、多犯法禁、雖彼野性難化、抑此教喩之未明、宜擇其同類之中、心性了事、衆所推服者一人、置爲之長、令加捉搦、是日始令參議從四位下紀朝臣廣濱、陰陽頭正五位下阿倍朝臣眞勝等十餘人讀日本紀、散位從五位下多朝臣人長執講、○己丑(三)、遣使造攝津國長柄橋、○庚寅(四)、賑給京中飢民、○辛卯(五)、薩摩國蝗、免逋負稻五千束、遣使修大輪田泊、神祇官言、住吉香取鹿嶋三神社、隔廿箇年、一皆改作、積習爲常、其弊不少、今須除正殿外、隨破修理、永爲恒例、許之、
○戊戌(十二)、左京人從五位下出雲連廣貞賜姓宿禰、河內國人外從五位下

○庶望、考異に庶舊作レ度據二類史一訂とあり
○家全緒業、祖先より繼承せる家業を全うするを云類史緒を諸に作る恐くは非
（六月）讀日本紀、書紀講讀の事此に始て見ゆ
○多朝臣人長執講、釋日本紀日本講例弘仁三年私記云四年云々博士刑部少輔從五位下多朝臣人長（或案作者太安麻呂後胤乎）とあり
○長柄橋、攝津志に西生郡長柄河一名中津川淀河第二支とあり此川に架す
○大輪田泊、攝津國武庫郡務古水門兵庫津の別名
○隔廿箇年云々、臨時祭式に凡諸國神社隨レ破修理但攝津國住吉下總國香取常陸國鹿嶋等神社正殿二十年一度改造其料便用二神税一如無二神税一即充二正税一とあり
○積習爲常、此句に據りて廿箇年一度改作の制甚久しきを知るべし
○常足、原本常を帶に作る西本に據て改む
○忍海原連、及朝野宿禰は姓氏錄に見えず葛城襲津彥の後也續紀延曆十年

林忌寸眞永、右京人正六位上山口忌寸諸足、內藏忌寸常足等賜姓宿禰、○辛丑、大和國人故正六位上忍海原連鷹取追賜姓朝野宿禰、鷹取之子從五位下朝野宿禰鹿取言、去延曆十一年詐爲叔父正六位上朝野宿禰道長之子、既得出身並改姓、今道長自有繼嗣、伏請還付本生、得承家門者、許之、又依鹿取請、追改鷹取姓、○壬寅、京中米貴、出官倉米、以減價糶貧民、○己酉、勅、頃者緇徒之間、多犯法禁、所司寬縱、專任律教、不加推勘、朝憲稍弛、爲弊良深、自今以後、僧尼犯罪、不論輕重、一依僧尼令糺之、○庚戌、幸於大堰、山城國獻物、賜五位以上衣被、○壬子、勅、甘澤不降、稍涉旬日、眷彼南畝、深軫于懷、所冀神靈垂祐、早致嘉雨、宜走幣畿內、祈於名神、大納言正三位兼皇太子傅民部卿勳五等藤原朝臣園人上表曰、臣昔歲不揆庸菲、頻歷外任、自西及東、惣十有八年、黎民疾苦、政治得失、耳聞目見、頗無相錯、夫銜綸出宰、概持綱紀、親民撿察、良在郡領、今依去年二月十四日詔旨、譜第之事、已復舊例、況乎終身之任、得其人、則遷替之吏、高枕而治、弈世之胤、非其器、則見任之司、還招罪責、是以精

正月己巳及續後紀承和二年二月庚辰紀を參考すべし
〇本生、生家を云
〇細徒之間云々、三代格卷三七月十日の太政官符に見ゆ
〇專任律敎云々、三代格に得少僧都忠芬狀云々律敎中已沒明制禁斷之事請准敎旨とあるを云
〇沙汰、字書に沙謂石之細碎者蕩滌之曰汰謂去其無用者とあり
〇爭第競甲、考選に及第して採用せられむことを競ひ爭ふを云
〇國選、國司よりの推選を云
〇彫殘、彫は字書に凋に同じ又殘也零落也とあり
〇理治、政事のよく治まるを云
〇富康、財豐にして心安きを云
〇御井朝臣、御井は近江國滋賀郡御井に據れるか考ふべし
〇大鳥、治部式中瑞に見ゆ
〇美作眞人、河嶋王の後なるべけれど他に見えず又眞人を改て朝臣を賜ふ由も詳ならず

還堪務、沙汰言上、而在京他人、爭第競甲、抑退國選、越舊被任、試之政事、未克宣風、訪之民間、誰有推服、國吏月敎不覺、郡內年弊而無興、不治之責、還及牧宰、外官之歎、前後不殊、方今仁風遠覃、德政屢降、然彫殘之餘、百姓猶困、實由撫養之失人也、伏請自今已後、銓擬郡司、一依言上、若還非其人、政績無驗、則署帳之官、咸解見任、永不敍用、以懲將來、天恩垂鑒、儻允臣請、則今年擬帳、悉從返却、一定改張、明春始行、庶令理治之聲、起於當年、富康之謠、流於後代、不任犬馬懷主之懇、謹奉表冒死以聞、詔可、左京人從五位下秋篠朝臣上子、秋篠朝臣清子、右京人從五位下秋篠朝臣室成、從七位上秋篠朝臣宅成等賜姓御井朝臣、〇癸丑、小鳥生大鳥、〇丙辰、左京人美作眞人豐庭等三人賜姓淡海朝臣、〇秋七月丁巳朔、勅、頃者疫旱並行、生民未安、靜言于此、情切納隍、但神明之道、轉禍爲福、庶憑祐助、除此灾禍、宜走幣於天下名神、〇戊午、御大極殿、奉幣於伊勢大神宮、爲救疫旱也、〇辛酉、有野狐見朝堂院、〇壬戌、從四位下伊勢朝臣繼子卒、贈從三位、喪事所須、令官給焉、從四位下老人之女也、天推

〇淡海朝臣、錄左京皇別に天智天皇皇子河嶋王之後也とあり

（七月）神明、神をいふ尙書に至治馨香感于神明と見え易經說卦傳に幽贊於神明而生著とあり

〇伊勢朝臣繼子卒、廢太子高岳親王巨勢親王等の母なり

（八月）從四位上大庭王、考異に上舊作下據上文訂とあり

〇布勢內親王、母丸朝臣は紹運錄に中臣豐子とあり延曆十六年伊勢齋王となり大同元年罷めらる

國高彥天皇[平城]在儲宮納之、生親王二男三女、卒時年卅一、〇癸亥[七]、幸神泉苑、觀相撲、命文人賦七夕詩、〇己巳[十三]、封五十戶施入招提寺、〇癸酉[十七]、陸奧國言、屯田元二百町、伏望定一百町、爲鎭守儲者、許之、〇庚辰[廿四]、幸神泉苑、賜陪侍者錢有差、〇壬午[廿六]、賜山城攝津河內三國新錢各二百卅貫、出擧取利、宛隄防用、〇八月丙戌朔、正五位下田口朝臣息繼爲右中辨、阿波守如故、正五位下藤原朝臣綱繼爲民部大輔、從五位下大伴宿禰小堅魚爲兵部少輔、從四位上大庭王爲刑部卿、從五位上藤原朝臣伊勢人爲因幡守、從五位下石上朝臣美奈麻呂爲周防守、〇戊子[三]、從五位上安倍朝臣眞直爲權左少辨、豐後守如故、從五位下藤原朝臣清本爲侍從、正五位下御室朝臣今嗣爲圖書頭、越後守如故、從五位下菅原朝臣清公爲大學頭、從五位下弟村王爲玄蕃頭、從五位下藤原朝臣文山爲宮內少輔、從五位下菅原朝臣清人爲主殿頭、肥後介如故、從五位下紀朝臣貞成爲左京亮、〇庚寅[五]、上野國介從五位下息長眞人家成、大掾正六位上酒人眞人人上等免、以令郡司私役百姓也、〇辛卯[六]、无品布勢內親

○燒亡官物云々、此勅三代格卷十四及類史八十四に見ゆ
○承前格、延曆五年八月七日及同十二年四月廿三日格を云
○以懲將來、考異に以舊脫據類史補とあり三代格にも以字あり
○神灾、三代格灾を火に作る下同じ
○善議卒、元亨釋書卷二にも傳あれど簡略なり
○道慈、天平十六年十月紀（續紀上二二七頁）及元亨釋書卷三に見ゆ
○入室、高足の弟子を云堂に昇りて已に室に入るの意
○中道、過不及なき道を云此は佛敎を指せり
○桃李成蹊、史記李將軍傳贊に諺曰桃李不言下自成蹊とあり德ある者は人自ら之に歸服するを云

王薨、詔賜四品、遣從五位下弟村王、從五位下文室眞人末嗣等、監護喪事、親王者、皇統彌照天皇（桓武）第五女也、母丸朝臣氏、親王資性婉順、貞操殊勵、延曆十六年爲伊勢齋、○（八）癸巳、流僧良勝於多褹嶋、以與女同車也、○（十六）辛丑、勅、撿承前格、有燒亡官物、以國司公廨塡、事乖弘恕、自今以後、必據法推決、以懲將來、俾夫監臨之官、勤肅所部、守掌之人、愼其防衞者、而頃者國司不勤肅清、屢致失火、爲避其責、恒稱神灾、官物之損、不可勝計、救弊之道、事資改張、自今以後、宜依前格、不問神灾人火、令國郡司及稅長等、依數塡備、其被差使出境之官、不在此限、但國司者、以任中公廨塡之、若當遷替年有失火者、只奪其年料塡之、○（廿三）戊申、傳燈大法師善議卒、本姓惠賀連、河內國錦部郡人也、法師入唐學問、道慈大德之入室也、少捐塵事、早結道遊、天資秀異、氣稟冲和、能持梵甲、志願傳燈、是以三論之家、許號法將、中道之理、流布國家、則伊人之力也、才位不愜、桃李成蹊、千歲之名、是謂不朽、道極如休、忽歸大暮、人之云亡、衆生不幸矣、時年八十四、○（廿六）辛亥、從五位下藤原朝臣濱主爲近江權介、○（廿八）癸丑、勅、在攝津國惸獨

○千歳、西本歳を載に作る
○安倍朝臣枚麻呂卒、續紀延暦四年正月癸卯紀に始見、大監物兵部少輔民部大輔を歷任す
(九月)陸奥磐井臣、磐井は陸中國磐井郡磐井郷にて之に據れるならむ
○陸奥高城連、高城は陸前國遠田郡高城(今中埣村大字)にて是に據れるならむ
○陸奥小倉連、小倉は岩代國信夫郡小倉郷にて之に據れるならむ
○陸奥石原連、石原は詳ならず
○椋椅連、原本椅を崎に作る西本に據て改む椋椅は岩代國會津郡倉精(ハクラハシ)郷にて之に據れるならむ
○遠田連、遠田は陸前國遠田郡にて之に據れるならむ
○意薩連、意薩は地理志料陸奥國小田郡賀美郷の注に今の小里(ヲサト)村に雖りしならむと云
○陸奥意薩連、同上

田一百五十町、宜令國司耕種、所獲苗子、毎年申官、待被處分、然後用之、惸獨田者、故大僧正行基法師、爲矜孤獨所置也、○乙卯、從四位下安倍朝臣枚麻呂卒、○九月戊午、陸奥國遠田郡人勳七等竹城公金弓等三百九十六人言、己等未脱田夷之姓、永貽子孫之恥、伏請改本姓爲公民、被停給祿、永奉課役者、勅可、唯卒從課役、難勸遺類、宜免一身之役、仍賜勳七等竹城公金弓、勳八等黑田竹城公繼足、勳九等白石公眞山等男女一百廿二人陸奥磐井臣、勳八等竹城公多知麻呂、勳八等荒山花麻呂等八十八人陸奥高城連、勳九等小倉公眞禰麻呂等十七人陸奥小倉連、勳八等石原公多氣志等十五人陸奥石原連、勳八等柏原公廣足等十三人椋椅連、遠田公五月等六十九人遠田連、勳八等意薩公持麻呂等六人意薩連、小田郡人意薩公繼麻呂、遠田公浮繼等六十六人陸奥意薩連、○辛酉、遊獵北野、五位已上賜衣被、○甲子、新羅人劉清等十人賜粮放還、幸神泉苑、宴侍從已上、奏妓、命文人賦詩、五位已上及文人賜祿有差、○乙丑、右大臣從二位兼左近衛大將藤原朝臣內麻呂、中

○鈎陳、星名共に六星北極紫微垣內にあり三才圖會に將軍之象也とあり
○衞尉八屯、衞尉は門衞の官、八屯は八處に屯するを云
○紫宮、紫微宮卽ち禁中を云
○黃屋、天子の車を云史記正義に天子車以黃繒爲蓋裏とあり
○左近衞、左字恐くは衍
○大同之年、二年三月己卯を云
○長直、番上に對して長上をいふ當番によらす日々出勤するを云
○漢光、漢の光武帝なり
○魏武、魏の武帝卽ち曹操なり此の兩條の典據詳ならす
○簪紱、冠簪と纓紱となり世家大族を云
○亦令番上、紀略亦を互に作る
○天平勝寶格、勝寶八歲六月九日境界を定めらる其時の格なり
○便經國司、類史司を師に作る
○无識之徒、考異に識舊作職據類史訂とあり
○禁苑、釋氏要覽に大唐內典錄云罽賓禪師法秀云

納言兼右近衞大將從三位勳三等巨勢朝臣野足等上表曰、臣聞、鈎陳六位、環北極以分輝、衞尉八屯、居西京而警夜、誠以紫宮淸切、周衞無虧、黃屋尊嚴、不虞是備、夫左近衞、元是依數長直、職掌旣重、儀式亦殊、晝夜警護、不離禁中、常見宮省之事、悉知出入之人、大同之年、爲左右府、卽停長直、一從番上、自玆上番下番、遞去遞來、苟守當番之直、不顧長久之法、坐作進退、稍忘其儀、伏惟皇帝陛下、道高萬古、功邁百王、漢光之懸制戎規、何能語美、魏武之切言兵略、未足稱奇、臣等猥以庸虛、得預簪紱、職司宿衞、身統禁兵、伏望左右近衞府、府別簡其驍勇者五十人、依舊長直、自餘相副、亦令番上、許之、○（十七）壬申、從五位下息長丹生眞人文繼爲右京亮、无位大宅水取臣繼主授從五位下、○（十九）甲戌、正六位上城部公小野麻呂授外從五位下、○（二十）乙亥、勅、依天平勝寶格、東大寺四面二里之內、不聽殺生、今年序稍遠、禁防彌薄、宜令便經國司新立標牓、如有國師不撿、卽以違勅論者、而今无識之徒、不畏朝憲、國司講師、禁制亦緩、遂使禁苑之邊、還作漁獵之地、梵宇之下、不異屠宰之場、宜更禁止、有犯科罪、○（廿一）丙子、右

々立禪閣於閑曠地、植奈千株、趁者如雲云々とあり奈苑は佛刹を云
○聖人、西本至人に作る
○跕原、玉篇に跕危也とあり危く陷らむとする原なり岱岳に對して云り
○岱岳、泰山なり
○朝端、朝臣の首位を云江淹蕭重讓揚州表に見ゆ
○禮記曰、文王世子篇に見ゆ
○乾巛、巛は坤の古字
○竊期懸車、原本期を斵に作る西本に據て改む懸車は致仕するを云
○斵不堪任、原本斵を駢に作る西本に據て改む斵は字書に音鼎鎗（カナヘ）也三足兩耳とあり卽ち鼎なり
○覆餗、易鼎卦の九四に鼎折足覆公餗とあり餗は鼎之實也と注す
○石川朝臣淨直卒、延曆十八年正月甲戌紀に始見大宰少貳左少辨に任ぜらる

大臣從二位兼左近衞大將藤原朝臣內麻呂緣病上表辭職曰、臣聞、無德而進、聖人誡其履危、不才而尊、有識陋其非據、臣之虛薄、久冐殊私、懼切跕原、荷重岱岳、臣賴先緒、忝齒朝端、寵藉時來、恩叨封邑、誠當上調和四時、下遂理萬物、竭節投命、報効絲豪、空消日月、無益聖朝、尸素之譏、臣爲其首、禮記曰、爲人臣者、殺其身有益於君則爲之、至如臣者、進不能統理衆務、以擧持綱維、退不聞薦拔賢能、而補裨時闕、陛下垂乾巛育物之德、體江海含容之大、假臣光照之榮、優臣不貲之分、況復時屬昇平、世返淳朴、感恩勵力、竊期懸車、頃來渇病彌積、兼暗眼精、兩脚强疼、行步失便、內自省量、既知不可、在於物議、更亦何疑、若猶事惷愚、都迷止足、恐斵不堪任、遂致覆餗、伏願辭罷官職、養疾私第、遂同葵藿、朝夕傾心、仰乞曲留寢暉、卽垂矜許、然則陛下爵不失實、愚臣免不避賢、無任懇款祇懼之至、謹詣朝堂、奉表以聞、遣中納言正三位藤原朝臣葛野麻呂就第優詔不許、是日從四位下石川朝臣淨直卒、○廿二丁丑、曲宴奏樂、賜侍臣祿有差、
○廿五庚辰、遊獵於大原野、右大臣從二位藤原朝臣內麻呂獻物、侍從已上、

○稱託宣、神託と稱して妖言衆を迷はすもの多し故にこれを禁ず
（十月）解由、式部式に伊勢大神宮豐前宇佐宮越前氣比神宮司諸神主亦責解由ことあり
○藤原朝臣內麻呂薨、叙任年月補任に明なり
○眞楯之子、補任第三子とす
○三主、桓武、平城、嵯峨の三天皇
○桀跖、夏王桀及柳下季の弟にして大盜たる盜跖（莊子盜跖篇に見ゆ）にて何れも暴虐なる人

山城國司、及右大臣子弟賜衣被、○辛巳（廿六）、勅、恠異之事、聖人不語、妖言之罪、法制非輕、而諸國信民狂言、言上寔繁、或言及國家、或妄陳禍福、敗法亂紀、莫甚於斯、自今以後、有百姓輙稱託宣者、不論男女、隨事科決、但有神宣灼然、其驗尤著者、國司撿察、定實言上、○壬午（廿七）、從五位上大枝朝臣永山爲刑部大輔、從五位上紀朝臣咋麻呂爲肥後守、○冬十月（丙戌朔）戊子（三）、令諸國神社神主、相替之日與解由、○辛卯（六）、右大臣從二位藤原朝臣內麻呂薨、詔贈從一位左大臣、遣從三位藤原朝臣繩主、從四位下藤原朝臣貞嗣等監護喪事、內麻呂者、贈太政大臣正一位房前之孫、大納言正二位眞楯之子也、奕世相家、少有令望、德量溫雅、士庶悅服、大同初拜大納言、兼近衞大將、其年轉右大臣、近衞大將如故、任兼相將、經事三主、皆被信重、上有所問、不希指苟合、如或不從、不敢犯顏、凡典樞機、十有餘年、靡有愆失、昔日庶人他戸爲皇太子時、桀跖之性、好害名流、有一惡馬、馭必踶齧、太子令內麻呂乘、快見傷損、惡馬低頭不動、被鞭廻旋、時人以爲非常之器、薨于位、時年五十七、○乙巳（二十）、式部省書生員定卅人、省試手跡、令

○出身、出て官に仕ふるを云書生採用の方法は式部式に見ゆ
○安侯云々、六驛を廢すされど兵部式に常陸國驛馬安侯二疋河内二疋さ見ゆれば廢して後更に置かれしなるべし安侯は常陸國茨城郡（抄に安侯郷あり今南川根村大字に安居あり）河内石橋は同那珂郡（抄に河内郷あり今柳河村大字に存す石橋は今石神なりと云）助川藻嶋棚嶋は多賀郡（助川は今も助川と云藻嶋は抄に藻嶋郷あり今櫛形村伊師棚嶋は今の磯原町なりと云）にあり
○小田雄薩田後等三驛、小田は筑波郡（今も小田村と云、小田城のありし地）雄薩は久慈郡（今の宮川村下野宮の邊なるべしと云）田後は那珂郡（今静村田間川の邊なるべしと云）なり抜に六驛を廢して三驛を建てしは海道を捨て山道を採りしなり
（十一月）庚午制、三代格卷五に應出羽史生并弩師歷五年爲限事と見ゆ
○弩師、邊要の國なるが

得出身。○（廿八）癸丑、官家功德封物、停收東大寺、收造東西二寺諸司、出納充用之色、一依前例。廢常陸國安侯、河內、石橋、助川、藻嶋、棚嶋六驛、更建小田、雄薩、田後等三驛。○十一月（丙辰朔）戊辰（十三）、制、與解由日、受領之官、署名已畢、任用之人、依假不署、如此之類、式兵兩省、依例勘返、判官主典、或假或病、不加署名、推量其理、公私無妨、自今以後、勿更返却。○庚午（十五）、制、出羽國史生并弩師、歷同國司。○乙亥（二十）、從五位下百濟王教俊授從五位上、爲出羽守。○庚辰（廿五）、於豐樂院宴五位已上、賜祿有差。○壬午（廿七）、贈四品布勢內親王墾田七百七十二町、施入東西二寺。○癸未（廿八）、起從四位上藤原朝臣冬嗣、從五位下福當麻呂、櫻麻呂等復本官。○十二月（乙酉朔）丙戌（二）、調綿一萬五百屯施七大寺常住僧并內供奉十禪師。○（四）戊子、攝津國河邊郡空地卅町賜某親王（淳和）諱（今上）、是日賜玄賓法師書、兼施綿布等物。○（五）己丑、從四位上藤原朝臣冬嗣授正四位下、從五位上良岑朝臣安世正五位下、正三位藤原朝臣園人爲右大臣、從三位藤原朝臣繩主爲中納言、兵部卿如故、從五位下粟田朝臣飽田麻呂爲諸陵頭、中納言正三位藤原朝臣葛野麻

故に特に之を置く
○復本官、冬嗣の父右大臣内麻呂十月六日薨ず依て喪に遭て職を去りしが是に至て本官に復せられたり福當麻呂權麻呂亦內麻呂の子にて冬嗣の弟なり

（十二月）藤原朝臣眞夏復本官、眞夏は內麻呂の長子なり冬嗣と同じく父の喪に遭て職を去りしが是に至て本官に復す

○入色、白丁に對して位ある人を云
○外任、原本任を位に作る類史に據て改む

【弘仁四年】物部中原宿禰、複姓なり物部氏にして中原と云る地に住るに據れるか但し參河には聞えず

呂爲兼民部卿、外從五位下山田造大庭爲主稅□、從五位下布勢朝臣全嗣爲左近衞少將、參議從三位文室朝臣綿麻呂爲左衞門督、大藏卿陸奧出羽按察使如故、左少辨正五位下良岑朝臣安世爲兼佐、但馬介如故、○壬辰、渤海國人高多佛賜姓名高庭高雄、○甲午、起正四位下藤原朝臣眞夏復本官、○乙未、參議正四位下行右衞門督兼近江守藤原朝臣緒嗣賜度二人、○丁酉、參議左近衞大將正四位下藤原朝臣冬嗣賜度二人、○乙巳、遊獵於芹川野、侍從已上幷山城攝津兩國司賜衣被、○己酉、加木工寮史生六員、○癸丑、制、春宮坊舍人六百人、就中入色五百人、白丁一百人也、而入色者無心仕官、白丁者唯在一身、是以數年之後、駈使乏人、宜五百內取外任一百人、隨闕補之、

（癸巳）四年春正月乙卯朔、皇帝御大極殿、受朝賀、○丁巳、少僧都傳燈大法師位永忠請老、優詔不許之、○己未、參河國人外從五位下物部敏久賜姓物部中原宿禰、○辛酉、宴五位已上於豐樂院、奏樂、賜祿有差、正四位下吉備朝臣泉授正四位上、從四位上秋篠朝臣安人正四位下、正五位下

○外從五位上物部匝瑳連、考異に上舊作レ下據二上文一訂さあり類史亦同じ

石川朝臣河主、藤原朝臣道繼、從五位上安倍朝臣男笠從四位下、從五位上藤原朝臣三守、大枝朝臣繼吉、坂上大宿禰鷹養正五位下、從五位下百濟王忠宗、安倍朝臣犬養、安倍朝臣益成、佐伯宿禰長繼、小野朝臣岑守從五位上、外從五位上物部匝瑳連足繼、正六位上高階眞人淨階、藤原朝臣弟河、紀朝臣興道、從六位上巨勢朝臣河繼、正六位上安倍朝臣益人、從六位上藤原朝臣柄繼、正六位上秋篠朝臣祖繼、大伴宿禰國道、坂田宿禰永河從五位下、正六位上文忌寸山守外從五位下、○[八]壬戌、從三位五百井女王授二正三位、正四位下永原朝臣惠子、小野朝臣石子從三位、從五位上大原眞人清子正五位下、无位橘朝臣綱子從五位下、○[十]甲子、從五位下藤原朝臣弟川爲二伊勢介、從五位上和朝臣建男爲二遠江守、從五位下安倍朝臣弟雄爲二駿河守、正五位下坂上大宿禰鷹養爲二武藏守、侍從從五位上藤原朝臣世嗣爲二兼下總介、從五位下藤原朝臣福當麻呂爲二常陸介、少納言從五位下宇智王爲二兼信濃守、左少辨正五位下良岑朝臣安世爲二兼但馬守、左衞門佐如レ故、從五位下坂田宿禰永

○淨原眞人夏野、淨は上下文共に淸に作る
○伊豫介、原本豫を勢に作る西本に從て改む
○延高學僧、原本延を迎に作る 考異に迎舊作近據類史訂とあれど今紀略に據て改む
○竹田臣、錄左京皇別に大彥命男武渟川別命之後也とあり
○坐夏、安居を云夏の間家にありて修業する故に坐夏とも云り
○采女、後宮職員令に貢采女者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申中務省奏聞とあり
○廣澄宿禰、地名か詳ならず

河爲介、從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲備中守、左近衞少將從五位上佐伯宿禰長繼爲兼阿波守、春宮亮從五位下淨原眞人夏野爲兼讃岐介、左近衞少將從五位下布勢朝臣全繼爲兼伊豫介、侍從從四位下平野王爲兼豐前守、從五位下笠朝臣梁麻呂爲豐後守、右衞門佐從五位下安倍朝臣雄能麻呂爲兼介、少納言從五位上百濟王忠宗爲兼左兵衞佐、○戊辰〔十四〕、最勝王經講畢、延高學僧十一人於殿上論義、施御被、傳燈大法師位勤操爲律師、○庚午〔十六〕、左京人從八位下竹田臣門繼等六人賜姓清岑宿禰、宴侍從以上、賜祿有差、○辛未〔十七〕、於南庭觀射、○癸酉〔十九〕、於東西二寺始行坐夏、其布施供養准諸大寺例、○丙子〔廿二〕、曲宴後殿、命文人賦詩、賜祿有差、○丁丑〔廿三〕、制、令伊勢國壹志郡、尾張國愛智郡、常陸國信太郡、但馬國養父郡、貢郡司子妹年十六已上廿已下、容貌端正、堪爲采女者各一人、○戊寅〔廿四〕、大和國人從六位下物部福麻呂賜姓廣澄宿禰、○己卯〔廿五〕、正五位下佐伯宿禰清岑爲右少辨、從五位下文室眞人末嗣爲内匠助、從五位下紀朝臣興道爲雅樂頭、從五位下安倍朝臣節麻呂爲大

炊助、外從五位下林宿禰眞永爲鑄錢次官、正六位上林忌寸稻主授外從五位下、○廿六庚辰、遊獵於栗前野、五位已上賜衣被、○二月甲申朔三丙戌、治部省言、承前之例、僧尼出家之時、授之度緣、受戒之日、重給公驗、據勘灼然、眞僞易辨、勝寶以來、受戒之日、毀度緣停公驗、只授十師戒牒、此之爲驗、於事有疑、如不改張、恐致姧僞、伏望不毀度緣、永爲公驗者、許之、但其度緣、自今以後、僧者請太政官印、尼者用所司之印、至于受戒之時、省並於度緣末、注受戒年月幷官人署名、卽以省印印之、其尼於外國受戒者、當所之官、准此行之、承前所授僧戒牒者、惣進僧綱、卽送所司、所司計會、明知不詐、署印其末、然後還授、進盡之期、斟量立限、限內不進、後賫白牒者、不得爲驗、一同私度、若有身亡幷還俗者、其度緣戒牒、早令進省、省卽年終申官毀之、庶令姦人屛跡、源流自澄、○十一甲午、改門部鈒帶色、左門部着淺縹、右門部淺縹纈、令石見國營乘田卅町、以其所獲、塡故年未納、營功種子、借充正稅、限以三年、地子依例輸之、○十二乙未、河內國人從八位上難波忌寸氏主、攝津國人正六位上難波忌寸船人、正六位上日下部忌

(二月)度緣、俗人僧となるには太政官より證書を授與す之を度緣と云ふ度緣には其人の住所氏名年齡及授與の年月日を明記し師僧僧綱玄蕃頭治部輔署名す其式玄蕃式に見ゆ
○受戒、毎年三月戒壇院に於て行ひ地方は東は下野藥師寺にて、西は筑紫觀世音寺にて之を行ひ重ねて公驗を授與するなり
○十師戒牒、戒壇の十師より戒を授けたる旨を記し連署して受戒者に附與する書付を云
○僞驗、原本驗を撿に作る類史に據て改む
○所司之印、治部省の印を云
○省並、類史並を丞に作る
○白牒、白紙戒牒を云
○省卽年終、省字類史及三代格に據て補ふ
○鈒帶色、鈒帶は鈒の紐なり其色によりて左右の區別を明にせられしなり

○山埼驛、上に出づ
○卅一家、類史卅を廿に作る紀略は本史に同じ
○又駕輿丁、左右近衞式に凡供奉行幸駕輿丁者駕別廿二人(十二人擎御輿、自餘執前後綱)皆著皂頭巾皂綾緋帛衫調布襖貲布衫紫大纈褶白布袴白布帶白布脛巾、惣廿二具(中宮亦准此)と見ゆ
○野原、倭名抄に讚岐國香川郡笑原鄕見ゆ隣國なれは由あるか

寸阿良多加等賜宿禰、○(十三)丙申、外從五位下勇山連家繼爲大學博士、正五位下大中臣朝臣魚取爲民部少輔、外從五位下物部中原宿禰敏久爲大判事、外從五位下日下部連高道爲大炊助、從五位下安倍朝臣節麻呂爲造酒正、從五位上高階眞人遠成爲大和介、從五位上三原朝臣弟平爲尾張守、外從五位下縵連家繼爲越中權介、○(十四)丁酉、上野國甘樂郡大領外從七位下勳六等壬生公郡守特授外從六位下、以戶口增益、爲民所懷也、○(十六)己亥、遊獵於交野、以山埼驛爲行宮、是日津頭失火、延燒卅一家、給米綿有差、又駕輿丁并左右衞士等、賜綿有差、○(十八)辛丑、遊獵水生野、山城國奉獻、五位已上并山城河內攝津等國司賜衣被、史生郡司賜綿有差、是夕還宮、○(廿一)甲辰、從五位上紀朝臣咋麻呂爲刑部大輔、從五位上大枝朝臣永山爲肥後守、賜伊豫國人勳六等吉彌侯部勝麻呂、吉彌侯部佐奈布留二人姓野原、○(廿二)乙巳、大和國平群郡田卅二町賜某親王(仁明)諱、今上、○(廿五)戊申、制、損稼之年、士民俘囚、咸被其災、而賑給之日、不及俘囚、飢饉之苦、彼此應同、救急之恩、華蠻何限、自今以後、宜准平民、預賑給

例、但勳位村長及給粮之類、不在此限、○壬子（廿九）、宴神泉苑、命文人賦詩、奏樂、賜綿有差、

日本後紀巻第廿二

（三條西家本奥書）

右命于恒宿禰令書之加一見加點點了

于時天文二年九月十日

日本後紀卷第卄四

起弘仁五年七月盡六年十二月

左大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣冬嗣等奉　勅撰

太上天皇　嵯峨

秋七月丙午朔、授正六位上大伴宿禰友足從五位下、從五位下紀朝臣長田麻呂爲治部少輔、從五位下藤原朝臣福當麻呂爲常陸守、左兵衞佐從五位下住吉朝臣豐繼爲兼介、從五位下巨勢朝臣淸野爲右衞門佐、從五位下大伴宿禰友足爲右兵衞佐、○(六)辛亥、尾張國丹羽郡田卄四町賜夫人從三位橘朝臣諱、(嘉智子)○(七)壬子、幸神泉苑、觀相撲、○(十)乙卯、從五位下藤原朝臣賀祐麻呂爲兼中務少輔、武藏介如故、從五位下藤原朝臣文山爲侍從、從五位下紀朝臣長田麻呂爲治部大輔、從五位下多治比眞人船主爲少輔、從五位上大原眞人眞福爲民部大輔、從五位下藤原朝臣濱主爲兼右京亮、近江介如故、齋宮頭從五位下安倍朝臣寛麻呂爲兼

【弘仁五年】橘朝臣諱、要記に皇后橘嘉智子淸友女、弘仁始爲夫人、同六年七月十三日壬午爲皇后とあり

○賀祐麻呂、祐は祜の誤なるべし下同じ
○爲兼中務少輔、兼字西本に據て補ふ
○從五位下藤原朝臣濱主、原本位一字衍れり西本に據て削る

○六年一班、六年に一たび班田することゝ其制は田令に見ゆ
○零疊、規定の年限に行れず或は年限に滿たずして重ねて行はれ制度の衰ふるを云零は字書に落也とあり脫落するを云
○藤原朝臣今川卒、延曆六年正月壬辰正六位上より從五位下に叙し同十六年正月從五位上に進み伊勢美濃越前守等を歷任し左京大夫となる
○孝婦含寃云々、漢書于定國傳に東海有孝婦養姑甚謹姑自經死姑女告吏婦殺我母吏捕孝婦孝婦辭不殺姑太守竟論殺孝婦郡中枯旱三年後太守至卜筮其故殺牛自祭孝婦冢天立大雨（節略）とあり
○能吏行縣云々、謝承後漢書に百里嵩爲徐州刺史甘雨輙澍（淵鑑類函所引）とある是なるべきか今謝承の書亡びたれば詳ならず
○永貞、考異に貞舊作眞據上下文訂とあり

伊勢權介、○辛酉、（十六）幸於葛野川、賜次侍從衣被、○丙寅、（廿一）免大和河內兩國遠年未納稻一十三萬四千束、以百姓窮乏、不堪辨進也、○己巳、（廿四）勅、夫六年一班、令條立制、理須依其年限、諸國班田、零疊者多、稽于通法、理不可然、宜待後班之國滿於年限、一令校班、左京大夫從四位上藤原朝臣今川卒、參議從三位巨勢麻呂之男、左大臣正一位贈太政大臣武智麻呂之孫、時年六十六、○庚午、（廿五）勅、畿內近江丹波等國、頃年旱災頻發、稼苗多損、國司默然、百姓受害、其孝婦含寃、東海蒙枯旱之憂、能吏行縣、徐州致甘雨之喜、然則禍福所興、必由國吏、自今以後、若有旱者、官長潔齋、自禱嘉澍、務致肅敬、不得狎汙、如不應者、乃言上之、立爲恒例、○辛未、（廿六）從五位下藤原朝臣濱主爲兼大學頭、近江介如故、從五位上安倍朝臣清足爲刑部大輔、從四位下紀朝臣咋麻呂爲左京大夫、從五位上坂本朝臣佐太氣麻呂爲右京亮、從五位下藤原朝臣永貞爲造西寺長官、陰陽頭從五位下小野朝臣諸野爲兼備中介、外從五位下廣井宿禰眞成贈從五位下、○閏七月（乙亥朔）庚辰、（六）幸神泉苑、○壬午、（八）散

（閏七月）吉備朝臣泉卒、景雲元年二月丁未近衞將監より大學員外助を兼ね左衞士督大學頭伊豫守等を歷任し延暦三年三月解任四年十月佐渡守に左降十三年十二月備中に移り廿四年三月免罪入京大同元年五月式部大輔に任じ左大辨刑部卿を歷任す
○孔門童子、孔門は孔子の門人の意泉は當代の大儒眞備の子なれば孔門の童子と云るか
○端揆、大臣を云
○式翼皇猷、原本式を或に作る西本に據て改む
○大同之初、大同三年五月南海道觀察使と爲る
○七十二、紀略二を三に作る
○薄朝服、薄は朝服の色の薄きを云政事要略六十七に弘彈格云太政官符應聽內外諸司人著薄朝服事右撿去延暦十一年十一月十九日勅例禁著件色今被右大臣宣偁奉勅自今以後宜莫禁制弘仁五年閏七月廿六日とあり
○白雀、治部式中瑞の部に見ゆ

位正四位上吉備朝臣泉卒、泉者、右大臣從二位眞備之子也、孔門童子、頗有所聞、性殊偏急、多忤於物、延暦初、出爲伊豫守、被僚下告、遣詔使勘問、辭涉不敬、有司執法請寘恒科、詔曰、其父故右大臣、往學盈歸、播風弘道、遂登端揆、式翼皇猷、宜宥泉辜、令思後善、但解見任、以懲前惡、後復以譴貶佐渡權守、歸居本縣、鬱鬱不得志、大同之初、以賢臣之後、徵爲觀察使、試于政事、處置無紀、剛戾之性、老而不移、卒時年七十二、○（十二）丙戌、幸神泉苑、賜五位已上被、○（二十）甲午、无位春子女王授從五位下、○（廿五）己亥、聽內外諸司人着薄朝服、○（廿七）辛丑、遊獵北野、日晚御嵯峨院、賜侍臣衣被、○（廿九）癸卯、美作國獲白雀、賜獲人稻四百束、○八月（甲辰朔）（三）丙午、從五位下淨野宿禰夏嗣爲主殿助、○（四）丁未、直勘系所書手三人、准勞叙階有差、一等二階、二等一階、○（十一）甲寅、幸皇（淳和）太弟南池、命文人賦詩、春宮亮從五位下清原眞人夏野授從五位上、大進正六位上橘朝臣長谷麻呂從五位下、賜四位已上被、五位并春宮屬已上及六位已下王藤原氏等衣、○（十六）己未、无位小繼女王授從五位上、○（十八）辛酉、大和國八嶋寺有嘉禾、一莖十八穗、○（廿一）甲子、免囚人

日下部土方、補木工長上、土方者、攝津國武庫郡人、以私鑄錢著鑷、役於堀河、頗善工巧、仍弃瑕取才、○(廿三)丙寅、化來新羅人加羅布古伊等六人配美濃國、○(廿五)戊辰、遊獵北野、○(廿六)己巳、遊獵栗栖野、○(廿八)辛未、正六位上甘南備眞人濱吉授從五位下、從五位下藤原朝臣永貞爲陰陽頭、正五位下安倍朝臣眞勝爲刑部大輔、參議正四位下藤原朝臣緒嗣爲兼宮內卿、近江守如故、外從五位下壹伎直才麻呂爲園池正、從五位上安倍朝臣淨足爲造西寺長官、從五位下甘南備眞人濱吉爲日向守、從四位下良岑朝臣安世爲兼左衛門督、但馬守如故、參議從三位文室朝臣綿麻呂爲兼右衛門督、陸奧出羽按察使如故、式部大輔從四位下藤原朝臣三守爲兼左兵衛督、美作權介如故、從三位春原朝臣五百枝爲兼右兵衛督、上野守如故、○(廿九)壬申、詔曰、朕恭踐天位、纂承洪基、旰食宵衣、星琯頻改、雖躬居紫極、而心遍黎民、庶齊七政、以無水旱之災、勸九農、以有仁壽之喜、頃年以降、春耕候花、不愆濯枝之潤、秋稼垂穎、可餘栖畝之粮、是則神靈降祥、佛子修善之所致也、朕思膺斯嘉貺、寄中實於百神、欣彼豐稔、報

(八月)勘系所、諸氏の系譜を勘校する所なり
○及六位已下、西本已を以に作る
○八嶋寺、大和志に八嶋寺添上郡八嶋村又名山階寺とあり
○嘉禾、治部式下瑞に嘉禾或異畝同穎或孳連數穗或一稃二米也とあり
○濱吉授從五位下、考異に從五位下四字傳脫據上文及類史補とあり
○星琯頻改、年月の經過するを云
○七政、尙書舜典篇に出づ、傳に七政日月五星(木火土金水の五星)、疏に此日月五星有吉凶之象因其變動爲占七者各自異政故爲七政得失由政故稱政とあり
○九農、左傳昭十七年に以九扈爲九農正とあるに據れり
○濯枝之潤、程よく枝を濯ふばかりに降る雨を云
○栖畝之粮、餘りて田畝に取殘されし粮なり
○佛子、諸菩薩の通名なり

○勤勞、西本勤を懃に作る古へ相通ず
○務在賙給、賙は字書に贍也給也とあり給は原本なし西本に據て補ふ
(九月)明神、文德紀仁壽元年六月甲寅詔以近江國散久難度神列於明神とあれば明神は名神に同じきか文字の出典は毛詩大雅雲漢章に敬恭明神、或は周禮司盟に北面詔明神とあるに據れるなるべし
○贏餘、考異に贏舊作嬴據類史一本訂とあり嬴は字書に餘也過熟也と注す
○煨燼、字書に猶灰燼也とあり

勤勞於萬姓、宜委天下國宰、明加撿挍、奉官社幣帛、並施給高年僧尼及耆老鰥寡孤獨不能自存者、各有等級、務在賙給、稱朕意焉、○九月甲戌朔七庚辰、從四位下百濟王敎德爲治部大輔、從五位下紀朝臣長田麻呂爲宮內大輔、從五位下大伴宿禰乎智人爲左京亮、從五位下中科宿禰善雄爲東宮學士、從五位下紀朝臣貞成爲造西寺次官、○九壬午、幸神泉苑、令文人賦詩、○十一甲申、施京畿七道諸國國分二寺僧尼年八十已上毎人綿二十屯、賜老人百歲已上穀二斛、九十已上一斛、八十已上伍斗、鰥寡孤獨之不能自存者、量老幼三斗已下一斗已上、○十五戊子、奉幣明神、報豐稔也、○二十癸巳、右大臣從二位兼皇太弟傅藤原朝臣園人奏言、諸國所收官物、本倉色目、具注稅帳、而或國司非必其人、便郡稻者、即充公廨、賜百姓者、必於遠郡、是以不便之郡、物既贏餘、至于交替、通計彼此、出雲國最多、此類、縱令應貯甲郡而納於乙處、帳是全倉、物爲煨燼、伏望自今而後、普知諸國、依帳收納、甲乙之郡、不許通計、若本倉相違、准狀科處、庶官家少損、黎民蒙濟、依請焉、○廿五戊戌、從五位下安倍朝臣益人爲雅樂頭、從五位下

(十月)右諸衛府、紀略諸を近に作る
○右衛府、紀略衛下に門字あり
○常樓卒、元亨釋書卷二に見ゆ
○無染著陀羅尼、陀羅尼は梵語の呪字なり能持又は總持の義なりと云聖教目錄に多種の陀羅尼見え壒囊抄に佛說陀羅尼二種あり一は祕密にして妄に說くべからず二は祕せずして說く佛頂尊勝千手十一面如意輪呪等是也といふ無染著は其一に屬するか
○秋篠寺、大和國添下郡秋篠村にあり
○音氣乃絶、原本氣を義に作る西本に據て改む
○辛波古知、考異に古舊作右據紀略訂とあり

大伴宿禰彌嗣爲大藏少輔、從五位下路眞人年繼爲宮内少輔、○廿七庚子、遊獵栗前野、日暮御彈正尹明日香親王宇治別業、親王奉獻、賜侍臣衣被、○三十癸卯、渤海國遣使獻方物、○冬十月甲辰朔四丁未、大雪、○十癸丑、遊獵北野、○十三丙辰、新羅商人卅一人漂著於長門國豐浦郡、○廿一甲子、右諸衛府奉獻、宴飲奏樂、賜侍臣及右衛府右馬寮史生已上綿有差、○廿二乙丑、興福寺傳燈大法師位常樓卒、俗姓秦公忌寸、山城國葛野郡人也、法師幼齡厭俗、出家入道、天資聰敏、日誦萬言、初爲同寺善珠大德弟子、請問内教、又善謄大丘、土師乙勝、學習外傳、年及廿、學業漸進、固持戒律、闡揚眞宗、和衆之中、撰作被讓、尋而發弘誓願、卅年之間、轉讀法華經一十二萬四千九百六十卷、兼復每日誦般若心經一百卷、無染著陀羅尼一百八遍、縱在於造次、無虧日科、上酬恩愛、下濟生靈、延曆廿四年有勅、屈置之秋篠寺、弘仁五年孟冬十月廿二日夜、對律師勝義、高聲誦弘誓願、律師合掌讚歎、五更之後、音氣乃絶、春秋七十有四、○廿四丁卯、遊獵水生野、山城攝津兩國奉獻、賜侍臣已上及二國掾已上衣被、○廿七庚午、大宰府言、新羅人辛波古

○多賀王卒、三年正月丙寅紀に授正五位上とあり

（十一月）膽澤德丹二城、膽澤城は陸中國膽澤郡鎭守府卽城址なり上に見ゆ德丹城は地理志料に陸中國紫波郡郡山の北に上德田下德田村ありこれ或は德丹の遺名かと云三代格卷十八弘仁六年八月廿三日太政官符に膽澤城德丹城鎭兵各五百人を停止の事見ゆ

○豫備糒鹽、西本豫を預に作る豫預通用す

○奏五節儛、壬辰なれば新嘗祭の翌日にて辰日節會に之を奏せしなり清行封事に弘仁承和二代尤好內寵故遍命諸家擇進此妓卽以爲選納之便也とありかゝる弊もありしなるべし

（十二月）不稱彼姓名而常號夷俘、太政官式に凡正月七日十一月新嘗二節預給祿俘囚夾名別紙而奏雖帶五位猶同此例とあれば此後も夾名は之を別にせられしなり蝦夷祿物の品目數量は大藏式に見ゆ

【弘仁六年】造瓷器生、

知等二十六人漂著筑前國博多津、問其來由、遠投風化、散位從四位下多賀王卒、○十一月癸酉朔、右大臣從二位藤原朝臣園人、中納言從三位巨勢朝臣野足奉獻、飲宴終日、賜侍臣綿有差、○（九）辛巳、免出雲國田租、緣有賊亂及供蕃客也、○（十一）癸未、從五位下紀朝臣國雄爲主計頭、從五位上藤原朝臣千引爲刑部大輔、正五位下安倍朝臣眞勝爲造西寺長官、從五位下紀朝臣和氣麻呂爲安房守、○（十七）己丑、陸奧國言、膽澤德丹二城、遠去國府、孤居塞表、城下及津輕狄俘、野心難測、至於非常、不可不備、伏望豫備糒鹽、收置兩城者、許之、○（二十）壬辰、宴侍臣、奏五節儛、賜祿有差、○（廿二）甲午、遊獵芹川野、○十二月癸卯朔、勅、歸降夷俘、前後有數、仍量便宜安置、官司百姓、不稱彼姓名、而常號夷俘、既馴皇化、深以爲恥、宜早告知、莫號夷俘、自今以後、隨官位稱之、若無官位、卽稱姓名、○（二）甲辰、大雪、從五位上登美眞人藤津爲越中守、○（二十）壬戌、遊獵芹川野、賜侍臣衣被、

（乙未）六年春正月癸酉朔、皇帝御大極殿受朝、蕃客陪位、宴侍臣於前殿、賜御被、○（五）丁丑、造瓷器生尾張國山田郡人三家人部乙麻呂等三人傳習成

瓷は抄器皿部に唐韻云瓷（疾資反俗云瓷器、之乃宇豆波毛乃）者或作㆑瓮とあり
○三家人部、三家人は録攝津皇別に三宅人大彥命男波多武日子命之後也とある三宅人に同じく共部民なりし故に三家人部といひしが氏となりしか
○榎本王、類史木な下に作り同一本幷に作る

○松成、類史和成に作る

○建王部公、姓氏錄考證に建部はもと建王の爲に置かれし部曲なる故に正しくは建王部と云りしを省きて建部と云しものなるべしと云り建部公と同姓なることは天平廿年二月に建部公豐足、承和十四年三月に建部公弟益などに見ゆるにて知るべし

業、准雜生聽出身。○己卯、宴五位以上幷渤海使、奏女樂。是日正四位下藤原朝臣緒嗣、秋篠朝臣安人授從三位、從五位下榎本王從五位上、從四位下紀朝臣廣濱、大野朝臣直雄從四位上、正五位下田口朝臣雄繼從四位下、從五位上高階眞人遠成、紀朝臣梶繼、高村宿禰田使、藤原朝臣藤成正五位下、從五位下藤原朝臣諸主、大伴宿禰眞城麻呂、紀朝臣長田麻呂、巨勢朝臣諸成、高階眞人眞仲從五位上、外從五位上高丘宿禰弟越、正六位上藤原朝臣八綱、藤原朝臣愛發（アラチ）、和氣朝臣眞綱、多治比眞人松成、從六位上甘南備眞人高繼、正六位上高賀茂朝臣里人、橘朝臣氏公、紀朝臣家長、安倍朝臣諸根、大伴宿禰宅麻呂從五位下、正六位上廣階宿禰象麻呂、廣井宿禰貞名、御林宿禰清名、廣澄宿禰福麻呂、建王部公豐益外從五位下、渤海國大使王孝廉從三位、副使高景秀正四位下、判官高英善、王昇基正五位下、錄事釋仁眞、烏賢偲、譯語李俊雄從五位下、賜祿有差。散位從四位下田口朝臣雄繼卒。少僧都傳燈大法師位如寶卒、大唐人、不知何姓、固持戒律、無有缺犯、至於咒願、天下絕

疇、局量宏遠、有大國之風、能堪一代之壇師者也、○[八]庚辰、正六位上石田王授從五位下、正五位下大原眞人淨子從四位下、外從五位下凡直古刀自從五位下、從八位下百濟宿禰四千子、无位大網公嶋刀自外從五位下、○[十]壬午、從五位下小野朝臣眞野爲上總守、從五位下八多朝臣桑田麻呂爲介、右近衞中將從四位下紀朝臣百繼爲兼美濃守、中納言從三位巨勢朝臣野足爲兼陸奧出羽按察使、右近衞大將如故、從五位上小野朝臣岑守爲陸奧守、從五位下甘南備眞人高繼爲介、外從五位下朝野宿禰道守爲越前大掾、從五位上安倍朝臣雄能麻呂爲左馬頭兼越中介、縫殿頭從五位下伊勢朝臣德嗣爲兼美作權介、從五位上紀朝臣長田麻呂爲備前介、諸陵頭從五位下粟田朝臣飽田麻呂爲兼豐後介、從五位下橘朝臣氏公爲左衞門佐、○[十一]癸未、刑部省言、名例律云、除名者、六載之後聽叙、免官者、三載之後降先位二等叙、免所居官及官當者、朞年之後降先位一等叙、公式令云、犯罪除名、未叙之間、在本貫身死者、申送刑部注除者、今據此令、除免之輩、未叙身死、不可更叙、而本貫主司、

○判官高英善、判官は西本及類史紀略に據て補ふ
○釋仁眞、類史眞を貞に作る
○田口朝臣雄繼卒、正月七日叙從四位下とある以外に所見なし
○如寶卒、元亨釋書卷十三にも傳見ゆ
○壇師、法壇の師を云
○除名、名例律に凡除名者官位勳位悉除課役從本色六載之後聽叙とあり
○免官、注解退所居官位勳位(法曹至要抄)
○免所居官、先解退所居之一官(同)
○官當、一品以下三品以上以二官當徒三年五位以上以一官當徒二年八位以上以一官當徒一年是也(同)
○朞年、朞は一匝して其時に復するを云朞年は卽ち滿一年なり
○犯罪除名、公式令除名を除免に作る名は免の訛なるべし
○申送、公式令に送字なし

○右兵衛督、考異に兵衛督作衛門據上文訂とあり西本にも衛門とあり
○五品、五位を云
○崇福梵釋二寺、上に注す尙は四月癸未の條を参看すべし

未營言上、收叙之官、无知存亡、伏請告知職國、爲例令言者、許之、○[十二]甲申、從五位下賀茂朝臣關守爲大舍人助、左近衛少將從五位上佐伯宿禰長繼爲兼內藏頭、阿波守如故、從四位下石川朝臣河主爲民部大輔、從五位下橘朝臣長谷麻呂爲少輔、外從五位下御林宿禰淸名爲主計助、從五位下藤原朝臣愛發爲兵部少輔、從五位下路眞人年繼爲宮內大輔、從五位下大伴宿禰國道爲少輔、外從五位下廣階宿禰象麻呂爲造酒正、從五位下和氣朝臣眞綱爲春宮大進、正五位下安倍朝臣眞勝爲造東寺長官、從五位下秋篠朝臣全嗣爲造西寺長官、○[十三]乙酉、從五位下八多朝臣桑田麻呂爲日向守、○[十四]丙戌、從四位下藤原朝臣道繼爲大舍人頭、從四位下紀朝臣咋麻呂爲兵部大輔、從四位下藤原朝臣綱繼爲左京大夫、左馬頭從五位上安倍朝臣雄能麻呂爲兼上野守、右兵衛督從三位春原朝臣五百枝爲兼下野守、○[十五]丁亥、制、攝津、美濃、丹波、播磨等國吏僚、身帶五品、願見節會者、與國解放之、自餘不在放例、又崇福梵釋二寺者、禪居之淨域、伽藍之勝地也、今聞、道俗相集、還穢佛地、繋馬牽

○同院、紀略内院に作る
○朝集堂、抄居處部に朝集堂會昌門外東西堂名とあり應天門の內會昌門の外に東西相對して兩堂あり各九間、紀略には朝集殿とも云り
○累葉、考異に葉舊作業據類史一本訂とあり西本亦葉に作る累代と云に同じ連枝は累葉に對して云り
○指蟠木而問津、家語五帝德篇に高陽巡西海以寧民東極蟠木（節略）とあり東海中の山なり津は字書に濟渡處也とあり
○淩鯨波、鯨波は海濤なと云
○東仁、弘仁二年十月癸亥紀林宿禰東人に作る
○克己復禮、論語顏淵篇に顏淵問仁子曰克己復禮爲仁と見ゆ私欲に打勝ち禮に復る時は則ち事皆天理にして本心の德ま

牛、犯汙良繁、宜令近江國嚴加禁斷、若有不從制者、五位已上錄名、六位已下留身、並言上、○（十六）戊子、御豐樂院、宴五位已上及蕃客、奏踏歌、賜祿有差、○（十七）己丑、御同院觀射、○（二十）壬辰、於朝集堂饗王孝廉等、賜樂及祿、○（廿一）癸巳、發尾張、參河、美濃、越前、但馬、美作、備前等國役夫一萬九千八百人、修理朝堂院、其食幷往還路粮、並用正稅、○（廿二）甲午、渤海國使王孝廉等歸蕃、賜書曰、天皇敬問渤海王、孝廉等至、省啓具懷、先王不終遐壽、奄然殂背、乍聞惻怛、情不能已、王祚流累葉、慶溢連枝、遠發使臣、聿脩舊業、占風北海、指蟠木而問津、望日南朝、淩鯨波以修聘、永念誠款、歎慰攸深、前年附南容等啓云、南容再駕窮船、旋涉大水、伏望辱降彼使、押領同來者、朕矜其遠來、聽許所請、因差林東仁宛使、分配兩船押送、東仁來歸不賚啓、因言曰、改啓作狀、不遵舊例、由是發日、棄而不取者、彼國修聘、由來久矣、書疏往來、皆有故實、專輙違乖、斯則長傲、夫克己復禮、聖人明訓、失之者亡、典籍垂規、苟禮義之或虧、何須貴於來往、今問孝廉等、對云、世移主易、不知前事、今之上啓、不敢違常、然不遵舊例、愆在本國、不謝之罪、唯命是聽者、

た我に全しさ朱注に云り
○爲念也、考異に也類史作已
○無悉、同に悉舊作委、據類史一本訂さあり
（二月）立義、釋奠の立義なり五日丁未卽ち上丁に釋奠を行ひ翌六日内裏に於て論義を行はしめられしなり殿上は紫宸殿上なり掃部式に釋奠後日内論義紫宸殿南廂に問者答者等の座を設くる事見え西宮記に内論議天皇御南殿さあり
○行幸交野、凌雲集に和左金吾將軍藤緒嗣過交野離宮感舊作さ云る御製を載す
（三月）彈正幷京職、紀略正の下に臺字あり

朕不咎已往、容其自新、所以勅於有司、待以恒禮、宜悉此懷、間以雲海、相
見無由、良用爲念也、春首餘寒、王及首領百姓並平安好、有少信物、色目
如別、略此還報、一二無悉、○壬寅、授正六位上岡上連弟繼外從五位下、
是日停對馬史生一員、置新羅譯語、○二月戊申、延大學博士及學生等
於殿上立義、賜祿有差、○辛亥、越中國介正六位上大伴宿禰黑成、據正
六位上多治比眞人清雄、少目從七位下和邇部臣眞嗣等免、以盜官物
也、其守從五位上藤原朝臣鷹養、大目正六位上上村主乎加豆良、以身
卒死、勿論其罪、○己未、行幸交野、○庚申、百濟王等奉獻、五位已上幷六
位已下及百濟王等賜祿有差、○乙丑、車駕自交野還、○庚午、幸神泉苑、
花宴、命文人賦詩、侍臣及文人賜綿有差、○三月癸酉、制、蕃國之使、入朝
有期、客館之設、常須牢固、頃者疾病之民、就此寓宿、遭喪之人、以爲隱處、
破壞舍垣、汙穢庭路、宜令彈正幷京職撿挍、○甲申、從五位上安倍朝臣
眞直爲左少辨、左近衞少將從五位下布勢朝臣全繼爲兼權左少辨、伊
豫介如故、從五位下和朝臣繩繼爲中務少輔、從五位下藤原朝臣賀祐

○延曆六年格、三代格卷十九に延曆六年正月廿一日太政官符應陸奧按察使禁斷王臣百姓與夷俘交關事とあるは是なり
○廣播、恐らくは廣楯の誤
○高城連、三年九月戊午紀に注す
○眞野連、磐城國相馬郡に眞野鄕、陸前國牡鹿郡に眞野と云ふ地名見ゆれば此に據れるなるべし
○白石連、白石は陸前國刈田郡の地名なり此に據れるなるべし
○遠田連、及意薩連は三年九月戊午紀に注す
（閏月）韓埼、類史埼を崎に作る
○崇福寺、菅家文草崇福寺綵錦寶幢記に近江崇福寺者天智天皇之創建也とあり志賀郡見世村に遺跡あり
○過梵釋寺云々、梵釋寺は桓武天皇の御建立續紀延曆五年正月壬子に見え文華秀麗集中卷に過梵釋寺御製一首及扈從梵釋寺應製一首同令製及藤冬嗣各一首を載す
○煎茶、正史に此に始て見ゆ茶は抄飲食部水漿類

麻呂爲侍從、武藏介如故、從五位下紀朝臣興道爲備前介、○辛卯、勅、軍用之要、以馬爲先、今聞、權貴之家、富豪之輩、通使於邊邑、求馬於夷狄、部内由其不肅、兵馬所以闕乏、宜依延曆六年格、禁買陸奧、出羽兩國馬、若有犯違、寘以嚴科、物即沒官、但駄馬之色、不在禁限、○丙申、從五位下高賀茂朝臣里人爲神祇少副、○丁酉、置春宮坊坊掌一員、○陸奧國遠田郡人竹城公音勝等卅五人賜姓高城連、眞野公營山等卌六人眞野連、白石公千嶋等卅九人白石連、遠田公廣播等廿九人遠田連、意薩公廣足等十六人意薩連、○夏四月癸卯、從五位下大伴宿禰乎智人爲典藥助、從五位下紀朝臣繼足爲左京亮、○己酉、攝津國住吉郡地十町賜參議右大辨從四位上紀朝臣廣濱、○壬子、幸神泉苑、○癸亥、幸近江國滋賀韓埼、便過崇福寺、大僧都永忠、護命法師等、率衆僧奉迎於門外、皇帝降輿、升堂禮佛、更過梵釋寺、停輿賦詩、皇太弟及群臣奉和者衆、大僧都永忠手自煎茶奉御、施御被、即御船泛湖、國司奏風俗歌舞、五位已上幷掾以下賜衣被、史生以下郡司以上賜綿有差、○五月甲申、侍膳從三位

に茶茗爾雅集注云茶（宅加反字亦作榛）小樹似支子、其葉可煮爲飲、今呼早採爲茶、晩採爲茗とあり
○幷掾以下、考異に以下郡司以上に至る十五字舊脫、據類史紀略補とあり
（五月）永原朝臣惠子薨、元藤原朝臣、大同三年十二月丙辰永原朝臣を賜ふ、弘仁四年正月壬戌從三位を授く
○津高郡、今御津郡に入る
○業良親王、嵯峨天皇第二皇子
（六月）幷近江、類史幷を及に作る
○榛、類史に茶に作る榛字は上條所引の倭名抄に見ゆ
○王孝廉薨、文華秀麗集上に王孝廉の詩五首を載せ共中に從出雲州書情寄兩箇勅使詩一首あり前年十一月辛巳紀と併考るに往還共に出雲路を採りしなるべし
○昊蒼不憖、憖は憖の俗字、左傳哀十六年哀公孔丘を誄して旻天不弔不憖遺一老云々とあり之に據りて不憖と云るか憖

永原朝臣惠子薨、薩摩國蝗、免調庸田租、○乙酉、從五位下橘朝臣長谷麻呂爲右少辨、從五位下多治比眞人松成爲主計頭、從五位下紀朝臣國雄爲大藏少輔、○戊子、渤海國使王孝廉等於海中値逆風漂廻、舟檝裂折、不可更用、○癸巳、令越前國擇大船、駕蕃客也、○己亥、備前國津高郡荒廢田十九町賜業良親王、○六月庚子朔、從五位下長岡朝臣岡成爲散位頭、從五位下藤原朝臣承之爲駿河守、○壬寅、令畿內幷近江、丹波、播磨等國殖榛、每年獻之、是日大雷、內舍人幷四衞府舍人以上賜祿有差、○甲辰、京畿百姓調錢五十文、今改定八百卌文、○癸丑、渤海大使從三位王孝廉薨、詔曰、悼往飾終、事茂舊範、褒忠錄績、義存先彝、故渤海國使從三位王孝廉、闕庭修聘、滄溟迴艫、復命未申、昊蒼不憖、寔雖有命在天、薤露難駐、而恨銜使命、不得更歸、朕慟于懷、加贈榮爵、死而有靈、應照泉扃、宜可正三位、更賜信物幷使等祿、以先所賜濕損也、○乙卯、河內國澇、賑給乏絕戶、○戊午、皇子源朝臣信、弟弘、常、明、女貞姬、潔姬、全姬、善姬等八人、右京人從四位下良岑朝臣安世、從五位下長岡朝臣岡

は字書に傷也又傷さ見ゆ
○薤露雖尉、薤露は喪を送る輓歌なり故に死を云
○泉局　泉は黃泉局は說文に外閉之關也とあり
○源朝臣、源氏始て此に見ゆ
○良岑朝臣安世、桓武天皇御子母女孺百濟永繼延曆廿一年十二月賜姓
○長岡朝臣岡成、考異に成舊脫據上文補ふと見ゆ桓武天皇御子母女孺多治比豐繼延曆六年賜姓
○貫附左京、錄左京皇別に源朝臣信等八人是今上親王也而依弘仁五年五月八日勅賜姓貫於左京一條一坊即以信爲戶主とあり
○二品高津內親王、桓武天皇第十二皇女狩谷氏云二品恐三品之訛續日本後紀高津內親王傳三代實錄業良親王傳並作三品
○物集國背、共に乙訓郡なり抄國郡部に物集（毛都女）訓世（郡勢）とあり
○賀陽朝臣豐年卒、賀陽朝臣は續紀神護元年六月辛酉紀に見ゆ御友別の後なり豐年は延曆十六年二月乙丁に始見、東宮學士陰陽頭式部大輔下野守を

成等貫附左京。○廿三辛酉、從五位下秋篠朝臣祖繼爲民部少輔、從五位下紀朝臣家長爲左京亮。○廿四癸亥、業子內親王薨。遣使監護喪事。賻絁卅一疋、布五十端、錢二百貫文。皇帝之第一女也。母曰二品高津內親王。是日山城國乙訓郡物集國背兩鄉雷風、壞百姓廬舍、人或被震死。先是有大蛇入人屋、即殺之。未幾其人被震。○廿七丙寅、播磨守贈正四位下賀陽朝臣豐年卒。右京人也。該精經史、射策甲科。秉操守義、無所屈撓。自非知己、不好造接。大納言石上朝臣宅嗣、禮待周厚。屈芸亭院、數年之間、博究羣書。中朝群彥皆以爲釋道融御船王之不若也。嘗友人小野永見命筆勸公宇。其詩曰、白眼對三公。貴勝惡之。延曆年中、任東宮學士。及踐祚、叙從四位下、拜式部大輔。既而女謁屢進、英賢見排。獨抱素懷、任運玄默。厥後天皇不豫、傳位上嗣。遷御平城。不預追從、猶守本職。及于後亂、自戢辭退。今上惜其宏材、任播磨守、令得終身。在任三年、移病入京、臥于宇治之別業。昔仁德天皇與宇治稚郎相讓之事、具著國典。故老亦語風俗。病裡聞之、追感不已。託左大臣、慕爲地下之臣。卒日有勅、許葬陵下、贈正四位下。

以崇國華也、時人猶謂、天爵有餘、人爵不足、時年六十有五、是日右大臣從二位兼行皇太弟傅藤原朝臣園人等奉表乞還先祖功封曰、臣等高祖大織冠內大臣鎌子、在昔天豐財重日足姫天皇(皇極)御宇也、緣一匡之功、錫封一萬五千戶、胤子正一位太政大臣(不比等)堂構相承、門風是存、由茲慶雲四年勅賜封五千戶、大臣固辭、天恩允請、即減定二千戶、傳及子孫、天平神護元年、從一位右大臣(豐成)抗表奉返、寶龜元年、勅更還賜、大同三年、正三位守右大臣內麻呂又抗表奉返、不蒙允聽、臣等伏料元緖、事寄功勞、今臣等冒寵苟進、未効涓塵、荷恩時來、徒冥山岳、而重叨殊私、久淹歲序、俯仰天地、慙悚罔措、恐乖忌滿之遠誡、必取覆餗之近憂、伏願奉納所傳功封、以補萬一、少塞素尸、天鑒曲廻、矜斯誠請、則家祚惟永、物議復休焉、無任丹懇切迫之至、謹拜表陳請以聞、不許、○秋七(頁上欄)月辛未、外從五位下廣井宿禰貞名爲縫殿助、外從五位下賓秦書師笠麻呂爲西市正、正五位下藤原朝臣藤成爲播磨守、從五位下淨野宿禰夏繼爲介、河內國人外從五位下勇山連家繼、外從五位下文繼、

歷任す
○射策、山堂肆考に孔氏雜說、漢射策與對策不同、射者謂列問疑義書于策、量其大小署爲甲乙之科、不使彰顯、欲射者隨其所得而釋之と見え、以て優劣を判つものにして一種の對策なり
○芸亭院、天應元年六月辛亥紀宅嗣の傳に捨其舊宅以爲阿閦寺、寺內一隅特置外典之院、名曰芸亭とあり
○中朝群彥、中は中國中華の中に同じく彥は字書に美士也とあり
○道融、傳は懷風藻に詳なり
○御船王、淡海眞人御船
○白眼、晉書阮籍傳に籍不拘禮教、能爲青白眼、見禮俗之士以白眼對之とありいやしみ輕んずる意
○左大臣、此時左大臣なく右大臣藤原園人廷臣の首班たり大日本史に執柄之臣とす
○國華、國家の精華、國の誇とすべき人を云
○奉表、表字は西本に據て補ふ
○封一萬五千戶、藤原家

正七位上國嶋、正七位下眞繼等貫附右京、○壬申、河內國人從七位下高道連鯛釣等五人貫附左京、○丙子、幸神泉苑、命文人賦七夕詩、○壬午、立夫人從三位橘朝臣諱嘉智子爲皇后、是日暴雨雷鳴、庭潦泛溢、參議宮內卿正四位下藤原朝臣緒嗣進就閤門宣命、其詞曰、天皇大命良万止勅布大命乎、親王等臣等百官人等天下公民衆聞食止宣、食國天下政波、獨知倍伎物爾波不有、必母斯理弊乃政有倍之止、自古行來留事、皇后定氐志、閫中乃政波成物止奈毛、常毛所聞看行須、故是以從三位橘夫人乎皇后止定賜布、故此狀乎悟而供奉止勅布天皇御命乎、衆聞食止宣、贈皇后父正五位下橘朝臣淨友從三位、授從四位下藤原朝臣貞嗣從四位上、從五位下橘朝臣永繼從五位上、外從五位下朝野宿禰道守、滋野宿禰家譯從五位下、從四位下藤原朝臣綱繼爲大舍人頭、左衞門督從四位下良岑朝臣安世爲兼左京大夫、但馬守如故、從四位下藤原朝臣道繼爲右京大夫、從四位上藤原朝臣貞繼爲皇后宮大夫、從五位下紀朝臣繼足爲亮、從五位下滋野宿禰家譯爲尾張守、從五位下甘南備眞人

傳に初め二千戸に封じ後八千戸を增封し更に五千戸を增し前後幷凡一萬五千戸とあり
○慶雲四年勅、四月壬午紀（續紀上五三頁）に見ゆ
○神護元年、四月丙子紀（同上一一六頁）に見ゆ
○忌滿之遠誠、尙書大禹謨に滿招損謙受益時乃天道、又易謙卦象傳に天道虧盈而益謙とあるに據れり
○顯餗、其任に堪へずして過誤あるを云
（七月）鯛釣、西本釣を鈎に作る
○閤門、閤門は宮中の門なり儀式立后儀に據るに蓋承明門を云
○斯理弊乃政有倍之、此語續紀天平元年八月壬午紀立后の詔に見ゆ斯理弊は後方にて後宮なり
○閫中乃政、閫は字書に門限也門橛也とあり閫中は門の敷居より內にて後宮と云に同じされば是もシリヘノマツリゴトと訓べし
○橘朝臣淨友、奈良麻呂第二子延曆五年內舍人と爲り正五位下に敍し八年卒

○貞嗣、考異に貞儔作、據上下文及類史紀略訂とあり
○甲午、類史六月甲午に作る恐くは非なり
○司牧、左傳襄十四年に天生民而立之君使司牧之とあり君を云牧は養也治也司也
○阜財、家語に見ゆ阜は大也肥也盛也多也
○杼軸之歎、杼は緯を持つ者ヒ、軸は經を受くるヲサなり毛詩大雅大東章に杼軸其空とあり詩意は賦斂急なれば出す可き者無く僅に絲麻を以て責を逃る故に杼軸も空しと云之に據れるなるべし
○迸溢、考異に迸舊作逆據類史訂
○復諸國司、同に復舊作後據紀略一本訂とあり
(八月)出□臣、□字は恐くは雲なるべし
(九月)常騰卒、元亨釋

濱吉爲石見守、夫人從三位多治比眞人高子爲妃、從四位下藤原朝臣緒夏爲夫人、河內國人外從五位下當宗忌寸家主等十六人貫附左京、○(十五)甲申、授正三位五百井女王從二位、從四位下藤原朝臣緒夏從三位、從五位上橘朝臣御井子從四位下、○(廿三)壬辰、從五位下大中臣朝臣淵魚爲神祇大副、從五位下甘南備眞人濱吉爲刑部少輔、從五位下高賀茂朝臣里人爲美濃權介、從五位下大中臣朝臣弟守爲石見守、○(廿四)癸巳、幸神泉苑、○(廿五)甲午、詔曰、天生黎元、樹之司牧、所以阜財利用、化成天下、是以欲濟弊俗、達且不已、思使農夫有稔熟之歡、婦功無杼軸之歎、而去五月以降、雨水迸溢、田疇不修、夫百姓不足、君孰與足、宜俾左右京畿內無出今年田租、務存優恤、副朕意焉、是日復諸國司遷替、以四年爲限、

○八月己亥朔、日有蝕之、○(三)辛丑、遣使奉幣於伊勢大神宮幷賀茂大神、以霖雨不晴也、○(十)戊申、外從五位下廣澄宿禰福麻呂爲造西寺次官、從五位下大中臣朝臣弟守爲丹後守、從五位下紀朝臣貞成爲石見守、○(十三)辛亥、加日向國軍毅一員、○(十八)丙辰、授從四位下橘朝臣常子從三位、○(廿六)甲

書卷二に見ゆ
○釋門之脂粉、釋門の棟梁、法衣の領袖と云に同じく脂は燕脂、粉は胡粉女子の脂粉の如く佛門の粧飾とすべきを云
(十月)蘆、抄草木部に兼名苑云葭一名葦(阿之)爾雅注云一名蘆とあり
○入色、白丁に對して位ある人を云
○百濟王明信薨、續紀寶龜元年十月癸丑紀に始見正五位下に敍す延暦十六年正月辛亥紀に田野七十七町を賜はる事見え尙侍從三位とあり藤原乙叡の母なり
○大原眞人明薨、明下恐くは子字を脫す
○蘇芳色、抄調度部染色具に蘇敬本草注云蘇枋(音方俗音須方)人用染色、亦草木部にも見ゆ
○象牙刀子、考異に刀舊作力據紀略訂とあり象牙を以て飾れる刀子なり抄調度部征戰具に刀四聲字苑云似劍而一刃曰刀(大刀太知小刀賀太奈)とあり刀子は小刀なり
○緋色鞦勒、抄調度部鞍馬具に鞦唐式云々(鞦音秋、之利賀岐)鑣說文云鑣

子、遊獵北野、○(廿七)乙丑、從五位下弟村王爲筑後守、○(廿九)丁卯、右京人少初位下出□臣廣津麻呂等七人賜姓春岑朝臣、○九月(戊辰朔)(四)辛未、從五位下藤原朝臣愛發爲中務少輔、從五位下甘南備眞人濱吉爲主計頭、從五位下菅野朝臣高世爲兵部少輔、從五位下多治比眞人松成爲刑部少輔、少僧都傳燈大法師位常騰卒、法師、俗姓高橋朝臣、京兆人也、法師道業優潤、博究經論、注釋六十三卷、後生仰之、了證斯在、爲人質素、詞乏文華、至於決釋義理、獨步少儔、可謂釋門之脂粉、人倫之龜鏡者也、初入興福寺、與故少僧都忠芬有隙、移住西大寺、守法待終、與化而盡、春秋七十有六、○(廿六)癸巳、遊獵大原野、五位以上及國司掾以上賜衣被、○冬十月(戊戌朔)(三)庚子、安房國獻蘆二枝、長各三丈、圍一尺、○(七)甲辰、制、皇后宮職舍人者、一百五十人以白丁補之、除此之外以入色補之、○(十五)壬子、散事從二位百濟王明信薨、○(二十)丁巳、散事從三位大原眞人明薨、○(廿一)戊午、外從五位下江沼臣小並爲陰陽助、從五位下藤原朝臣豐彦爲長門守、○(廿五)壬戌、遊獵栗前野、五位已上賜衣被、勅、親王內親王女御及三位已上嫡妻子、並聽著蘇芳色

（訓久都波美一云久々美）馬銜也兼名苑云鑣一名勒とありシリガイとクツハとなり
○褐及黃櫨染等色、褐は褐色、黃櫨染は抄調度部染色具に黃櫨文選注云櫨（和名波瀰之）今之黃櫨木也とあり之を以て染むるなり
（十一月）延曆格云々、此勅三代格卷二十に見ゆ
○斷決囚徒云々、考異に舊闕囚徒令三字據三代格補とあり令とは獄令をいひ順時肅殺とは死罪を執行するには時期あり立春より秋分までは之を行はざるを云獄令に從立春至秋分不得奏決死刑若犯惡逆以上及家人奴婢殺主者不拘此令其大祀及齋日朔望晦上下弦廿四氣假日並不得奏決死刑と見ゆ
○秋冬無妨、死刑を行ふに秋冬の間は妨げなし年終を待て上奏するに及ばずとなり西本秋冬を秋分に作るは非考異に冬舊作分據類史三代格訂とあり
○十月初斷奏、刑部式に流罪以下隨發且斷、其死

象牙刀子、但緋色鞦勒一切禁斷、又禁女人著褐及黃櫨染等色、唯節會日不在禁限、五位已上聽恒服餝刀、六位已下不得以金銀爲餝、內親王孫王、及女御已上、四位已上內命婦、四位參議已上嫡妻子、大臣孫並聽乘金銀裝車、自餘一切禁斷、○十一月（丁卯朔）丁亥（廿一）、勅、延曆格云、斷決囚徒、令有正文、順時肅殺、不可虧違、或過秋分節、延入立春、是既乖法式、都無准的、宜死罪者年終斷訖者、今於行死刑、秋冬無妨、而頃年有司、必至年終、乃奏刑書、施行之後、計其行程、合入春月、以到遠國、宜自今以後、十月初斷奏訖、但始自十一月一日至于十二月十日、常行祭事、不得令京官此限內決死刑、○甲午（廿八）、遊獵水生野、五位已上及兩國掾以上賜衣被、是日令諸國正稅帳計帳兩使、便附朝集使、不聽別差使、以省郵驛迎送也、○十二月（丁酉朔）丙午（十）、大和國人從五位下朝野宿禰鹿取、從五位下道守等男女六十四人貫于右京、○癸丑（十七）、遊獵芹川野、○戊午（廿二）、廢常陸國板來驛、○乙丑（廿九）、勅、諸國司等、各期六年之任、不慮四歲之替、國內雜務、非唯一途、今新格忽行、心事相違、而去秋下稔、損害殊甚、定知遷替之人、必累拘留、宜須

刑者皆悉斷、十月四日甲申旨とあり
○常行祭事、十一月一日より十二月十日に至る云々と云るは十一月中卯日に新嘗祭を行ひ之に先ちて相嘗祭あり其他にも祭祀多きを以て此期間は京都にて死刑を行ふことを禁するなり
○正稅帳計帳、正稅帳は其國の正稅を記載す計帳は又大帳ともいひ諸國にて歲入を豫算し兼れて人口を檢覈する基礎とすべき帳簿なり養老元年五月紀(續紀上一二七頁)を參考すべし
(十二月)板來驛、常陸國行方郡にあり常陸風土記に板來村臨海濱安置驛家此謂板來之驛とあるは是なり倭名抄に行方郡板來(伊多久)と見ゆ板を坂と書けるは誤なり今潮來と云
○下稔、豐年に對して不作なるを云下は或は不の誤ならむか
○延曆廿五年四月格、廿五年三月廿四日紀(八四頁)に見ゆ
○公廨、原本廨を解に作る西本に據て改む

明春新舊交替之政、依今年損所有未納、隨帳分付、即令後任國司准延曆廿五年四月十六日填納舊年未納之格、毎年徵收、附帳言上、但有返擧虛納、欠負未納、而得公廨之類、准法科附、今年免大宰府管內諸國三箇年田租、以頻年不登、是歲自五月及九月霖雨、諸國多被其害焉、

日本後紀卷第廿四

（三條西家本奥書）

右倩于恒宿禰手令書之

于時天文二年重九之後一日加一見又加朱點了

（塙本奥書）

右日本後紀殘缺第五第八第十三第十四第十七第二十第廿二第廿四合八卷門人稻山行敎於京都寫之以類聚國史日本紀略等諸書挍合畢

寛政十一年十月　日

檢校保己一

昭和十五年六月二十三日印刷
昭和十五年六月二十九日發行

豫約頒價　金二圓

不許複製

增補六國史　卷五
（日本後紀卷上）

編纂者　佐伯有義
東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地

發行者　櫻木俊晃
東京市麴町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社

印刷者　小坂孟
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京・大阪　朝日新聞社

朝日新聞社
増補
六國史月報
昭和十六年三月
第十回配本附録

日本後紀逸文の編纂に就きて

佐伯有義

日本後紀は、桓武天皇延暦十一年（紀元一、四五一年）より淳和天皇天長十年（一、四九三年）まで四十二年間、即ち桓武天皇後半より平城・嵯峨・淳仁御三代の歴史で、重要な記事が多く載せられてあり、極めて貴重な寶典である。然るに久しく世に隠れてゐたので、僞書の日本後紀が世に出現したり、後紀纂が出來たりして渇望をいやしてゐたが、梨木祐之が日本逸史を編纂して、後紀時代の史實を一纒めにして見ることの出來るやうにしたのは偉大な功績で吾人は大に感謝をせねばならぬ。然るに其の後幸に塙撿校の力で、後紀卷五以下十卷の眞本が世に公にせられるやうになり、たとひ四分の一でも眞本を手にすることの出來るやうになつたのは、國家のため實に悦ばしいことである。其の結果今日では卷五以下の十卷は、逸史を見る必要がなくなつたが、其の以外はなほ逸史によらねばならぬ。然るに逸史は後紀の逸文のみではなく、類聚三代格・公卿補任を始め、其の年代に於ける史料となるべきものは總べて收載してあるので、後紀の逸文を見ようと思ふ人の爲には繁雜に感ぜらるる。其の上に逸史の卷數の分け方は僞書の後紀に據つてゐるので、一々眞本の目録と引合せて見ねばならぬ。斯くの如く種々な不便があるので、後紀の逸文をのみ編纂したものを得たいと思うてゐたが、何人も之を計畫した人が無いので、今回六國史の再版を機會に之を編纂しようと思立つたのである。

さて之を編纂するには、其の資料とすべきものは第一に類聚國史である。第二に日本後紀又は類聚國史と記名して他書に引用したものである。是は種々の書に引用してあるが現存の類聚國史と重複するものが多く、類聚國史に見えぬものは極めて僅少であるが、是は見當つたものは悉く之を收載した。第三に日本紀略は六國史の完存せる時代に抜萃したもので、信據すべきものであるが、

省略した部分が多いので、後紀の逸文といふに不適當なものもある。そこで之を類聚國史と對照するに同文のものも決して少くない。是等は逸文と稱するに十分である。次に類聚國史に缺けた部分で、紀略に相當に精しく記してあるものも少くない。是は對照することは出來ぬが、唯一の材料で多少省略をした所があつても、之を除外することは出來ぬ。次に明かに逸文でないものは、「某日叙位、女叙位」。或は「某日任官」などとある文である。叙位任官等の文字は全く拔萃者の文である故に、最初は之を採らぬ考であつたが、之を除けば全然其の事實を知ることが出來ぬので、本文より文字を少し小さくして之を收むることにした。是は三代實錄等にも既に是認しゐる先例があるので、再考の末に斯樣に決した。次に同日に於て二項以上の記事のあつた場合に、其の順序は之を如何にすべきかと考へたが、記略に其の記事の見えたものは紀略の順序に從ふことにした。然るに逸史は之に據つて居らぬので、今回編纂の後紀逸文は逸史とは順序の違つたものが相當多くなつた。次に紀略に見えず據るべきものゝ無き記事は、事の大小輕重を考慮して順序を定めた。是が編纂の大體の順序である。次に類聚三代格に見ゆる官符等は逸文として採り得るやうにも考へらるゝが、試みに現存の國史と格式とを比較するに、國史は格文の要を採つて文を成せるもの多く、格文即ち國史なりといふことは出來ぬ。依つて之を除いた。但し詔勅は官符と趣を異にし出入が少いので、一二採つたものもある。又日本後紀纂は奥書に二條前攝政康道公の御家藏を寛文戊申（八年）秋に書寫したとあり、世間に之を信用してゐる人も多少ある樣であるが之を眞本と比較して僞書であることを確めたのである。それは後紀纂に所引の和氣清麿の傳を後紀卷八に載する所と比較するに略文である。眞本には「贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麿本姓磐梨別公、右京人也、後改ニ藤野和氣眞人ニ」とあるを、纂には正二位民部卿造宮大夫和氣朝臣清麿薨、本姓盤梨別公、後改ニ藤野ニ」とあり、以下全文に涉つて異なつてゐる。其の他にも疑はしきものが多いので、後紀纂をも採らぬことにした。

次に標注は書紀以下の例に倣ひ簡單に注釋をした。紙幅の許す限り稍精しく注してもよいと思つたが、標注には十分に意を盡すことは困難であり、且本文の紙數が豫定より頗る増加したので、旁以て簡單にすることにした。本書は尚ほ數月前に脱稿すべき豫定であつたが、意の如く進まず、今や辛うじて之を完成するに至つた。此に之を一言して讀者諸君に御斷を言上げる。將來も尚ほ逸文の搜索に力を注ぎ、若し獲る所あれば之を增補して出來得る限り補充したいと思つてゐるのである。若し御氣附があれば何卒御指示下さるやう

に呉々もお願ひ申上げて置く。

六國史年表に就きて

佐伯有義

如何なる歴史でも記錄でも、之を閲讀するに最も必要なものは索引と年表とである。すべて人の記憶には限度がある故に、讀書に際して索引と年表とを座右に備へ、記憶のたどたどしいものがある時に、先づ索引を披いて其の所在を明かにし、次に年表に就いて前後の關係を明かにすれば、所謂嚢中の物を探るが如くに求め得て、この上もなく樂しいものである。之に反して之を求め得なかつたならば殘念至極である。それ故に讀書家に取つて年表と索引ほど重寶なものはない。しかし索引も年表も好く出來たものは昔から極めて少い。それはその道に苦心をした人が苦心をして作つたものが少いからである。單に無意識に材料を採り、十分に之を考慮せずして編纂したのでは、如何に頁數が多くても役に立たぬのである。それ故に先づ材料を採る時より注意をせねばならぬ。材料の採り方が不十分では、如何に骨を折つても良い編纂が出來ぬのである。此の見地から言へば、六國史の索引も年表もまだ意に滿たぬものが多いので、かねて全部改めたいと思つてゐたが、今回再版に關し、時間の關係上改作の暇がなかつたので、止むを得ずやゝ訂正を加へるに止めた。年表は(一)に記事を成るべく多くして漏さぬやうにし、(二)に文字を成るべく少くして閲覧に便ならしめる、(三)に活字も多種類を使用して閲覧に便なるやうにし、(四)或る程度の分類をもするやうにせねばならぬ。それには全部改版をせねばならぬので、原版に據り多少訂正を加ふる程度に止めた次第である。更に他日を期して成るべく便利なものを作り、意志を達したいと思うてゐるので、此の事を此に申上げて置く。

(昭和十六、三、十三、)

次回配本豫告

第六卷 六國史 日本後紀 卷下

四月下旬配本豫定

増補六國史全十二卷再版事業も既に十册を刊行愈々後二册を殘すのみとなりました。

次回は日本後紀逸文を配本の豫定ですが、本月報卷頭に佐伯先生の述べられてゐる通り、逸文の編纂は全く常人の到底及ばざる御苦心により漸く脱稿の運びに至り、目下組版を督勵、豫定期日の配本を期してゐますから、御期待下さい。

〔近刊〕

山田孝雄著

國史に現はれた日本精神

菊判三〇四頁 定價二圓

朝日新聞社發行

六國史の再版にいそしみつゝ思ひ出づるまゝを書きつく

佐伯有義

ます鏡かけてあふかむ代々の跡
　さやかにうつす六のみふみを

おほみこと仰き畏みまこゝろを
　こめて作れるむつのくにふみ

このふみの世になかりせは古の
　畏きあとも知るによしなし

おのか身におもひくらへて古の
　人のいたつき思ひやらるゝ

老の身に十年のむかし偲ひつゝ
　まなひの窓に日々に筆取る

朝日新講座

新時代に即した國民必讀の新教養叢書！

新しき教養、良知良識の國民的敷衍を念願として學界に於ける新進氣鋭の專門權威を動員し尨大な科學分野に亙つて、中學校の上級生に解る程度に平易簡徑に解說した新講座

既刊 ① 九州帝大教授 今中次麿著 政治學
刊 ② 東北帝大教授 新明正道著 社會學

〔續刊〕每月數册刊行

3・生理學 林 髞著
4・財政學 汐見三郎著
5・經濟學 波多野鼎著
6・哲學 清水幾太郎著
7・軍事科學 齋藤 忠著
8・數學 今野武雄著
9・物理學 湯川秀樹著
10・機械工學 長岡順吉著
11・電氣工學 米澤 滋著
12・航空工學 山本峰雄著
13・榮養學 井上兼雄著
14・法學 木村龜二著
15・文學 中野好夫著
16・動物學 丘 英通著
17・植物學 服部靜夫著
18・合成化學 櫻田一郎著
19・經營學 鍋島 達著
20・商品學 上坂酉三著
21・衛生學 梶原三郎著
22・理論物理學 伏見康治著
23・造船學 和辻春樹著
24・人類學 須田昭義著
25・兵器學 青木 保著
26・建築學 藤島亥治郎著
27・生物學 寺尾 新著
28・海洋學 宇田道隆著
29・教育學 長田 新著
30・歷史學 千代田謙著

——以下續刊——

〔各册分賣〕 B六判・上製カバー付 平均二五〇頁・瀟洒袖珍型

定價一圓

PURCHASED FOR THE

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE

CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR

FAR EASTERN STUDIES

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02960 8056

DS
851
A2R5
1940
v.5